

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第255集

山屋館経塚・山屋館跡発掘調査報告書

町道長岡・徳田線道路改良工事関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

やま や たて

山屋館経塚・山屋館跡発掘調査報告書

町道長岡・徳田線道路改良工事関連遺跡発掘調査



南東から北西

巻頭写真1 遺跡全景



卷頭写真2 山屋館経塚全景



1号経塚状遺構



2号経塚状遺構

巻頭写真3 経塚状遺構石槨部(1)



3号経塚状遺構



4号経塚状遺構

巻頭写真4 経塚状遺構石槨部(2)



巻頭写真 5 1号経塚状遺構出土の波状文四耳壺



巻頭写真6 4号経塚状遺構出土の常滑三筋文壺

序

岩手県には旧石器時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地にあり、平成7年度の岩手県教育委員会のまとめでは8700箇所を超えております。先人の残したこれらの埋蔵文化財を保護し、保存していくことは私たち県民に課せられた重大な責務であります。

一方、本調査の原因となりました紫波郡紫波町における町道長岡徳田線道路改良事業を例にあげるまでもなく、現代社会を豊かにし、快適な生活をおくるための地域開発もまた県民の切実な願いであります。埋蔵文化財の保護・保存と地域開発という相容れない要素をもつ事業の調和のとれた施策が今日の課題となっております。

財団法人岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたって、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむをえず消滅する遺跡について発掘調査を行いその記録を残す措置をとってまいりました。

本書は、町道長岡徳田線改良工事に関連して、平成7年度に発掘調査を実施した紫波郡紫波町山屋館経塚・山屋館跡の調査結果をまとめたものです。今回の調査により、山屋館経塚から経塚状遺構4基、山屋館跡からは縄文時代後期末葉と弥生時代末葉の集落跡、中世前期と推定される城館跡等を検出しました。特に山屋館経塚から出土した常滑産三筋文壺と、波状文四耳壺及び4基の経塚状遺構の石槨構造は、今後の経塚研究や陶磁器研究、奥州藤原氏についての歴史学研究等に貴重な資料を提供することができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財に対する関心と理解をいっそう深めることに役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、発掘調査および報告書作成にご協力とご援助を賜りました岩手県土木部盛岡土木事務所や紫波町教育委員会をはじめとする多くの関係機関・関係各位に深く感謝申し上げます。

平成9年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 船越昭治

例 言

1. 本報告書は岩手県紫波郡紫波町山屋字山口地内に所在する山屋館経塚及び山屋館跡の発掘調査の結果を収録したものである。
2. 当初、山屋館経塚の場所は山屋館跡の飛び地遺跡として調査に入ったが、この場所から平安時代末の4基の経塚状遺構を検出した。そのため岩手県教育委員会文化課・(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター・紫波町教育委員会社会教育課の3者の協議により、4基の経塚状遺構を検出した場所を新たに山屋館経塚という遺跡名で呼称することとし、山屋館跡と区分することにした。
3. 本遺跡の調査は岩手県教育委員会と岩手県土木部盛岡土木事務所との協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。
4. 山屋館経塚から検出された遺構については、遺構の重要性和地域住民の声を考慮して、紫波町教育委員会により1号及び2号経塚状遺構の2基の石槨部を切り取り移設することになり、それぞれ石槨部の検出で調査を終了している。
5. 山屋館経塚・山屋館跡の遺跡番号はLE59-2101、遺跡略号はYY-95である。
6. 発掘調査期間、発掘調査面積、発掘担当者は以下の通りである。

発掘調査期間	1995年 6月16日～ 9月18日
発掘調査面積	2,900m ²
発掘担当者	文化財専門調査員 鎌田 勉 伊藤 拓

7. 室内整理期間及び整理担当者は以下の通りである。
1995年11月 1日～1996年 3月31日 鎌田 勉
8. 本報告書の執筆は、I. 調査に至る経過は高橋與右衛門、他は鎌田 勉が担当した。
9. 分析・鑑定は以下の方に依頼した。

石質鑑定	佐藤 二郎	長内水源工業
樹種同定	高橋 利彦	木工舎「ゆい」
金属製品の保存処理	新日本製鉄	

10. 基準点測量・写真測量は、シン技術コンサルに依頼した。
11. 野外調査・室内整理等にあたり下記の方々のご指導・ご協力をいただいた。(順不同・敬称略)
関 秀夫(東海大学)、矢部良明・伊藤嘉章(東京国立博物館)、千々和到(国学院大学)、大石直正(東北学院大学)、入間田宣夫(東北大学)、斉藤利男(弘前大学)、川島茂裕(富士大学)、菅野文夫・樋口知志(岩手大学)、大平 聡(宮城学院女子短期大学)、菅野成寛(中尊寺教学研究所)、中野晴久(常滑市民俗資料館)、小池平和(悠研究所)、国生 尚(県立盛岡工業高校)、八重樫忠郎(平泉町教育委員会)、室野秀文(盛岡市教育委員会)、兼康保明・森内秀造・植松邦浩(兵庫県埋蔵文化財調査事務所)、古沢友治(紫波町文化財調査委員)、高橋博恭(帝国データサービス)、花籠博文(紫波町役場)、桜井芳彦(紫波町教育委員会)、梅沢 稔・菅原由美子(紫波町赤沢公民館)、半田清次郎(紫波町山屋公民館)、福田 惇・菅原 弘・菅原和博(紫波町山屋)、工藤眞巨・中村直嗣(紫波町赤沢)、稲垣雅宏(紫波町長岡)
12. 本遺跡の調査で得られた一切の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターが保管している。

目 次

序
例言

[本文]

I. 調査に至る経過	2	① 主郭	53
II. 遺跡の立地と環境	4	② 曲輪	53
1. 遺跡の位置と立地	4	③ 帯曲輪1	59
2. 遺跡の地形	4	④ 帯曲輪状1	59
3. 山屋地区について	4	⑤ 堀跡	59
4. 基本層序	7	⑥ マウンド状遺構	61
5. 周辺の遺跡	8	(2) まとめ	63
6. 岩手県内の「経塚」について	9	2. B区について	64
7. 周辺の中世城館と歴史的背景	16	(1) 堅穴住居跡	64
III. 野外調査と整理の方法	21	(2) 土坑	68
1. 野外調査	21	(3) 陥穴状遺構	78
2. 室内整理	22	(4) 出土遺物について	78
IV. 山屋館経塚. 検出された遺構と遺物	24	VI. まとめと考察	80
1. 山屋館経塚の立地	24	1. 山屋館経塚の経塚状遺構について	80
2. 積石の状況	24	(1) 4基の経塚状遺構の属性	80
3. 1号経塚状遺構	26	(2) 山屋館経塚の造営時期について	82
4. 2号経塚状遺構	32	(3) 「箱」状の容器の破片についての考察	84
5. 3号経塚状遺構	36	(4) 検出された遺構が経塚であるかどうかの検討	86
6. 4号経塚状遺構	41	(5) 造営者の検討と北上川流域の「経塚」	91
7. 出土遺物について	42	2. 山屋館跡について	95
(1) 三筋文壺	42	(1) A区について	95
(2) 三筋文壺蓋石	44	(2) B区について	96
(3) 波状文四耳壺	48	付編	
(4) 「箱」状の容器の破片	48	1 樹種同定	98
V. 山屋館跡. 検出された遺構と遺物	53	報告書抄録	
1. A区について	53		
(1) 館跡	53		

[表]

表1 周辺の遺跡一覧表	11	表3 山屋館跡周辺の中世城館跡	20
表2 岩手県の経塚地名一覧表	15		

〔図版〕

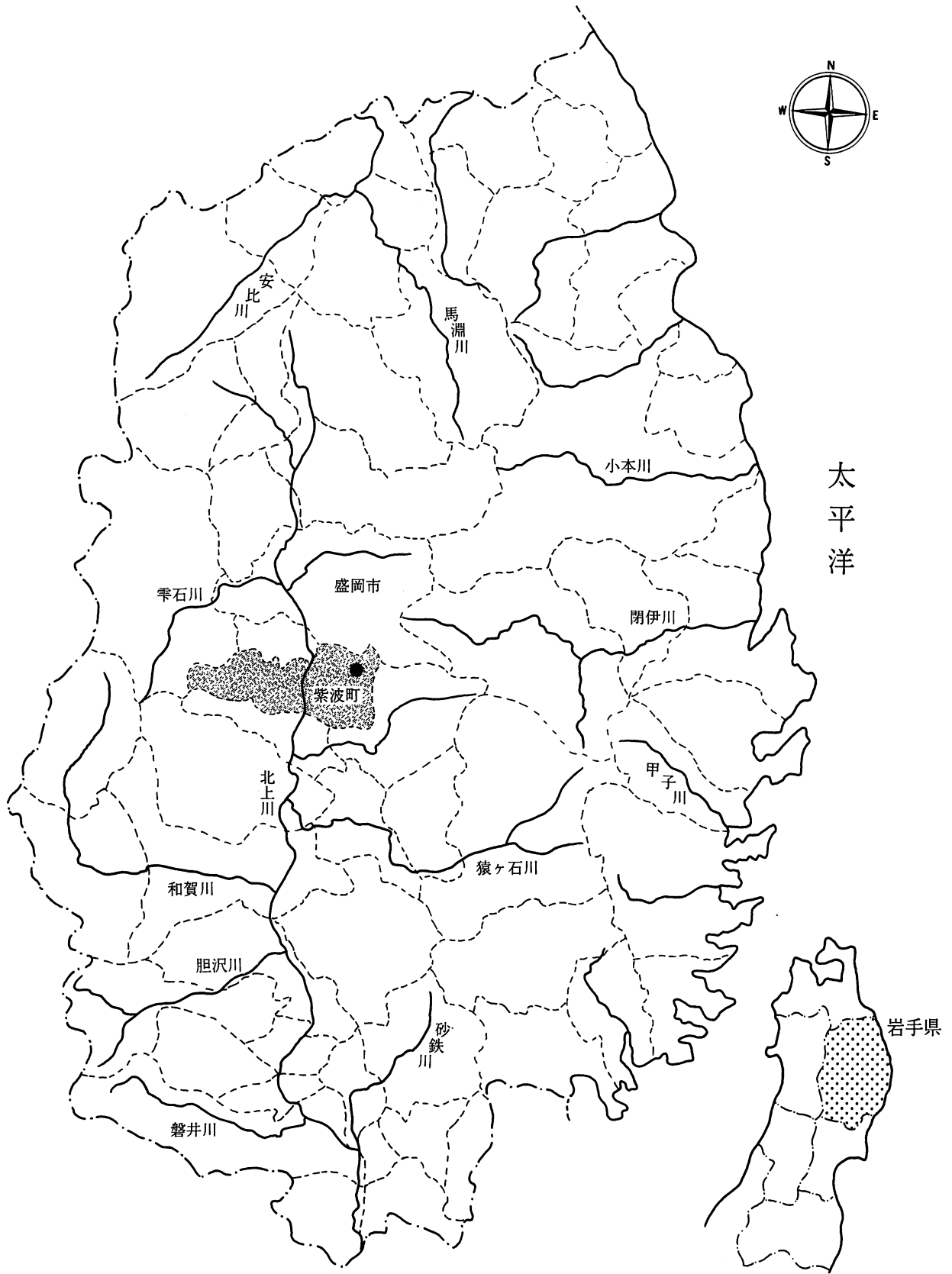
第1図	岩手県図に見る遺跡の位置……………1	第23図	4号経塚状遺構……………43
第2図	遺跡の位置図……………3	第24図	4号経塚状遺構……………45・46
第3図	遺跡周辺の地形図……………5	第25図	経塚状遺構完掘、エレベーション……………47
第4図	遺跡周辺の地形分類図……………6	第26図	出土遺物（陶器・蓋石）……………49
第5図	基本層序模式図……………7	第27図	3号経塚状遺構出土「箱」破片(1)……………51
第6図	周辺の遺跡位置図……………17・18	第28図	3号経塚状遺構出土「箱」破片(2)……………52
第7図	山屋蛇洞館（山屋館）縄張り図……………19	第29図	山屋館跡遺構配置図……………54
第8図	山屋館跡周辺の城館跡分布図……………20	第30図	山屋館跡縄張り図……………56
第9図	調査区とグリッド配置図……………23	第31図	1号～3号堀跡……………58
第10図	凡例……………23	第32図	4号・5号堀跡……………60
第11図	山屋館経塚周辺の地形図……………25	第33図	1号・2号マウンド状遺構……………62
第12図	山屋館経塚遺構配置図……………27・28	第34図	B区遺構配置図……………65
第13図	積石の状況……………29	第35図	1号・2号竪穴住居跡……………67
第14図	積石断面図……………30	第36図	1号～9号土坑……………69
第15図	1号経塚状遺構……………31	第37図	10号～14号土坑……………71
第16図	1号経塚状遺構石槨部……………32	第38図	16号～20号土坑……………73
第17図	2号経塚状遺構……………33	第39図	21号～23号土坑、1号陥穴状遺構……………75
第18図	2号経塚状遺構石槨部検出状況……………34	第40図	山屋館跡B区出土遺物……………77
第19図	2号経塚状遺構……………35	第41図	経塚状遺構模式図……………81
第20図	3号経塚状遺構……………37	第42図	岩手県内の「埋経の経塚」の可能性のある場所……………92
第21図	3号経塚状遺構……………38	第43図	岩手県内出土の三筋文壺・波状文四耳壺……………93
第22図	3号経塚状遺構検出平面図……………39・40		

〔巻頭写真図版〕

巻頭写真1	遺跡全景（空中撮影）	巻頭写真4	経塚状遺構石槨部(2)
巻頭写真2	山屋館経塚全景	巻頭写真5	1号経塚状遺構出土の波状文四耳壺
巻頭写真3	経塚状遺構石槨部(1)	巻頭写真6	4号経塚状遺構出土の常滑三筋文壺

〔写真図版〕

写真図版1	空中写真……………103	写真図版14	4号経塚状遺構(3)……………116
写真図版2	山屋館経塚全景(1)……………104	写真図版15	館跡(1)……………117
写真図版3	山屋館経塚全景(2)……………105	写真図版16	館跡(2)……………118
写真図版4	経塚状遺構積石の状況(1)……………106	写真図版17	館跡(3)……………119
写真図版5	経塚状遺構積石の状況(2)……………107	写真図版18	1号竪穴住居跡……………120
写真図版6	1号経塚状遺構(1)……………108	写真図版19	2号竪穴住居跡、1・2号土坑……………121
写真図版7	1号経塚状遺構(2)……………109	写真図版20	3号～6号土坑……………122
写真図版8	2号経塚状遺構(1)……………110	写真図版21	7号～11号土坑……………123
写真図版9	2号経塚状遺構(2)……………111	写真図版22	12号～15号土坑……………124
写真図版10	3号経塚状遺構(1)……………112	写真図版23	16号～19号・22号～24号土坑……………125
写真図版11	3号経塚状遺構(2)……………113	写真図版24	20号～22号・24号土坑・1号陥穴状遺構……………126
写真図版12	4号経塚状遺構(1)……………114	写真図版25	山屋館経塚出土遺物(1)……………127
写真図版13	4号経塚状遺構(2)……………115	写真図版26	山屋館経塚(2)・山屋館跡出土遺物……………128



第1図 岩手県図にみる遺跡の位置

I. 調査に至る経過

山屋館経塚・山屋館跡は「町道長岡・徳田線道路改良事業」の施工に伴って、その事業区域内に位置することから発掘調査することとなったものである。

当事業は、紫波町の北上川東岸長岡地区から当遺跡の所在する山屋地区を通して盛岡市の根田茂川流域を通る主要地方道盛岡・大迫線の砂子沢地区へ到達する紫波町道長岡・徳田線が、路線全体の幅員が狭く、歪曲していることと未舗装道路であることにより、これらを補正すべく「町道長岡・徳田線道路改良事業」として実施された道路改良工事である。本来は紫波町の施工事業であるが、難工事であることにより町に代わって県が施工する代行工事である。

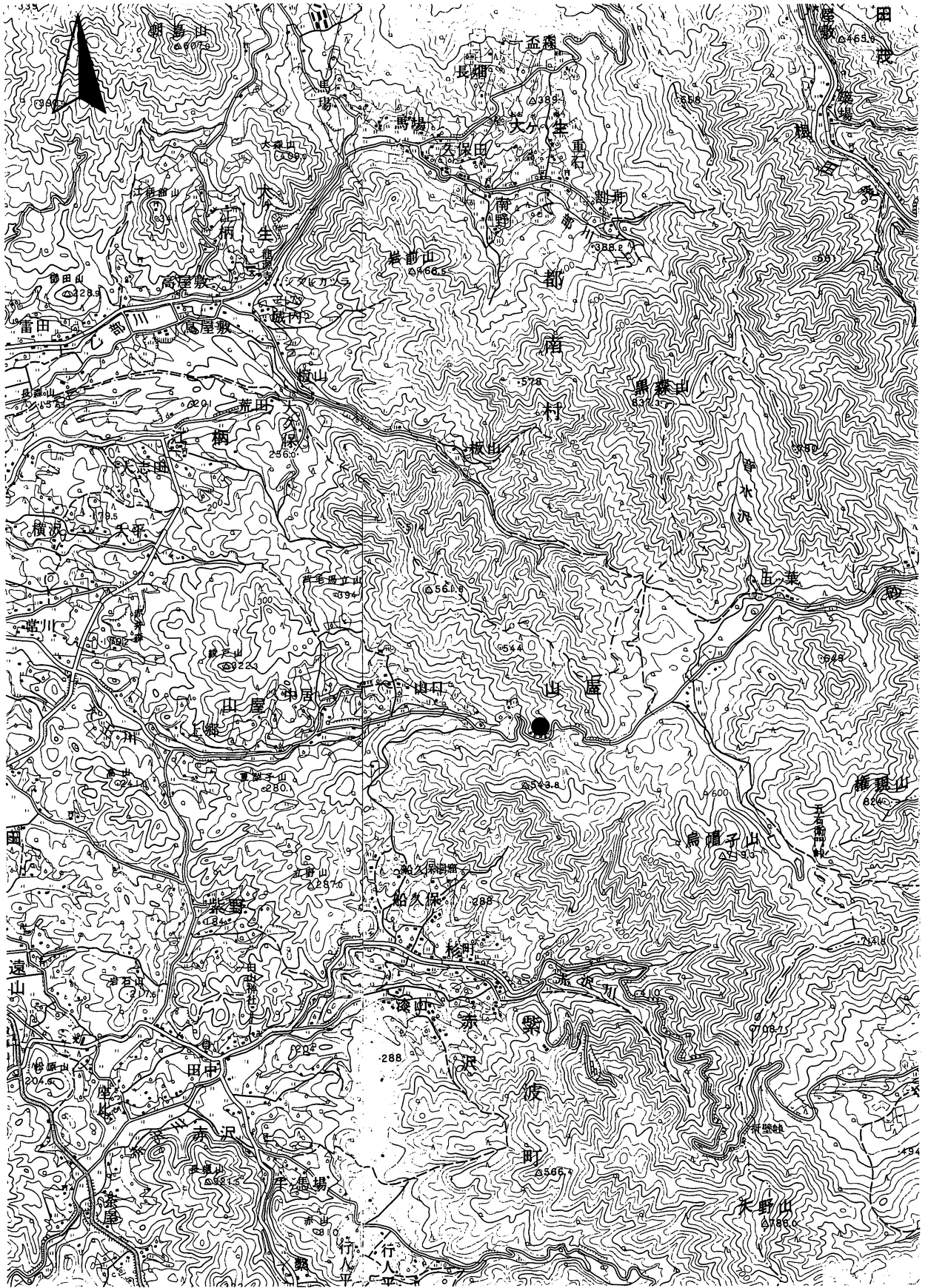
当該地区における遺跡の存在は、山地であったことにより知られていなかったが、平成3年10月に紫波町教育委員会に対して研究者から中世城館跡が存在するとの通報があったことにより、その存在が明らかとなった。一方、当該地区に対する道路改良事業は平成3年度に補助事業として新規に採択され、着手されることとなった。紫波町教育委員会ではそれに伴って、平成4年10月12日付けで文化庁に対して遺跡発見届を提出したが、この時点では城館跡だけが知られていた。平成5年4月24日には、遺跡の存在を通報した研究者によって「山屋館跡」の縄張図が作成された。

平成6年になって、用地買収が終了し立木の伐採に伴って城館跡とは別地点に石積みの存在が明らかとなり（結果的にこれが経塚となった）、城館跡とこの石積みを紫波町教育委員会が9月～10月に試掘調査を実施し、その結果は平成6年11月7日付けで紫波町土木課と岩手県教育委員会に対して、遺跡としての認定及び本調査が必要である旨を付記して報告された。

報告を受けた岩手県教育委員会は、紫波町教育委員会や紫波町土木課そして岩手県土木部盛岡土木事務所と取り扱いについて協議を進め、その結果本調査を実施することとなった。その結果に基づいて、岩手県教育委員会は平成7年2月28日付け「教文1053号」の「平成7年度埋蔵文化財調査事業の実施について」によって盛岡土木事務所に対して平成7年度の事業とする旨通知した。さらに、岩手県教育委員会文化課はそれに基づいて（財）岩手県文化振興事業団に対しても平成7年度の（財）岩手県文化振興事業団の受託事業とする旨と、合わせて両方で協議して進めるようにと、通知した。

通知を受けた（財）岩手県文化振興事業団は、平成7年6月15日付けで盛岡土木事務所長と事業団理事長との間で委託契約を締結し、平成7年6月16日～同年9月18日まで現地調査を実施し、その後同年11月1日から平成8年3月31日まで室内整理を行った。

なお、本遺跡の名称は当初「山屋館跡」のみであったが、調査によって経塚の存在が明らかとなり、遺跡の性格や地点がまったく異なることから、紫波町教育委員会及び岩手県教育委員会と協議を進めた結果、中世城館跡部分のみを「山屋館跡」とし、経塚部分は「山屋館経塚」として分離し、それぞれ独立した単独の遺跡とすることとした。



第2図 遺跡の位置図

1 : 50,000 日誌・早地峰

Ⅱ. 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置と立地

山屋館経塚・山屋館跡の所在する紫波郡紫波町は、岩手県のほぼ中央部にあり、北に矢巾町・盛岡市、南に石鳥谷町、東に大迫町、西は雫石町にそれぞれ接する。遺跡は東日本旅客鉄道東北本線古館駅の東約9.5kmに位置する。両遺跡は、国土地理院発行の5万分の1地形図「早池峰山」(NJ-54-13-11)の図幅に含まれ、北緯39度34分50秒・東経141度17分20秒付近に位置する。また両遺跡は、北上川の東側、北上山地西部の黒森山系の舌状の尾根上に立地しており、標高は山屋館経塚が430～435m、山屋館跡が450～490mである。現況は主として赤松・杉等の繁る森林である。

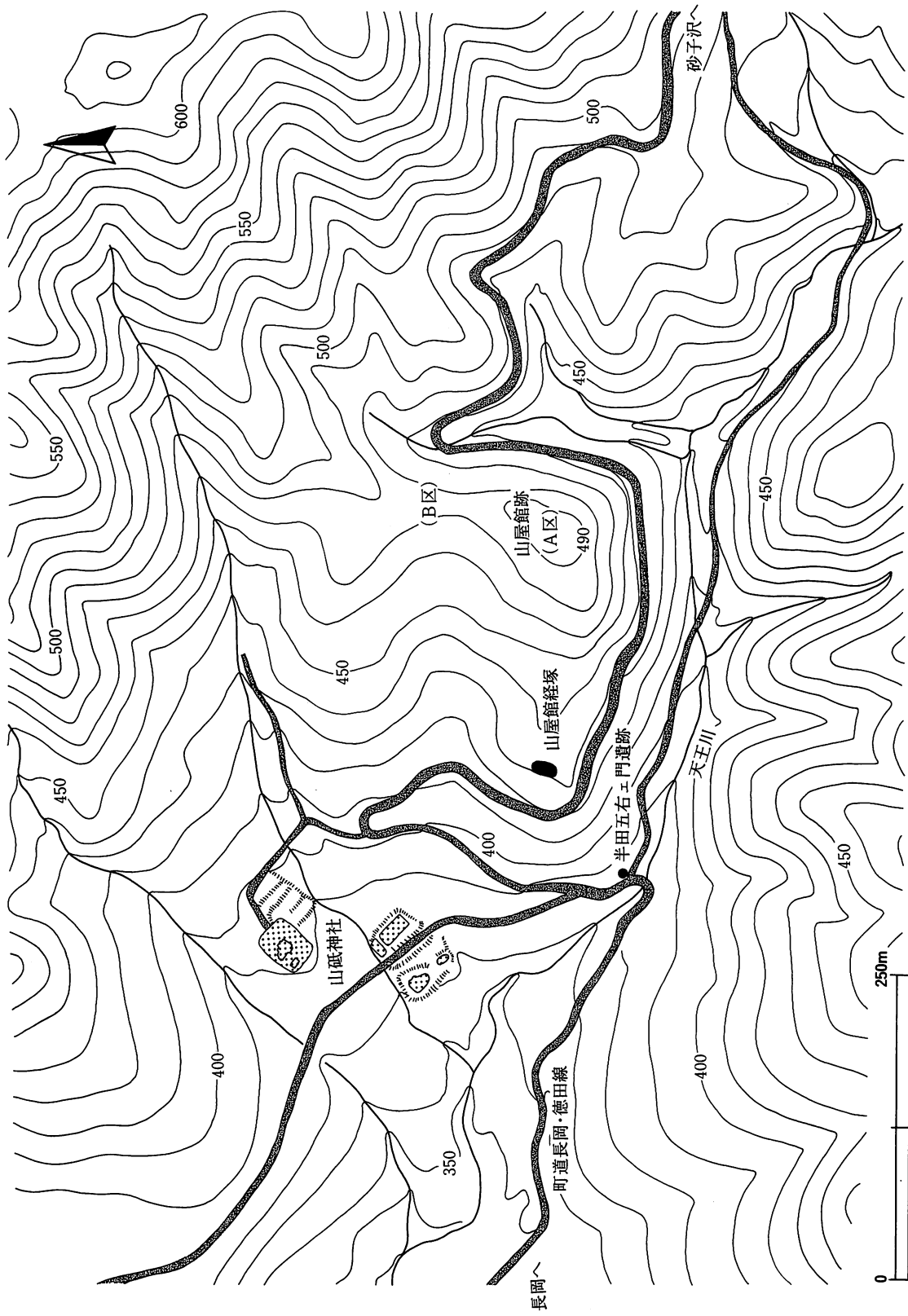
2. 遺跡の地形

紫波郡紫波町の東方には石灰質物質が堆積・隆起した高地が削られてできた北上山地があり、同町の西方には海底火山や圧力による褶曲の奥羽山脈がある。北上山地・奥羽山脈の両山系は、そのつくりが大きく異なるため地形・地質は甚だ変化に富んでいる。北上山地西部縁辺部あるいは北上川河谷東側は、小起伏山地及び中起伏山地からなり、主として古生層及び花崗岩類からなる。奥羽山脈東部縁辺部は、基本的に火山灰が堆積し、緑色の岩石となっているグリーンタフで構成されている。高度的にも高い山塊で起伏量400m以上を示す直線状急崖地形となっている。このような両者の構造の違いを受けて、北上川の東岸と西岸では地形が対照的である。北上川西岸は奥羽山脈から流れだす支流によって形成された大小の扇状地がみられ、この扇状地を刻むかたちで段丘もよく発達している。一方、北上川東岸では北上山地西部縁辺部が北上川に迫るように分布し、小規模な段丘と沖積地が観察されるにすぎない。紫波町の中央部を南流する北上川は、東北地方最長の河川で、岩手県北部の西岳に源を発し岩手県を縦断して宮城県に入り、飯野川付近で東に向きを変え追波湾に注いでいる。幹線流路延長は247kmに及ぶ。下流では大正から昭和の間の2度にわたり付け替え工事が行われ流路が変わっている。遺跡の所在する紫波町山屋字山口地区は、北上川東岸の東方にあり、北上山系黒森山・権現山・烏帽子山に囲まれた山村地域であり、主として小起伏状山地である。また遺跡の南側は北上川水系天王川(山屋川)に開析された深い谷となっている。

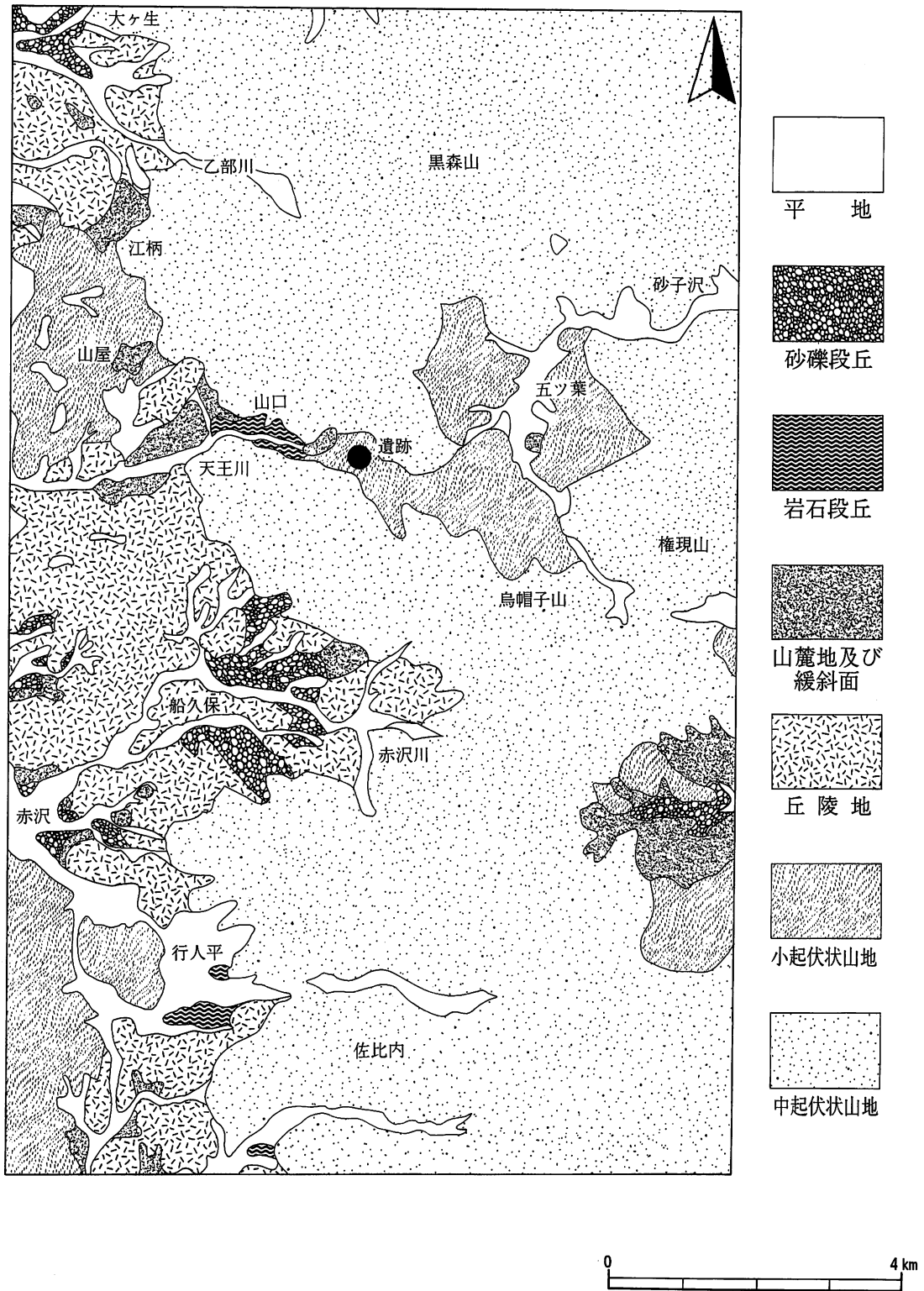
3. 山屋地区について

紫波郡紫波町山屋地区は、天王川(山屋川)と砂子沢川の上流域に位置する。黒森山・権現山・烏帽子山に囲まれた地域であり、字山口・下崎に縄文中期・後期の遺跡が残っている。近世～明治22年は山屋村と呼ばれ寛永年間頃に長岡村から分村して成立し、近世を通じ盛岡藩領長岡通に属していた。村高は「邦内郷村志」によれば152石余であり家数は51(集落別では峠2・大蛸4が見える)である。明治元年松代藩取締、以後盛岡藩、盛岡県を経て、明治5年に岩手県に所属。明治10年の村の幅員は、東西約1里31町・南北約15町、税地は田23町余・畑66町余・宅地11町余・切替畑75町余・畝下22町余の計199町余、戸数63・人口409、馬137であり、物産は馬・鶏・鶏卵・米・大豆・小豆・大麦・小麦・粟・稗・黍・蕎麦などである。明治22年以降現在の大字名となる。はじめは赤沢村の大字で、昭和30年からは現在の紫波町の大字となった。現在この地区では主として水田耕作と果樹(リンゴ・ブドウ・モモ)・葉煙草の栽培が行われている。

この地区は日詰・長岡から五葉の峠を越えて砂子沢・根田茂あるいは大迫方面に行くルートの途上にあり



第3図 遺跡周辺の地形図



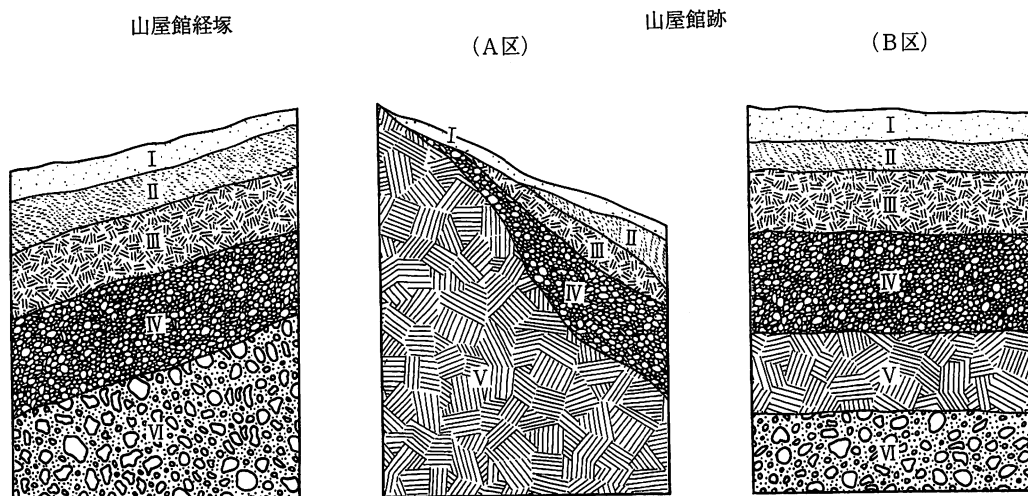
第4図 遺跡周辺の地形分類図

古くからの交通の要衝だったという。また遺跡の西方には大山碓命を祀る山碓神社があり、その由来は『紫波郡誌』によれば、坂上田村麻呂がこの地に十一面観音を勧請、熊野山照光寺と称したとある。更にこの熊野山照光寺は江戸時代から当国三十三観音札所の一つとして、十二番山谷観世音と称し「松が枝にかくれるつたに紅葉して山谷の寺は錦なるらん」という御詠歌が伝えられているという。付近の名跡としては、山碓神社の裏山（山屋館経塚の北方）に「不動岩」がある。高さ二十尺・幅六十尺の自然石に不動尊像を安置しているもので近くに不動尊堂がある。また伝統芸能としては「山屋の田植踊」があり、国指定重要無形民俗文化財に指定されている。遺跡周辺の地名は特に登録されているわけではないが、山屋館跡の場所を地元の人々は「蛇洞（じゃぼら）」と呼び、山屋館経塚の場所を「寺山（てらやま）」と呼んでいる。

4. 基本層序

調査区における土層の形成はその地形と植生等により一定ではないため、山屋館経塚及び山屋館跡A・B区それぞれの各層序の模式図を示した（第5図）。各層の層序は次の通りである。

- I層 10YR3/4 暗褐色～10YR2/3 黒褐色シルト・腐食土。しまりなし、粘性なし。草木根が繁茂し、未分解の植物質（木の葉を中心とする）の混在が認められ、下部はシルト質の暗褐色から黒褐色へと漸変する。0.5～1 cm程の小角礫を少量含む。部分的に炭化物片が散布するが、比較的新しい焚き火等の痕跡と思われる。層厚は10～15cm程である。
- II層 10YR3/4 暗褐色シルト。しまりなし、やや粘性あり。5～10cm程の角礫を少量含む。山屋館跡B区において縄文土器片や弥生土器片が含まれる層である。上部で草木根が混入する。山屋館経塚・山屋館跡B区の平坦面において10～15cm程であるが、斜面下位付近では20～30cm程の層厚である。山屋館跡A区においては急斜面のため土層の形成が希薄である。
- III層 10YR4/6 褐色シルト。しまりなし、やや粘性あり。角礫等の混入物は少なく、比較的均一な土層である。遺物は一切含まれない。層厚は30～40cm程である。
- IV層 10YR4/3 にぶい黄褐色～10YR5/6 黄褐色シルト。ややしまりあり、粘性あり。10cm以下の角礫を多量に含む。山屋館経塚・山屋館跡B区で層厚50cm前後であり、山屋館跡A区では斜面上部で約20～30cm



第5図 基本層序模式図

斜面下部で50～60cm程の層厚である。

V層 10YR7/6 明黄褐色シルト。しまりあり、粘性あり。3 cm以下の角礫を少量含む。全体的に均一な土層である。この層は山屋館跡B区を中心に分布し、層厚40～60cm程である。

VI層 10YR5/6 黄褐色礫層。同色のシルトを多量に含む。調査区全体に分布するが、山屋館跡A区においては急斜面部と削平面において、I層の直下にある場合がある。

5. 周辺の遺跡

遺跡の周辺には縄文時代から中世にかけての多くの遺跡が分布している。岩手県教委1995『岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧』によれば、遺跡周辺の盛岡市南部・矢巾町・紫波町・石鳥谷町内の遺跡は、約420箇所程確認されている。まず縄文時代後期から晩期にかけての遺跡には、白沢えぞ森古墳・乙部野・乙部方八丁・東長岡林崎Ⅱ・舟久保洞穴遺跡など31箇所がある。また遺跡の所在する山屋山口地区にも縄文中期・後期の遺跡がある。弥生時代後期の遺跡で知られているものには、大明神山の麓に位置する墳館遺跡があり、遺跡の北東側から墳墓とみられる南北3m・東西3.5mの隅丸形状の土坑を検出している。この遺構から小田野編年Ⅳ期に相当する弥生時代の壺が出土しており、この土器は壺棺の可能性が想定されている。また山屋近在の盛岡市乙部方八丁遺跡からも弥生時代の土器が出土している。

一方、奈良時代から平安時代の遺跡も数多く分布しており、稲村・白沢・東長岡林崎・上平沢新田遺跡など250箇所程がある。この時代の遺跡の中には、古代城柵官衙跡の徳丹城跡、須恵器や土師器窯跡の杉の上Ⅰ・星川窯跡・七久保遺跡、寺院跡として赤沢廃寺・伝蓮華寺跡・宮手・新山神社境町遺跡などがある。

平安時代末期12世紀代の遺跡としては、奥州藤原氏の一族、樋爪氏の居館とみられる比爪館跡がある。発掘調査によって12世紀後半のかわらけや国産陶器、四面庇をもつ掘立柱建物跡などが検出されている。同様のかかわらけは、比爪館周辺の大日堂・北日詰東ノ坊Ⅲ・南日詰大銀Ⅰ遺跡からも出土している。『吾妻鏡』文治5年条に登場する奥州藤原氏関係の「館」は、平泉館・衣河館と比爪館の3つである。最近の研究によれば、当時の「館」とは単に居館を意味するのではなく、政治権力の中心・政庁としての役割もあったとする説がある。この場所に「館」が置かれた理由としては、この地域が平安前期に志和城・徳丹城が置かれ、政治の中心的な場であり、北方世界との境界に位置する国家的に重要な場所であったことが想定されること等があげられるが、その他に紫波郡の北上川東岸丘陵部が砂金と馬の産地であり、とりわけ砂金の独占的支配の必要があったとする説(『紫波町史』)がある。但し、この地域の産金が資料の上で明確となってくるのは、近世初頭のことである。近世において佐比内から赤沢・舟久保・山屋にかけての山地には、朴山金山を筆頭として大小数多くの金山が開発され南部領内でも屈指の産金地をなし、この金鉱脈地帯を貫流する佐比内川・赤沢川・山屋川(天王川)の流域からは豊富な砂金を産出していたという。この地域の産金経営が12世紀代に遡るような史料はないが、古代から近世を通じ様々な意味で重要な場所であった可能性が高い。

また前述の『吾妻鏡』文治5(1189)年9月4日～11日条に、奥州合戦で鎌倉勢28万4千騎が「陣岡蜂社」に逗留した経過が書かれてある。「陣岡」とは古館の陣ヶ岡とする説が有力である。陣ヶ岡は遺跡の西方約10kmに位置している。実際、遺跡の西方に、北上川の向こうの緑の小さな独立丘陵、陣ヶ岡を眺めることができる。

更に同書9月9日条には、「今日二品なお蜂社に逗留す。而るにその近辺に寺あり、名づけて高水寺という。これ称徳天皇の勅願、諸国安置せられる一丈観自在菩薩像の随一なり。〔以下略〕」とあり、同11日条に「今日陣岡を立たしめ給う。今に至り己に七か日この所に逗留し給うものなり。而るに高水寺鎮守は、走湯権現を勧請し奉る。その傍らにまた小社あり。大道祖と号す。これ清衡の勧請なり。この社の後ろに大きな槻

木あり。二品彼の樹の下に佇み『走湯権現に奉る』と称し、上箭鏑二を射立てしめ給う。これより厨川柵は、廿五里の行程たるにより、いまだ黄昏に属せず、件の館に着御すと云々。」とある。それらの記述によれば、1189年時点で「陣岡蜂杜」の近隣に「高水寺」があり、その鎮守に「走湯権現」、藤原清衡の勧請したという「大道祖」があったとされる。高水寺域といえるこれらの場所はまだ確認されていないが、高水寺に関しては僧侶の訴えに対する源頼朝の誠実な対応ぶりから考えて、かなりの名刹（勅願の寺・官寺）か、あるいは古くから源氏と関係する寺院と考えられる。走湯権現は伊豆山権現のことであり、現在の静岡県熱海市から勧請されたもので、太平洋海運と関係し、当時から東国武士の信仰を集めていたという。また大道祖（道祖神）は、交通の要衝の境界に置かれたものと考えられており、陣岡を含めた高水寺域が当時の交通路に位置し、比爪館とともに北方世界との境界をなす場にあったと考える説がある。

高水寺その他以外の12世紀代の周辺の寺社については、『紫波町史』は、土館新山神社の前身である新山寺（新山権現社）と赤沢白山神社の前身である白山権現社をあげている。新山寺は、現在の新山神社の山坂の途中にいくつかの坊舎を配する典型的な山岳寺院であり、伽藍跡から平安末期の鏡（俗に鵲の古鏡という）と掛け仏残欠（十一面観世音）が出土している。また新山神社西方の道路工事中に完形の常滑産三筋文壺が出土している。この壺は中野晴久氏によれば常滑編年1b期に相当するタイプであり、出土状況から考えて経塚の存在した場所の可能性が考えられる。『紫波町史』は、「新山寺」の鎮守として創建以来新山権現社があったとし、新山権現社は出羽三山の新山（遙拜所）として勧請され、羽黒山系統の修験に開かれたものとして

いる。

山屋地区の南方に位置する白山権現社は、十一面観世音を本地とし、山寺号を寂靜山蓮華寺と称したとされる（『御領分社堂』）。蓮華寺は現在廃寺となっているが、本来は現在の白山神社境内に存在した可能性がある（白山神社境内より一字一石経塚が発見されている）。そして、白山神社南麓の薬師堂に安置されているという一木造りの毘沙門天立像と四明王立像（五大尊中不動明王を欠く）の五体は、本来は「蓮華寺」にあった可能性が高いようである。いずれも平安時代末の仏像と推定されており、樋爪氏時代に蓮華寺という寺院が存在していた可能性が考えられる。なお、五体の仏像はいずれも県指定文化財になっている。

6. 岩手県内の「経塚」について

関1984『経塚地名総覧』・木口1995『奥州経塚の研究』・岩手県教委1995『岩手県文化財包蔵地一覧』等によれば、岩手県内の「経塚地名」は81箇所及ぶようである。それらの分類に従い時代別に整理するならば、平安時代の経塚17箇所、中世の経塚7箇所、近世の経塚32箇所、時代不明25箇所となる。但し、以上挙げた「経塚」については、正規の発掘調査により確認されたものはきわめて少数であり、大部分が現代に残る経塚地名やその関連の地名、あるいはその伝承であったり、経石の散布であったり、外容器とみられる完形の陶磁器壺・甕類が単体で出土したこと等の根拠により、その場所を「経塚」と想定しているのが実態である。「経塚地名」81箇所については、「経塚の可能性のある場所」とするのが妥当であると思われる。近世の「経塚」については、その形態が一字一石経塚の形をとることが多いので、その場所に散布、あるいはその場所から出土した経石の存在から、近世の経塚であると確認することはある程度可能であり、県内に分布する近世の一字一石経塚についてはある程度の把握が可能であるかもしれない。一方、時代不明とした経塚については、出土したとされる壺・甕類の調査により平安時代あるいは中世の経塚の数は増えることになるだろう。この場合でも出土した陶磁器製の壺・甕類は、火葬墓の蔵骨器として使用されることもあり経塚と即断することはできない。平安時代の経塚は、教典を経筒に入れ（更にそれを外容器に納める場合が多いが）、鏡や合子

等の副納品と共に地下に埋納する「埋経の経塚」の形態をとることが多い。確認された最古の経塚は、寛治4(1007)年藤原道長の奈良県金峯山経塚である。全国に分布する埋経の経塚は12世紀代のものが大部分を占めるようである。山屋館経塚から検出された遺構は、12世紀頃の埋経の経塚の可能性が考えられるので、ここでは平安時代末の岩手県内の経塚の可能性のある場所について述べる。

12世紀頃の岩手県内の埋経の経塚は、主に北上川流域に分布する傾向がある。流域といっても平野部ではなく、奥羽山脈・北上山地の北上川寄りの丘陵部が多い。全国的にみて経塚の立地は、寺院や神社の領域内の見晴らしのよい丘の上に営まれる傾向があり、岩手県内の経塚についてもその傾向に準じているのかもしれない。経塚の立地は、寺社の領域以外では霊山・神山と呼ばれる山地の頂上に営まれる場合もあり、それについては岩手県内においては未確認であるが、修験道に関わる霊山的な山は県内にも存在するので、そのような立地の経塚の存在の可能性は考えられる。寺社の領域の経塚については、9～11世紀頃につくられたとみられる古代寺院あるいは式内社の存在と関係していると思われる。北上川流域以外では、県北の安比川流域に1箇所存在するが、これも古代寺院天台寺の領域に営まれたものであり、系統を別にするものかもしれないが立地条件としては共通する。

これまで発掘調査により経塚と確認されたのは、県内では東和町丹内山神社経塚1例のみである。報告書によれば、神社境内にある東経塚から銅製経筒と湖州鏡・宋銭が出土し、西経塚からは中国産白磁四耳壺と宋銭が出土しているという。実測図によれば底石・側石・蓋石からなる石槨構造の経塚遺構である。近年の発掘調査によって経塚の存在が推測されたものに、北上市南部工業団地遺跡がある。遺跡内から検出された近世の経塚の下部に何らかの遺構があり、その場所から渥美産刻文壺が出土している。遺構そのものは近世の経塚に破壊され明らかではない。また石鳥谷町大瀬川B遺跡では3基のマウンド遺構が調査されている。1号マウンドからは石槨部の内部から須恵器壺が出土し、2号マウンドの周溝から常滑産三筋文壺が出土している。大瀬川B遺跡の場合、墳丘と周溝の形態から中世の火葬墓である可能性が高いが、三筋文壺の存在からその前身に12世紀頃の経塚が存在した可能性が考えられる。古い時期の発見で記録があるのは、浄法寺町御山久保経塚である。天台寺に近接し寺域ともいえる場所であり、別名「土踏まず丘」と呼ばれ昔からの聖地とされる。『土踏まず丘発掘記』によれば、積石下の石組みから2個の猿投産壺が出土したという。

出土状況は全く不明ながら、豊富な出土遺物により経塚の存在が確実視されている場所は、平泉町金鶏山経塚・東和町熊野神社毘沙門山経塚である。金鶏山経塚からは、銅製経筒・渥美産袈裟禪文壺・常滑産三筋文壺・常滑産甕5点・常滑産片口鉢・平瓦・砂金・かわらけ・刀身・鉄鏃等の経容器・外容器と豊富な副納品が出土しており、奥州藤原氏の拠点平泉域の経塚に相応しい内容である。熊野神社毘沙門山経塚からも、銅製経筒・須恵器系外容器(経筒)・石櫃(石製外容器)・草花蝶鏡・かわらけ・鉄鏃等が出土している。また、花巻市岩根神社経塚からは、中国産白磁四耳壺・常滑産三筋文壺・常滑産甕・渥美産片口鉢が出土しており、まとまった外容器の出土例として興味深い。岩手県内で「経塚」と推測されている場所からは、常滑・渥美などの東海系陶器が出土している事例が比較的多くみられ、特に三筋文壺の出土が顕著である。また中国産白磁四耳壺や須恵器系(珠洲系)の壺類も出土することもあり陶磁器製の外容器は多様である。確実な経容器と判断できるのは銅製経筒であるが、県内で出土した事例は前述のように丹内山神社経塚・金鶏山経塚・熊野神社毘沙門山経塚の3箇所にすぎず、また発見された経筒には紀年銘が施される例がみられない。銅製経筒に比して外容器とみられる陶磁器製壺・甕類の出土が多いことから、搬入品の陶磁器をそのまま経容器として使用したとする説と、それらを蔵骨器とみて経塚の存在を疑問視する説もある。

表1. 周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	種別	出土遺構・出土遺物	No.	遺跡名	種別	出土遺構・出土遺物
1	清水野	集落跡	縄文(中・後・晩期)土器	54	境	散布地	縄文土器・石匙・石皿
2	煙山館	城館跡	—	55	沢川目	散布地	縄文土器
3	町	散布地	縄文土器	57	乙部野	散布地	縄文土器(後・晩期)
4	石切茶屋西方	散布地	須恵器・石棒	58	町田	散布地	縄文土器(中・後・晩期) 石匙・石鏃・石斧・土師器
5	野田新田	散布地	縄文中期土器片・石皿	59	松長根	集落跡	土師器・須恵器
6	町場	散布地	縄文土器破片・石鏃	60	乙部方八丁	散布地	縄文土器(早・中・後・晩期) 弥生土器・土師器・須恵器
7	称宣地Ⅰ	散布地	縄文土器	61	手造	散布地	土師器・須恵器
8	称宣地Ⅱ	散布地	縄文土器	63	江柄館	館跡	—
9	桜屋	散布地	須恵器片	64	高江柄	散布地	縄文土器(中期)
10	久保屋敷Ⅱ	建物跡	柱脚	65	江柄	散布地	縄文土器
11	久保屋敷	城館跡	柱脚(径、約30cm)	66	太田Ⅹ	集落跡	土師器・甕
12	下煙山	キャンプ地	土師器	67	瀧源寺前	散布地	縄文土器・石棒・石皿
13	煙山	集落地	土師器	68	城内	散布地	縄文土器(晩期)
14	細屋	散布地	縄文土器	69	江柄館	城館跡	—
15	白沢森	散布地	須恵器	70	虫壁	散布地	縄文土器(中期)
16	白沢館	城館跡	腰郭 他	72	北谷地山南東斜面	祭祀跡	平場
17	熊田Ⅲ	散布地	縄文土器	73	釈迦堂跡	祭祀跡	平場・礎石
18	熊田Ⅱ	散布地	縄文土器	74	館前	城館跡	柱脚
19	熊田Ⅰ	散布地	縄文土器	75	小泉	散布地	須恵器
20	白沢ⅩⅡ	集落跡	土師器	76	柳田Ⅰ	散布地	土師器
21	白沢ⅩⅨ	集落跡 キャンプ地	縄文土器・土師器・甕	77	岩清水Ⅰ	キャンプ地	—
22	白沢ⅩⅠ	集落跡	土師器	78	上山新田Ⅰ	散布地	縄文土器(中～後期)
23	白沢Ⅹ	集落跡	土師器・赤焼き?	79	岩清水城内Ⅱ	城館跡 集落跡	
24	白沢Ⅷ	集落跡	土師器・壺(ロクロ)・甕	80	南伝法寺沢Ⅱ	散布地	縄文土器(後期)・土師器
25	白沢ⅩⅢ	集落跡	土師器	81	岩清水Ⅳ	キャンプ地	—
26	飯島Ⅱ	集落跡	土師器	82	岩清水Ⅱ・Ⅲ	キャンプ地	縄文土器
27	白沢えぞ森古墳	集落跡 古墳	縄文(中・後・晩期)・土師器	83	南伝法寺中屋敷	散布地	土師器・須恵器
28	えぞ森古墳	古墳	—	84	小屋敷	散布地	土師器
29	白沢ⅩⅣ	城館跡	土師器	85	和田橋	集落跡	—
30	姥谷地	散布地	土師器	86	光円寺	散布地 集落跡	土師器
31	白沢ⅩⅤ	散布地	土師器	87	煙山Ⅲ	キャンプ地	土師器
32	谷地中Ⅰ	散布地	土師器・須恵器	88	室岡Ⅱ	キャンプ地	—
33	又兵エ新田	集落跡	土師器・須恵器	89	白沢Ⅲ	集落跡	土師器・甕
34	南矢巾	散布地	土師器	90	石蔵	散布地	土師器・墨?
35	狄森古墳	古墳	切子玉・勾玉	91	白沢Ⅱ	集落跡	土師器・甕
36	白山堂	散布地	須恵器・土師器	93	白沢Ⅶ	集落跡	土師器
37	田郷	散布地	土師器・須恵器・砥石・焼石	94	室岡	集落跡	土師器・甕
38	西前	散布地	須恵器・土師器	95	太田Ⅷ	集落跡	土師器・甕・赤焼き・須恵器
39	館畑	散布地	土師器・須恵器	96	石蔵Ⅱ	散布地	土師器
40	徳丹城	官衛	掘立式柱脚1本・須恵・土師器	97	不動馬場	集落跡	縄文土器・土師器
41	川村	散布地	—	99	両沼Ⅲ	集落跡	須恵器・土師器
42	下通	散布地	縄文土器・土師器	100	太田Ⅱ	集落跡	土師器・須恵器・甕
43	渋川	集落跡	須恵器・土師(細)片・柱脚2本	102	太田Ⅶ	集落跡	土師器・須恵器・甕・灰彩陶器
44	南谷地	城館跡	土師器・須恵器・柱脚3本 角材1本	103	杉の下	散布地	須恵器
45	間野々Ⅰ	散布地	土師器	106	北郡山Ⅰ	散布地	土師器・坏・ロクロ
46	間野々Ⅱ	散布地	土師器	107	太田Ⅳ	集落跡	土師器・須恵器・甕・坏
47	間野々一里塚	塚跡	—	108	太田Ⅸ	集落跡	須恵器・甕・赤焼き・土師器・坏
48	間野々Ⅲ	散布地	土師器	109	三合	散布地	土師器・須恵器
49	間野々Ⅳ	散布地	土師器				

No.	遺跡名	種別	出土遺構・出土遺物	No.	遺跡名	種別	出土遺構・出土遺物
110	両沼	集落跡	縄文土器・土師器・須恵器	169	宮手	散布地	—
111	太田Ⅲ	集落跡 キャンプ地			経塚寺院跡		
112	太田Ⅵ	集落跡	土師器	170	土館浦田	散布地	縄文土器(中～後期)
113	上竹林Ⅰ	散布地	須恵器	171	—	散布地	土師器
114	上竹林Ⅱ	城館跡	土師器	172	上平沢新田	集落跡	土師器
115	上竹林	散布地	土師器	175	上平沢川原	集落跡	土師器
116	太田ⅩⅡ	散布地	土師器	176	馬場	散布地	土師器
117	太田ⅩⅠ	集落跡	須恵器・甕・土師器	177	南馬場	駅家跡	—
118	上長根	集落跡	土師器・須恵器	178	東馬場	散布地	土師器・須恵器
119	古館橋	散布地 集落跡	土師器・須恵器	179	粟田	集落跡	土師器・須恵器
120	飯島Ⅰ	散布地	土師器	180	笹木館	散布地 城館跡	縄文土器(中～後期)
123	権現堂	集落跡	土師器	182	石田Ⅰ	散布地	土師器
124	柳田Ⅰ	散布地	土師器	183	石田Ⅱ	散布地	縄文土器・土師器
125	柳田Ⅱ	散布地	土師器	184	田面木Ⅰ	散布地	土師器
126	北郡山	城館跡	掘立式柱脚2本	185	田面木Ⅱ	散布地	土師器
127	岡村	散布地	土師器・須恵器	186	関沢Ⅰ	散布地	土師器
128	西田	散布地	土師器	187	関沢Ⅱ	散布地	土師器
129	島	散布地	土師器	188	関沢Ⅲ	散布地	縄文土器・土師器
130	高水寺	散布地	土師器・須恵器	189	だんご塚	塚	—
134	中田	散布地	—	190	寺館	城館跡	濠
135	念仏堂	寺院跡	—	191	浦田	散布地	—
137	古屋敷	散布地	—	194	愛宕山館	城館跡	—
138	柄内館	城館跡	—	195	内川	散布地	須恵器
139	柄内沢田	散布地	縄文土器(後期)・石鏃・ 土師器・須恵器	196	土館百目木	散布地	須恵器
140	東長岡上大平	散布地	縄文土器・石器	197	小林	散布地	土師器
141	柄内横沢目古墳	古墳	—	198	新里	散布地	土師器
143	東長岡天王	散布地	縄文土器・石鏃・石匙・石斧	199	稲藤館	—	—
144	柳田一里塚	一里塚	—	202	漆田	集落跡	土師器
147	—	散布地	土師器	203	平坊Ⅰ	集落跡	土師器・須恵器
148	—	散布地	土師器・須恵器	204	杉の上Ⅰ	窯跡	土師器・須恵器
149	—	散布地	縄文土器・土師器	205	新田	窯跡	土師器・須恵器
150	長岡城	城館跡	堀・土塁・郭	206	杉の上	集落跡	土師器・須恵器
151	東長岡林崎Ⅱ	散布地	縄文土器(後期)・土師器 須恵器	207	蓮沼Ⅰ	集落跡	土師器・須恵器
152	東長岡林崎Ⅰ	散布地	土師器・須恵器・石鏃・石匙	208	蓮沼Ⅱ	集落跡	土師器・須恵器
153	北田館	城館跡	—	209	川原毛瓦窯跡	窯跡	向鶴紋軒丸瓦・軒平瓦
154	山屋館跡	—	—	210	杉の上Ⅲ	集落跡	土師器・須恵器
155	小森	散布地	—	211	泰衝首洗い池	城館跡	—
158	升沢田中	散布地	土師器	212	平坊Ⅲ	集落跡	土師器
159	弥勒地	散布地	縄文土器・土師器	213	平坊Ⅱ	散布地	縄文土器・土師器
160	弥勒地館	城館跡	堀・郭	214	追分	散布地	—
161	蓮田Ⅰ	集落地	縄文土器	215	陣ヶ岡	城館跡 集落跡	縄文土器・空堀・土師器・ 須恵器
162	蓮田Ⅱ	散布地	土師器	216	日の輪月の輪	池跡	—
163	熊田	散布地	須恵器	217	北田	散布地	—
164	升沢極楽寺	散布地	縄文土器(中～後期)・土師器	218	柳原	城館跡 集落跡	土師器
165	—	散布地	土師器	219	宮手越場	散布地	土師器・須恵器
166	奥屋敷	—	—	220	宮手追分Ⅰ	散布地	土師器
167	下二合	散布地	土師器・須恵器	221	日詰上新田Ⅰ	散布地	土師器
168	上戸	散布地	土師器・須恵器	222	宮手追分	散布地	土師器・須恵器
				223	宮手追分Ⅱ	散布地	縄文土器・石器・土師器・須恵器

No.	遺跡名	種別	出土遺構・出土遺物	No.	遺跡名	種別	出土遺構・出土遺物
224	宮手追分Ⅳ	散布地	須恵器	279	平沢新田Ⅰ	散布地	縄文土器・土師器・窯跡
225	日詰七久保	散布地	須恵器	280	平沢新田Ⅱ	散布地	土師器・須恵器
226	日詰上新田	散布地	土師器	281	平沢四折	散布地	土師器
227	七久保	窯跡	土師器・須恵器	282	平沢幅Ⅱ	散布地	縄文土器・土師器・須恵器
228	善念寺山古墳	墳墓	縄文土器(後～晩期)	283	平沢野田Ⅰ	散布地	縄文土器・土師器・須恵器
230	善念寺山Ⅱ	散布地	縄文土器(中～後期)・石鏃・石匙	284	平沢野田Ⅱ	散布地	縄文土器・土師器
231	山子	散布地	縄文土器(後期)・石鏃・石匙	285	新山神社境町	散布地	縄文土器(中～後期)・鏡・掛仏
234	戸部御所	—	—	286	笹森館	城館跡	—
235	吉兵衛館	城館跡	陶磁器	287	新山古墳	古墳	—
237	大犬森館	城館跡	—	288	金田Ⅰ	集落跡	土師器・須恵器
240	星川窯跡	窯跡	—	289	金田館	城館跡	—
241	星川館	—	—	290	金田Ⅲ	集落跡	土師器
242	北田	散布地	土師器・須恵器	291	金田	散布地	縄文土器
243	遠山	散布地	縄文土器(中～晩期)・石斧 石鏃・石匙	292	土館田屋	集落跡	土師器・須恵器
244	遠山館	城館跡	—	293	中島	散布地	土師器・須恵器・石斧
245	高間館	—	—	294	沖田Ⅰ	散布地	土師器
246	加賀館	城館跡	—	295	尻掛	散布地	縄文土器(中、後期)・石斧
247	白山経塚	経塚	一字一石	296	片寄中島	散布地	土師器・須恵器・石鏃
248	赤沢廃寺	寺院跡	—	297	平沢佐藤部	散布地	土師器
249	伝蓮華寺跡	寺院跡	石碑	298	平沢滝名川Ⅰ	散布地	土師器
250	舟久保洞穴	洞穴	縄文土器(中期～晩期)石斧・ 石鏃・石匙	299	平沢滝名川Ⅱ	散布地	縄文土器・土師器
251	舟久保	城館跡	—	300	南日詰野原	散布地	土師器・須恵器
252	平沢越場Ⅰ	散布地	土師器	301	金館	城館跡	墨書土器
253	六本松	散布地	土師器	302	南日詰長根	散布地	縄文土器・土師器
254	平沢越場Ⅱ	散布地	土師器	303	—	散布地	土師器
255	平沢越場Ⅲ	散布地	須恵器	304	北日詰外谷地	散布地	石器
256	平沢堤頭Ⅱ	散布地	土師器	305	北日詰外谷地	散布地	土師器・須恵器
257	平沢字館Ⅰ	散布地	縄文土器・石器・土師器	306	北日詰外谷地	散布地	縄文土器・土師器・須恵器
258	平沢檜Ⅰ	散布地	須恵器	307	北日詰外谷地	散布地	縄文土器・石器・土師器
259	平沢幅Ⅰ	散布地	縄文土器・土師器	308	北日詰外谷地	散布地	土師器
260	平沢檜Ⅴ	散布地	土師器	309	北日詰外谷地	散布地	石器
261	平沢字館Ⅱ	散布地	縄文土器・石器	310	北日詰外谷地	散布地	石器
262	伝平沢館	散布地	土師器	311	北日詰外谷地	散布地	土師器・陶器
263	平沢檜Ⅱ	散布地	土師器	312	北日詰八掛	散布地	土師器・須恵器
264	平沢檜Ⅲ	散布地	縄文土器・石器・土師器・ 須恵器	313	北日詰下藪	散布地	土師器
265	桜町上野沢	散布地	縄文土器・土師器・石器	314	大日堂	集落跡 城館跡	土師器・須恵器・かわらけ
266	桜町下野沢	散布地	土師器	315	北日詰城内Ⅱ	集落跡	縄文土器・住居
267	日詰下野沢	散布地	—	316	北条館	城館跡	土師器
268	桜町中桜町	散布地	縄文土器・石器・土師器	317	北日詰東ノ坊Ⅱ	散布地	土師器
269	日詰牡丹野	散布地	土師器	318	北日詰東ノ坊Ⅰ	散布地	土師器・須恵器
270	田頭	散布地	—	319	比爪館	城館跡	土師器・須恵器・かわらけ
271	平沢松田Ⅲ	散布地	土師器・須恵器	320	伝蛇塚	散布地	—
272	桜町館田頭	散布地	土師器・須恵器	321	五郎沼	散布地	縄文土器・石鏃・石斧・石匙
273	平沢松田	散布地	土師器	322	北日詰下東ノ坊	散布地	土師器・白磁
274	北日詰牡丹野	散布地	縄文土器(後期)	323	南日詰大銀Ⅰ	散布地	土師器
275	平沢堤頭Ⅰ	散布地	縄文土器・須恵器	324	南日詰大銀Ⅱ	散布地	土師器・須恵器
276	平沢境田Ⅲ	散布地	須恵器	325	南日詰小路口Ⅱ	散布地	土師器・須恵器
277	平沢境田Ⅱ	散布地	土師器	326	南日詰小路口Ⅲ	散布地	土師器
278	平沢境田	散布地	土師器	327	南日詰宮崎	散布地	土師器
				329	南日詰田中Ⅰ	散布地	須恵器

No.	遺跡名	種別	出土遺構・出土遺物	No.	遺跡名	種別	出土遺構・出土遺物
330	南日詰牡丹野	散布地	土師器	377	基坪	散布地	縄文土器
331	南日詰	散布地	縄文土器・土師器・須恵器	378	彦部館	城館跡	—
332	伝善知鳥館	城館跡	縄文土器・土師器	379	彦部赤坂古墳	古墳	—
333	南日詰滝名川Ⅰ	—	—	380	定内	散布地	—
334	—	散布地	土師器	381	機織館	城館跡	陶磁器
335	犬淵新田堰Ⅳ	散布地	土師器	382	館盛	城館跡	土師器・須恵器
336	南日詰滝名川Ⅲ	—	—	383	元町	散布地	土師器・須恵器
337	南日詰滝名川Ⅳ	—	—	384	是信房墓所	—	—
338	犬淵新田堰	—	—	385	小深田	散布地	土師器
339	南日詰八坂沢	散布地	須恵器	386	寺沢	散布地	縄文土器
340	下川原Ⅰ	散布地	土師器	387	牛ノ頭館	城館跡	郭等
341	西田北	集落跡	縄文土器	388	田屋館	散布地	—
342	西田	集落跡 城館跡	縄文土器(中期)・堀・土塁	389	柳田館	城館跡	陶器・古銭等
345	下川原Ⅱ	集落跡	土師器	390	大明神	散布地	縄文土器(中～晩期)・石器
346	下越田Ⅰ	散布地	—	391	片寄漆立	散布地	縄文土器(中～晩期)・石器
348	犬淵谷地田南	—	—	392	墳館	城館跡・墳墓	—
349	南谷地	—	—	393	一二神古墳群	集落跡	人骨(頭蓋骨・胸骨)・玉
350	下越田Ⅱ	散布地	—	394	御在所	集落跡・墳墓	—
351	下越田Ⅲ	散布地	土師器	395	林	散布地	縄文土器(中期)・土師器・石器
352	鎌倉街道	—	—	396	弥五郎屋敷	散布地	縄文土器(後期)
357	野上	散布地	縄文土器(中期)	397	渡	散布地	縄文土器(後期)・石器
360	大巻館	城館跡	堀・郭	398	大地渡	集落跡	縄文土器(中・晩期)・石器
364	白根金山	金山跡	—	399	片寄	散布地	縄文土器・土師器
365	佐比内中平	散布地	縄文土器(中・後期)・石匙 石鎌	400	片寄野畑	散布地	縄文土器・石匙
366	平栗館跡	城館跡	—	401	上久保館	城館跡	—
367	平栗館	—	—	402	片寄上久保	建物跡	須恵器・柱脚
368	平栗	散布地	縄文土器(後・晩期)・石鎌・石匙	403	片寄熊林	散布地	縄文土器(前・中期)
369	代官畑	散布地	縄文土器(中・後期)・石鎌・石鐘	404	四ツ谷	散布地	—
370	中屋敷いたこ塚	塚跡	—	406	南日詰梅田	散布地	土師器
371	片山洞穴	洞穴	縄文土器(中・後期)	407	南日詰梅田Ⅱ	散布地	土師器
372	—	散布地	縄文土器	408	南日詰川原	散布地	土師器
373	大巻問田	散布地	土師器	409	南日詰京田Ⅰ	散布地	縄文土器・土師器・須恵器
374	大巻長沢尻	散布地	縄文土器(後期)・土師器	410	南日詰京田Ⅱ	散布地	土師器・須恵器
375	赤川館跡?	城館跡	—	411	南日詰蔭沼Ⅰ	散布地	土師器
376	彦部久保	散布地	土師器	412	南日詰蔭沼Ⅱ	散布地	土師器
				413	南日詰京田Ⅲ	散布地	土師器
				414	片寄越田	散布地	縄文土器(中・後期)・土師器

※岩手県教委1995『岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧』による。

欠番になっている遺跡は、遺跡名が付されていないものである。

表2. 岩手県の経塚地名一覧表

〔関1984・岩手県教委1995による〕

名称	所在地	遺物・時代	名称	所在地	遺物・時代
御山久保経塚	二戸郡浄法寺町御山	短頸壺・平安	福蔵寺経塚	二戸郡浄法寺町字寺の上	経石・近世
曲田経塚ⅠⅡ	二戸郡安代町字上の山	経石・近世	鳥海	二戸郡一戸町鳥海	陶器
耕雲寺	岩手郡葛巻町葛巻字小田	中世	一字一石一礼塔	岩手郡玉山村大字寺林字平森	経石・近世
—	岩手郡岩手町沼宮内	鏡	永井経塚	盛岡市永井字経塚	不明
油壺経塚	盛岡市上湯沢	二筋壺・平安	永祥院経塚	盛岡市材木町	近世
八幡神社経塚	盛岡市八幡町	近世	繫	盛岡市繫	甕
太田蝦夷森	盛岡市太田蝦夷森	甕・鉄玉	狐野原	盛岡市狐野原	一字一石経
宮手朴田経塚	紫波郡紫波町宮手朴田	平安?	白山経塚	紫波郡紫波町赤沢字田中	一字一石経
横町経塚	紫波郡紫波町佐比内字砥ヶ崎	平安?	宇部	久慈市宇部	一字一石経
和見	宮古市和見町	中世	山口	宮古市山口	一字一石碑
黒森山	宮古市黒森山(黒森神社)	甕	荷竹	宮古市津軽石字荷竹	古銭
山口地主神社	大槌町小槌第26地割	近世	古廟	大槌町小槌第28地割	石碑石仏・近世
三日月神社経塚	大槌町赤浜	経石・近世	赤沼経塚	大槌町吉里吉里3丁目	経石・近世
弁天鳥経塚	大槌町吉里吉里	経石・近世	山谷観音経塚	遠野市小友町山谷明前	中世
新山神社	紫波郡紫波町新山社	三筋壺・平安	比爪館跡?	紫波郡紫波町赤石	壺・平安
飯岡	盛岡市飯岡	甕?	経塚森	花巻市高松	甕・平安
高木岡神社	花巻市高木	壺?・平安?	まさかり塚	花巻市高松	壺・平安
真行寺経塚	和賀郡東和町下小山田	三筋壺・平安	丹内山神社経塚	和賀郡東和町谷内	白磁壺・平安
毘沙門山経塚	和賀郡東和町土沢字北成島	壺経筒・平安	鬼柳西裏	北上市鬼柳字町分	中世
下門岡ひじり塚	北上市稲瀬町字水越	中世	水押神社	北上市口内	三筋壺・平安
—	江刺市田原小田代	刀子・甕	益沢院	江刺市増沢	甕・平安?
小名丸経塚	江刺市増沢小名丸	不明	米ぼさつ供養塚	金ヶ崎町永沢橋本	石碑・近世
三ヶ尻十三塚	胆沢郡金ヶ崎町三ヶ尻	中世	経塚山	水沢市黒石町山内	中・近世
丸森経塚	水沢市黒石町字下柳	中・近世	栗林経塚	水沢市黒石町字八反町	経石・近世
出羽神社	水沢市羽田町出羽神社	陶器	—	水沢市姉体町	経石・近世
三子田経塚	水沢市佐倉河字佐三子田	三筋壺・平安	十三坊経塚	水沢市黒石町下柳	中・近世
宝寿寺	胆沢郡胆沢町南都田	経石・近世	登満羽毛経塚	胆沢郡前沢町生母字壇の腰	近世
一字一石経塚	胆沢郡前沢町生母字西館	経石・石碑	河内経塚	胆沢郡衣川村上衣川字河内	不明
的場	胆沢郡衣川村下衣川字本田原	近世	称宣塚	胆沢郡衣川村下衣川字寺袋	近世
経塚(南蘇塚)	胆沢郡衣川村字松下	近世	—	胆沢郡衣川村上衣川石神	経石・近世
衣川柵跡	胆沢郡衣川村	甕	金鶏山経塚	西磐井郡平泉町花立	経筒等・平安
鈴懸の森	西磐井郡平泉町平泉字大沢	石組み・平安	東福寺	西磐井郡平泉町長島字赤羽根	
経塚山	西磐井郡平泉町字高田前	中・近世	下西風Ⅰ	西磐井郡平泉町長島字西風	中・近世
南宗塚	西磐井郡平泉町平泉字東郷	経石・近世	経壇坂	西磐井郡平泉町長島字山谷	
経壇長根	西磐井郡平泉町長島字山谷	経石・近世	白山五輪	胆沢郡前沢町白山五輪	五輪塔・甕
龍泉寺経塚	東磐井郡大東町猿沢	中世	高倉東ノ森経塚	西磐井郡花泉町永井鞍懸山	甕・平安
鹿ノ畑経塚	西磐井郡花泉町日形字中通	甕・平安	高倉中ノ森経塚	西磐井郡花泉町永井薬師沢	平安
経ヶ森塚	西磐井郡花泉町金沢字小沢田		清水銅屋	西磐井郡花泉町清水銅屋	甕
—	西磐井郡花泉町上油田		浄津	西磐井郡花泉町浄津	甕
観音寺	一関市観音寺	碑	なんそう塚	一関市戸河内なんそう塚	
—	陸前高田市気仙町	経石・近世			

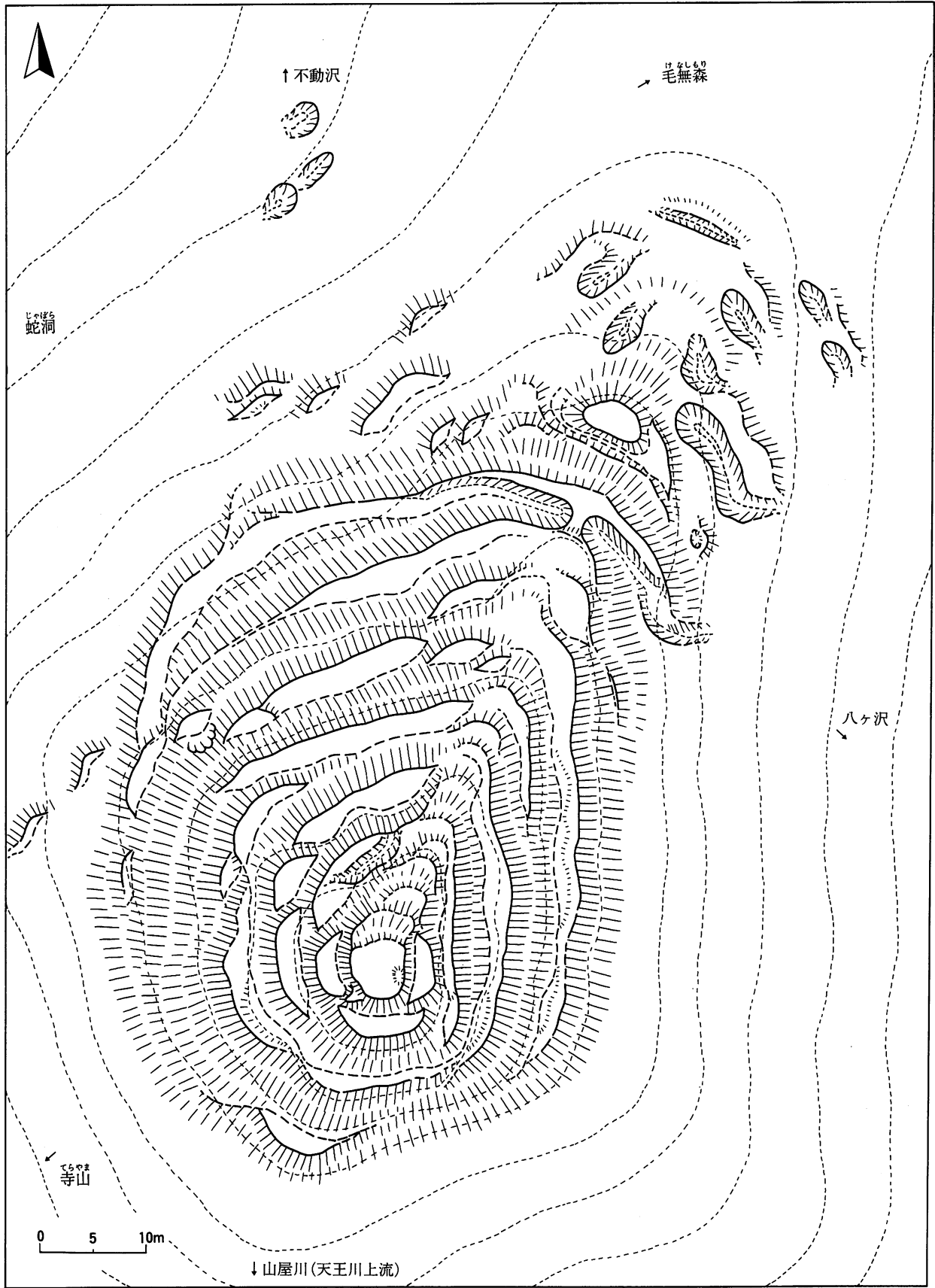
7. 周辺の中世城館と歴史的背景

山屋館跡は周知の中世城館遺跡ではなく、1993年4月に高橋博恭・古沢友治・室野秀文各氏による最初の縄張り調査が行われ、「蛇洞館」と命名された城館跡である（第7図参照）。館主を想定する文献や伝承はなく「山屋館」の名称は山屋に所在する館という意味にすぎない。以下簡単に山屋館跡周辺の中世城館とその背景について述べる。『紫波町史』によれば、文治5年奥州合戦後、奥羽の遺領は軍功の賞として源頼朝の御家人に分割給与され、奥六郡北部では岩手郡の北上川西部は工藤氏に、岩手郡と紫波郡の北上川東部は河村氏に、稗貫郡は稗貫氏に給与された。頼朝に降伏した樋爪一族6人のうち、季衡他4名は鎌倉に向け護送されているのに対し、ひとり俊衡だけは老齢をもって本領を安堵され、樋爪の地に留まったという。鎌倉時代中期になると、樋爪氏の旧領を足利氏の支族斯波氏（後に室町幕府三管領の一つとなる）が領知することになり、河東の河村氏と河西の斯波氏と二氏併立の時代を迎えた。建武2年（1335年）8月、足利尊氏は、斯波家長を奥州管領に任じて陸奥国府に拠る北畠顕家に対抗させた。こうして南朝派と北朝派に分かれての奥州の豪族層の対立抗争が始まり、斯波郡にあっても、河村氏は南朝派を支持し北朝派の中心斯波氏と激しく相争った。しかし次第に南朝の衰微とともに河村氏宗家は没落し、一族は斯波氏に屈するところになり、以後斯波氏は北上河東をも合わせて斯波郡六十六郷を支配することになった。

所伝によると、北上河東に所領を給与された河村秀清は、斯波郡の大巻に居城（大巻城）を築いたといわれる（『藤家河村氏由緒書』）が、確かな根拠があるわけではない。『紫波町史』によれば、河村秀清は鎌倉か相州河村郷の内に本拠を置き代官を駐在させて支配を行うのであり、秀興の代になり、斯波・岩手の所領を相続するに至って初めて当地に定住するようになり、この時本拠を大巻城にしたとし、現在大巻館跡と称される城館遺跡を大巻城があった場所と推定している。その後大巻河村氏の子孫が斯波・岩手両郡を分封した形跡があるが、基本資料が欠落しているためその経緯は全く不明である。伝えられる大萱生・柄内・江柄・手代森・日戸・玉山・下田・渋民・川口・沼宮内の諸氏が河村氏一族であったかどうかはわからない。紫波町二日町の城山公園の場所は、「奥州管領」斯波氏歴代の居城高水寺城があった場所と推定されている。城山公園は東麓を北上川が洗う標高108.6mの独立丘陵であり、その規模は南北1.2km、東西0.7kmに及ぶ。発掘調査はこれまで果樹園の更新や公園化事業、施設の建設などの事前調査として断続的に行われてきた。北西側の果樹園の調査では「高水寺跡」と伝えられている場所であり、整地して建てられた礎石建物跡と整地層下の掘立柱建物跡を検出している。遺物としては、石製の香炉・煙管・古銭（北宋銭）・陶磁器片・布目瓦等が出土している。本丸の北側に張り出す平地「姫御殿跡」からは、上幅2m・深さ2mの薬研状の空堀と掘立柱建物跡が検出され、更に南端部の平地からは掘立柱建物跡・竪穴住居跡・柵列・物見櫓跡等が検出されている。公園整備等の調査では園池跡や掘立柱建物跡が検出され、穀類・将棋の駒・曲物・椀・箸・下駄等の豊富な木製品が出土している。新山神社の南に位置する柳田館跡は、東北縦貫自動車道建設に伴い発掘調査が行われた。調査の結果、空堀・土塁の他に、柵列・城戸などの防御施設、造成された平場から建物跡・カマド状の焼土遺構等が検出された。建物跡は掘立柱建物跡と竪穴を伴う建物跡で、全平場から検出された柱穴の総数は2587個で、少なくとも80棟以上の建物が建て替えられながら存在したと想定されている。掘立柱建物跡は、主要建物・付属建物・方形建物の三群に分けられ主要建物は南西に庇をもつ。平場は切土や盛土によって造成される。出土遺物は陶磁器類が最も多く、金属製品・古銭・石製品・木製品がある。陶磁器は、明代の白磁・青磁・染付と国産の瀬戸・美濃の椀・皿類であり、16世紀後半の遺物が中心となっている。柳田館跡は、規模の大きさ検出遺構・遺物から、この地方の平山城を代表する城館跡とみられている。



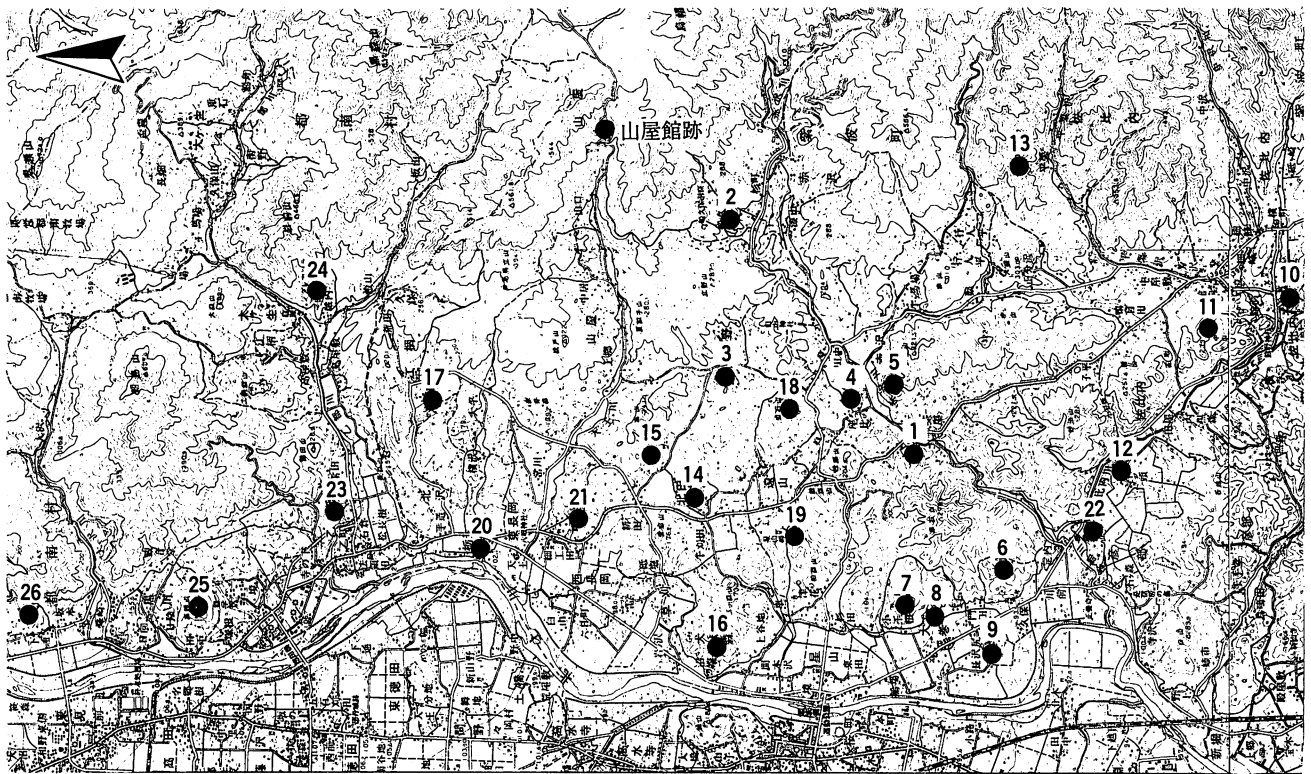
第6図 周辺の遺跡



標高490M 比高90M 主郭 東西5.1M 南北5.9M

1993.4.24 高橋博恭氏作成

第7図 山屋蛇洞館(山屋館)縄張り図



第8図 山屋館跡周辺の城館遺跡分布図

1 : 50,000

No.	名称	別称	所在地	遺構	城主等(文献)
1	的場館		紫波町赤沢字的場	郭・空堀・土塁	
2	船久保館		紫波町赤沢字船久保		
3	田村館		紫波町赤沢字清水袋		田村治兵衛(赤沢村郷村史)
4	加賀館	清水館	紫波町赤沢字加賀館		
5	赤沢館		紫波町赤沢	郭・空堀・土塁	赤沢氏(紫波郡誌)
6	古館		紫波町大巻字上山		
7	大巻館		紫波町大巻字花立	郭・空堀・土塁・井戸	河村秀興
8	梅ノ木館		紫波町大巻字梅ノ木		(紫波郡誌)
9	赤川館		紫波町大巻字長沢尻		葛原義敬
10	古館		紫波町佐比内字古館	郭・空堀・土塁	
11	佐比内館		紫波町佐比内字神田		河村秀清(封内郷村誌)
12	牛ノ頭館		紫波町佐比内字牛ノ頭	堀	河村氏(南部諸城の研究)
13	平栗館		紫波町佐比内字平栗		
14	星川館		紫波町北田字星川	郭・空堀	
15	畑沢館	北田館・梅ノ木館	紫波町北田字畑沢	郭・空堀	
16	犬吠森館	東館	紫波町犬吠森字沼端	郭・空堀・土塁	東民部(紫波郡誌)
17	江柄館		紫波町江柄字大志田		江柄式部(紫波町史)
18	高間館	西野館	紫波町遠山字西野々		
19	遠山館		紫波町遠山字新田		
20	栃内館		紫波町栃内字栃内	堀	栃内秀綱(紫波町史)
21	長岡館		紫波町東長岡字館	郭・空堀・土塁	長岡氏(南部古実記)
22	機織館	彦部館	紫波町彦部字機織		彦部氏(彦部村誌)
23	乙部館		盛岡市乙部字館	空堀・腰郭状の平坦地	乙部兵庫(奥南落穂集)
24	大萱生館		盛岡市大ヶ生字城内	郭・空堀	大萱生玄蕃(枯清私記)
25	黒川館		盛岡市黒川字沢田	空堀・腰郭	黒川某(紫波郡誌)
26	手代森館		盛岡市手代森字館	主郭・空堀・腰郭	手代森秀親(紫波郡誌)

表3 山屋館周辺の中世城館跡

Ⅲ. 野外調査と整理の方法

1. 野外調査

(1)調査区の設定

山屋館跡の調査区はやや屈曲し細長く伸びているが、それは道路の改良工事による調査区の設定によるものである。一方、山屋館経塚の地点は山屋館跡の主郭部より西に約200mの地点にある。そのため山屋館経塚と山屋館跡を一括するグリッド設定は実際の調査面積よりもかなり大きな範囲となった。グリッドの単位は4m×4mとした。遺跡北東隅を基準とし、南北方向は北から4m毎に0・1・2・3～52・53・54の番号を付した。また東西方向については4m毎に東からA・B・C～X・Y・Zのアルファベットを付した。最初のA～Zを1A～1Zとし、2番目のA～Zを2A～2Z、3番目のA～Zを3A～3Z、4番目のA～Zを4A～4Zとした。各グリッドの名称は、南北列と東西列の記号を組み合わせ、例えば1C42や3M38のように表現している。

また山屋館跡については、調査区が広範囲に及び、館跡地区と平坦地区とは遺跡の性格が異なることから調査区を2分割して、館跡地区を山屋館跡A区、平坦地区を山屋館跡B区と呼称している。

(2)基準点の設定

基準点については八幡平頂上を基準とするX系を使用している。調査区は広範囲に及ぶため、4地点に基準点を設定し、山屋館経塚に基準点1、山屋館跡に基準点2～4を置いた。山屋館跡では西側の平地に基準点2、頂上の主郭部(A区)に基準点3、北側の平坦地区(B区)に基準点4を置いた。それぞれの基準点の成果は次の通りである。

基準点1	X = -47,186.00	Y = 37,246.00	H = 430.804m
基準点2	X = -47,198.00	Y = 37,402.00	H = 469.546m
基準点3	X = -47,178.00	Y = 37,450.00	H = 491.955m
基準点4	X = -47,098.00	Y = 37,486.00	H = 471.370m

(3)山屋館跡の調査前の写真実測

山屋館跡A区では、まず館跡現況の写真実測を行った。調査区の森林は伐採されていたが、その除去が不十分であったため樹木等の雑物除去にかなりの労力と日数を費やした。特に館跡南側については急斜面になっており、平場は未形成であることが明らかだったため主郭部周辺の除去に留めた。また立木伐採及び搬出時の重機が相当部分の帯曲輪と掘跡を破壊しており、原状復旧は非常に困難であったことを断っておく。空中写真は、各地点にポイントを設定し、リモコンヘリによる撮影を行った。

(4)山屋館経塚の積石平面の写真実測

調査前の積石は、山林であったこともあり、多くの木の根が入り込み、伐採された樹木と枯れ葉及び腐食土に覆われていた。そのためそれらの除去を行った後にケーブル方式による積石平面の写真実測を行った。

(5)山屋館跡の精査と遺物の取り上げ

山屋館跡B区では、雑物除去の後、(3)の写真実測による地形測量を行い、各グリッドにベルトを設定して、遺構検出面(Ⅱ層)まで掘り下げていった。平面径が大きい遺構は十字のベルト、平面径の小さい土坑あるいは柱穴状の遺構は半截し、断面の写真撮影と実測を行った。遺物はⅠ～Ⅱ層のものはグリッド番号と層位を付して取り上げた。遺構内の遺物は、遺構名と可能な限り層位を付して取り上げた。

(6)山屋館経塚の精査と実測

4基の経塚状遺構は積石平面の写真実測及び写真撮影を行った後、それぞれ積石平面を4分割し千鳥状に積石を除去していった。状況からみて十字のベルトの設定は不可能と判断したからである。それ故積石断面の実測図は反転させたものである。積石除去後は石槨部周囲に組石が存在することが考えられたので、4基の組石・石槨部の検出平面の写真実測を行った。組石の除去は基本的に東西方向と南北方向の十字のベルトを設定し断面を実測した。組石を除去し石槨部の中心部と想定される遺構が検出されたので、その検出平面の2度目の写真実測を行った。石槨部の石の除去の際にも、東西と南北のベルトを設定して断面を実測したが、可能な限り新たに現れた石の平面の実測も行った。

(7)山屋館跡の平面実測

山屋館跡は調査区の大半が斜面になっているため、検出した遺構の平面は、トータルステーションによる実測を行った。館跡については、調査後に全体の2度目の写真実測を行い、トータルステーションによる主郭・曲輪・帯曲輪・マウンド状遺構の平面実測の成果と照合した。

(8)写真撮影

基本的に6×7cm及び35mmの白黒ネガフィルムと35mmのカラーライドの3種で撮影を行ったが、撮影対象により35mmの白黒ネガフィルムと35mmのカラーライドの2種で撮影する場合があった。また観察・記録用としてポラロイドカメラを使用した。

2. 室内整理

(1)遺構の図面の整理

山屋館跡に関しては、検出した遺構の平面図はトータルステーションによるデータを基に、全体写真測量図と写真を参考にして第1原図及び第2原図を作成し、それらをトレースしている。山屋館経塚の経塚状遺構の石槨部の断面図については、各段階での断面図を合成した後に、第2原図を作成した。また経塚状遺構の精査の各段階での平面図については、全体の写真測量の成果を活用しているものがある。

(2)遺構図版

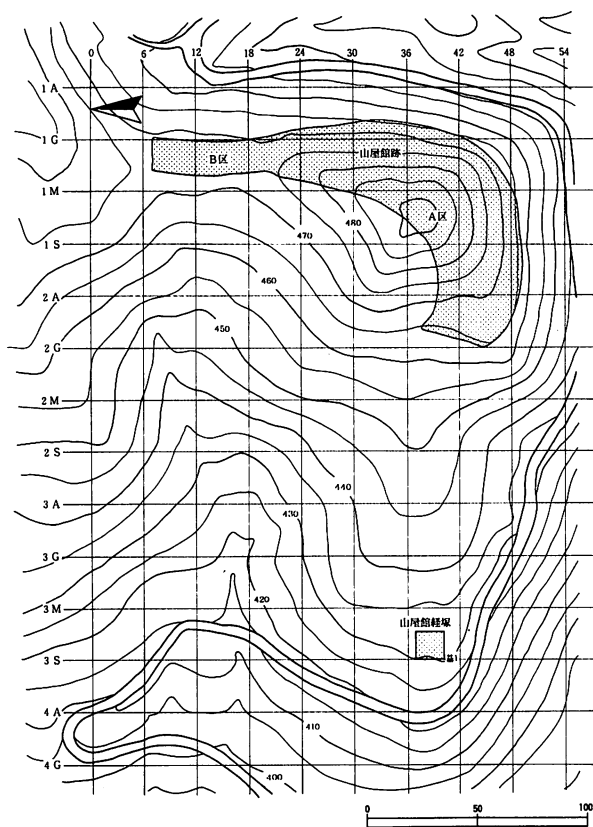
山屋館経塚の図版は原則として1/20で掲載しているが、積石・組石等の平面図については1/40～1/80で掲載している場合がある。また山屋館跡A区の遺構図版については、堀跡の平面は1/80、断面は1/40で掲載しており、マウンド状遺構等については不定である。山屋館跡B区については、基本的に平面・断面とも1/40で掲載している。それぞれの遺構には、縮尺とスケールを付している。

(3)遺物の実測と図版

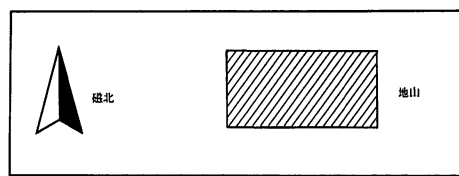
山屋館経塚から出土した2つの壺と「箱」状の破片と蓋石は、原寸大で実測し、トレースを行った。2つの壺については、製作技法上重要と思われるので、それぞれ底部の拓本をとり、同縮尺で掲載している。図版ではいずれも1/3で掲載している。山屋館跡B区から出土した縄文土器及び弥生土器は、すべて破片であり、全体形を想定できるものはないため、断面の実測と拓本を行った。図版ではすべて1/2で掲載している。

(4)写真図版

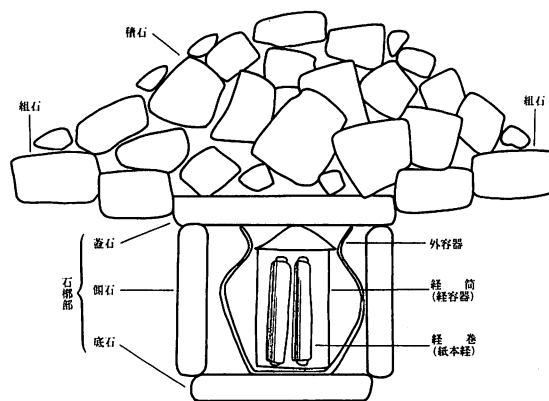
巻頭カラー写真図版は、35mmのカラーライド写真及びケーブルによる全体のカラー写真(6×6)を使用した。白黒の写真図版の方は、手持ち及びリモコンヘリ、ケーブル方式による空中撮影を行った35mmと6×7cmの白黒写真を使用している。縮尺はすべて任意である。



第9図 調査区とグリッド配置図



スクリーントーンのあらわし方



第10図 凡例

【参考資料】

経塚について

(1)経塚とは何か

経塚とは、紙本経や一字一石経のような教典を、土中に埋納した場所のことである。このような経塚は、10世紀の後半から行われ、教典埋納の主意に多少の変化はあるものの、現代にいたるまで続けられている。千年に及ぶ経塚の歴史の中でその造営形態や主意等大きく変化させている。関秀夫は全体を大きく3つの時代に分けている。この3つの時代とは、1.古代の経塚、2.中世的な経塚、3.近世的な経塚である。1.は平安時代から鎌倉時代初期に活発に造営された「埋経の経塚」である。1.については(2)以降で述べる。2.は主として16世紀に盛行した六十六部聖による、廻国納経に伴う「奉経の経塚」である。鎌倉時代に定着した六十六部聖の活動と霊場信仰との結びつきが見られ、遺物としては納札、納経受取書、奉納経筒などが検出されている。3.は主として一字一石経塚で知られる「礫石経の経塚」である。礫石経の経塚は室町時代から行われているが、最も盛行したのは17世紀以降のことである。埋経の願意や造営年を記した経碑を伴うものと、そうでないものがある。なお、13世紀から15世紀の経塚については、鎌倉時代前半の経塚の流れを汲んでおり、やや小型になった経筒に紙本経を納めたものが多い。15世紀頃の経塚の発見例は少ないようである。

(2)経塚の目的

経塚造営の目的は、地上の教典を56億7000万年後の未来まで保存することであるという。それは経塚の造営が始まる平安時代後期に流布した末法思想と大きく関係する。仏教では釈迦入滅後の世界を、正法・像法・末法の3つに分ける。末法の世では釈迦の教えだけが残り凡人はいかに修行しても悟りは得られない。やがて56億7000万年後、釈迦の代わりに地上に降りてくる弥勒如来の救いをひたすら待つしかない。しかし、弥勒如来が降りてきた時地上のお経（釈迦の言葉）が減っていたのでは救いが得られない。そのためお経を保管する経塚が生まれたというのがこれまでの経塚の目的に関する説明であった。

しかし弥勒如来に値遇したいとする願いは現実的なものではないと考えられる。もとより保管には不向きな紙の教典を埋納することが多いのである。自らの浄土への往生や死者の冥福を祈る追善のために仏教的な善行をなすこと＝「作善」が経塚造営の本来（本音）の目的であった。作善の中には、お経をよむことから始まり、教典の書写、仏像の造立、寺院・堂塔の建立が含まれ、経塚造営はそれらの行為の一部であったと考えられる。
(杉山洋1994『浄土への祈り－経塚が語る永遠の世界』より)

Ⅳ. 山屋館経塚. 検出された遺構と遺物

1. 山屋館経塚の立地

山屋館経塚は、山屋館跡の主郭部（頂上部）の西方約200mの、館跡から延びる丘陵に連続する舌状の尾根の先端部に位置する。4基の経塚状遺構のある場所は標高431～434mの緩斜面であり、調査前は、赤松・杉を中心とした山林地帯であった。遺跡の南側は急峻な崖となっており、下に天王川が西流している。天王川と遺跡の比高は40～50m程である。遺跡の約230m北方にも沢が西流しており、遺跡の西方下で天王川と合流している。また遺跡の北方約60mにも小規模な沢が西流しており、遺跡はこれら3つの沢に挟まれる形になっている。遺跡の北北西約250mには大山砥命を祀る村社山砥神社がある。ほぼ南西方向を向く神社で手入れの行き届いた杜の中にあり、この地域の鎮守的な存在である。『紫波郡誌』によれば、山砥神社の前身は寺院であり十一面観音を安置していたとされる。かつての寺院の跡は確認されていないが山砥神社の周辺には明らかに人為的な削平による平地がいくつか存在している。また山砥神社南方に家の跡があり、ここは山寺という屋号であったとされている。この山砥神社周辺に古い寺院が存在した可能性が考えられる。また遺跡の北北東約300mの山の中腹には、その旧寺院と関係する可能性のある「不動石」が祀られてある。

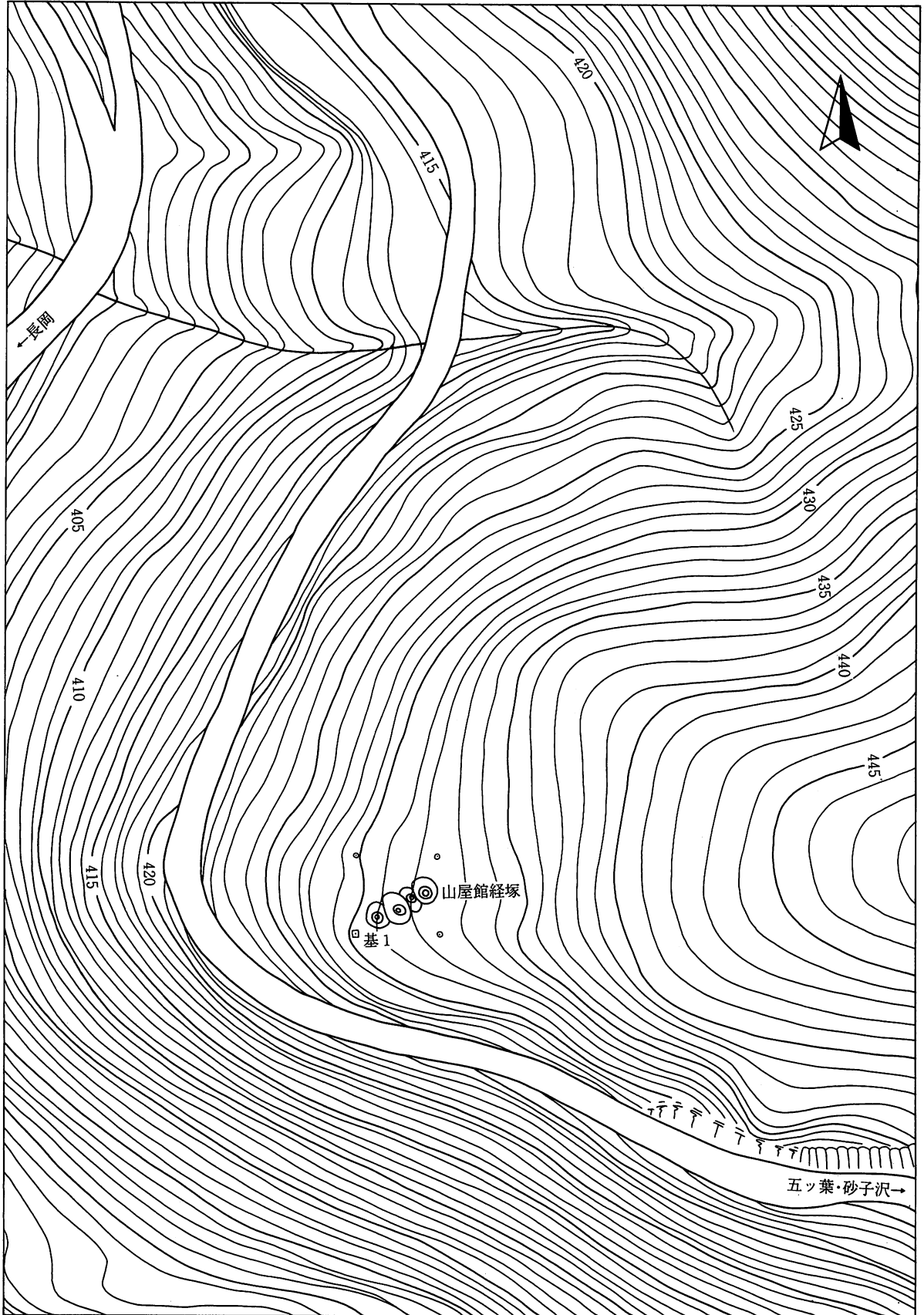
遺跡の下を紫波町古館・長岡地区と盛岡市砂子沢地区を結ぶ町道長岡徳田線が巡っている。かつては遺跡南方の天王川沿いに道が開けていたという。山屋の中心の集落は遺跡の西方にあり、山砥神社から山屋館跡までの地域には民家は存在しない。また調査に入る以前に道路工事による重機掘削により、遺跡の立地する舌状の尾根の先端部の北半分は失われていたため、遺跡北側の緩斜面部の状況はわからない。

2. 積石の状況

調査に入った段階での積石の状況は、多くの木根が繁茂し伐採された木の枝や蔓・枯れ葉で全体が覆われていた。このような状況から考えて、それらの積石は長期間森のなかに人知れず埋もれていたことが想像される。積石の平面実測を行うため石の上を覆う枝や蔓等の雑物の除去を行ったが、雑物等の下から約40～60cm程の角礫を主体とする3基のマウンド状の積石が姿をあらわした。積石のマウンドの規模は、長軸が約13m程で1基あたり4～5m程の幅を有している。それら積石群は、北に対してほぼN-60度-Eの角度で直線状に並んでいた。3基とも中央部がすり鉢状に掘り窪められてあり、状況からみて盗掘を受けていることは明らかであった。検出した3基の積石のマウンドを、北から1号・2号・3号経塚状遺構とした。

石塚上部に積まれた石は、遺跡周辺に散在するいわゆる山石類と同一のものと考えられる。最も高く盛り上がる中央部が盗掘を受けているので明確なことはわからないが、これらの角礫を中央部付近で約40～60cm程の高さに積み上げており、角礫を3～4個分を積み上げた高さであったと考えられる。角礫の隙間を埋めるように約10～20cm程の角礫を置いている。マウンドは積石のみで構成されており、封土や葺石等は検出されず、マウンドの状況や長年の風化を考えてもそれらは元々存在しなかった可能性が高い。

積石全体のクリーニングの後、積石全体の平面の写真実測を行った。その後断面を残して千鳥状に積石の除去を行い、積石の写真と図面を断面を取りながら積石下部の検出作業をした。その結果1号～3号経塚状遺構に相当する組石及び石塚部を検出した。更に4基目の遺構の可能性が確認されたので、その遺構を4号経塚状遺構とした。1号～3号経塚状遺構に関しては、後年の盗掘による積石の移動がある程度考えられるものの、未盗掘の4号経塚状遺構については、そのほとんどの積石は造営当初の状況に近いと考えられる。



1 : 1000

第11図 山屋館経塚周辺の地形図

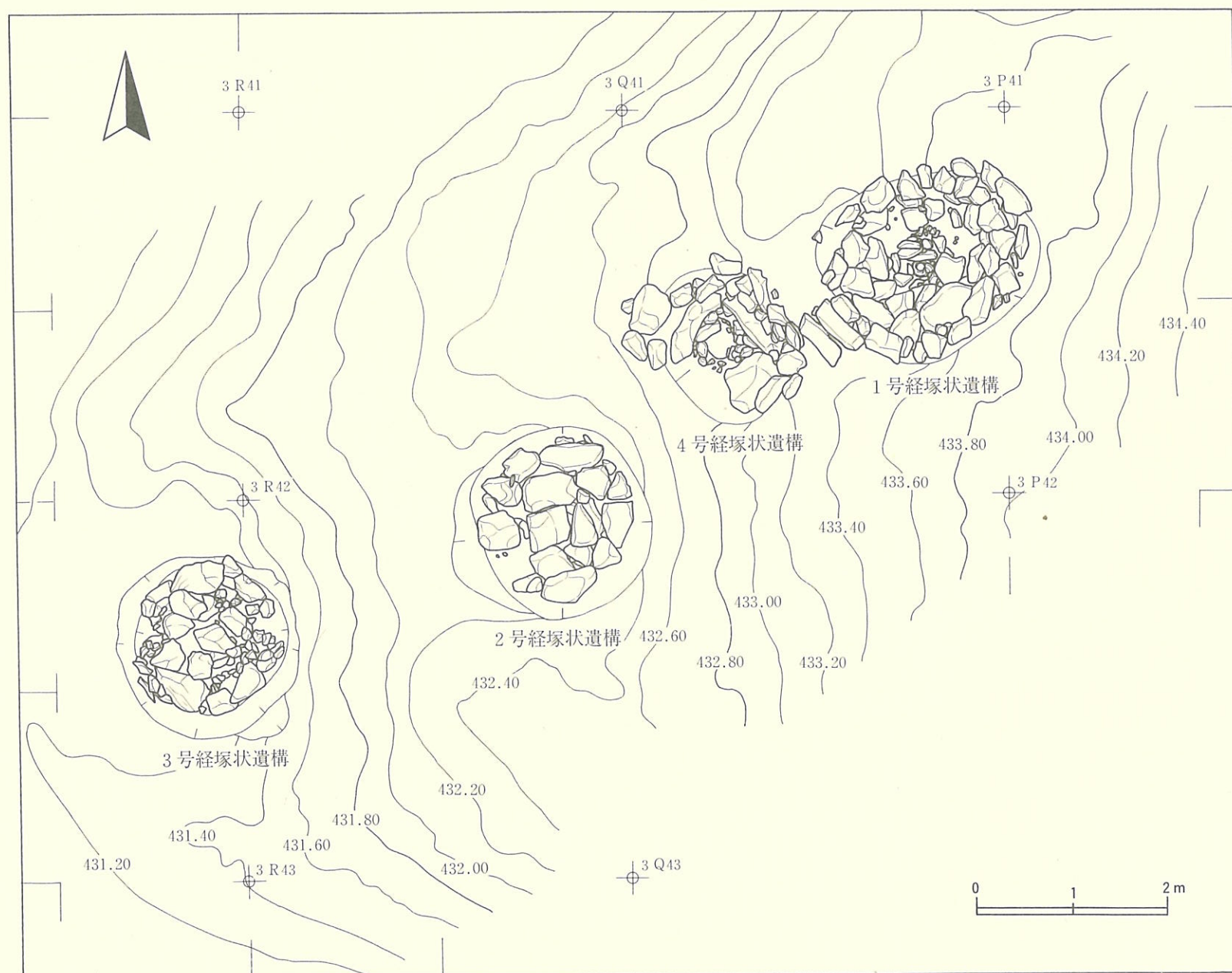
3. 1号経塚状遺構

当遺構は、経塚状遺構群の中では最も北に位置する。東西約240cm・南北約200cmの円形のすり鉢状を呈し、中央の石槨部を囲むように石が組まれている。組石は下部から上部へと構築されており、深さは約30cmである。組石は大きい石が60cm程、小さい石が30cm程で一定ではないが、いずれも偏平で角が丸い河原石を使用している。角の丸い河原石でも組みやすくするために、人工的な加工を施している石もあった。おそらく盗掘が原因すると思われるが、石槨中央部から北東側・北西側の組石は部分的に抜き取られていた。また中央部にある側石の周辺には、約5～8cm大の比較的小さな玉石・角礫が散在していた。

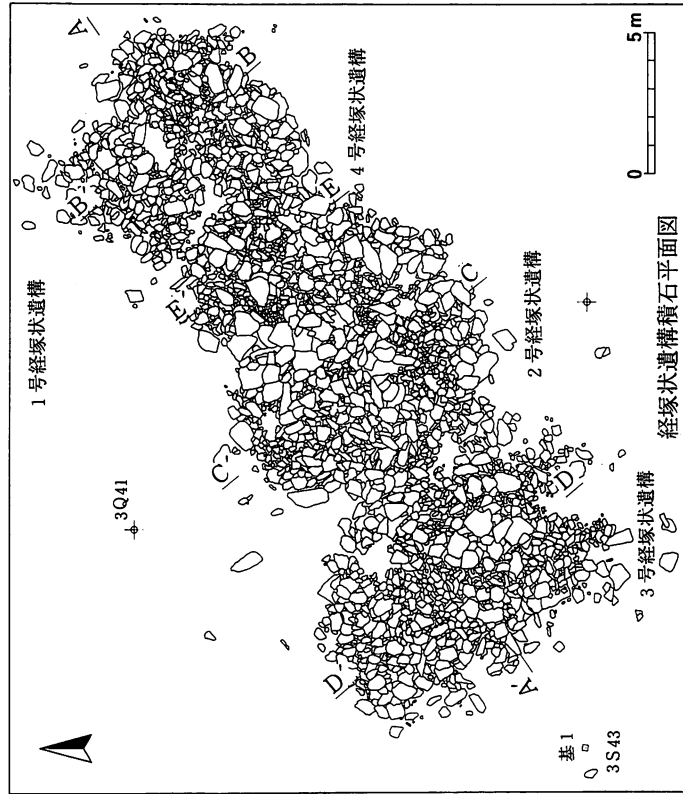
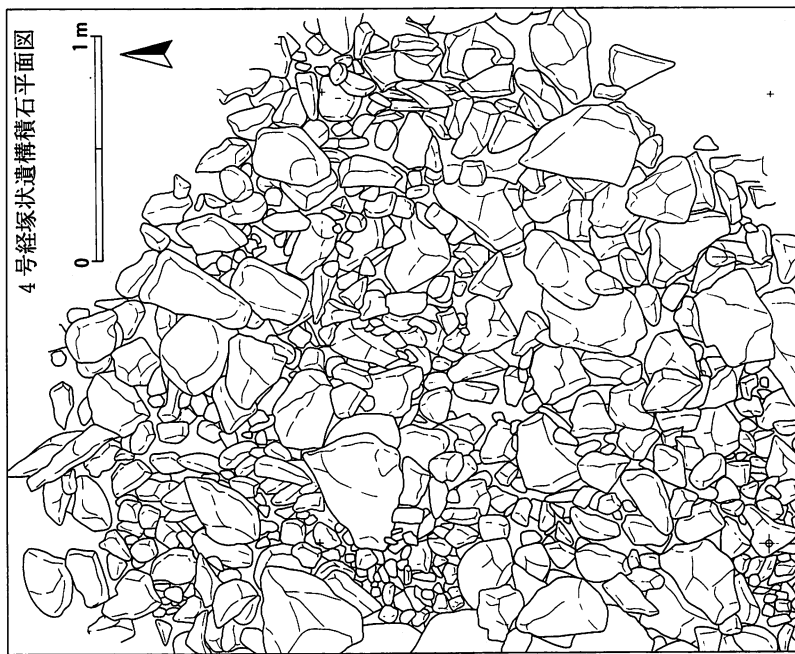
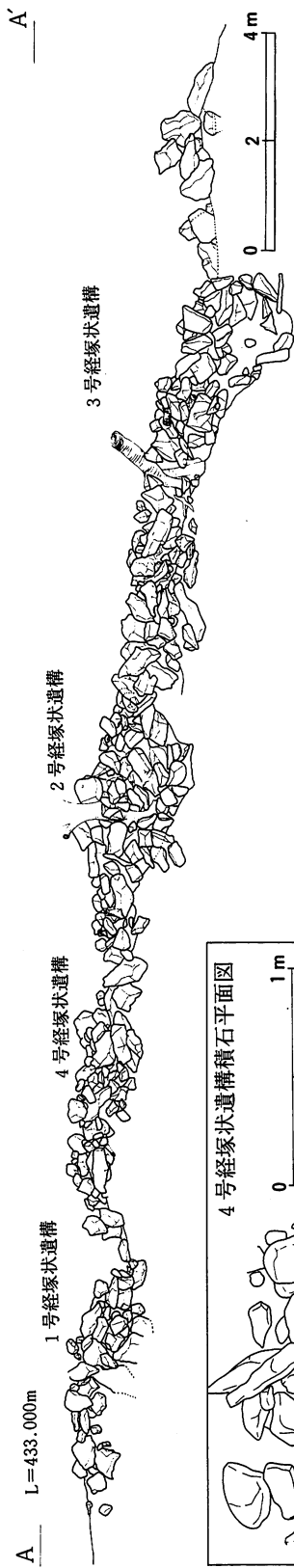
石槨部の上部には、草木根痕や微量の炭化物粒を含む10YR3/3 暗褐色シルトを主体とする土が覆っており、その土の下より波状文四耳壺の口縁部を検出した。波状文四耳壺の口縁部は人為的に打ち欠かれてあった。この壺の内部には2～3cm程の角礫と暗褐色の土、微量の炭化物粒が入っているだけで、その他の遺物は存在しなかった。壺内部の土や角礫は石槨部上部の覆土や石槨部周囲のものと同一であると考えられる。本来壺内部にあったと考えられる遺物は盗掘の際に抜き取られたか、蓋石が外されたために腐食が進み残存しなかったものと思われる。残存する壺内部の土や角礫は盗掘の際に入れられたか、部分的には自然に流入した可能性が高い。

石槨部は四方に立てられた側石と方形で平らな底石からなる。波状文四耳壺の口縁部が打ち欠かれてあったことから考えて、蓋石は本来存在したものの、盗掘の際に外され積石中に混入したか失われてしまったものと思われる。石槨部はほぼ軸線上にあり、平面形はやや歪な長方形を呈する。石槨部東西の長軸は約60cm・東西の短軸は西方部が約40cm・東方部が約50cmである。長軸の側石はそれぞれ2つの偏平な石からなる。北方部の側石は波状文四耳壺を覆うように内側に傾けられている。このように側石が傾けられたことで、内部にある波状文四耳壺は、上からは取り出すことができないようになっている。側石上部から底石上面までの深さは約30cmである。側石裏の掘形は、約70cm×90cmの楕円形を呈する形状であり、側石を固定するために10cm前後の楔形をした角礫を埋め込んでいる。南東側に約15cm程の前庭部的な張り出しがあり、10YR4/4 褐色シルト質の土で埋められてあった。東側の側石は、上部に偏平な石が置かれ、それを外し裏込めの石と土を取ると簡単に上方に外れる仕組みになっていた。波状文四耳壺は、この唯一側石の外れる東側から埋納されたと推測できる。先の前庭部的な張り出しは、その埋納行為と関わるのではなからうか。東側の側石以外は底石を挟み込むように直接地中に埋め込まれているが、切り取り移設のため、石槨部の検出で調査を終えているので、側石が最終的にどの程度の大きさで、どれほど地中に埋め込まれているかはわからない。但し、側石の裏込め石の除去後でさえ側石は全く動く様子を見せなかったことから、かなりの深度で側石が埋め込まれていたことが想像される。

底石は一個の石からなるようである。検出で調査を終えているため底石の下の状況がどのようなものかわからないが、底石の規模はほぼ側石に囲まれた範囲の大きさで、最低でも約25cm×40cm程の長方形を呈する石であると推定される。表面は平滑であるが、やや北東よりに傾いている。波状文四耳壺の底部が若干傾いていることに対応しているのかもしれない。波状文四耳壺は遺構全体のほぼ中央部に位置してある。石槨部からみると、東方部に寄っており、壺の西側には細長い偏平な石が置かれ、仕切りのような意味を持たせていたのかもしれない。その石の西側にはそれにより約10cm×20cm程の長方形の空洞が出来ており、10YR4/4 褐色シルト主体の土で埋められていることから、何らかの副納品が納められていた可能性も考えられる。

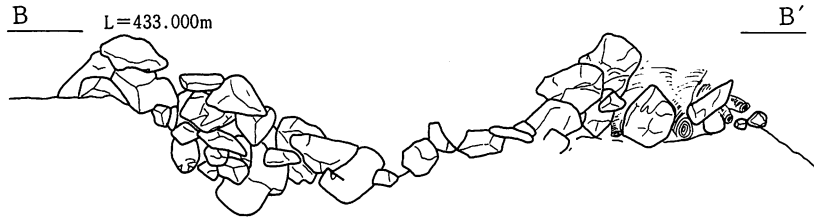


第12図 山屋館経塚遺構配置図

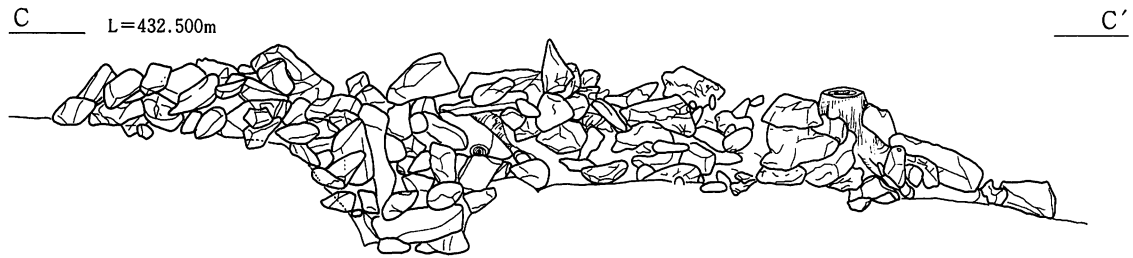


第13図 積石の状況

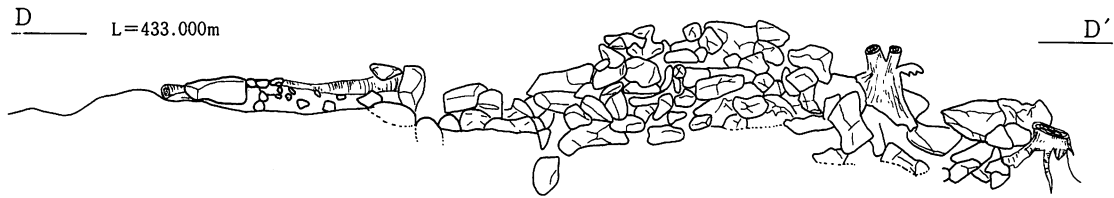
1号経塚状遺構積石



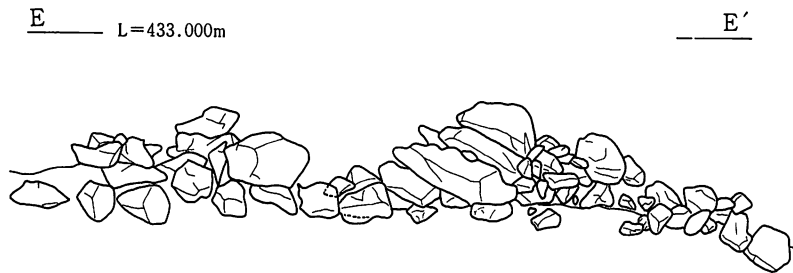
2号経塚状遺構積石



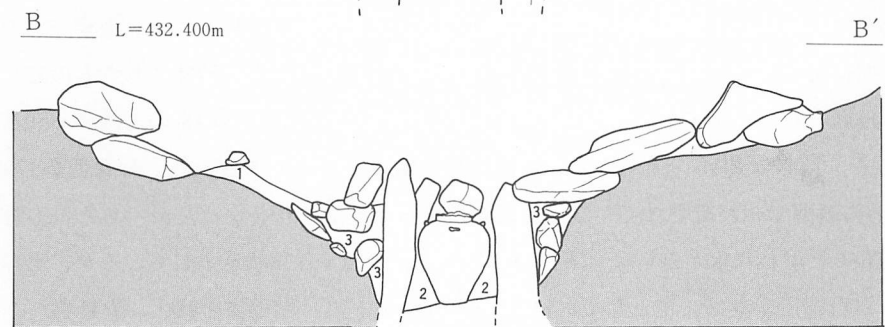
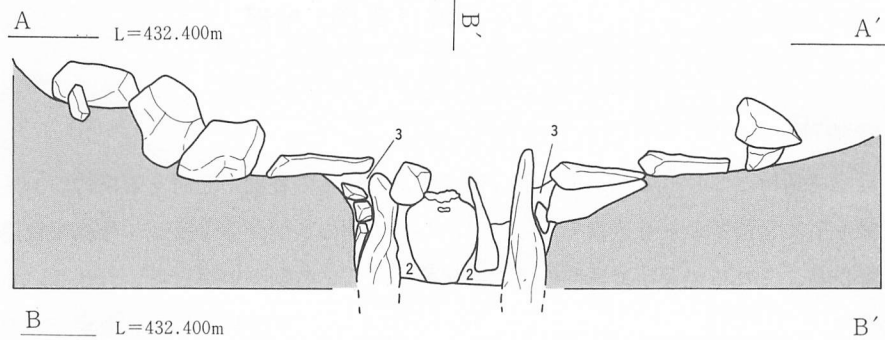
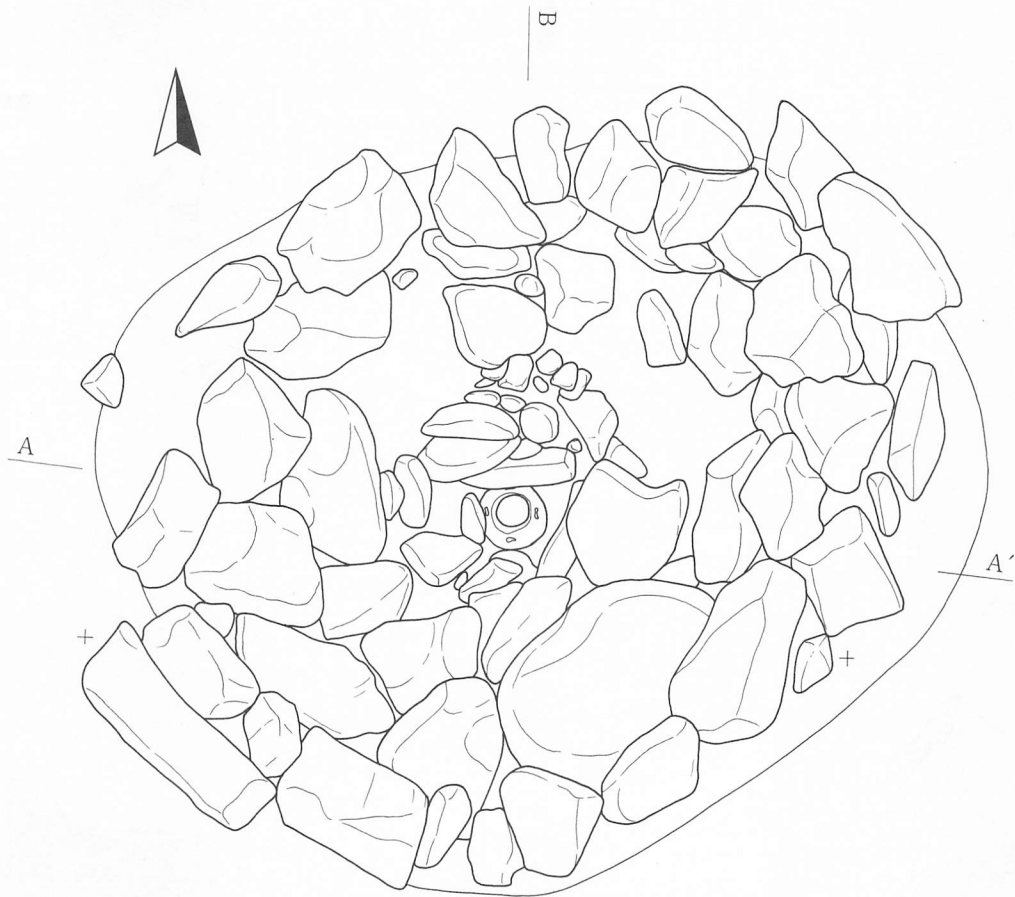
3号経塚状遺構積石



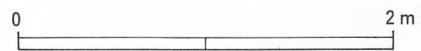
4号経塚状遺構積石



第14図 積石断面図

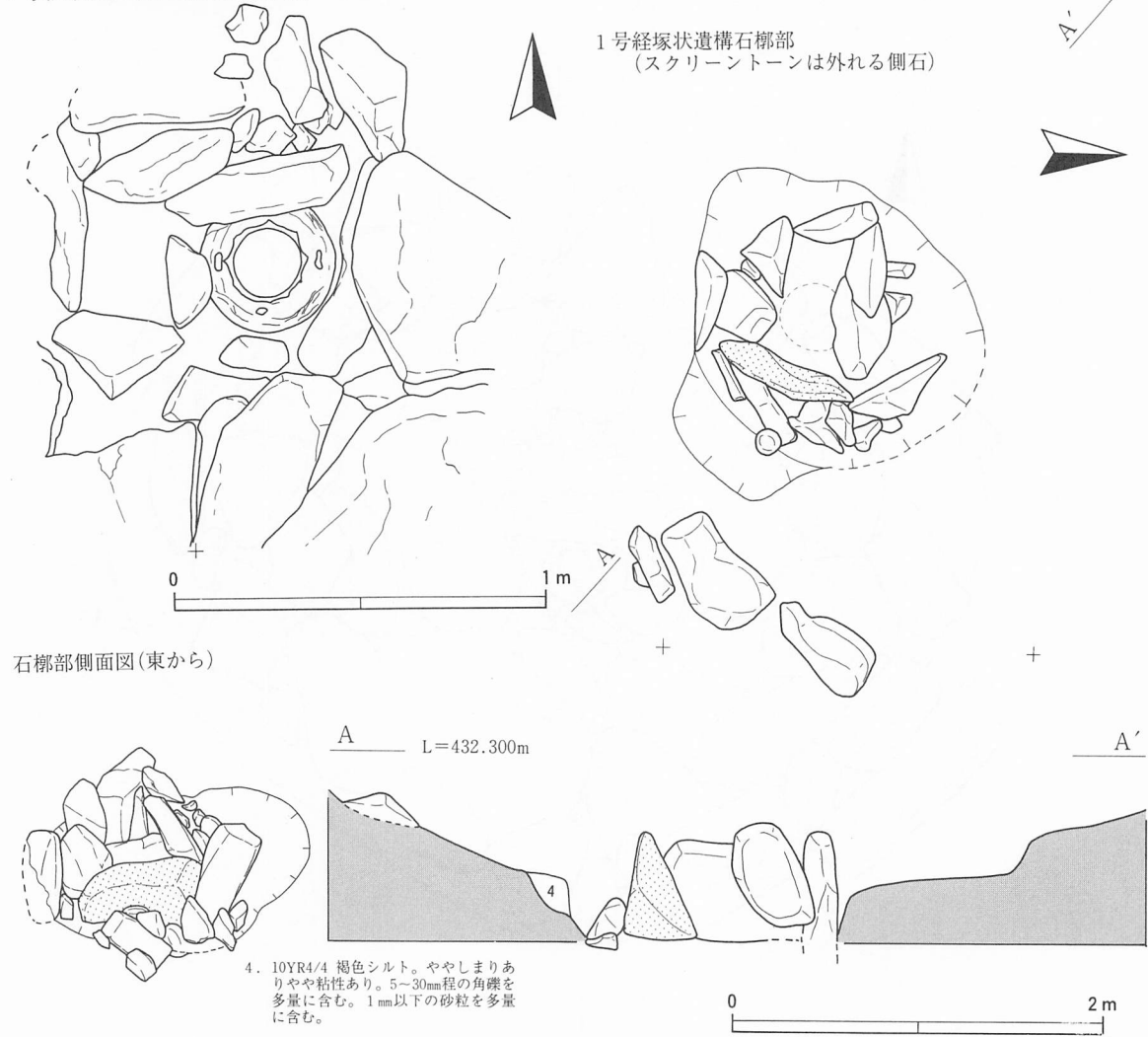


1. 7.5YR3/3 暗褐色シルト。やわらか、やや粘性あり。10YR4/6 褐色シルトをブロック状に含むが、2層よりも少ない。小角礫を多く含む。
2. 10YR3/3 暗褐色シルト。やわらか、やや粘性あり。10YR4/6 褐色シルトを径1~2mm程のブロック状~粒状に多く含む。径2~5mm程の小角礫を多量に含む。下部ほど礫が大きく(2~5cm程)、ブロックの混入が少なくなる。炭化物を粒状に少量含む。
3. 7.5YR3/3 暗褐色シルト。やわらか、やや粘性あり。10YR4/6 褐色~10YR5/6 黄褐色地山ブロックを含む。10~15cm程の楔の角礫を多量に含む。御石堀方の埋土である。



第15図 1号経塚状遺構

1号経塚状遺構石槨遺物出土状況



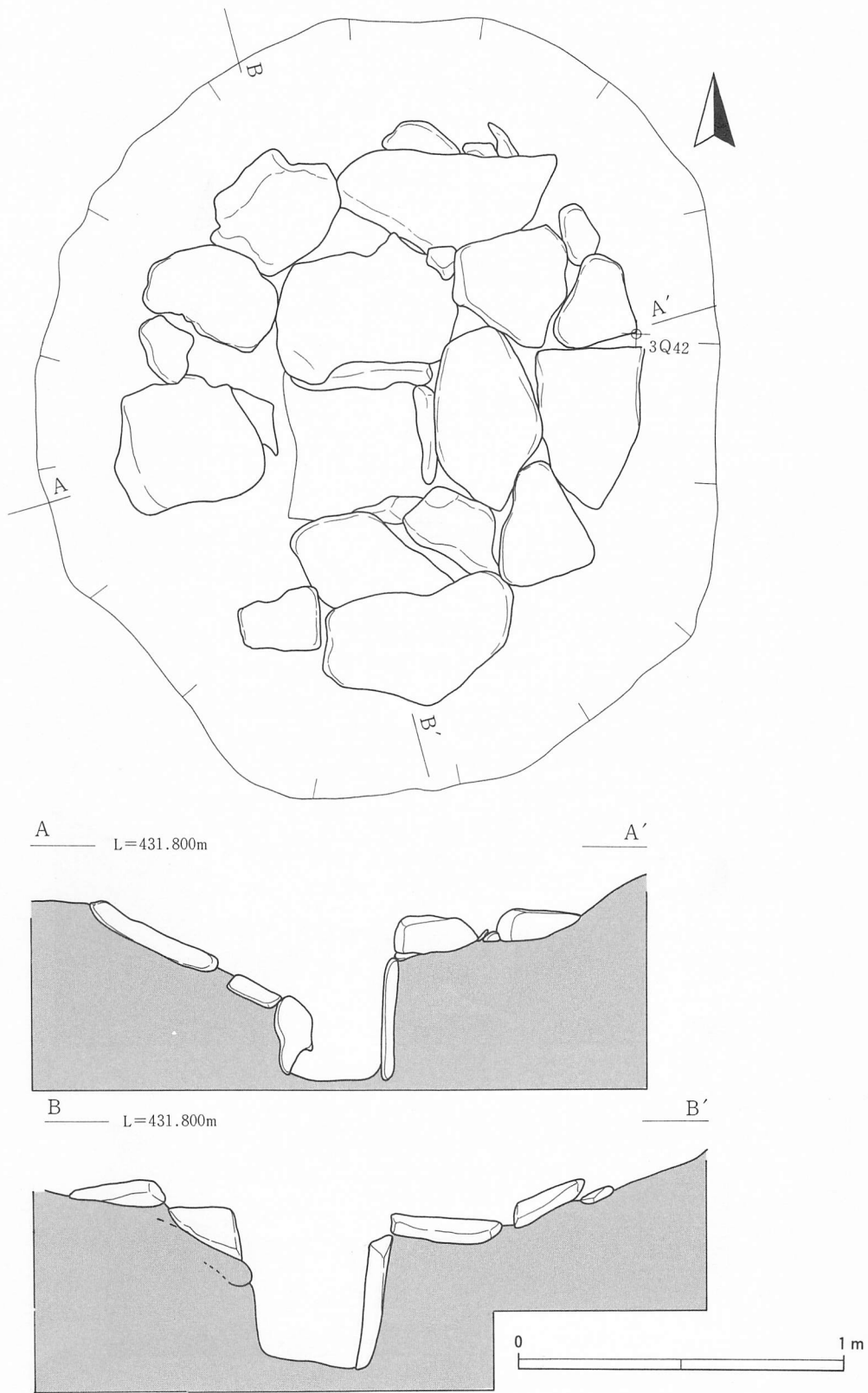
第16図 1号経塚状遺構石槨部

4. 2号経塚状遺構

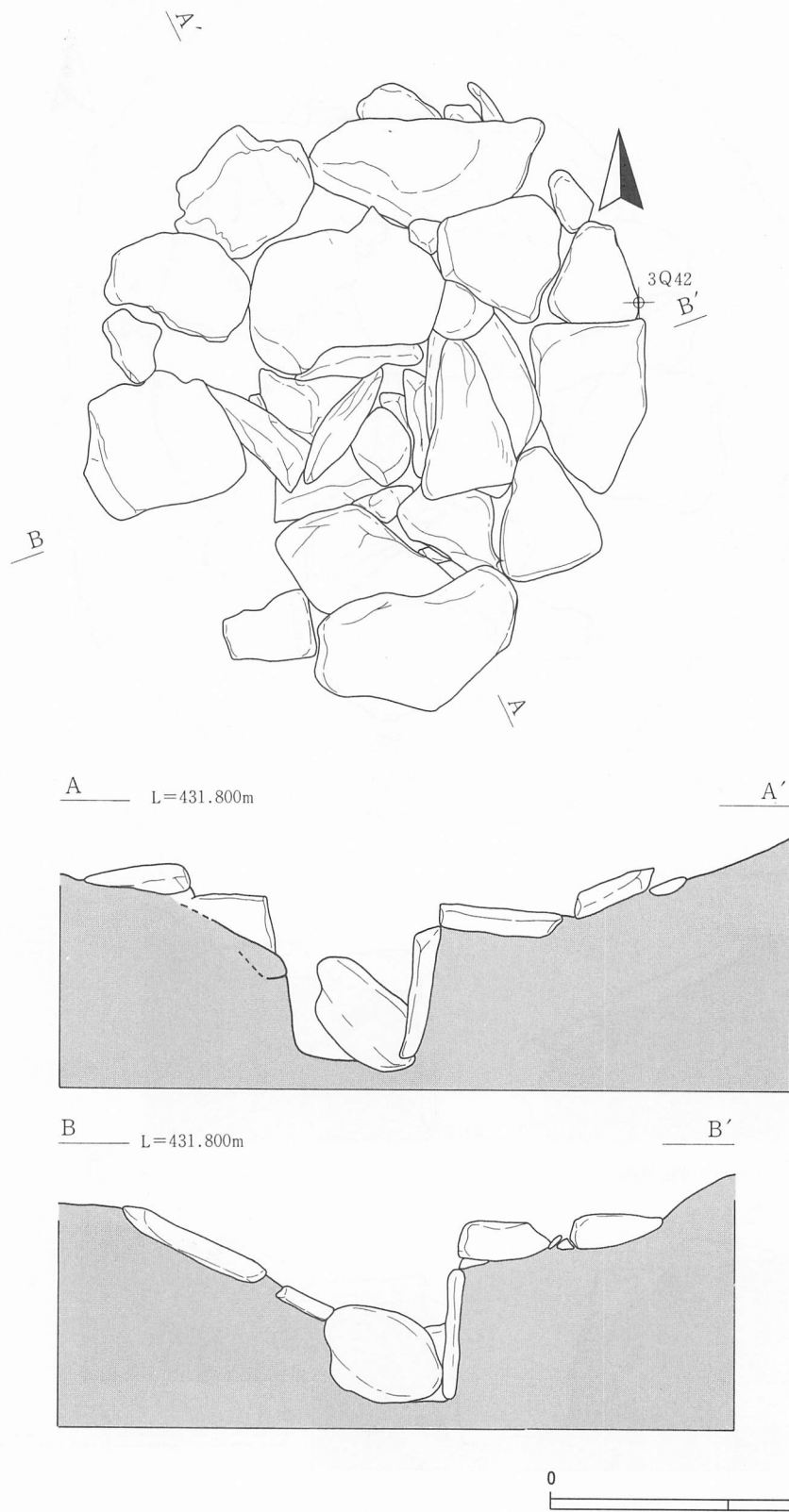
当遺構は4号経塚状遺構と3号経塚状遺構の間に位置する。積石の範囲が北西-南東約5m・北東-南西約4mと4基中最も広く、積石の量も豊富であった。積石の平面の状況が3号及び4号経塚状遺構を切る形になっていることから、これら経塚状遺構群の中でも比較的新しい時期の遺構と考えられる。また当遺構は平面がほぼ円形を呈する組石と箱型の石槨部から構成され、4基中最も規模の大きな遺構である。

組石及び石槨部は比較的大きな単位の石によって構築されている。石材も吟味されたもので、重量感があり加工痕の認められる石も存在する。組石に使用される石は、角が丸い板状のもので約40~60cm程の大きさの石が大半である。厚さは約10~20cm前後と比較的薄く偏平なものである。組石は東西約170cm・南北約180cmのほぼ円形の範囲で石が組まれている。南西部の組石は検出されなかったが、おそらく盗掘の際に外されてしまったものと思われる。組石は上下2段に構成され浅いすり鉢状を呈しているが、上部と下部の高低差は少ない。組石周辺の土は、主として7.5YR4/4褐色シルトで、炭化物を粒状に少量含んでいる。また組石の掘り込み部の土は7.5YR4/4にぶい褐色シルトで、10YR5/6黄褐色ブロックを多量に含んでいる土である。

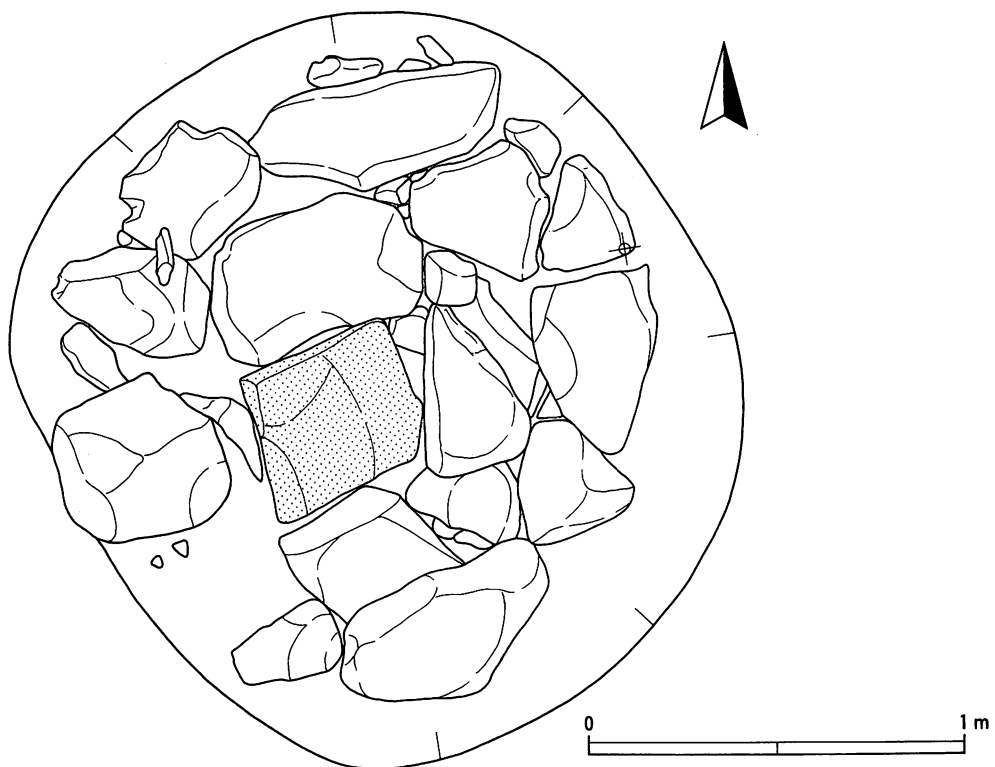
中央の箱状の石槨部は盗掘を受け内部石組みが攪乱を受けていた。石槨内部の検出時は、蓋石が西側の組石に重ねられるように斜めに外され、側石や組石・積石等が石槨内部に入り込んでいた。特に側石のひとつは底の地山にめりこむようになっていた。石槨内部の上部の土は7.5YR3/4暗褐色シルトを主体とするもので、木や草の根痕・炭化物粒を含んでいた。おそらくそれらの土は、盗掘後、石槨部周囲から流入してきた



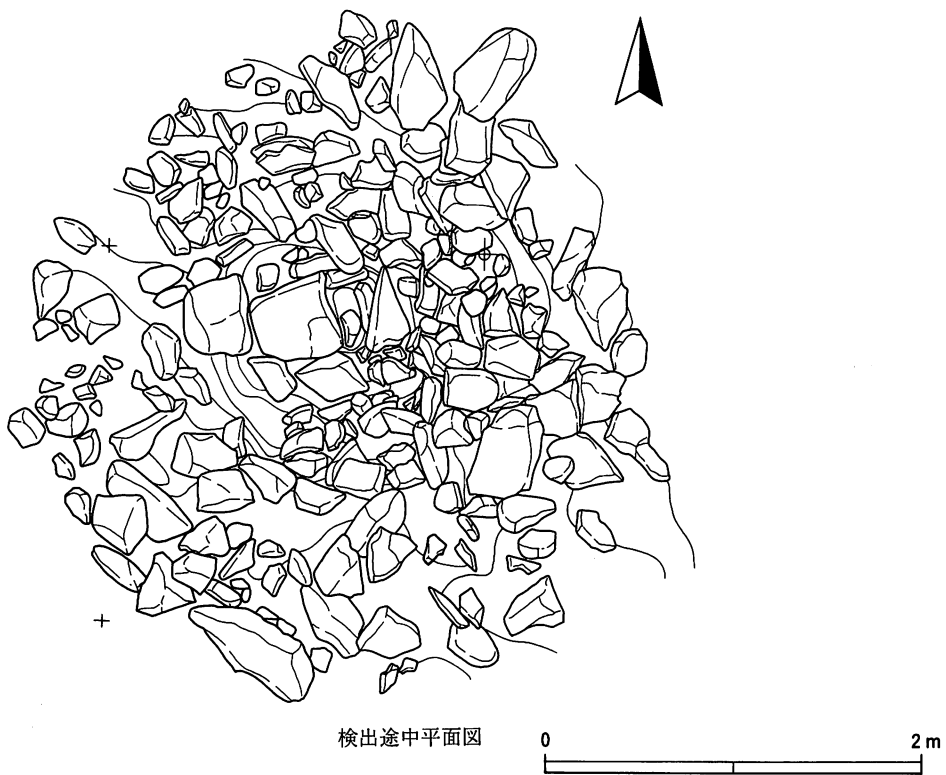
第17図 2号経塚状遺構



第18図 2号経塚状遺構石槨部検出状況



蓋石をした状態の平面図(スクリーントーンは蓋石)



検出途中平面図

第19図 2号経塚状遺構

土と考えられる。当遺構の石槨部の本来的な姿を想定すれば、蓋石と4つの側石で構成されていたと思われる。石槨部はほぼ軸線上にあり、平面形は約40cm×40cmのほぼ正方形を呈している。深さも約40cmなので、一辺がほぼ40cm程の立方体と考えても良いかもしれない。底石は盗掘の際に抜かれてしまった可能性は低く、おそらく地山粘土質土が露出する状態になっていたと思われる。底石は省略したのであろうか。石槨内部からは遺物は全く出土しなかった。側石が外されていたのは、盗掘者が側石の背後に副納品が隠されていると考えたのであろうか。

蓋石は一個で、厚さ約10cmの方形の石である。かなり重量感のあるもので、周囲の石に密着するように部分的に加工されている。盗掘のため斜めに外れていたが、本来は四方の側石に支えられていたものだろう。石槨部に蓋石をすると、周囲の組石との段差はほとんどなく組石の一部としてしか見えない。意図的にそのような構造にしてあったようである。石槨内部に壺が納められていたとすれば、壺の直接の蓋石が存在したはずだが検出されていない。当遺構も切り取り移設されることになったので、石槨内部の検出で調査を終了している。

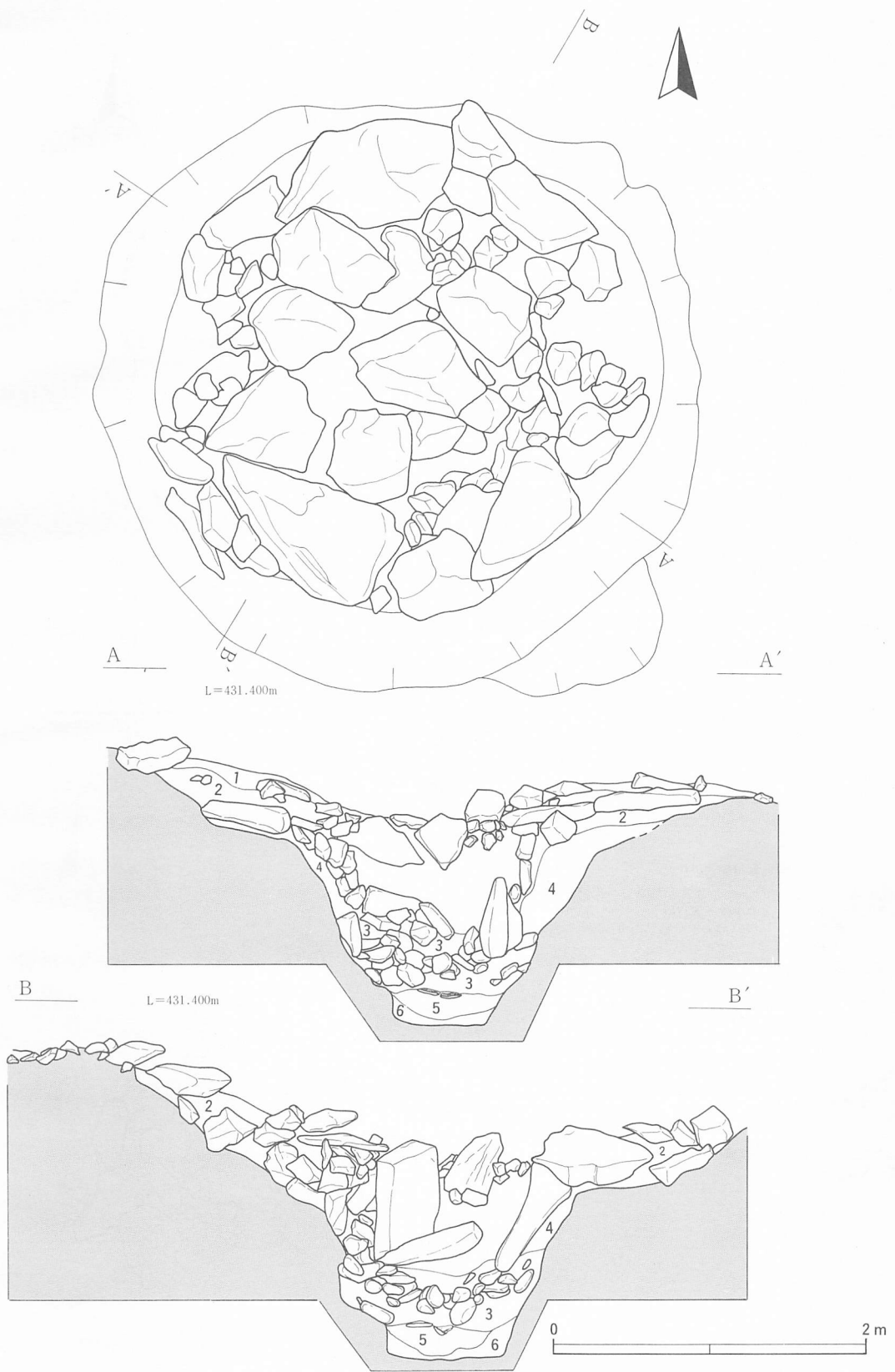
5. 3号経塚状遺構

当遺構は4基の経塚状遺構のうち最も南に位置している遺構である。当遺構の積石は、隣接する2号経塚状遺構の積石に切られる形になっており、2号経塚遺構より古い時期に造られた遺構と考えられる。積石は北側と比較すると南側はやや希薄であった。石槨部は盗掘による攪乱が著しいため本来的な構造は明確ではない。石槨部上部の平面形は、ほぼ円形を呈し東西約200cm・南北約190cmである。石槨部周囲の組石は明確には検出されず組石はほとんど存在しなかったようである。石槨南東部に約30～50cmの角礫がこんもりと積み重ねられた場所があった。それらの礫の下部には遺構らしきものは検出されなかったが、その礫群自体が何らかの意図をもつ構築物だった可能性も考えられるかもしれない。

石槨上部には平面径が約40～60cm程で厚さが約10～20cm前後の、やや偏平な石が11個程置かれてあった。盗掘のためいくつかの石は取り払われているか石槨内部に落ちてしまっていたと思われる。置かれていた11個の石は長方形ないし方形を基本とするが、大きさはまちまちで規格化されておらず、河原石のように角は丸まっていた。石の形態や置かれた状況等からみて、これらの石はこの遺構の石槨部における蓋石群と考えられる。盗掘のために攪乱を受けた石を復元・想定するならば、本来的に蓋石は16個程存在し、石槨部全体を覆っていたと考えられる。蓋石の隙間や周囲には約0.5～1.0cm程の小角礫を含む10YR4/6～7.5YR4/4褐色シルト質の土が入り込んでいた。これらの土は、当遺構構築時に人為的に埋められたものではなく、後年自然的作用により入り込んだ土だと思われる。

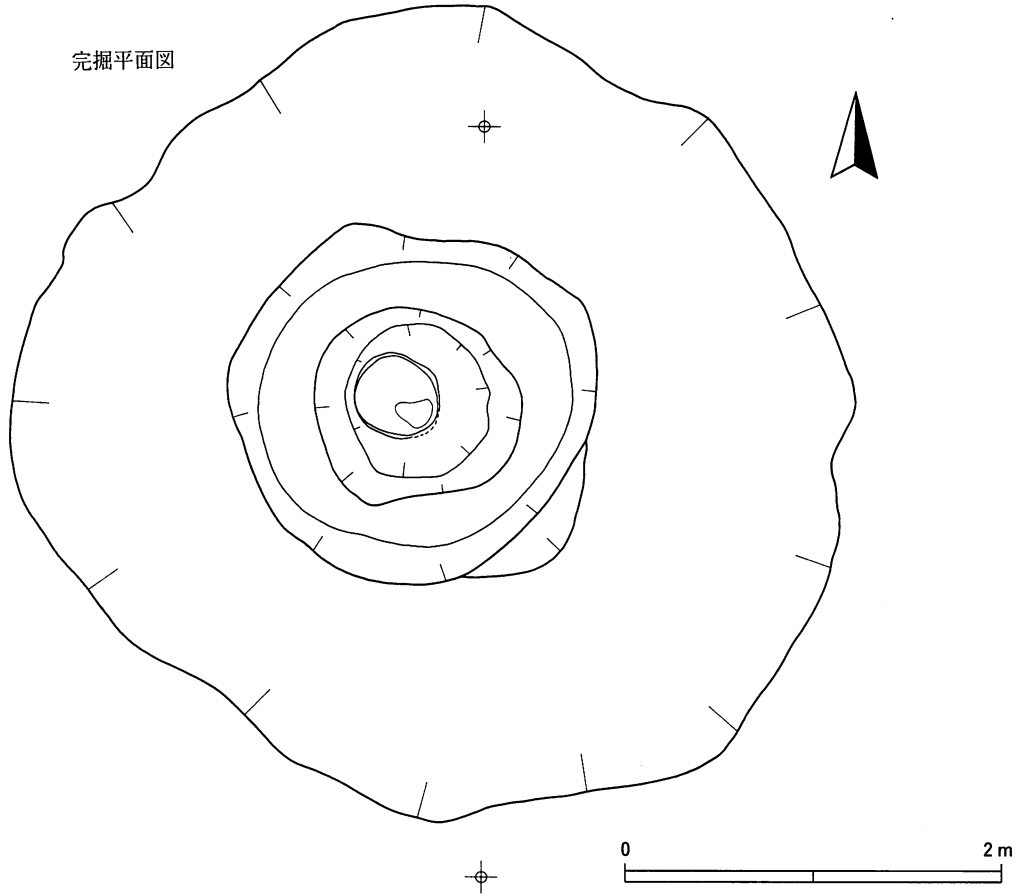
中央部から北側の蓋石の下部は、ほぼ空洞になっており、それ以外の蓋石の下部には、7.5YR3/3暗褐色シルト質土に混入する形で、約10～15cm程の玉石がやや密にあった。石槨部は盗掘のため内部がかなり攪乱を受けているとみられ判断は難しいが、本来的には中央部に関しては空洞であり、周辺部に関しては玉石を多量に含んだ土により石槨部を埋め込み、蓋石を支えていたのではないかとと思われる。北側の空洞は盗掘の際に埋土及び玉石が削り取られてしまったのだろう。

蓋石の約10cm程下に北側の側石の上端があった。残存していた側石はこの北側の側石だけである。この側石は東西の軸線上に立てられてあり、南側の石は内側に倒れていたものの残存する北側の側石と対応関係にあることが考えられることから、おそらく本来の側石は軸線上の四方にあり、東西約45cm・南北約35cm程の平面形が長形状の石槨部を形成していた可能性が考えられる。残存する側石から、側石下部を深く埋め込



第20図 3号経塚状遺構

完掘平面図

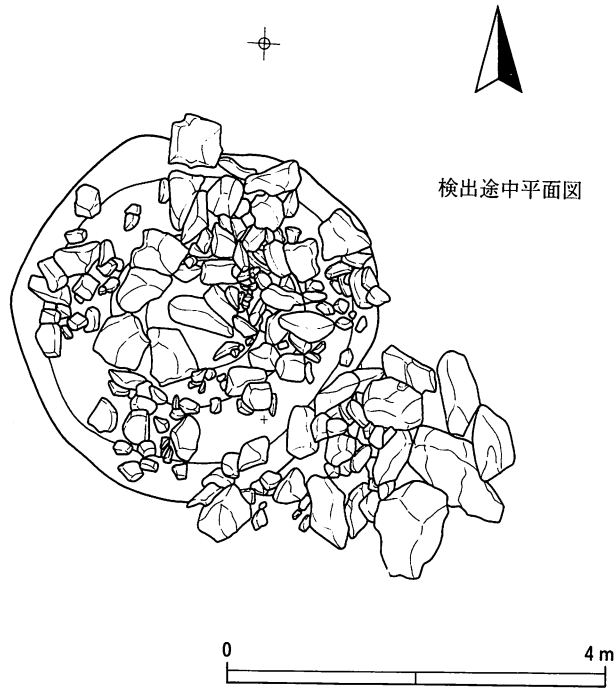


(3号経塚状遺構土層注記)

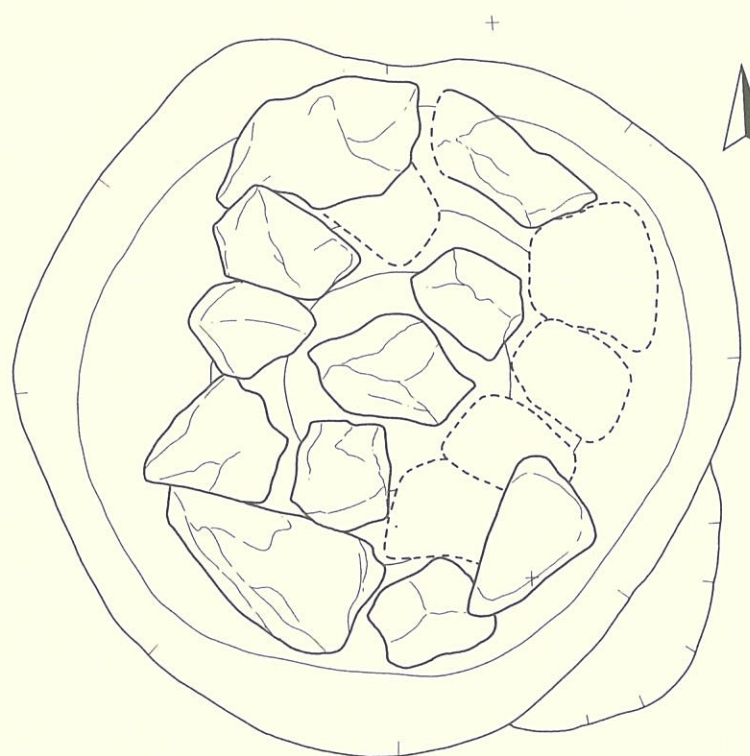
1. 7.5YR4/4 褐色シルト。やわらか、やや粘性あり。赤褐色土をブロック状に含む。2～5 cmの小礫多量に混入。
2. 7.5YR3/3 暗褐色シルト。やわらか、やや粘性あり。小礫の混入少ない。7.5YR4/4褐色土をブロック状に含む。
3. 10YR3/3 暗褐色シルト。ややしまりあり、粘性あり。黄褐色ローム質シルトをブツ状に含む。
4. 10YR3/4 暗褐色シルト。やわらか、粘性あり。小礫及び5～10cm程の礫混入。底部ほど礫が多い。
5. 10YR3/3 暗褐色シルト。しまりなし、粘性なし。砂少量混入。5Y6/4 オリーブ黄色ロームをブロック状に含む。銅板片・木片を多量に含む。
6. 10YR3/3 暗褐色ローム質土。しまりあり、粘性あり。同色のシルト・砂少量混入。5Y6/4 オリーブ黄色ロームをブロック状に少量含む。

※地山は2.5Y5/4 黄褐色ローム質シルト。2～5 cm程の小礫を多量に混入する。

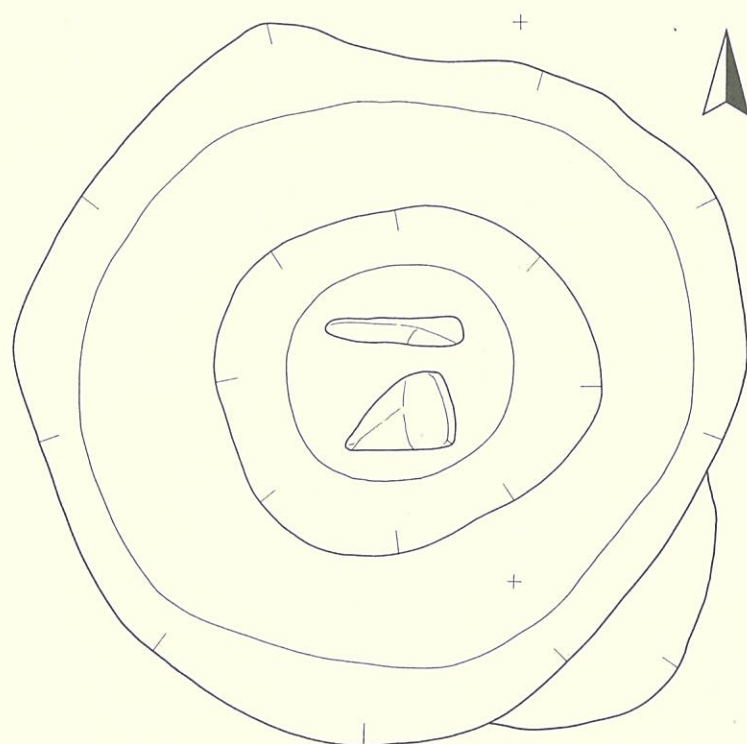
検出途中平面図



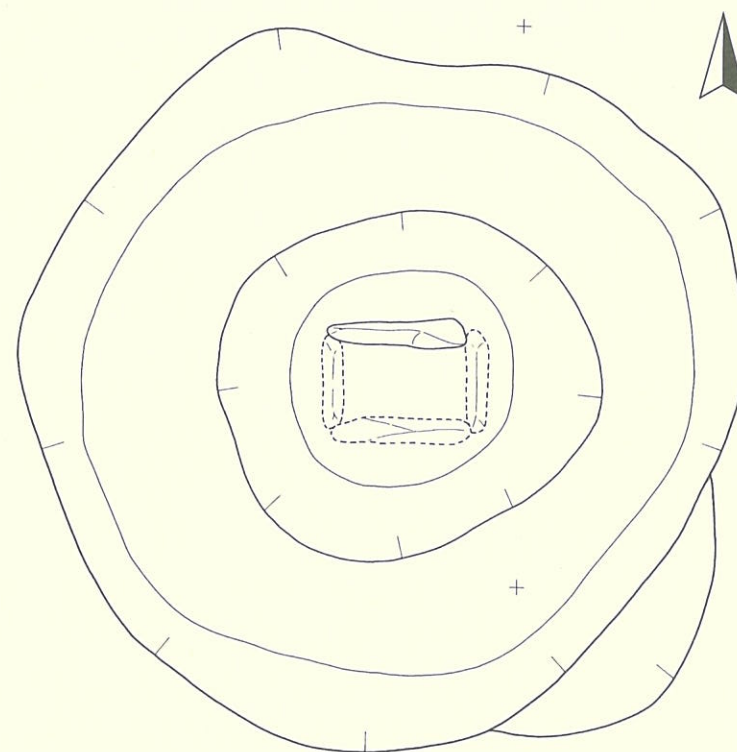
第21図 3号経塚状遺構



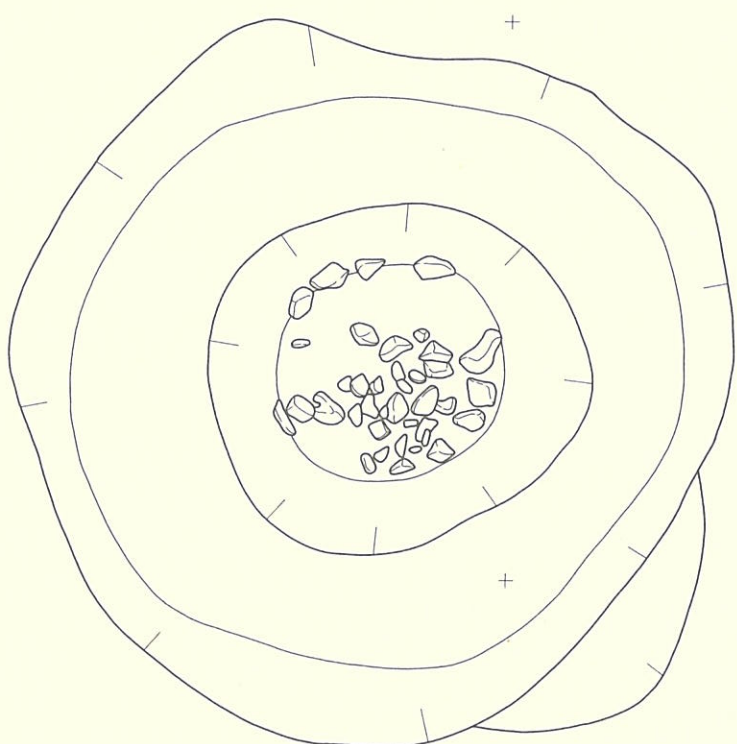
蓋石想定図(破線部が想定される蓋石)



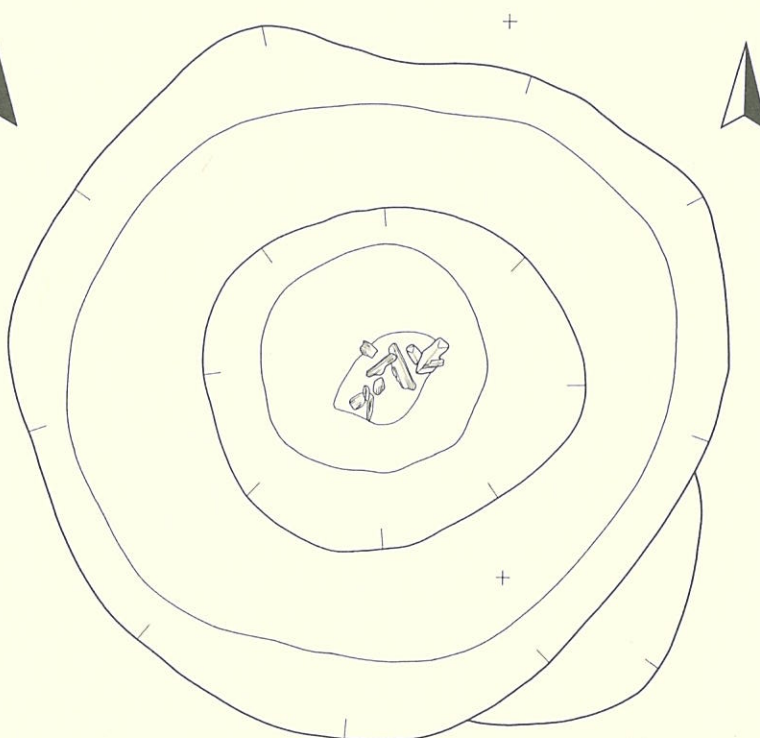
側石検出状況(南側の側石は倒れている)



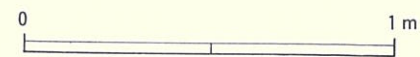
側石想定図(破線部が想定される側石)



側石下の底石検出状況



底石下の遺物出土状況



第22図 3号経塚状遺構検出平面図

むことで立てているのではなく、埋土の上に置いただけの不安定な立てられ方をしている。三方の側石が残らなかったのはそのためであろう。蓋石下の周辺部の埋土及び玉石は、蓋石を支えると同時に4つの側石の裏込めとしての役割を与えられていたものと思われる。なお北側の側石の裏の空洞部の下、10YR3/4 暗褐色シルト質土の埋土上部から、「箱」の一部と考えられる銅板（図版番号4）が出土している。

側石下部の埋土を除去すると、すぐその下から玉石層が検出された。それは面的な広がりがあり、玉石敷といってよいものである。この玉石層は、その在り方から想定すると、石槨部における底石的な意味をもつのかもしれない。玉石層の下部、「底石」の掘形部の可能性のある埋土が約10cm程あり、その下から、長方形あるいは長方形の「箱」の一部と思われる銅板片と木片が出土した。それらの出土した面は、直径約40cm程の円形のピットの上面（検出面）であり、そのピットは10YR3/3 暗褐色の粘土質の埋土で、地山起源と思われる5YR6/4オリブ黄色粘土質土をブロック状に含んでいるものであった。

「箱」の破片は、銅板と木片が密着したものと木片だけのも、銅板のみが残存するものがあり、やや散乱する形で出土していることから、完形の「箱」がそのまま押しつぶされたとは考えられないが、形状その他から、同一の「箱」の一部である可能性が高い。またそれらは側石裏から出土した銅板と同一の個体のものであると考えられる。「箱」の一部である小さな木片は、ピットの埋土中にも多く含まれ、地山粘土質土と共に混在していた。石槨部「底石」掘形部の下に、埋土の異なる別のピットがある理由は不明であるが、そのピットの埋土の状況からみて、作り替えを行った可能性は否定できない。また同一の「箱」の破片が側石の裏に存在したということは、当遺構構築時にはすでに破片の状態であったことを示すものであり、当遺構に埋納した遺物である可能性は低く、遺構構築時かそれ以前の遺物である可能性が考えられる。

6. 4号経塚状遺構

4号経塚状遺構は唯一未盗掘の遺構である。積石は1号経塚状遺構と2号経塚状遺構の積石に切られる形になっていた。切られた分の積石は2つの経塚状遺構の積石に転用されたと思われる。しかし北西―南東の積石に関しては原型を留めており平面径が350cm前後である。おそらく4基の経塚状遺構のうち最も積石の範囲が狭い遺構であることが推測されるが、当遺構は盗掘を受けていないこともあり、検出された積石の状況は造営当時の様相に最も近いと思われる。石槨部は平面形が北からN-39度-Wの傾きで隅丸の長方形を呈する。長軸は約160cm・短軸は約140cmである。

石槨最上部の蓋石は、約55cm×50cm程の円形に近い偏平な石であり、厚さは5～10cm程である。この蓋石の周囲には南西側以外の3方向に石が置かれていた。北西側と北東側の石は長さがそれぞれ約85cm・80cmの細長い石であり、南東側の石は長軸が約70cm程の楕円形の石である。南西側の石は隣接する2号経塚状遺構に転用された可能性も考えられるが、状況からみて本来的に存在しなかった可能性が考えられる。これらの蓋石及び周囲の石は角が丸くなっており、いずれも加工痕はみられないが、それぞれが近接し形態的によく対応するような構造になっている。

上部の蓋石を外すとその下に小さな蓋石が置かれてあった。この蓋石は平面形が台形状を呈する偏平な小型の石である。この2番目の蓋石を更に外すと壺の口縁部があらわれた。蓋石を外した際に風化により壺口縁部の小さな破片が壺内部へ剥落したが、本来は蓋石と壺の口縁部は密着していたようである。蓋石についていた口縁部の痕跡からもそれが確認できる。2つ目の蓋石の直下、石槨内部中央にあった壺は、常滑産の三筋文壺であった。口縁部欠損以外、完形品である。

壺の内部はほぼ空洞であり、わずかに約0.3～0.8cm大の塊が少量だが壺の底面に残存していた。壺内面に

は朱色の顔料が塗られていた。朱色の顔料は主として胴部から底部にかけて顕著であり、頸部から口縁部にかけてはやや希薄であったが、壺に直接被せられた蓋石の円状の口縁部痕跡の内側にも朱色顔料の痕跡がみられたことから、壺の内面全体に顔料が塗られていたと思われる。また壺底部に残存していた塊も、壺内面の顔料に染まり朱色を呈していた。前述のように蓋石は大小の2個の偏平な石からなり、大きな蓋石は石槨部全体の蓋石であり、小さな蓋石はその中から出土した三筋文壺の直接の蓋石と考えられる。壺の周囲には約5～10cm大の偏平な玉石が埋められており、壺本体をしっかりと固定している。壺の下も同様に偏平な玉石を敷きつめていた。

玉石の下には、主として約10～20cm大の角礫が隙間なく詰め込まれていた。角礫の下の中央部には約30×30cm程の方形状の石があり、その周囲には同様の角礫がこの方形状の石を支えるように詰め込まれていた。さらにこの方形状の石の下にはやや薄い偏平な石が置かれており、石槨最底部にも約30×30cm程の方形状の石があった。これらの方形状の石は、従来使用された積石や石槨部内の石材とは異なり、かなり吟味し選ばれており河原石を加工したものと思われる。何らかの意図をもって置かれたことは確実だがその意図は不明である。石槨内部の礫群を囲むように、周囲の四方に側石が立てられていた。立てられた側石で長いものは北西側と西側の2つの側石で約50cm程あり、偏平な隅丸の長方形を呈する。またこれらの側石は、側石の中でも垂直に近い状態で立てられていた。南側から北東部にかけての側石は形が不整形で小さく、外側にやや寝かされた形で立てられていた。特に南側の側石は一つの石としては大きく重量感があるものの、高さは約35cm程でしかない。全体としてこれらの側石についていえることは、統一した形態をもたず、側石としての機能を重視していないのではないかと、ということである。側石の掘形部の平面形はほぼ円形を呈する。上部の直径が約75cm、下部の直径は約40～50cm程である。

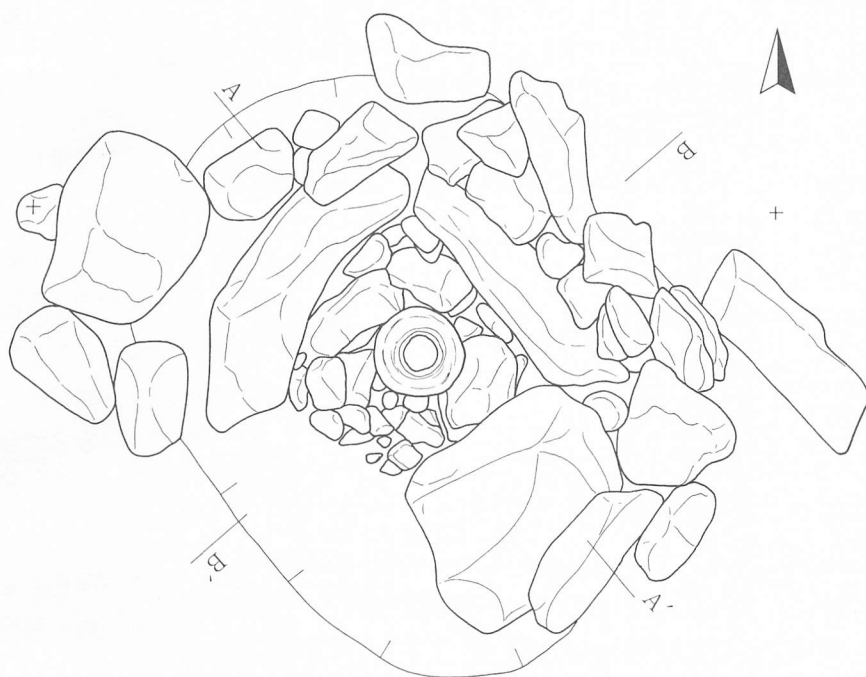
当遺構の場合は、明確な形の底石は存在せず、代わりにやや深めの地下構造をもっているのが特徴であろう。三筋文壺の下約40cm程の石のみの地下構造を有している理由については、除湿をし壺内部のものを保護するということが考えられる。しかし他地域の経塚において検出例のある除湿を目的とした木炭等の遺物は伴っていないことから、底部中央に置かれた2個の方形状の石に何らかの信仰上の意味付けを行った可能性もあるのではなかろうか。現段階では当遺構の地下構造の目的は不明とせざるを得ない。

7. 出土遺物について

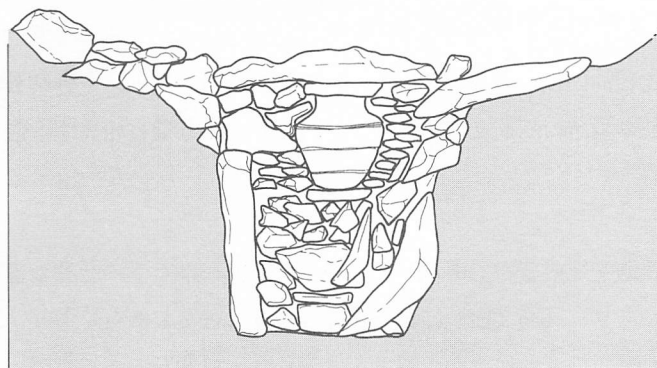
検出された遺物は、4号経塚状遺構から出土した三筋文壺、1号経塚状遺構から出土した波状文四耳壺、3号経塚状遺構から出土した「箱」と思われる容器の破片である。また三筋文壺の直上にあった蓋石は、三筋文壺と一体のものと考えたので遺物として扱っている。2号経塚状遺構からの出土遺物はなかった。

(1)三筋文壺〔図版番号1〕

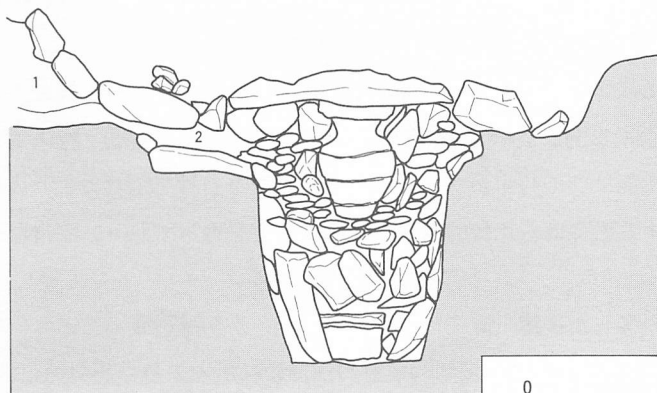
4号経塚状遺構の石槨部中央から出土した。常滑産。推定器高26.0cm。推定口径13.7cm。底径10.3cm。胴部最大径22.8cm。口縁部を除き完形品。表面はにぶい褐色から暗褐色を呈するが、部分的に炭化物の付着がみられる。肩部から胴部にかけて浅黄色を呈する自然釉が薄くかかる。但し自然釉の広がりは一様ではなく片面が肩部までで、もう片面は胴部中位まで自然釉がかかり、自然釉も比較的厚めである。底部付近には回転ヘラケズリ痕が認められる。底面は比較的平滑であるが、特に調整した痕跡は観察できなかった。胴部には斜位あるいは縦位のヘラケズリが施され、胴部中部から肩部にかけて回転ナデ調整が行われている。これらのヘラケズリ・回転ナデ調整は三筋文施文後に行っており、一部で三筋文が消えている。肩部と胴部の接合部には横ナデ・指押さえ調整が施され、頸部から口縁部にかけて丁寧な横ナデ調整が施される。口縁は意



A L=432.300m A'



B L=432.300m B'



(4号経塚状遺構土層注記)

1. 10YR3/4 暗褐色シルト。やわらか、やや粘性あり。2~5cmの小角礫を少量混入する。上部で草木根が混入する。
2. 10YR4/6 褐色シルト。しまりなし、やや粘性あり。小角礫の混入少ない。7.5YR4/4褐色土をブロック状に含む。

第23図 4号経塚状遺構

図的に打ち欠いており、口唇部のほとんどが欠損しているためその形状は明確ではないが、口縁部上面に沈線文は施されていないようである。口縁部はほぼコの字型に立ち上がる。胴部の器壁は、約12~14mm程であり肩部の接合部と底部近くでやや厚くなっている。

肩部から胴部下にかけて施される三筋文は、いわゆる「櫛目文」である。回転台を使用し、断面がV字状の平行する3単位の櫛目状の工具により施文を行っていると思われる。沈線は上段で3~4本・中段で3~5本・下段で2~3本である。上段の沈線文は、回転施文当初は幅が約1.5mm・深さが約1mmの明確な沈線であるが、一往復後は特に沈線文がやや細く浅くなる。この部分はきつめの曲面なので2単位の沈線文が主体となっている。中段は比較的平滑な面ということもあり、ほぼ3本の沈線文が施されている。幅は上段同様約1.5mmだが深さは約0.5~1mmとやや浅くなる。基本的に3本の沈線文であるが、回転施文が重複する部分では5本の沈線文となる。下段は2本の沈線文に見えるが、一部で3本の沈線文となっており、上・中段と同様の工具を使用していることがわかる。上位の沈線文は幅が約1.5~2mm・深さが約1mmであり、明確な形態をとるが、下位の沈線文はそれよりも細く浅くなる。上位の沈線文が明瞭なのは、おそらく胴部下という場の制約を受けているためであろう。下段の沈線文はところどころ縦位の指ナデ調整を受け消えてしまっている。壺の内面にはほぼ全面に炭素が付着しており部分的に黒色を呈す。内面に塗られた可能性のある朱色を呈する顔料は、壺内面の底面部から胴部下にかけて顕著に残存し、内面頸部から胴部上部にかけてはやや希薄である。

胎土は粒子の細かな土を使用しており、砂粒の混入は少ないが一部で約2~5mmの小石が表面に浮き出ている。焼成は比較的良好で、硬く焼き締まっている。この三筋文壺の胴部文様は、いわゆる櫛目三筋文であり、口唇部の形態は明確ではないが比較的口径が大きく、肩が張る形態が特徴である。中野晴久氏のご教示によれば、このタイプの壺は最も初期の段階の三筋文壺であり、常滑編年の1b期に相当する壺であるという。

(2)三筋文壺蓋石〔図版番号2〕

4号経塚状遺構から出土した三筋文壺の蓋石である。4号経塚状遺構には上下に2枚の蓋石が存在したが当蓋石は上部の大きな蓋石の下にあり、三筋文壺の口縁部を覆うように蓋をした石であり、三筋文壺の直接の蓋石と考えられる。上部の蓋石は角の丸い河原から運んだと思われる自然石であったが、当蓋石は同様の河原石であるものの、明らかな加工痕があり三筋文壺に密着するように工夫がしてあった。石質鑑定によれば、石質は閃緑岩で、産地は北上山地（中生界）ということである。同種の石材は4号経塚状遺構の石槨部にも使用されている。

三筋文壺蓋石は、平面形が台形状を呈する偏平な石である。長軸が約14.5~21cm、短軸が約13~15cmで、厚さは約2.3cm~3cmである。石全面に約2.5cmのノミ状の工具による加工痕がある。特に4つの側面の加工はかなり綿密に施している。自然面はごくわずかで、もともと不整形な石材を工具により成形したことが推測される。三筋文壺の口縁と接する面には、比較的大きな単位の調整を行っており、平滑な面を可能な限り造り出そうとしている。

石の表面には三筋文壺の口縁の接した痕跡（直径12.5~13.2cm程）が明確に残っており、灰白色を呈する幅0.5~0.9cm程の環状の痕跡があった。またその環状の痕跡の内側には所々朱色の顔料の痕跡が認められた。やや風化したものの、おそらくこの範囲内全面に顔料の痕跡があったようである。これは壺内部に塗られた顔料と関係すると思われるが、直接この蓋石に塗られたのかどうかについてはわからない。

なおこの蓋石は、長軸がほぼ北東-南西の角度で置かれてあった。この角度は4号経塚状遺構の短軸の角



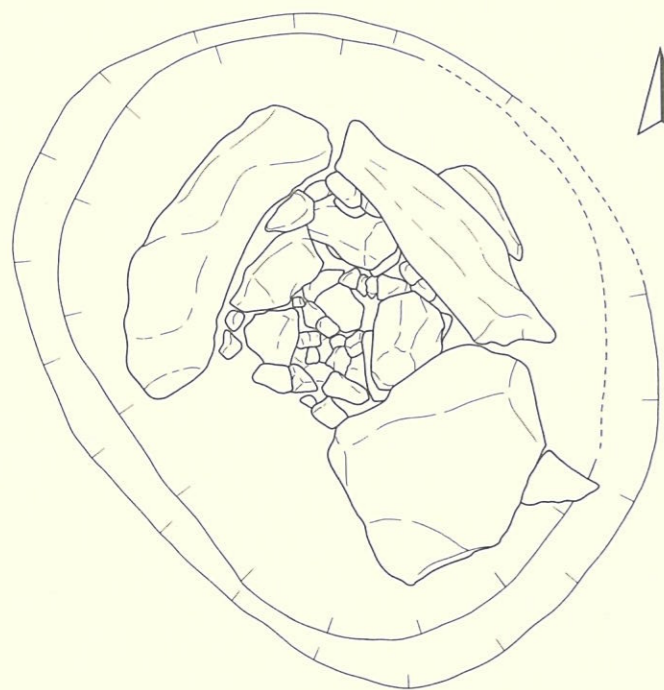
(1)三筋文壺出土状況



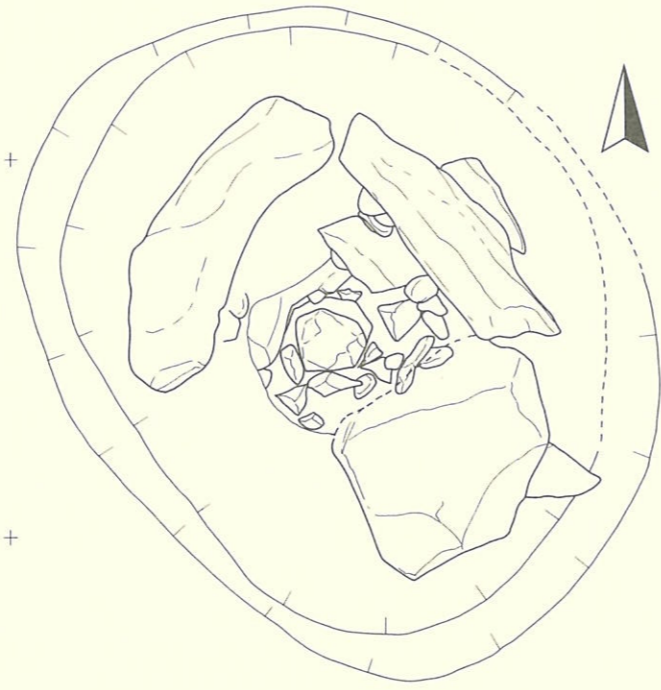
(2)蓋石検出状況①
※スクリーントーン部が蓋石



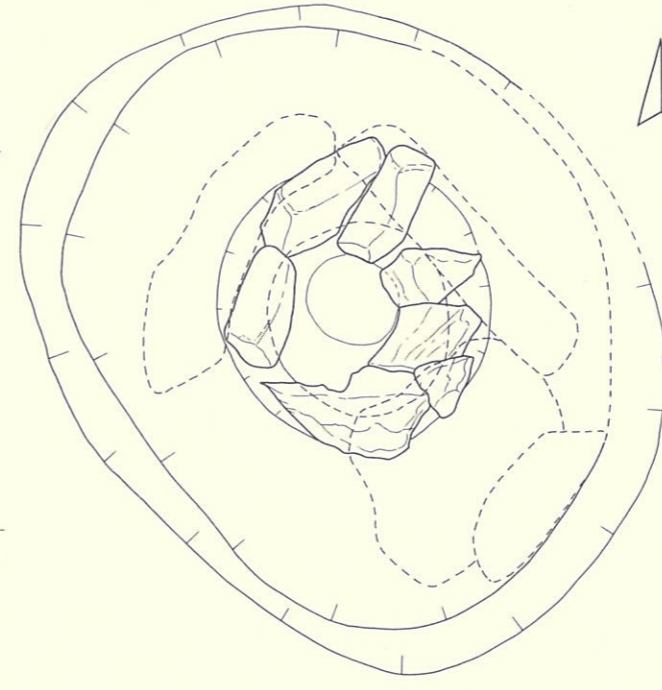
(3)蓋石検出状況②
※スクリーントーン部が蓋石



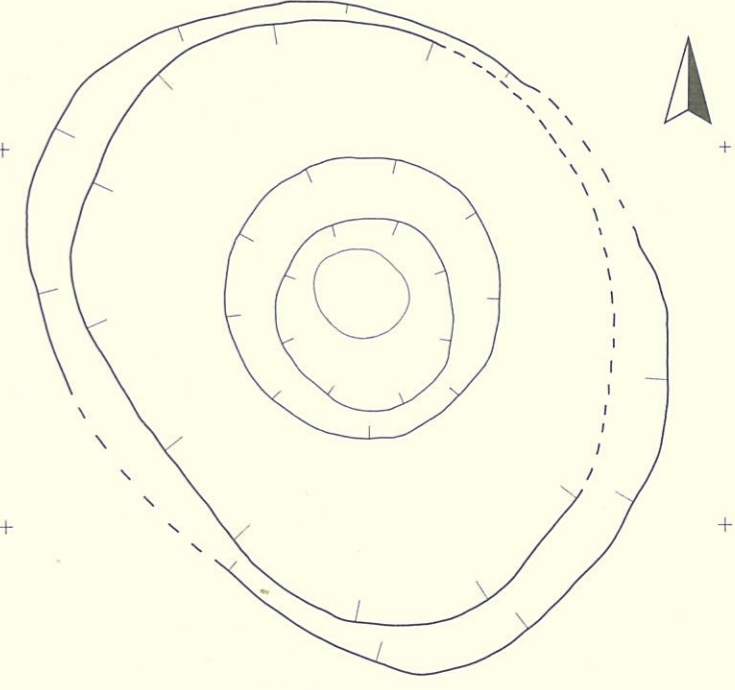
(4)三筋文壺下の底石検出状況①



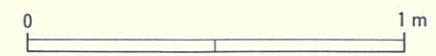
(5)三筋文壺下の底石検出状況②



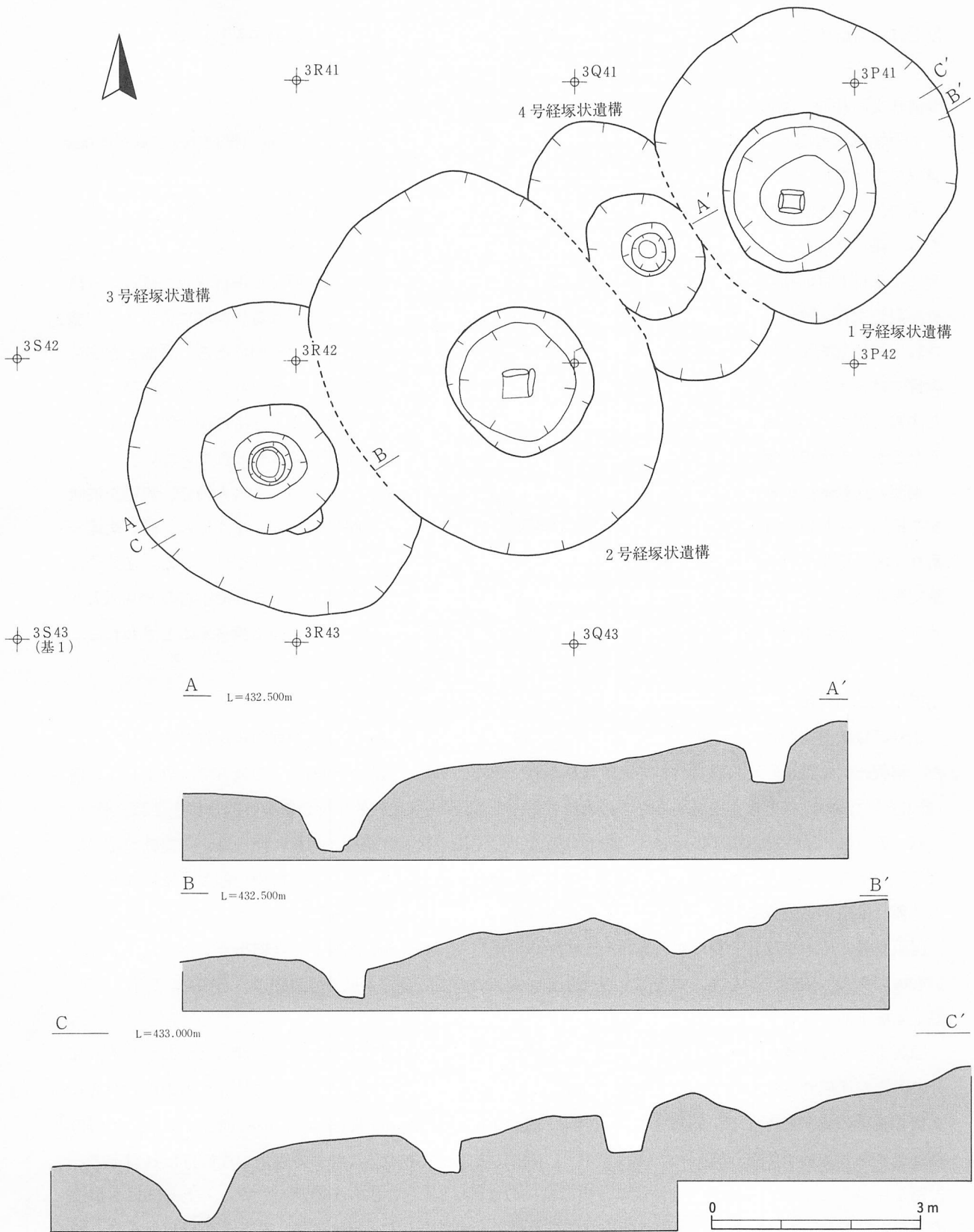
(6)側石検出状況



(7)完掘平面図



第24図 4号経塚状遺構



第25図 経塚状遺構完掘平面図、エベレーション

度とほぼ対応する。この対応関係は埋納の際に蓋石を置く作法と関係することなのかもしれない。

(3)波状文四耳壺〔図版番号3〕

1号経塚状遺構から出土した。産地不明。須恵器系陶器。推定器高24.5cm。推定口径12.0cm。底径9.0cm。胴部最大径約19.8cm。口縁部を除き完形品。

灰白色～灰色を呈し、肩部から胴部上部にかけて薄く自然釉がかかる。ややふっくらした倒卵形の器形である。紐ロクロ成形による段が胴部全体にあり、底付近に回転ヘラケズリが施されている。底面は静止糸切りによるロクロ回転台からの切り離し後、静止糸切り痕を消すかのように、底面をカキ目状の工具による簡単な調整を行っている。胴部の波状文施文具と同一の工具である可能性が考えられる。胴部には横ナデが施され、外傾気味に立ち上がる。口縁部は意図的に打ち欠いてあるため、形態等は不明である。肩部と頸部の境目には、1条ないし2条の沈線文が入る。頸部は比較的丁寧な横ナデが施されており、調整の段階で入った沈線と思われる。底部付近以外の胴部の器壁は約7～10mmで比較的薄めである。肩部の接合部はやや分厚くなるが、内面の指押さえ等は顕著ではない。内外面とも、縦位の指ナデ調整等も行われていない。

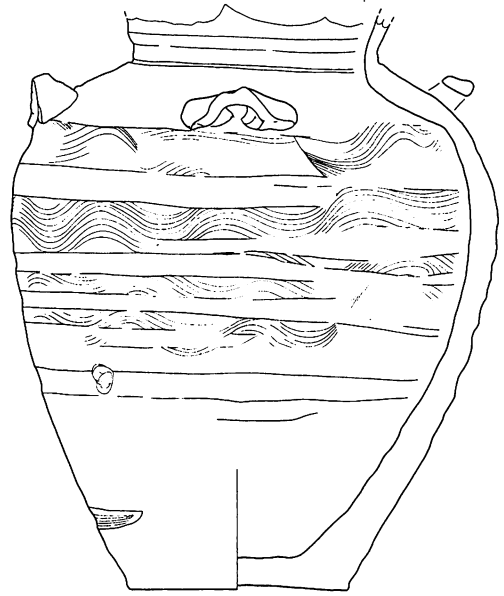
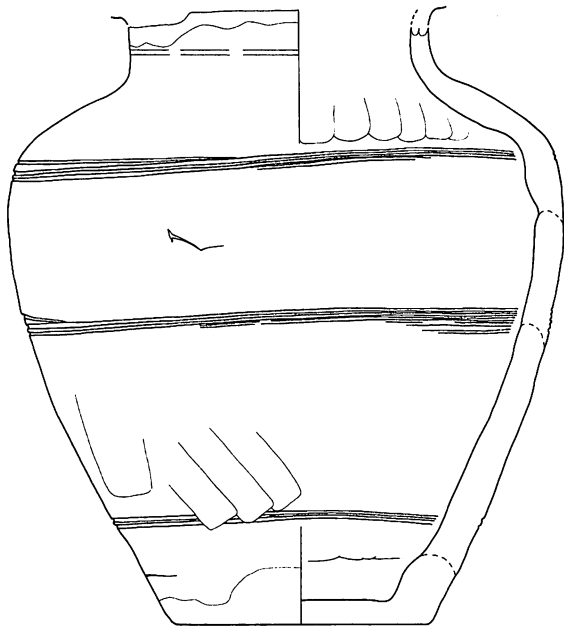
胴部の比較的広い範囲に施される沈線による波状文は、9単位の楕目状の工具によるもので、流麗な波状文を描く。1単位の沈線は幅約1.5mmのごく浅いものであり、波状文は胴部4ヶ所に施される。浅い沈線であり、所々施文されない箇所がある。波状文施文後に指でひねった4個の横耳を張りつけている。横耳には施文等はなく、貼り付けの調整も簡略化している。粒子の細かな胎土に黒色を呈する砂や小石なども混入させている。産地不明であるがこの壺を珠洲窯系陶器とするならば、珠洲編年のI期に相当すると思われる。

(4)「箱」状の容器の破片〔図版番号4～23〕

3号経塚状遺構石槨部から出土した。出土した銅板は無文の薄い板であり、銅製の鉸が打ち込まれてあった。銅板と共に出土した板材は白木で漆等は施されていない。板材の樹種はこの地方では自生しない檜(ひのき)である。板と板を接合するための木釘もあった。これらは比較的小型の木製容器と想定されるので、「箱」の一部の破片とみなすのが妥当と思われる。そして出土状況と銅板・板材の同一性から複数の箱ではなく、おそらく一個分の箱の一部であり、板材の組み合わせから印籠合口造りの蓋の一部と考えられる。この「蓋」は白木に銅板で縁取りを行ったものだろう。以下、個々について説明する。

図版番号4の銅板は、北側の側石裏の埋土中から出土した。長さ約17cm程で、今回出土した銅板中最も長いものである。鉸の穴があり、中央部で接合している。この図版番号4以外の遺物は、石槨部「底石」下の埋土4層下部～5層中からまとまって出土したものである。

図版番号5は、無文の銅板側面の裏面に木片が付着する。銅板の側面上端が折り曲げられており、その部分の木片が面取りされているので、この上端部分で完結していると思われる。上面には3つの鉸止めがあり2個の銅製の鉸が残存する。頭部径0.3～0.4cm・長さ0.6cm程である。間隔は4.7cm～5.0cmである。側面の鉸は2つあり上面の鉸とほぼ同様の規模であり、間隔は8.9cmである。これらの鉸が木片に打たれ固定する役割を持つことがわかる。下の方の鉸は、更に縦位の直径0.3cm程の木釘まで及んでいる。上端部にも横位の木釘が打たれており、木釘が木片の組み立てのためのものであることがわかる。また製作行程として、初めに木の箱を組み立ててから銅板を施していることもわかる。上端の下にも横位の小さな木釘(径0.2cm程)があるが、面取り部から打ち込まれているようであり、その機能はわからない。銅板下端は人為的に曲げられている可能性がある。中央部から上端にかけての曲がりの角度(上面と側面の角度)は、本来的なものと



1

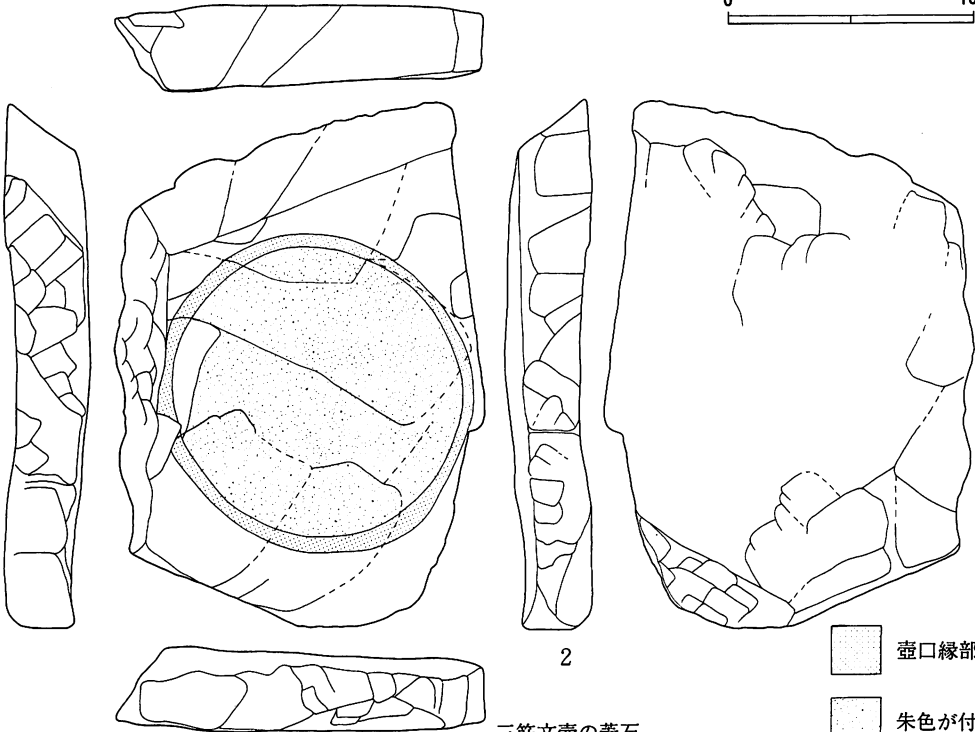
常滑産三筋文壺



3

須恵器系波状文四耳壺

0 10cm



2

三筋文壺の蓋石

壺口縁部と接する面

朱色が付着している面

第26図 出土遺物

考えられるが、下端部はかなりの鈍角になっている。但し上部の重みで変形した可能性もあるので確実なことはいえない。

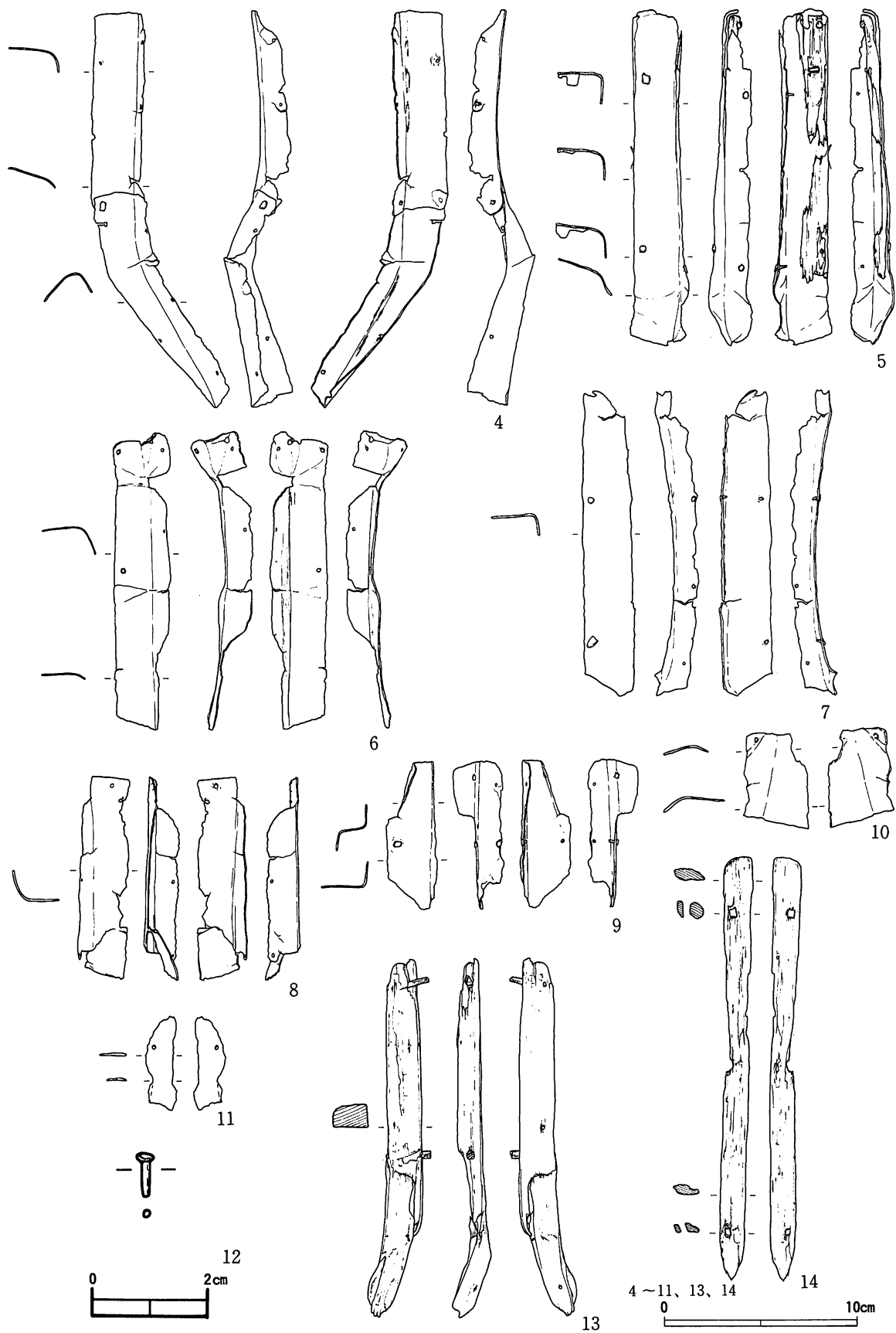
図版番号6は、無文の銅板である。上端部は銅板の端部である。上面約1.4cm、側面2.4cm。上端部の下の上面は、楔形に意図的に切り取られている。この部分は、木片を覆うように折り曲げられていた可能性が考えられる。上面に3つの鋳止めがある。上の径0.3cmの鋳穴は側面の鋳穴と対応するものであろう。径0.15cmの2つの鋳穴の間隔は、約4.5cm程である。図版番号7も無文の銅板である。残存状態は比較的良いほうである。下端は人為的に折り曲げられた可能性がある。上端は若干腐食。裏面に木片の痕跡がある。この銅板と組み合うのは、図版番号13である。側面幅2.3cm・上面幅1.1cm・厚さ約0.1cm。側面に2つの鋳止め、木片に打ち込むことを目的としている。6.4cm間隔、鋳は0.4～0.5cmの頭部・0.5cmの全長。上面には3つの鋳止め、うち1つは鋳が残存する。間隔は4.0～4.5cm。鋳は頭部が0.4cm、長さが0.3cm。鋳の穴は0.13cm程の円形である。側面の鋳よりも太く短い。上面と側面とは鋳の規格が違うようである。

図版番号8の上端部は銅板側面の端部である。下端部は欠損している。上面幅1.6cm・側面幅2.2cm程である。裏面は腐食や錆が少なく、取り上げ直前まで木片が密着していたことが考えられる。上面の鋳止めは2つあり、鋳穴は0.15cm程の小さな円形であり、間隔は3.8cmである。側面の鋳止めは、上端部に2つあり上の鋳穴は中央にある。鋳穴は0.2cm強の比較的明瞭な円形を呈する。

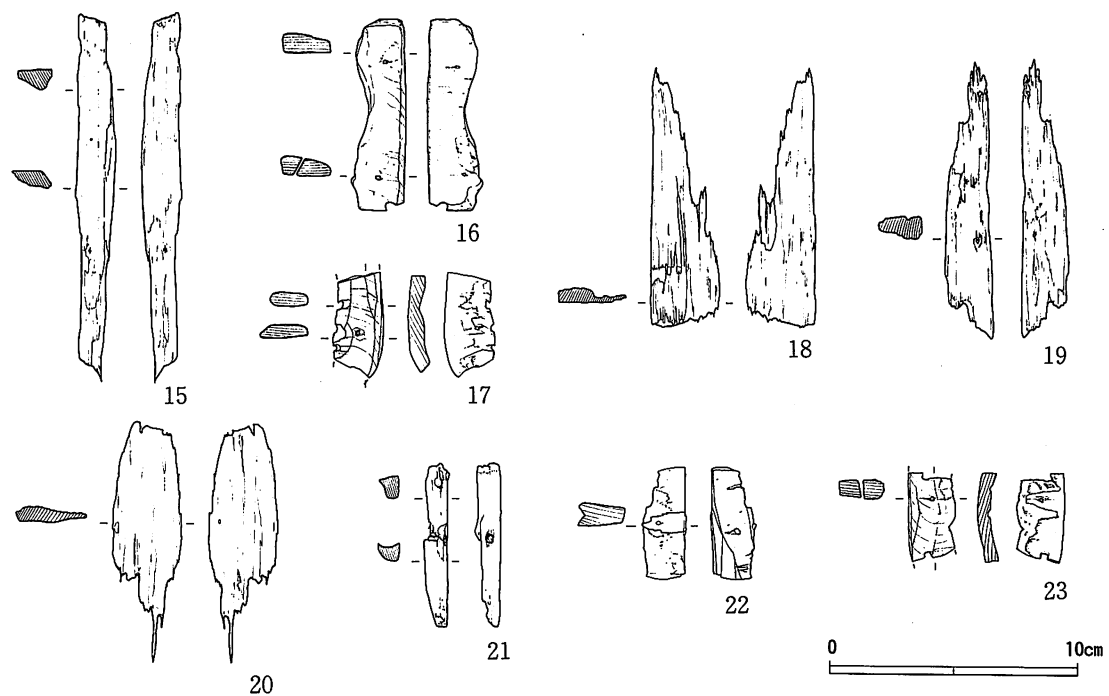
図版番号9は、銅板の上端部は本来の銅板の端部であり、下端部は何らかの理由で欠損している。上面は腐食しているが、幅は1.3cm以上と思われる。側面は2.4cm程である。側面部は明らかに折り曲げられている。裏面は腐食や錆が少なく、木片痕があることから、裏面に木片が存在し続けていたことは確実である。側面部に2つの鋳止めがあり、上の鋳穴はやや中央よりあって、径0.35cm程である。下の鋳は残存度が良く頭部径0.3～0.4cm、長さ0.4cm程である。間隔は約3.5cmである。上面にも2つの鋳止めがあり、鋳の頭部径0.3cm、鋳穴径0.15cm、長さ0.3cm程である。間隔は3.0cmである。図版番号10についても、銅板の上端部は本来の銅板の端であり、下端部は何らかの理由で欠損していると思われる。上端の側面部に鋳止めが1つある。頭部径は0.2cm程の小さな鋳であり、胴部は欠損している。上面幅1.5cm程、側面幅1.9cm程である。図版番号11は小さな銅板片である。おそらく上面部の一部と思われる。鋳止めの穴が1つあり、径は0.15cm程であり、比較的明瞭な円形を呈する。

図版番号12は銅製の鋳止めの釘である。頭部はやや歪な方形であり一辺約0.25cmをはかる。全長は約0.7cmであるが、先端部は欠損している可能性が高い。先端部にいくに従い少しずつ細くなる傾向がある。

図版番号13～23は、箱に使われた木製品である。図版番号13は図版番号7の銅板とセットとなる。銅板側面部裏面に接合するもので3面に明瞭な面取りの加工痕、もう一面は腐食が進んでいるものの、一部に面取り痕が観察できる。1.8cm×1.2cmの角材である。木釘は2つあり、下の木釘①は頭部はやや歪な方形で一辺0.3～0.4cmをはかる。先端にゆくに従い細くなり、先端部径は0.2cm程の円形を呈する。この木釘の長さは2.4cmで、釘穴から0.4cm程外にはみ出るようになっている。上の木釘②は径0.2～0.3cm、長さ2.3cm程の小さなものである。これも釘穴から0.4cm程外にはみ出ている。木釘の0.4cm程はみ出た分は、銅板上面の裏面に接合するようになっている。図版番号14は、腐食が進んでおり、面取り部は残存しない。上端部に若干の加工痕が認められるのみである。2箇所木釘の穴が穿たれており、径0.4cm前後のほぼ円形を呈する。釘穴の間隔は17cm程である。図版番号15は、図版番号6の銅板とセットとなるものである。銅板と接する部分のみきれいな面取りが残存し、あとは腐食している。図版番号16・17・22・23は銅板と接触する面は比較的きれいな面が残っている。鋳に穿たれた痕跡が明確である。図版番号18・19・20は、全体的にかなり腐食が進んでいるが、鋳に穿たれた痕跡が木口面にわずかに残存している。



第27図 3号経塚状遺構出土「箱」破片(1)



第28図 3号経塚状遺構出土「箱」破片(2)

V. 山屋館跡. 検出された遺構と遺物

山屋館跡の調査区は丘陵部と緩斜面部に2分にされ、遺構・遺物の性質と様相が異なると予想されたので、便宜的にA区とB区に分けて調査を行った。調査の結果、A区からは中世前期と推測される館跡、B区からは縄文時代後期と弥生時代後期の遺構・遺物が検出された。以下、A区・B区に分けて述べていくことにする。なおA区とB区の線引きは厳密なものではなく、A区とB区の境界部に両者の遺構が重複する場合がある。

1. A区について

(1) 館跡

この地区からは、中世前期と考えられる館跡に関係する遺構が検出された。以下、1では中世の城館跡に関わる遺構について述べていく。1993～94年にかけての道路工事予定地内の立木伐採及び搬出により、館跡の正面と思われる北東側や東から南に廻る帯状の段を中心に全体的に著しく攪乱を受けていたが、幸い伐採直前の1993年4月に高橋博恭・古沢友治・室野秀文3氏による館跡の縄張り調査が行われ、高橋氏が縄張り図を作成している(第7図参照以後高橋1993縄張り図と呼称)。この縄張り図を援用しつつ館跡について述べていく。館跡に関係する人為的に造成されたと考えられる平場を16基程検出することができた。いずれも小規模な平場でありその構築位置と予想される機能で主郭・曲輪・帯曲輪・帯曲輪状に分類した。検出した平場の内訳は主郭が1、曲輪が13、帯曲輪が1、帯曲輪状が1である。また曲輪群の東方に堀跡5条・マウンド状遺構2基を検出した。また遺構及び表土等から館跡に伴う遺物は一切出土しなかった。

①主郭

館跡主郭部は館跡の位置する山の頂上に占地している。標高は491～492mである。主郭を形成する平場は、元々の山頂部に存在したと考えられる若干の平地を利用して、人為的に削り出すことによって造成した平場である。伐採・搬出による削平を受けているものの、全体的な形態・規模に大きな変更はないものと考えられる。中央部がやや盛り上がるものの全体に比較的平坦な面であり、削平により黄褐色シルトの土に角礫が多く含まれる面である。山頂部にある主郭からは、西方に紫波町北部の古館方面の町並みが眺められ、更に北西に盛岡市太田地区までが視野に入る。また西の山々では東根山から南昌山の山並みはもとより、北西に秋田駒ヶ岳や岩手山南麓を眺めることができる。また南方向は天王川筋の道を眼下とする。

主郭の平面形はやや歪な円形を呈しており、平面規模は東西が約6.5m、南北が約7.3mである。柱穴等の遺構が検出されず、建物を構築できるような空間もないことから、物見台か狼煙台的な役割の、臨時の使用に限定された平場と考えられる。なお高橋1993縄張り図には主郭部南よりの場所に塚状のマウンドが表現されているが、伐採・搬出の削平により破壊されてしまい、状況を確認することはできなかった。マウンド構築の意図は分からないが、地下遺構はなく土を盛り上げることに意味があったのかもしれない。

②曲輪

曲輪 1

主郭の東側斜面下に位置する。主郭側斜面を削り取ることで平場を造成したもので、平面形は東西に細長い楕円形を呈する。標高は491mで、東側にやや傾斜している。平面規模は、東西が約2.5m、南北が約6m

である。北西側に幅約1.8m程の主郭との通路があり、主郭に廻り込むような形で接続している。通路には段等の構築物はなく、若干傾斜を緩やかにして他との差異化を図っているようである。

曲輪 2

主郭の南西側斜面下に位置する。主郭側斜面を削り取ることで平場を造成したもので、平面形は三日月形を呈する。標高は491m前後で、造成面はほぼ水平である。平面規模は、東西が約1.5m、南北が約6.5mである。当曲輪の南東部に幅1.7m程の主郭との通路がある。この通路にも段等の構築物はなく、傾斜を若干緩やかにすることで他との差異化を図っているようである。

曲輪 3

主郭の北西側斜面下に位置する。これも主郭側斜面を削り取ることにより造成したものであるが、平場といえるような平坦面ではなく、地形面に沿った緩斜面になっており、北東から南西への上り斜面となっている。当曲輪の標高は489～491mであり、平面形は半月形状を呈する。平面規模は南西－北東が約11m、南東－北西が約3.5m程である。当曲輪は曲輪群の中でも比較的広い面積を占めるが、柱穴等の遺構は検出されなかった。むしろ曲輪 2 との関係で段のある帯曲輪状の遺構であり、北側から南側へ廻り込み、主郭に至るための通路的な役割の平場であったと思われる。

曲輪 4

主郭の南側斜面下、曲輪 1 の南側に位置する。主郭側の斜面を削り取ることにより造成した平場であるが曲輪 3 同様に地形面に沿って緩斜面になっている。攪乱の多い曲輪群の中では本来の平場が比較的残存している方である。当遺構の標高は490～491mであり、平面形は半月形状を呈する。平面規模は東西が約8.5m、南北が約2mである。主郭に次いで館跡西方の町並みや西の山々を見渡すことができる場所である。当曲輪は北東側の曲輪 1 へは 1 段上だけの位置にあり、曲輪 1 との強い関係を見出すことができる。

曲輪 5

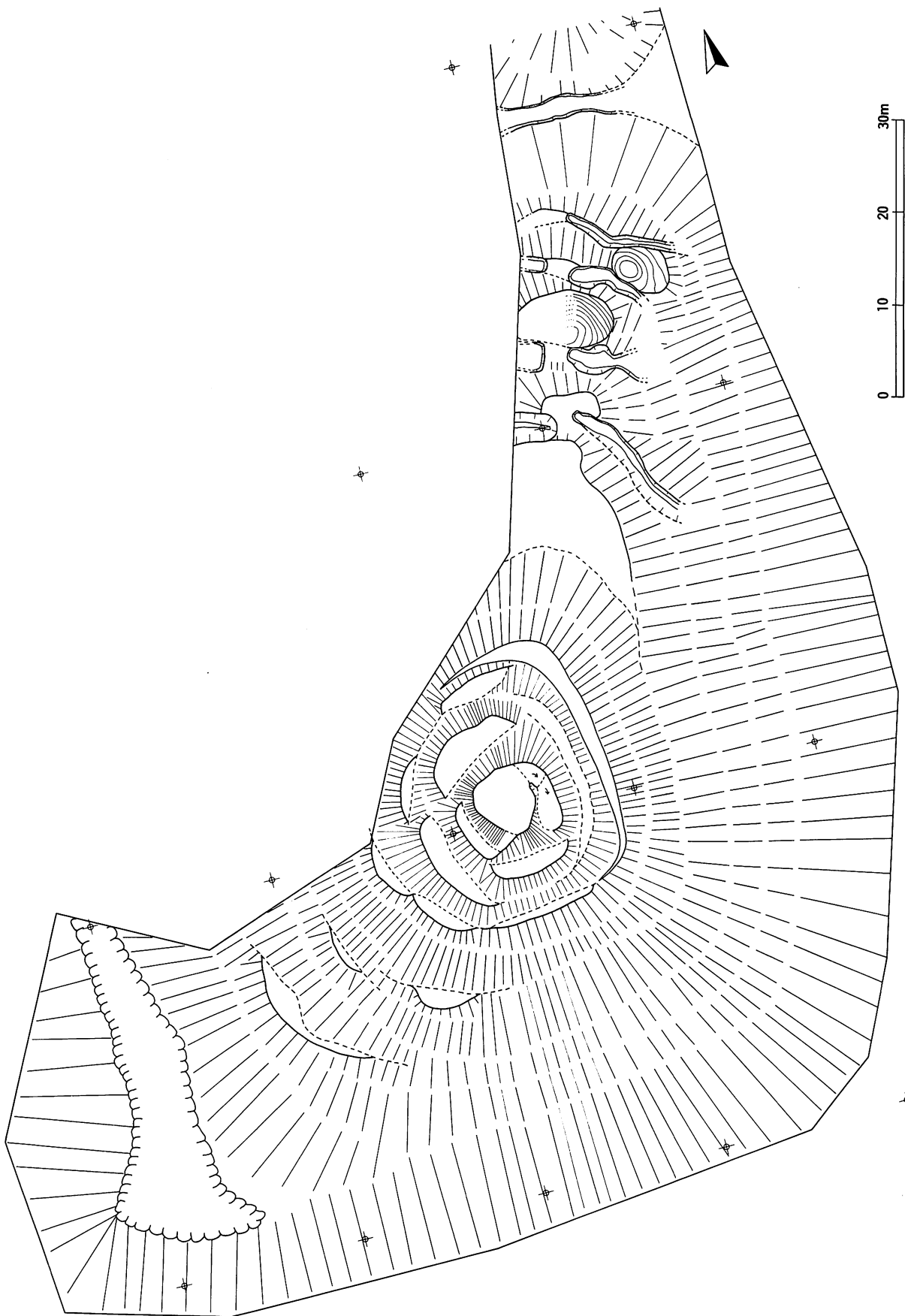
主郭及び曲輪 2 の南西側斜面下に位置する。主郭側の斜面を削り取ることにより平坦な面を造成したものであり、平面形は細長い三日月形状を呈する。当遺構の標高は489～490mであり、南東－北西が約11.5m、南西－北東が約2.5mである。当曲輪の南東端の延長は明確ではないが、帯曲輪状 1 と連結する可能性があり、曲輪 6 と曲輪 7 を含めて主郭部を取り囲む最初の帯曲輪と想定することが可能かもしれない。

曲輪 6

主郭の北西側斜面下に位置する。主郭側の斜面を削り取ることにより造成した小規模な平坦面である。当曲輪の標高は489m前後であり、平面形はやや細長い三日月形状を呈する。平面規模は南西－北東が約7.5m、南東－北西が約1mである。前述のように当曲輪は単独で存する曲輪ではなく、例えば上位の曲輪 5 と階段状に接続し、やや下るが曲輪 7 と接続して一つの帯曲輪状の遺構を構成する可能性が考えられる。

曲輪 7

主郭及び曲輪 3 の北側斜面下に位置する。これも主郭側の斜面を削り取ることにより比較的平坦な面を造



第30図 山屋館跡縄張り図

成したものであり、平面形は細長い三日月形状を呈する。当曲輪の標高は487～488mにあり、平面規模は南西－北東が約9m、南東－北西が約2.3mである。当曲輪の南西端が曲輪6と接続する可能性は前述したが、北側一段下で帯曲輪1と接続する可能性も考えられる。

曲輪8・9

主郭・曲輪2及び曲輪5の南西側斜面下に、これら2つの曲輪が並んで位置している。これらも主郭側の斜面を削り取ることにより平坦面を造成しており、両者とも平面形は三日月形状を呈する。当曲輪の標高は486～488mにあり、曲輪8の平面規模は南西－北東が約1.5m、南東－北西が約7.5mであり、曲輪9の平面規模は南西－北東が約1.4m、南東－北西が約7.2mである。曲輪8と9とはほとんど段差がなく一体の平場といえるものである。また、前述のように帯曲輪1と曲輪8の南東端が繋がる可能性が高く、その場合曲輪8と9は帯曲輪1の一部と考えることができるだろう。

曲輪10

主郭及び曲輪5・8の南西斜面下に位置する。主郭側の斜面を削り取ることにより比較的平坦な面を構築している。平面形は半月形状を呈しており、当曲輪の標高は482～483mである。平面規模は、南東－北西が約8m、南西－北東が約2mである。当曲輪と連続する可能性のある曲輪は段があるものの曲輪12を想定することができるだろう。また曲輪11とは標高的に近い位置にあり、当曲輪と曲輪11は南西－北東に対応する関係にあり、何らかの関係性を想定できるかもしれない。

曲輪11

主郭の北側の斜面、標高482～485mに位置する。人工的に造成されたとみられる曲輪状の平場としては最も広い面積を占めるものである。当曲輪は主郭のある山頂に続く尾根を切る形で構築されており、平場というものの緩斜面になっており、館跡の斜面でも自然地形で比較的傾斜の緩やかな場所を選地しているようである。斜面上部を削り出すことで平場を構築している。この平場の西側は調査区外に出ているため、全体像は把握していない。また伐採時の重機による攪乱も大きく、遺構の復元も困難であり、特に南東部に関しては重機による平場の造成？の可能性も否定できない。

検出した平面規模は、東西の幅が狭い場所で約13m、広い場所で約25mである。また南北方向の規模は約23～26m前後である。攪乱や削平もあって、平場の表土はほとんどなく、地山の角礫を多く含む黄褐色シルト系の土が露出した状態であった。この平場が最も建物跡の存在の可能性が高いと思われたが、結局遺構の存在は確認できなかった。

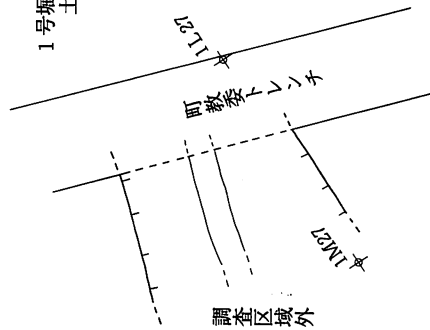
曲輪12

主郭及び曲輪5・9の南西斜面下に位置する。主郭側の斜面を削り出すことで造成した平場である。平面形は半月形状を呈し、標高は481m前後である。当曲輪の東側に位置する曲輪10に隣接しており、曲輪10の延長線上にある曲輪11と接続する可能性が考えられる。

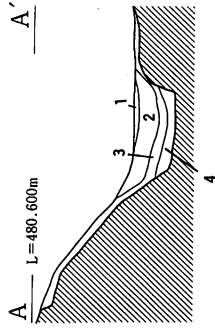
曲輪13

主郭及び曲輪10・12の南西斜面下に位置する。削り出しの平場であるが高橋1993年縄張り図では描かれて

1号掘跡平面

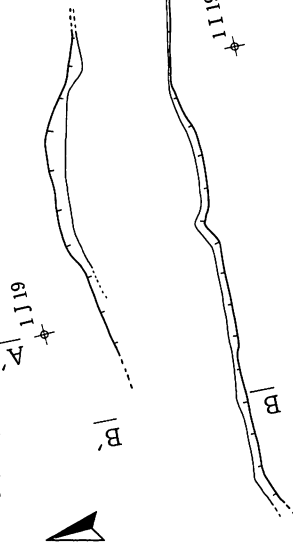


1号掘跡断面

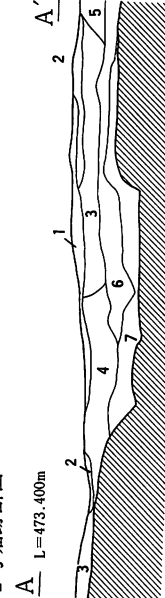


1. 10YR3/2 黒褐色シルト。しまりなし、粘性なし。植物の根・炭を多量含む。腐食土を少量含む。
2. 10YR1/2 黒色シルト。しまりあり、粘性なし。腐食土を少量含む。
3. 10YR4/3 暗褐色シルト。しまりあり、粘性なし。1cm以下の炭を含む。
4. 10YR4/4 褐色シルト。しまりあり、粘性やあり。3cm以下の小礫・風化礫を含む。

2号掘跡平面

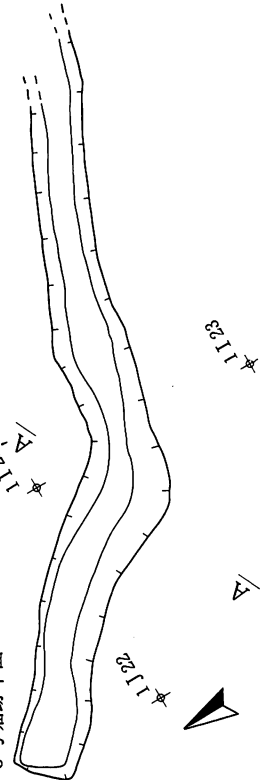


2号掘跡断面

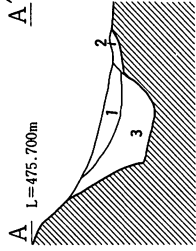


1. 10YR1/2 黒色シルト。しまりなし、粘性なし。木根痕跡少量含む。
2. 10YR3/3 暗褐色シルト。しまりあり、粘性なし。木根痕跡微量含む。
3. 10YR4/4 褐色シルト。しまりあり、粘性なし。10cm程度の角礫を比較的多量を含む。

3号掘跡平面



3号掘跡断面

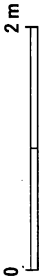


1. 10YR1/2 黒色シルト。しまりあり、粘性なし。植物の根・炭を多量含む。腐食土を少量含む。
2. 10YR3/3 暗褐色シルト。しまりあり、粘性なし。腐食土を少量含む。
3. 10YR2/1 黒色シルト。しまりなし、粘性なし。植物の根・炭を多量含む。腐食土を少量含む。
4. 黄褐色ロームをプロック状に少量含む。

2号掘跡断面のみ



1号・3号掘跡平面・断面共通



いない。平面形は2つの三日月を重ねたような細長い形状を呈し、標高は475～476mである。平場の中では最も低い位置にあり、最西南端にある平場である。当遺構と関係する曲輪は存在しないようである。

③帯曲輪 1

曲輪7ないし帯曲輪状1と曲輪11の間に位置しており、館跡の南側から東側を経て北側へ廻る細長い曲輪である。標高は487～488mである。主郭側の斜面を削り取って平場を造成したものであり、幅は北東側がやや広いが、それでも2mから3m弱程である。南東側は最も狭くなり、南側にいくと若干幅が広がる。南側の幅は約1m弱である。当遺構は前述のように曲輪8・9と繋がる可能性があり、高橋1993縄張り図によれば、館跡中心部を一周し館跡を取り囲む形になっている。

④帯曲輪状 1

曲輪1及び曲輪4と帯曲輪1の間に位置している帯状の平場である。当遺構は高橋1993縄張り図にも表現されている「帯曲輪」であるが、立木の伐採・搬出時の攪乱（帯曲輪は重機の通路に利用されたようである）により大部分が破壊されており、復旧は不可能に近い状態であった。そのため当遺構が「帯曲輪」であるかどうかを確認するとはできなかった。遺構は主郭の南東側から北側にかけて存在しており、推定される幅は約2.0mから1.5m程である。前述のように曲輪5と接続する可能性があり、主郭部へ廻り込みながら登っていく通路的な機能をもっていた可能性が考えられる。

⑤堀跡

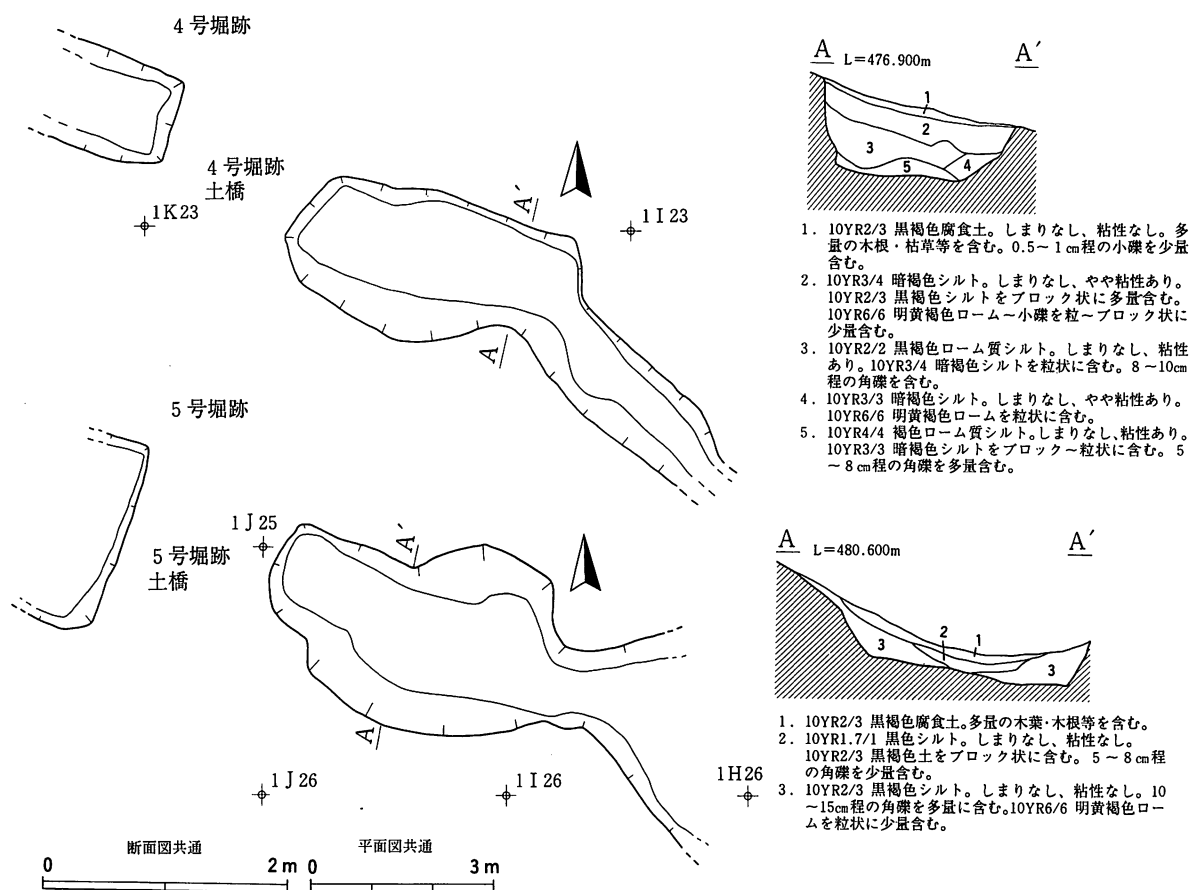
1号堀跡

主郭の北東側の斜面部、5号堀跡の南に位置しており、堀跡の中では最も主郭に近い場所にある堀跡である。1994年の紫波町教育委員会の試掘トレンチ調査で土橋西側の断面を検出していたものである。西側に延びていく堀については、現状で堀の形状を判別することができた。このことから埋土の形成はかなり遅かったのではないと思われる。西側に延びる堀は調査区外にあり、高橋1993縄張り図によれば、このあと10m以上は存在していることが予想される。東側へ延びていく堀については、伐採時の重機による攪乱で堀自体が押しつぶされており、これらの土を人力で除去し、旧表土をあらわすことによって遺構を検出することができた。但し斜面上部の方の岸は重機により完全に切り崩されてしまっており、検出したのは斜面上部においては掘り込みの底部から1m程でしかない。

標高は478～482mで、館跡の東側から南東側に展開しているが、南斜面に廻ってはゆかず外に抜けてしまっている。東側へ延びる堀の長さは約15～16mである。上場の幅は約2.0～2.2m、下場の幅は約0.4～0.6mである。西側へ延びる堀の方は、上場の幅が約3.0～3.4m、下場の幅は約0.4mである。深さは場所によって異なるが約0.4～0.5m程である。埋土は上位は非常に新しい時期の腐食土、その下が暗褐色のシルトであり、小角礫を含んでいる。堀中央の土橋は削り出しによるものである。土橋の西側は紫波町教委のトレンチで削平されているが、残存部から推定すると南北幅が約2.8m、東西幅が約2.6m程である。

2号堀跡

主郭の北北東側、館跡の斜面が終わり比較的平坦な面に変わる地点に位置しており、A区とB区の境界付近にある遺構である。B区から主郭へ延びて連続する尾根を切る形で構築されており、堀切状の遺構と考え



第32図 4号・5号堀跡

られる。標高は470～472mである。

確認した東西の長さは約24m程であるが、西側は斜面下の調査区外に延びており、東側の斜面下にも延びて南北に広がっていくが壁は明確ではなくなっている。最も明確に壁がたつ尾根中央部の上場の幅は約4.8mであり、下場の幅は約4.4mである。深さは地点により異なるが、尾根中央部で約0.3～0.4m程を図る。また当遺構は北側の壁がB区の1号及び2号竪穴住居跡を切る形になっている。

断面形はほぼ逆台形状を呈しており、埋土は下位が黄褐色粘土質シルト、上部が暗褐色シルトであり、いずれも炭化物を粒状に含んでいる。断面の状況から当遺構は上位面の削平が少ないことが予想され、検出した状況と当時の状況は差異が少ないことが考えられる。堀としては非常に浅いことから、館跡に至る通路の一部と考えることができるかもしれない。

3号堀跡

主郭の北東側の斜面部、2号堀跡と4号堀跡の間に位置する。標高は471～475mであり、尾根の土橋部から南東方向へ堀が延びていくが、東部斜面には廻らず外へ抜けてゆく形になっている。全長は約13m程で上場の幅が約0.8～1.6m、下場の幅が約0.4～0.6mである。

断面形は逆台形状を呈し、深さは約0.5m前後である。埋土下位は、褐色粘土質土をブロック状に含む黒色シルトであり、埋土上位は暗褐色腐食土と黒色シルトである。2号マウンド状遺構の北部を切っており2号マウンド状遺構よりも新しい時期の遺構と考えられる。

4号堀跡

主郭の北東側の斜面部、3号堀跡と5号堀跡の中間に位置し、1号マウンド状遺構の斜面部下、2号マウンド状遺構を切る形で構築されている。標高は475～477mである。中央部に削り出し式の土橋があり、土橋を中心として東西に堀が切られている。東側ないし北東側へ延びる堀は約8m程あり、2号マウンド状遺構を切りながら外側に突き抜けていっている。幅は上場が1.6mから2.2mまでと一定ではなく、下場も約0.4mから約1.6mまでと規模に幅があり東側へゆくにつれ全体の規模が縮小する傾向にある。西側に延びる堀については、約1.8m程検出しているが、大部分は調査区外にあるため全体像はわからない。幅は上場が約1.6m、下場が約1.1mで東側の堀と比べ形状的に一定である。

断面形は逆台形状を呈し、深さは検出面から約0.7m前後である。埋土は5層からなり、埋土下部は地山礫層を起源とする角礫を多く含むものであり、埋土上位は黒褐色～暗褐色を呈する腐食土系の埋土である。土橋は、上部はかなり削平されていると思われるが、残存部で長さ2.2m前後、幅が2.3m前後である。

5号堀跡

主郭の北東側の斜面部、1号堀跡と4号堀跡の中間に位置し、1号マウンド状遺構の斜面上部にある。標高は478～481mであり、土橋を中心に南東側と北西側に堀が延びている。北西側の堀は、長さは土橋から8m程であるが、これもまた外側に突き抜けていっている。幅は上場が約3.0mから約1.4mまで、下場も約1.6mから約0.8mまでと一定ではなく、形状的に不整形な形態をもっている。南東側の堀は、その大部分が調査区外にあるので全体像は不明であるが、調査区内での規模は、長さが約1.2m、幅が3.2m程であり比較的一定な形状を保っている。

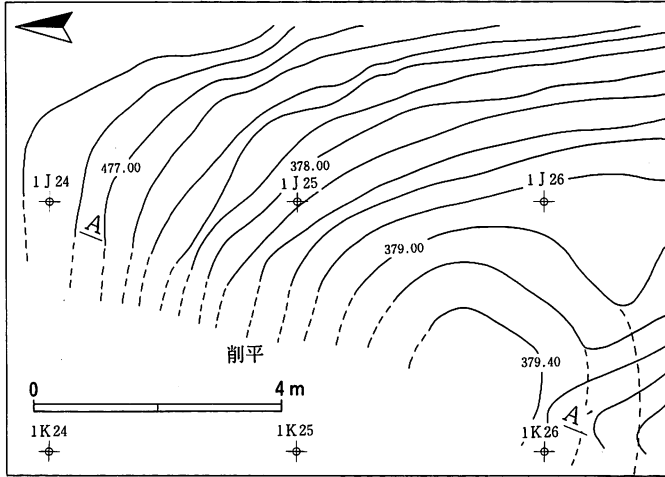
断面形は逆台形状を呈し、深さは斜面上部の検出面から約1.4mである。埋土は3層からなり、黒色～黒褐色のシルトを主体とし、下位ほど角礫を多く含む傾向にある。埋土上位は腐食土層で多くの木葉・木根痕を含んでいる。土橋は、削り出し式によるもので、上部はかなり削平を受けているが残存部で計ると、長さが約2.4m、幅が約3.0m前後である。

⑥マウンド状遺構

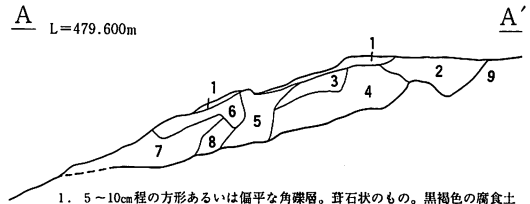
1号マウンド状遺構

主郭の北北東側、4号堀跡と5号堀跡の中間に位置しており、標高は476.6～479.4mである。遺構の西半分は重機による削平により完全に失われていた。そのためマウンドの範囲や形状を特定することは困難であるが、残存部から想定すれば、平面形状は楕円形を呈すると思われる。想定される規模は、東西が約12m前後、南北が約11m前後である。

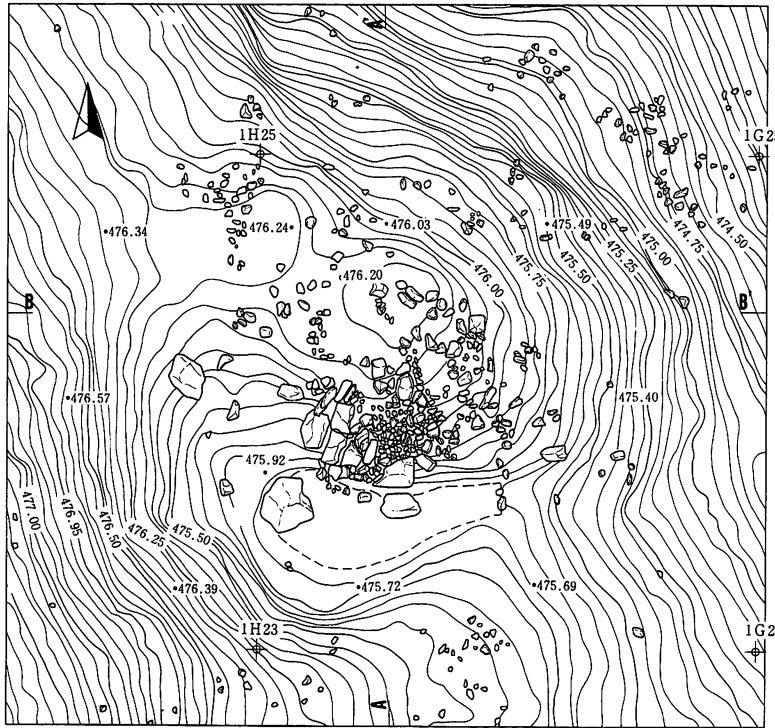
盛土の断面形は、南側に寄る中央部がやや盛り上がるドーム状の形態で、斜面上部から順次土を盛り上げていったと思われる。盛土の土は、褐色シルト～暗褐色粘土を主体とするもので、地山起源の黄褐色粘土質土や角礫を含むものである。盛土2層は後で掘り込んだような断面形を呈しており、5号堀跡の埋土とも考えられるが、平面ではプランが捉えられず、その先は削平で失われていることもあって明確なことはわからないものの、5号堀跡の埋土とは性質が異なることは確かである。盛土の上部にはやや偏平な小角礫が葺石



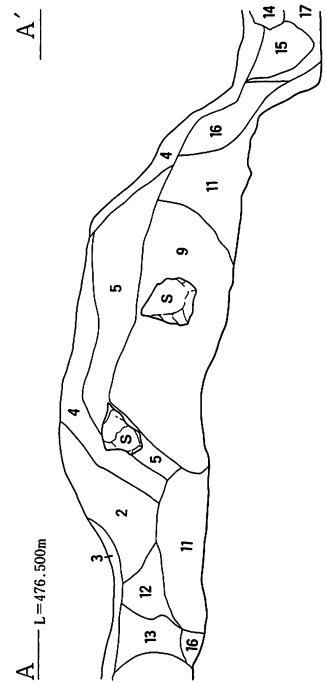
1号マウンド状遺構



1. 5～10cm程の方形あるいは偏平な角礫層。葎石状のもの。黒褐色の腐食土を含む。
2. 10YR7/4 に近い黄褐色ローム質シルト。しまりなし、やや粘性あり。砂・シルトを少量含む。10YR3/4 暗褐色シルトを粒状に含む。5～8cm程の角礫を少量含む。
3. 10YR2/3 黒褐色ローム質シルト。しまりなし、粘性なし。10YR5/6 黄褐色ロームをブロック状に含む。10～30cm程の方形の角礫を含む。
4. 10YR4/4 褐色ローム質シルト。ややしまりあり、粘性あり。10YR6/6 明黄褐色ロームをブロック状に少量含む。炭化物を粒状に少量含む。7～10cm程の角礫を少量含む。
5. 10YR2/4 暗褐色ローム。しまりなし、粘性あり。10YR2/3 黒褐色シルトを粒状に含む。炭化物を粒状に微量含む。1～5cm程の角礫を多量に含む。
6. 10YR6/6 明黄褐色ローム。ややしまりあり、粘性あり。砂少量含む。10YR3/4 暗褐色ロームを粒状に少量含む。炭化物を粒状に微量含む。
7. 10YR4/4 褐色ローム。しまりなし、やや粘性あり。砂少量混入。10YR3/4 暗褐色ロームをブロック状に含む。礫の混入は少量。
8. 10YR6/4 褐色ローム。しまりなし、粘性あり。砂少量混入。10YR6/6 明黄褐色ロームを粒状に含む。1～5cm程の角礫を少量含む。
9. 10YR6/4 に近い黄褐色ローム質シルト。ややしまりあり、粘性あり。砂混入。偶丸の角礫を少量含む。地山。



2号マウンド状遺構



1. 10YR3/2 黒褐色腐食土。2～15cm程の偏平な角礫を多量に含む。
2. 10YR3/4 暗褐色ローム質土。ほろほろでしまりなし、粘性あり。2～10cm程の角礫を多量に含む。10YR2/3 暗褐色腐食土をブロック状に多量含む。
3. 10YR6/6 明黄褐色ローム。地山起源の土。しまりなし、粘性あり。10YR4/4 褐色ローム質土を多量にブロック状に混入。
4. 10YR5/6 黄褐色ローム質シルト。ほろほろでしまりなし。地山起源の土を主体に盛土としている。2～3cm程の角礫を含む。10YR3/4 暗褐色シルトをブロック状に含む。

5. 10YR2/6 褐色ローム質シルト。ほろほろでしまりなし。後は4層と同じ。
6. 10YR4/4 褐色ローム。しまりなし、粘性あり。1～3cm程の角礫を少量含む。10YR3/4 暗褐色シルトをブロック状に少量含む。
7. 10YR4/4 褐色ローム。6層とほとんど同じだが、やや角礫を含む割合が高い。
8. 10YR3/3 暗褐色ローム。しまりなし、粘性あり。シルトを多量に含む。10YR6/6 黄褐色ロームをブロック状に多量に含む。2～4cm程の角礫を少量含む。
9. 10YR3/4 暗褐色シルト。しまりなし、やや粘性あり。10YR5/6 黄褐色を呈する砂を多量に含む。礫の混入は比較的少ない。旧表土か。
10. 10YR3/4 暗褐色シルト。ほろほろで全くしまりなし。10YR4/6 暗褐色ロームをブロック状に多量に含む。1～3cm程の礫、多量に混入。大きな礫の混入はない。
11. 10YR4/4 褐色ローム質シルト。しまりなし、やや粘性あり。15～20cm程の角礫を多量に含む。
12. 10YR4/4 褐色シルト。しまりなし、粘性なし。10YR3/3 暗褐色シルトをブロック状に含む。1～10cm程の角礫を多量に含む。
13. 10YR2/1 黒色シルト。腐食土を多量に含む。ほろほろでしまりなし。炭化物を多量に粒状に混入する。2～6cm程と30～40cm程のやや偏平な角礫を多量に含む。
14. 10YR3/3 暗褐色シルト。腐食土起源。しまりなし、やや粘性あり。10YR1/7/1 黒色シルトをブロック状に含む。
15. 10YR2/2 黒褐色シルト。しまりなし、粘性なし。5～10cm程の角礫を多量に含む。10YR5/6 黄褐色シルトをブロック状に少量含む。
16. 10YR3/3 暗褐色シルト。さらさらでしまりなし。10YR4/4 褐色シルト・ロームを粒状に少量含む。炭化物を微量に粒状に含む。
17. 10YR4/4 褐色ローム質シルト。しまりなし、やや粘性あり。10～20cm程の角礫を多量に含む。

第33図 1号・2号マウンド状遺構

状に置かれてあった。

当マウンド状遺構は目隠し的な機能をもつ遺構と思われる。実際4号堀跡の土橋から見上げると5号堀跡・1号堀跡の土橋を視界から遮る働きをしていることがわかる。

2号マウンド状遺構

主郭の北東側、3号堀跡と4号堀跡の間に位置しており、標高は474.5～476.2mである。平面形は楕円形を呈しており、平面規模は南北が約5m前後、東西も約5m前後である。北側と南側はそれぞれ3号堀跡と4号堀跡に切られる形になっているが、マウンド自体の削平はそれほどではなくマウンド構築時本来の状況を残していると思われる。

盛土の断面形は中央部が盛り上がるドーム形をしており、盛土は斜面下部から順次土を盛り上げていったようである。盛土下部の土は暗褐色シルト～褐色粘土質シルトを主体とするもので、やや大きめの角礫を含み、全体的にしまりに乏しい。盛土上位は、黄褐色粘土質シルト～暗褐色粘土質土を主体とし、やや小さめの角礫を含んでいる。盛土表面の中央部を中心に約10cm前後の葺石状の偏平な角礫が置かれてあった。

盛土最下位の中央に約50cm前後の角礫が3個程あったが、石の在り方に規則性はなく、それらの石が意図的に置かれたかどうかはわからなかった。堀跡に切られているものの時期差はあまりないと考えられる。当遺構の存在する位置からみて館跡に伴う遺構と考えられるが、その構築意図は不明である。

(2) まとめ

館跡の正面については、検出された5条の堀跡と土橋の位置等から、主郭の北東側の尾根筋であると考えられる。堀跡は北西端の緩斜面部から館跡中位部までに構築されており、館跡東から南側の急斜面には堀跡等は存在しない。これらの方角は堀を設定する必要もない急峻な斜面である。館跡の斜面の中で北東側は最も緩やかであり尾根筋であることから、ここを館跡の正面と設定したのだろうが、同時に最も進入し易い方向であるために堀を構築したのかもしれない。

2号堀跡は、尾根を切る堀切状の遺構であり、2号堀跡より北東側には館跡に付随するような遺構は検出されていないことから、館跡最北東端に位置する遺構と考えられる。谷のある北西側から調査区域に入る道が現在でもあり、この2号堀跡は館跡に至るための道路状の遺構の一部なのかもしれない。あるいは最北東端に位置することから館跡を結界する目的もあったのだろうか。

2号堀跡から館へ登ると3号堀跡の土橋がある。そして4号堀跡の土橋を通ると目前に1号マウンド状遺構が目の前をふさぐ形となる。実際、4号堀跡土橋から上を仰ぐとその先が全く見えない状況である。右におれて北西側に廻り込み1号堀跡を抜けていくか、5号堀跡の上へゆき、1号堀跡の土橋を通過して曲輪11に至る。

曲輪・帯曲輪であるが、これらは堀跡及びマウンド状遺構の上位にあり、左回りに4周して主郭部に至るような形態であったと思われる。北東の尾根筋に主郭へ至る道があり1号堀跡及び3～5号堀跡にかかる土橋を通る。1号堀跡の土橋から右に折れ、西側から南側に至ると曲輪12・曲輪10となり、南東側から北側へ曲輪11に至る。更に曲輪11から一段登り、西側の帯曲輪を通過して、曲輪9・曲輪8へ至る。そして南東側から北側へと帯曲輪1に至る。帯曲輪1は曲輪7と接続して、西側にまわり曲輪5へ至る。(南側の帯曲輪は希薄であるものの)、南東側から北側への帯曲輪状1へと接続する。更に西側の曲輪3・曲輪2と行き、主

郭へ至る場合と、曲輪4・曲輪1へ行き、主郭へ至る場合があるようである。曲輪2から主郭に至る道が結構としては相応しく思われるが、曲輪1にも上り口を設けたのは、曲輪4に特別な意味を持たせたからではなかろうか。曲輪4は、主郭に次いで西側の平地や谷筋を見下ろすことができる場所である。物見台としての意味があったのだろうか。

山屋館跡は、平野部から遠く離れた山地に立地しており、いわゆる山城様式の城館跡であると思われる。堀跡や曲輪等の城館跡であることを示す遺構は検出されているものの、人間が居住する施設（掘立柱建物や竪穴住居跡等）は検出されなかった。人間が居住するとすれば、館跡の西側の平地と館跡北側のB区が想定された。館跡西側の平地は建物跡の存在の可能性があるとして、既に1994年に紫波町教育委員会によって調査が行われたが、遺構・遺物は一切検出されなかった。今回の調査においても遺構の検出を行ったものの、地山礫層がすぐに露出する状況で、後年に伐採作業用に大きく削平を受けた面であることが明らかとなった。おそらく旧地形も緩斜面であったことが予想されるので、削平前に館跡に伴う何らかの遺構が存在した可能性も考えられるが、今となってはわからない。B区については、後に述べるが、時期不明の土坑等はあるものの館跡に伴うと明らかにいえる遺構は検出されていない。また山屋館跡からは、B区を含めて縄文・弥生時代以外の出土遺物は一切なく、人間が居住したことを示す遺物は得られなかった。また館跡の時期を想定する資料も同様に得られてはいない。人間が居住したことを示す遺構・遺物が検出されなかったことで、臨時に使用する場所であったことを証明しているともいえようか。

このような山地の尾根筋を占地して平場を構築する形式は、中世前期頃の山地に立地する城館遺跡に共通する形式である。山屋館跡の性質と存在した時期・館の主等の想定は「V. まとめと考察」で行う。館跡の立地する条件としては、山屋館跡を仰ぐ山屋天王川の谷は交通の要衝にあり、可能性として推測されるこの主要交通路の途上に立地していること、そのため戦時における交通の遮断、防衛ラインの設定という基本的な軍事機能の点では、最もそれを直接的に体现した構築物であるといえる。また見張り台的な意味においても、眼下の古館～都南の集落や陣ヶ岡、西山の館跡群などの軍事施設を監視する機能として有効であったと考えられる。

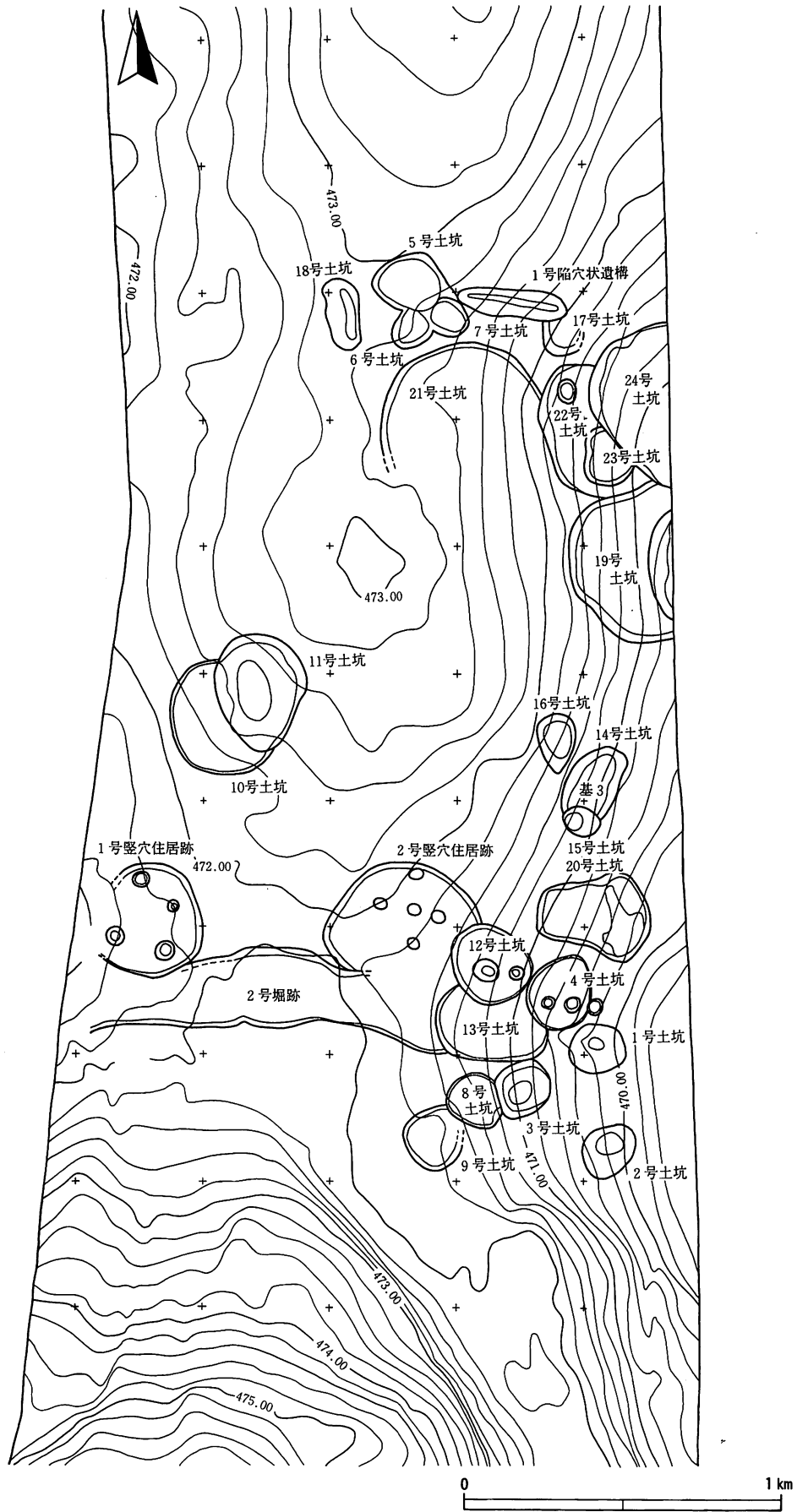
2. B区について

B区は館跡の主郭部北側、主郭から連続する尾根筋の比較的平坦な面に位置する。1994年紫波町教委の調査で弥生土器散布地とした場所である。B区から竪穴住居跡2棟・土坑24基・陥穴状遺構1基を検出した。

(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡

B区の南西隅の緩斜面に位置する。検出面はⅡ層下位である。平面形はやや歪な円形を呈している。遺構の西側は調査区外に出ており、南側は壁面と埋土の一部が2号堀跡に切られている。平面規模は上部の南北が約365cm、東西推定値が約350cm前後である。また床面の規模は南北が約335cm、東西推定値が約320cm前後である。床面までの深さは、検出面から約20cm前後で、西側斜面部は深くなり約30cm程になる。遺構プランの検出は、Ⅰ層下位段階で当遺構の東側の範囲内で縄文土器片が出土していたが、遺構プランの範囲をつかむことができなかった。また遺構の北側も円形のピット状の攪乱を受けており、埋土1～3層はその攪乱層に相当する。当遺構本来の埋土は4層からである。



第34图 B区遺構配置图

埋土4層の土は暗褐色シルトを主体とするもので、黄褐色粘土と炭化物を粒状に含んでいる。またこの層からの出土遺物は、20数点の縄文時代後期末の土器片と少量の弥生時代終末期の土器片が出土している（図版番号24～29・33～36）。掲載分の土器は比較的破片の大きなものに限定しており、大半は地文のみの、磨耗度の高い小さな破片である。埋土5層は、暗褐色シルトで黒褐色シルトをブロック状に含み、炭化物を粒状に多量に含む土である。この層からは、縄文時代後期末の土器片がやはり十数点出土している（図版番号30～32）。これも5層同様磨耗した地文のみの小片である。なお5層には弥生土器片は含まれない。

床面はやや西側へ緩やかな傾斜がつくものの、全体的にはほぼ平坦な面である。床面の東側が一段若干高くなっているようにもみえるが、その目的はわからない。当遺構に伴うと思われる炉跡は検出されなかった。埋土下部や床面に焼土や焼土粒や炭化物を全く検出できなかったため、当遺構で火を常時使用したとは想定できないだろう。

当遺構に伴うと思われる柱穴を4基検出している。4本柱で構成される竪穴住居跡ということになるが、PP3はやや壁に近い場所にある。4基とも平面形は円形である。平面の直径はPP1が約65cm、PP2が約40cm、PP3が約50cm、PP4が約60cmである。柱穴の深さは約15～25cmで全体にやや浅めである。特にPP3が比較的浅いが、一方、PP2は約25cmとやや深く、柱痕跡も確認することができた。

遺構の時期は埋土中の土器片から推測するしかないが、埋土下部からは縄文時代後期末の土器片のみが出土する状況からみて、縄文時代後期末頃の竪穴住居跡であると思われる。

2号竪穴住居跡

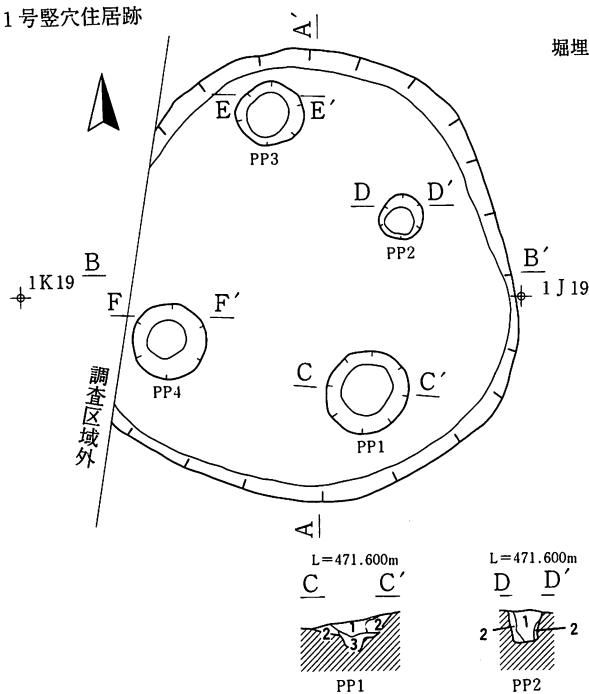
B区の南側中央に位置し、Ⅱ層下位で検出した。平面形はやや歪な楕円形を呈するが、当遺構の南側は2号堀跡に切られ南東側は12号土坑に切られているため、明確な全体像を把握することはできなかった。平面規模は、上部の南北が約460cm、東西推定値が約510cm前後である。床面の規模は、南北が約430cm、東西推定値が約470cm前後である。深さは検出面から約24～28cm程である。

竪穴住居跡としての埋土は埋土2・4層の2層に限られる。埋土7層は、当遺構を切る2号堀跡の埋土であり、埋土5・6層も後年の攪乱を受けた後に堆積した土である。1・3層はそれらの後に堆積した土であるので、竪穴住居跡本来の埋土とはいえない。埋土1層と3層は、にぶい黄褐色シルトで炭化物を粒状に含む。かなり新しい時期の堆積土と考えられる。埋土2層は当遺構埋土の主体をなすもので、暗褐色シルトを主体として、褐色シルトと黒褐色シルトをブロック状に多量に含んでいる。この層からの遺物は、縄文時代後期末の土器片（図版番号38～41）が出土している。埋土4層は褐色シルトで地山起源の黄褐色土をブロック状に多量に含んでいる。この層には遺物は入らない。埋土7層は、にぶい黄褐色シルトを主体とする土で、縄文時代後期末の土器片（図版番号37・19・20）が出土している。2号堀跡の埋土に相当する土ではあるが、2号堀跡に切られた際に当遺構埋土中の土器片が入り込んだものと思われる。

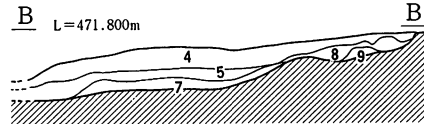
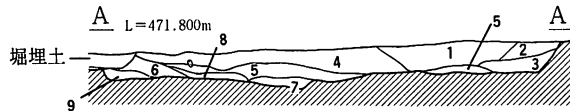
床面はほぼ平坦な面であるが、東側の斜面部付近では緩やかに傾斜する。床面から炉は検出されず、焼土等の火を使用した痕跡も確認できなかった。埋土中にも焼土や炉に関係する炭化物等はなかったため、当遺構内でも火を常時使用した可能性は低いと思われる。

当遺構に伴うと思われる柱穴は5基検出している。柱穴群は北側に偏在しており、南側に柱穴がないことは疑問である。他の遺構に切られた時に削平されたか、当遺構より新しい土坑が南側に存在しているからかもしれない。いずれにせよ、これらの柱穴がすべて同時期に存在したとすれば、この竪穴住居跡は5本柱で屋根を支えていたことになろう。平面形はいずれもやや歪な円形を呈し、直径はPP1が約40cm、PP2は約44cm、PP3は約45cm、PP4は約42cm、PP5は約42cmである。深さは約10～30cmの間でややばらつきがある。PP3は最も

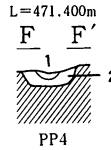
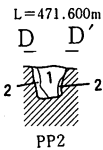
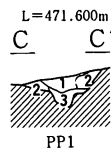
1号竪穴住居跡



- PP1
- 10YR4/4 褐色シルト。ややしまりなし、やや粘性あり。10YR5/4 において黄褐色や10YR3/3 暗褐色シルトをブロック状に多量含む。
 - 10YR5/4 において黄褐色シルト。しまりあり、やや粘性あり。
 - 10YR5/6 黄褐色土。しまりあり、やや粘性あり。10YR3/3 暗褐色シルトをブロック状に少量含む。1-3層とも小礫・炭化物は含まれない。
- PP2
- 10YR3/3 暗褐色シルト。しまりなし、やや粘性あり。10YR5/4 において黄褐色土をブロック状に少量含む。
 - 10YR3/4 暗褐色シルト。ややしまりあり、やや粘性あり。小礫を含む。

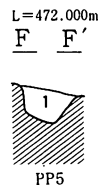
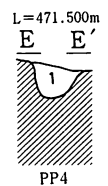
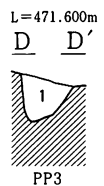
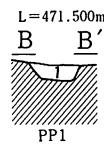
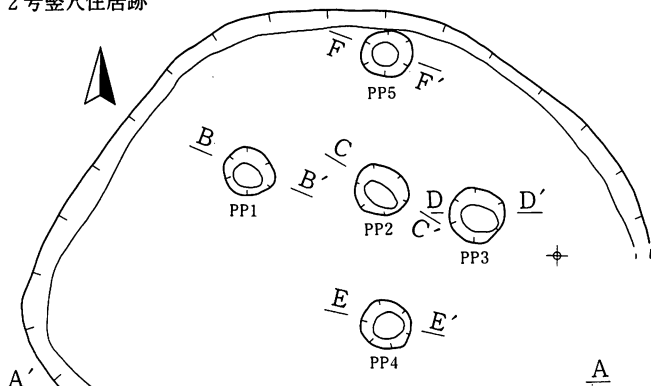


- 10YR 3/3 暗褐色シルト。しまりなし、粘性なし。炭化物を粒状に微量含む。10YR5/6 黄褐色ローム質シルトを粒状に含む。5-7cm程の角礫を含む。
- 10YR4/6 褐色ローム質シルト。しまりなし、やや粘性あり。炭化物を粒状に微量含む。10YR6/6 黄褐色ローム-小礫を少量含む。
- 10YR3/4 暗褐色シルト。しまりなし、粘性なし。10YR6/8 明黄褐色ローム-小礫を含む。
- 10YR3/4 暗褐色シルト。しまりなし、粘性あり。炭化物を粒状に多量含む。10YR5/6 黄褐色ロームを粒状に含む。縄文後期末の土器片を多量に含む。
- 10YR3/3 暗褐色シルト。しまりなし、やや粘性あり。炭化物を粒状に多量含む。10YR2/2 黒褐色シルトをブロック状に含む。
- 10YR4/4 褐色ローム質シルト。しまりなし、粘性あり。炭化物を粒状に微量含む。10YR3/3 暗褐色シルトをブロック状に含む。
- 10YR4/6 褐色ローム質シルト。ややしまりあり、粘性あり。10YR3/3 暗褐色-10YR2/2 黒褐色土を粒状に含む。10YR5/6 黄褐色ロームを粒状に少量含む。
- 10YR4/3 において黄褐色ローム質土。ややしまりあり、粘性あり。炭化物を粒状に含む。10YR5/6 黄褐色ロームをブロック状に含む。
- 10YR5/6 黄褐色ローム質土。しまりなし、粘性あり。10YR4/6 褐色シルトをブロック状に含む。



- PP3
- 10YR4/4 褐色シルト。ややしまりなし、やや粘性あり。丸い小礫を少量含む。
- PP4
- 10YR4/4 褐色シルト。ややしまりなし、やや粘性あり。10YR5/4 において黄褐色や10YR3/3 暗褐色シルトをブロック状に多量含む。
 - 10YR4/4 褐色シルト。ややしまりなし、やや粘性あり。シルトのブロックは含まれない。

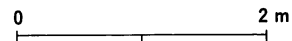
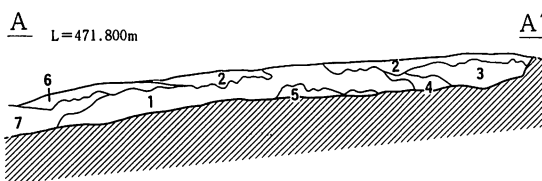
2号竪穴住居跡



- PP1-PP5
- 10YR4/6 褐色シルト。しまりなし、やや粘性あり。10YR5/6 黄褐色を小ブロック状に少量含む。小礫を少量含む。

2号竪穴住居跡

- 10YR3/3 暗褐色シルト。ややしまりあり、やや粘性あり。炭化物を粒状に少量含む。10YR4/4 褐色シルト及び10YR2/3 黒褐色シルトをブロック状に多量含む。25cm程の小礫を少量含む。
- 10YR4/3 において黄褐色シルト。しまりあり、やや粘性あり。炭化物を粒状に含む。10YR5/4 において黄褐色土をブロック状に少量含む。
- 10YR5/4 において黄褐色シルト。しまりあり、やや粘性あり。炭化物・小礫の混入は少ない。
- 10YR3/4 暗褐色シルト。しまりあり、やや粘性あり。炭化物・小礫の混入は少ない。
- 10YR4/6 褐色シルト。ややしまりなし、やや粘性あり。地山起源の10YR5/6 黄褐色土をブロック状に多量に含む。
- 10YR5/4 において黄褐色シルト。やや粘性あり。炭化物・小礫の混入は少ない。
- 10YR4/3 において黄褐色シルト。しまりなし、やや粘性あり。炭化物・小礫の混入は少ない。



第35図 1号・2号竪穴住居跡

深い柱穴であるが、緩斜面にあるために深く掘り込んでいるのだろうか。埋土は5基とも共通し、褐色シルトで黄褐色土を小ブロック状に含むものであり、明確な柱痕跡は確認できなかった。

当遺構の時期も1号竪穴住居跡同様、遺構埋土中の土器片の時期から推測する他にない。縄文時代後期末の土器片が多く出土していることから、当遺構は縄文時代後期末頃の竪穴住居跡であると思われる。

(2) 土坑

1号土坑

B区南東部の斜面部から検出した。検出面はⅡ層下部である。平面形はほぼ円形を呈し、上部の長軸は約180cm、短軸が約155cmである。底面の長軸は約45cm、短軸は約40cmである。断面形は不整形な逆台形状をなし、深さは検出面から約95cmである。

埋土は4層からなる。埋土1層は黒色シルトを主体とする埋土で自然堆積層と考えられる。2層の凹み部分に後年流入した層であり、土器片が粒状に混入している。埋土2・3層は暗褐色から褐色の粘土質の埋土であり、地山粘土をブロック状に含み粘性に富む土である。これらの層は当遺構本来の埋土と考えられ、人為的堆積の可能性が高いと思われる。埋土4層は壁の崩壊土と思われる。出土遺物はなかったが、人為堆積の土坑ということで、墓塚の可能性が考えられる。

2号土坑

B区南東隅の斜面部から検出した。検出面はⅠ層下位からⅡ層上位である。平面形は歪な円形を呈し、上部の長軸は約180cm、短軸は約150cmである。底面は長軸が約90cm前後、短軸が約60cmである。断面形は、変形のピーカー形を呈し、深さは検出面から約160cmである。

埋土1層は黒色シルトであるが角礫や暗褐色粘土質土を含んでおり、埋土2層は暗褐色シルトで、褐色粘土をブロック状に含む土である。埋土3層は黄褐色粘土質シルトを主体とする土で、10～15cm程の角礫を多量に含んでいる。埋土最低部の土であると同時に東側上部にも同質の土が存在しているが、堆積の形態に疑問が残る。当遺構の埋土上位まで、かなり地山の粘土質の土が入り込んでいるが、遺構の位置する地形や上位面からの影響も考えられるので、自然堆積層とみなすのが妥当であろう。出土遺物はなく、遺構の性格も不明である。

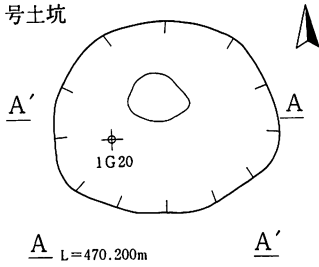
3号土坑

B区の南側の斜面から検出したが、粗掘の際にⅠ層とともに掘り上げてしまったため、埋土の状況は分からない。平面で検出できなかったのはⅠ層と当遺構埋土の性質がかなり近いものであったことを意味するかもしれない。平面形はやや歪な隅丸形状を呈するが、東側の形状は明確ではない。平面規模は、上部の東西推定約160cm、南北が約160cm程である。底面は東西が約80cm、南北が約60cmである。東側の立ち上がりは不明であるが、断面形は浅鉢状を呈すると思われる。深さは約50cm程である。出土遺物はなく、遺構の性格も不明である。

4号土坑

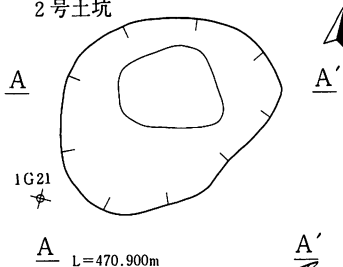
B区の南側の斜面部から検出した。検出面はⅠ層下位である。当遺構の位置する場所は斜面ということもあり、Ⅰ層の形成が発達していたようである。平面形はやや歪な円形を呈し、上部の東西は約205cm、南北

1号土坑



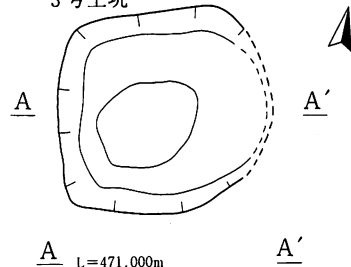
1. 10YR2/1 黒色シルト。しまりなし、粘性なし。土器片を粒状に微量含む。5-3cm程の炭化物を少量含む。黄褐色-褐色ローム質土を粒状に含む。
2. 10YR3/3 暗褐色ローム質シルト。しまりなし、やや粘性あり。炭化物を粒状に微量含む。10YR4/6 褐色ローム質土を粒-ブロック状に含む。
3. 10YR4/6 褐色ローム質土。しまりなし、粘性あり。10YR2/3 黒褐色シルトをブロック状に含む。明黄褐色系の地山ローム(角礫)を少量含む。
4. 10YR5/6 明黄褐色ローム。ややしまりなし、粘性富む。10YR4/4 褐色ローム質土をブロック状に含む。

2号土坑

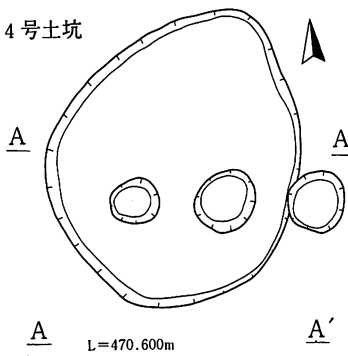


1. 10YR1.7/1 黒色シルト。さらさらでしまりなし、粘性なし。10YR3/4 暗褐色ローム質シルトをブロック状に含む。10YR6/6 明黄褐色呈する地山起源の小角礫を少量含む。
2. 10YR3/4 暗褐色シルト。ローム質土を少量含む。しまりなし、粘性なし。3-5cm程の角礫を少量含む。10YR4/6 褐色ローム質土をブロック状に含む。
3. 10YR5/6 黄褐色ローム質シルト。しまりなし、粘性あり。10-15cm程の角礫を多量に含む。10YR3/4 暗褐色シルトをブロック状に含む。

3号土坑

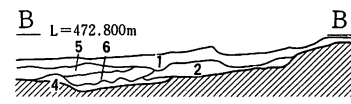
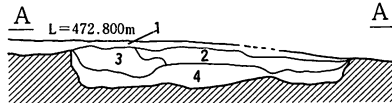
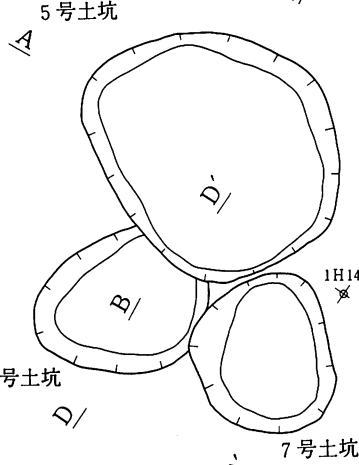


4号土坑

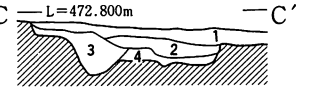


1. 10YR3/3 暗褐色シルト。しまりなし、粘性なし。10YR5/8 黄褐色シルトをブロック状に多量に含む。1cm程の角礫を少量含む。

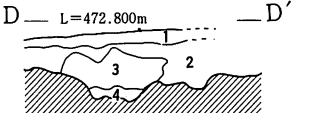
5号土坑



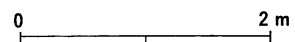
1. 10YR3/3 暗褐色シルト。しまりなし、やや粘性あり。10YR5/6 黄褐色ローム及び角礫をブロック状に含む。
2. 10YR2/2 黒褐色シルト。しまりなし、やや粘性あり。暗褐色-褐色系のローム質土をブロック状に含む。2-3cm程の礫を少量含む。
3. 10YR2/3 黒褐色ローム質シルト。しまりなし、やや粘性あり。10YR4/6 褐色シルト-ロームをブロック状に含む。
4. 10YR5/6 黄褐色ローム質土。角礫を多量に含む。10YR3/3 暗褐色シルトをブロック状に含む。
5. 10YR3/3 暗褐色シルト。ロームを含む。しまりなし、やや粘性あり。8-10cm程の角礫を含む。



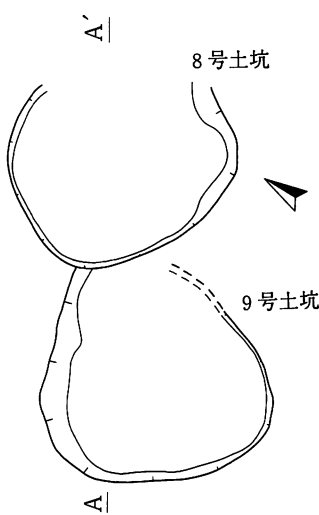
1. 10YR3/4 暗褐色シルト。ややしまりあり、やや粘性あり。0.5-1cm程の礫を少量含む。
2. 10YR2/3 黒褐色シルト。ややしまりあり、やや粘性あり。炭化物を微量含む。礫はほとんど含まれない。
3. 10YR3/1 暗褐色シルト-ローム。ややしまりなし、粘性あり。1cm以下の礫を少量含む。
4. 2.5YR4/6 オリーブ褐色シルト。砂及び風化した岩盤粒を少量含む。しまりあり、粘性なし。1-3cm程の角礫を少量含む。



1. 10YR3/4 暗褐色シルト。しまりなし、やや粘性あり。
2. 10YR3/3 暗褐色シルト。しまりなし、粘性なし。炭化物を粒状に微量含む。10YR5/6 黄褐色ロームをブロック状に含む。角礫を少量含む。
3. 10YR2/3 黒褐色シルト。しまりなし、粘性なし。角礫を少量含む。
4. 10YR5/6 黄褐色ローム質土。10-15cm程の角礫を多量に含む。10YR3/4 暗褐色土をブロック状に微量含む。



8号土坑



1. 10YR3/3 暗褐色シルト。ややしまりあり、やや粘性あり。炭化物を少量含む。1-2cm程の角礫を少量含む。
2. 10YR4/3 灰黄褐色土。しまりなし、やや粘性あり。1cm以下の小角礫及び3-5cmの角礫を少量含む。
3. 10YR2/2 黒褐色シルト-ローム。ややしまりなし、やや粘性あり。1cm程の角礫を少量含む。
4. 10YR3/4 暗褐色ローム質シルト。しまりなし、やや粘性あり。3-5cm程の角礫を少量含む。
5. 10YR4/6 褐色ローム質シルト。しまりあり、粘性あり。炭化物を少量含む。1cm以下の角礫を少量含む。
6. 10YR5/6 黄褐色シルト。しまりなし、やや粘性あり。2-3cm程の角礫を含む。

9号土坑

1H21

第36図 1号~9号土坑

が約230cmである。断面形からみると深さが約10～20cm前後とやや浅めであることからみて、遺構上部はある程度削平を受けていることが予想される。底面は比較的平坦であるが地形面に沿うように傾いている。底面の中央部から東側へ3個のピット状の穴の痕跡があった。当遺構に直接関わるかどうかはわからず、別遺構の可能性もあるが、痕跡に近い検出状況だったので同一遺構に扱った。埋土は1層のみで、暗褐色シルトを主体として、黄褐色シルトをブロック状に多量に含んでいる。浅い埋土の状況からだけでは判断が難しいが、この層位の時点では人為堆積層の可能性が高いと思われる。

5号土坑

B区の北側中央の尾根筋のやや平坦な面から検出した。検出面はI層下部である。平面形はやや歪な楕円形を呈する。上部の長軸は約230cm、短軸は約190cmである。断面形はピーカー形を呈し、深さは検出面から約30cm前後である。埋土上位は黒褐色シルトで、暗褐色～褐色を呈する粘土質土をブロック状に含み、角礫を少量含んでいる。埋土下位は黄褐色粘土を主体として、多くの角礫とブロック状の暗褐色シルトを含んでいる。出土遺物はなく、遺構の性質も不明である。

6号土坑

B区北側中央、5号土坑の南隣から検出した。検出面はI層下部である。平面形はやや歪な円形を呈するが、遺構北側を5号土坑に、遺構西側を7号土坑に切られている。平面規模は上部の東西が約120cm、南北推定値が約120cmである。断面形は不整形な逆台形状を呈する。壁の立ち上がりも明確ではない。埋土は暗褐色シルトを主体とし、炭化物や礫を少量含むものである。埋土下位は、角礫を多量に含む黄褐色の粘土質土であり、壁の崩壊土の可能性が考えられる。出土遺物はなく、遺構の性格も不明である。

7号土坑

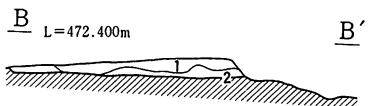
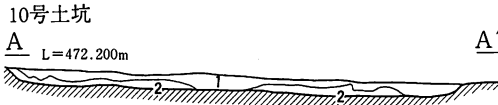
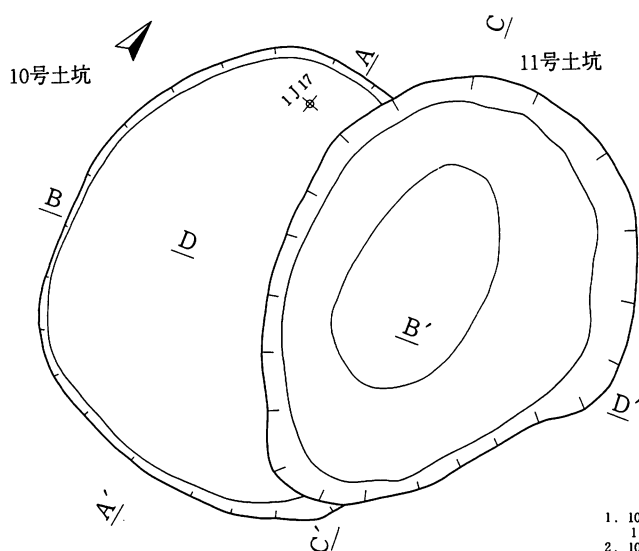
B区の北側中央、6号土坑東隣から検出した。検出面はI層下部で、平面形はやや歪な円形を呈する。平面規模は、上部の東西が約125cm、南北が約120cm程である。断面形はやや不整形な逆台形を呈し、深さは約20～40cm前後である。埋土上位は黒褐色シルトを主体としており、礫や炭化物を少量含むものである。埋土下位は角礫を含むオリーブ褐色シルトで壁の崩壊土と考えられる。出土遺物はなく、遺構の性格も不明である。

8号土坑

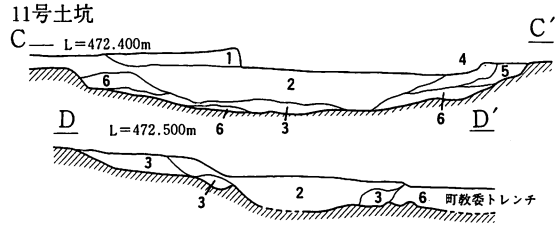
B区の南側中央の斜面部から検出した。検出面はI層下部である。平面形はほぼ円形を呈するが、東側の斜面下部分は削平を受けたと思われる、平面形は明確ではない。平面規模は上部の東西が約170cm、南北が約180cmである。断面形は浅鉢形を呈し、深さは検出面から約70cm前後である。埋土上位は暗褐色～黒褐色粘土質シルトを主体とし、角礫を少量含む。埋土中位は褐色粘土質シルトで、少量の炭化物と小礫を含んでいる。埋土最下位は角礫を少量含む黄褐色シルトである。堆積の状況からみていずれの層位も自然堆積層と思われる。出土遺物はなく、遺構の性格は不明である。

9号土坑

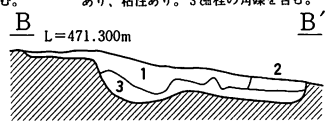
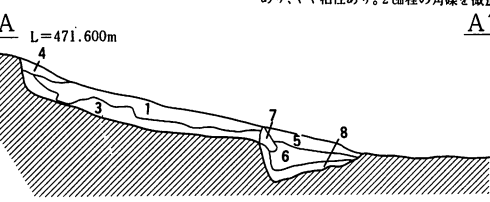
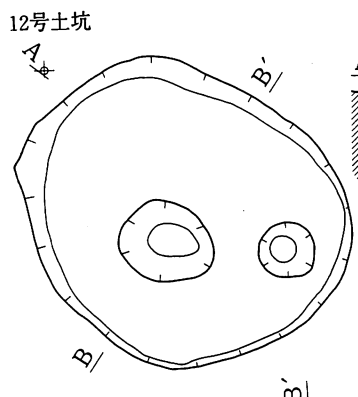
B区の南側中央の斜面部、8号土坑の南西隣から検出した。北東部分は8号土坑に切られている。平面形はやや歪な円形を呈する。上部の規模は、東西が約185cm、南北が約190cm前後である。断面形は8号土坑に



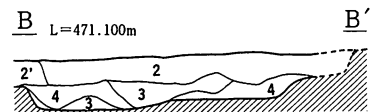
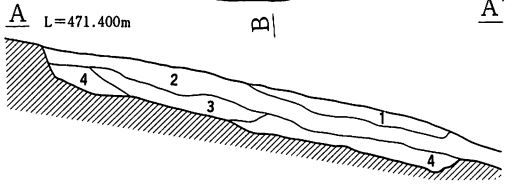
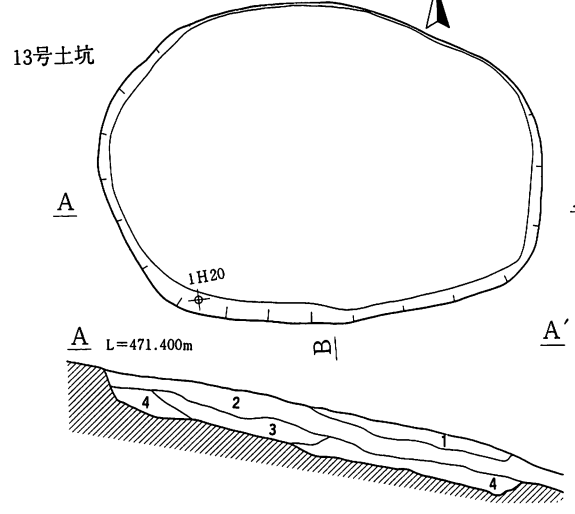
1. 10YR7/3 におい黄褐色ローム質シルト。しまりなし、粘性あり。10YR4/6 褐色シルトをブロック状に多量含む。地山起源の小礫を少量含む。
2. 10YR7/6 明黄褐色ローム。しまりあり、粘性あり。10YR4/6 褐色シルトをブロック状に少量含む。地山起源の2-5cm程の礫を少量含む。



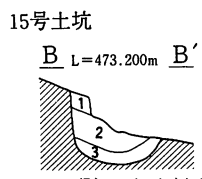
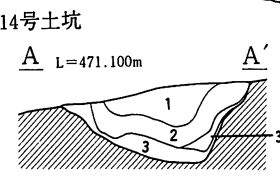
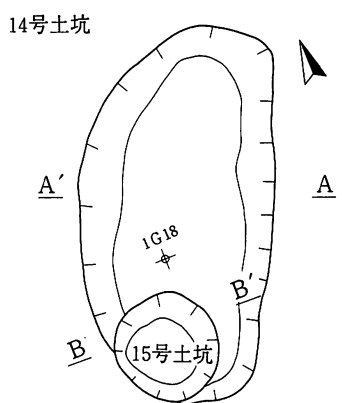
1. 10YR3/4 暗褐色シルト。しまりなし、粘性なし。1cm以下の角礫を少量含む。
2. 10YR2/1 黒色ローム質シルト。ややしまりあり、やや粘性あり。1cm以下の角礫を少量含む。
3. 10YR4/2 灰黄褐色ローム質シルト。ややしまりあり、やや粘性あり。2cm程の角礫を微量含む。
4. 10YR2/3 黒褐色シルト。ややしまりあり、粘性あり。1cm程の角礫を微量含む。
5. 10YR3/3 暗褐色シルト。ややしまりあり、粘性あり。
6. 10YR4/3 におい黄褐色シルト。しまりややあり、粘性あり。3cm程の角礫を含む。



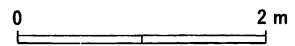
1. 10YR2/3 黒褐色ローム質シルト。しまりなし、やや粘性あり。10YR5/8 黄褐色ロームを粒状に少量含む。10YR2/1 黒色シルトをブロック状に含む。
2. 10YR2/3 黒褐色ローム質シルト。しまりなし、粘性あり。
3. 10YR3/4 暗褐色ローム質シルト。しまりなし、粘性あり。10YR5/8 黄褐色ロームをブロック状に多量含む。黄褐色ロームは地山起源で礫崩壊によるもの。
4. 10YR3/4 暗褐色シルト。ほろほろでしまりなし。腐食土起源の礫のみで、径1cmとほとんど同じ。10YR5/8 黄褐色ロームを少量含む。
5. 10YR3/4 暗褐色シルト。ほろほろでしまりなし、粘性なし。10YR4/6 褐色ローム質土をブロック状に含む。
6. 10YR3/3 暗褐色シルト。しまりなし、粘性なし。10YR5/8 黄褐色ロームを粒状に少量含む。他の混入物は微量。
7. 10YR4/6 褐色ローム質シルト。しまりなし、粘性なし。炭化物を粒状に微量含む。
8. 10YR4/4 褐色ローム質土。ややしまりあり、粘性あり。炭化物を粒状に微量含む。10YR3/4 暗褐色シルトをブロック状に含む。



1. 10YR2/4 暗褐色シルト。しまりなし、やや粘性あり。10YR4/6 褐色ローム質シルトをブロック状に含む。2-3cm程の炭化物を少量含む。
2. 10YR2/2 黒色シルト。しまりなし、粘性なし。10YR4/4 褐色ローム質シルトをブロック状に少量含む。2-3cm程の礫を少量含む。
3. 10YR2/2 黒色シルト。しまりなし、粘性なし。10YR4/4 褐色ローム質シルトをブロック状に多量含む。
4. 10YR4/4 褐色ローム質シルト。ややしまりあり、粘性あり。10YR3/3 暗褐色シルトをブロック状に多量含む。礫を少量含む。
5. 10YR5/6 黄褐色ローム。しまりなし、粘性あり。10YR3/4 暗褐色シルトをブロック状に含む。
6. 10YR5/6 明黄褐色ローム。しまりあり、粘性高む。10YR4/4 褐色ローム質シルトをブロック状に少量含む。



1. 10YR2/1 黒色シルト。しまりなし、粘性なし。10YR3/4 暗褐色ロームをブロック状に含む。
2. 10YR3/1 黒褐色シルト。しまりなし、粘性なし。10YR3/4 暗褐色ロームをブロック状に含む。
3. 10YR4/4 褐色ローム質シルト。ややしまりあり、粘性あり。10YR3/1 黒褐色シルトをブロック状に含む。小礫を少量含む。
- 3' 10YR4/4 褐色ローム質シルト。しまりあり、粘性あり。10YR3/1 黒褐色シルトをブロック状に多量混入。
1. 10YR4/4 褐色シルト。しまりなし、やや粘性あり。1cm程の角礫を少量含む。
2. 10YR4/3 におい黄褐色ローム。ややしまりあり、粘性あり。炭化物を少量含む。1cm程の角礫を少量含む。
3. 10YR4/4 褐色ローム。ややしまりあり、やや粘性あり。炭化物を微量含む。1cm程の角礫を少量含む。



第37図 10号~15号土坑

切られているため明確ではないが、状況からみて逆台形状を呈すると思われる。深さは検出面から約30cm前後である。埋土は単層で、炭化物や角礫を少量含む暗褐色シルトである。自然堆積層と思われる。出土遺物はなく、遺構の性格は不明である。

10号土坑

B区の南西部から検出した。検出面はⅡ層下部である。遺構東側は11号土坑に切られており、本来の平面形は明確ではないが、残存する形態からほぼ円形を呈すると思われる。平面規模は上部が東西推定約320cm前後、南北が約360cm程である。断面形も上部がかなり削平されており明確ではないが、平坦面から比較的緩やかに立ち上がると思われる。埋土は2層からなり、上位はにぶい黄褐色粘土質シルトで、褐色シルトをブロック状に含む。下位は明黄褐色粘土質土で褐色シルトをブロック状に含む。埋土は地山の土を主体とする人為堆積層と考えられる。住居跡の貼床とも考えられるが、遺構上部の様子がわからないので確実なことはいえない。出土遺物はなかった。

11号土坑

B区の南西部、10号土坑の東隣で検出した。遺構の中心部に1994年の紫波町教委による試掘トレンチが入っており、遺構の存在はすでに確認されていた。検出面はⅡ層下部である。平面形はやや歪な楕円形を呈し平面規模は、上部の東西が約290cm、南北が約380cmであり、底面は東西が約105cm前後で、南北が約190cm前後である。断面形は不整形な浅鉢状を呈する。

埋土は6層からなり、埋土上位は暗褐色シルトで、Ⅱ層に相当する土であり、おそらく埋土中央部の凹みに流入した土であると思われる。埋土中位は埋土の中核をなす土であり、小角礫を少量含む黒色の粘土質シルトである。この層から、弥生土器片（図版番号21・22）が出土している。埋土下位は角礫を少量含む灰黄褐色粘土質シルト～にぶい黄褐色シルトである。埋土上位～中位の土は自然堆積層であり、埋土下位は地山起源の土を含むことから、人為堆積層の可能性が考えられる。遺構の性格は不明である。

12号土坑

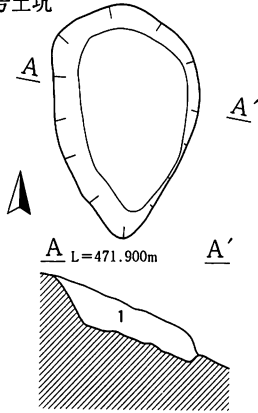
B区南東隅で検出した。検出面はⅡ層下位である。平面形はやや歪な楕円形を呈する。平面規模は上部の長軸が約280cm、短軸が約230cmである。遺構の内部に2つのピットがあり、特に東側のピットは遺構埋土を切る形になっており、当遺構より新しい柱穴状のピットと思われる。西側のピットは比較的浅いもので、埋土の状況から遺構と一体のものであると思われる。底面は斜面に沿って傾斜しており、断面形は不整形な逆台形状を呈し、深さは検出面から約25cm前後である。

埋土上位は、黒褐色粘土質シルトであり、黄褐色粘土を粒状に含む。埋土下位は、粘性に富む暗褐色粘土質シルトで黄褐色粘土をブロック状に多量に含んでいる。埋土は人為堆積によるものと思われる。出土遺物はないが、埋土の状況から墓塚の可能性が考えられる。

13号土坑

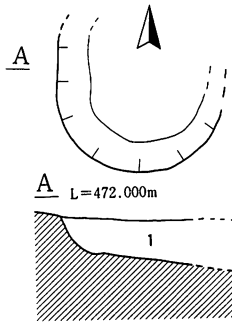
B区南東隅で検出した。基本的な検出面はⅡ層下位であるが、遺構上部は2号堀跡に切られている。平面形は歪な楕円形であり、平面規模は上部が長軸約360cm、短軸が約260cmである。底面は斜面に沿って傾斜しており、断面形は逆台形状を呈する。深さは検出面から約30～35cm前後である。埋土は5層からなるが、そ

16号土坑



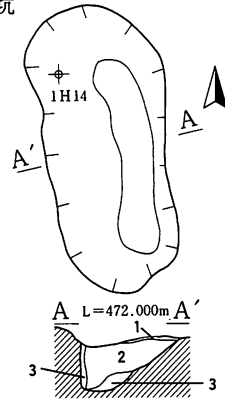
1. 10YR4/4 褐色シルト。ローム質土を含む。しまりなし、やや粘性有り。5~10cm程の角礫を多量に含む。

17号土坑



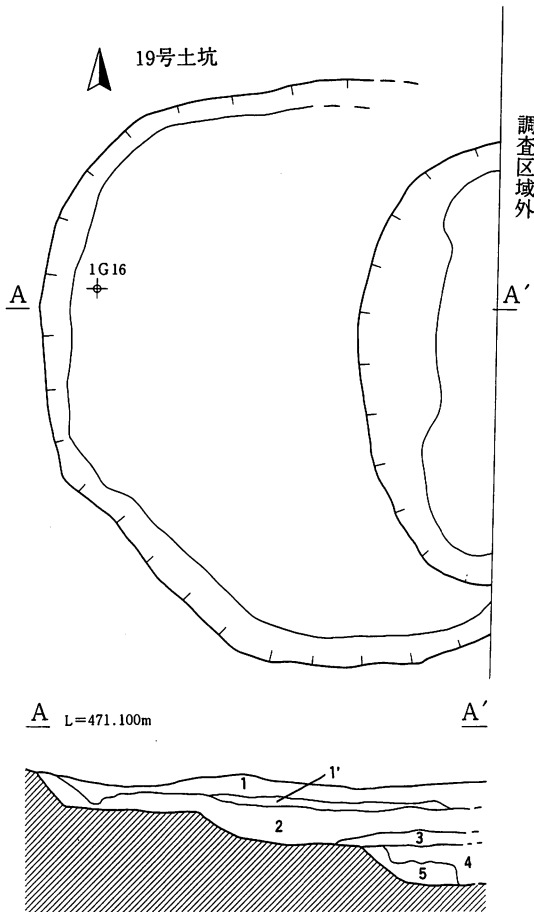
16号土坑と同様する埋土状況である。

18号土坑



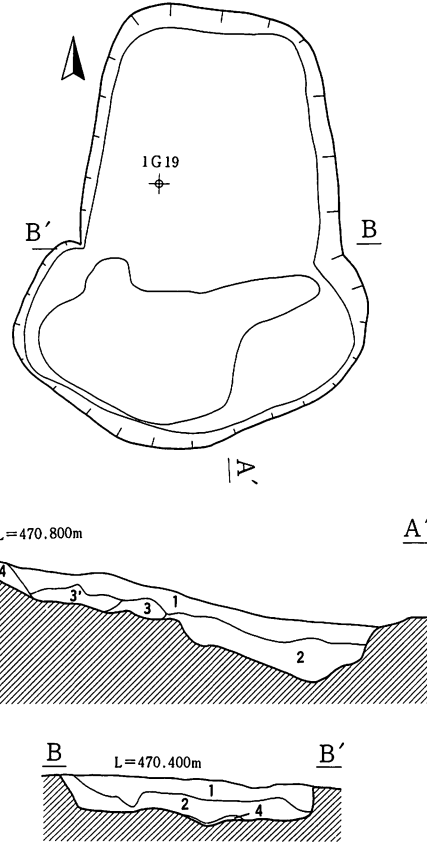
1. 10YR3/4 暗褐色シルト。しまりなし、やや粘性あり。表土2層。
2. 10YR2/1 黒色シルト。しまりなし、やや粘性あり。10YR4/6 褐色ローム質土を粒状に少量含む。
3. 10YR3/4 暗褐色ローム質シルト。しまりなし、粘性あり。地山起源の2~4cm程の角礫を多量に含む。

19号土坑



1. 10YR2/2 黒褐色腐食土。旧表土であり、木葉を多量に含む。
- 1'. 10YR2/3 黒褐色腐食土。表土2層。ぼろぼろでしまりなし。5~10cm程の角礫を含む。
3. 10YR3/3 暗褐色シルト。しまりなし、やや粘性あり。10YR2/3 黒褐色シルトをブロック状に含む。5~8cm程の角礫を少量含む。
4. 10YR2/3 黒褐色シルト。しまりなし、粘性なし。10YR5/6 黄褐色ロームを粒状に含む。2~4cm程の角礫を少量含む。
5. 10YR5/6 黄褐色ローム。地山起源の土で、粘性に富む。10YR3/4 暗褐色シルトをブロック状に少量含む。7~12cm程の角礫を多量に含む。

20号土坑



1. 10YR3/3 暗褐色シルト。しまりなし、やや粘性あり。炭化物を粒状に微量含む。10YR5/6 黄褐色ローム質土をブロック状に少量含む。
 2. 10YR5/6 黄褐色ローム質土。しまりなし、粘性あり。炭化物を極小粒状に微量含む。10YR3/4 暗褐色シルトをブロック状に多量含む。黄褐色の2~3cm程の隙を少量含む。
 3. 10YR4/6 褐色ローム質土。しまりなし、粘性あり。10YR3/3 暗褐色土をブロック状に含む。
 - 3'. 10YR4/6 褐色ローム質土。しまりあり、粘性富む。10YR3/3 暗褐色土を少量含む。
 4. 10YR4/6 褐色ローム質土。しまりなし、粘性あり。10YR3/3 暗褐色土をブロック状に少量含む。
- ※ 1~3層は人為堆積の可能性ある。黒色シルトは埋土にならない。

0 2 m

第38図 16号~20号土坑

の性質から埋土上位と下位の2つに分けられる。埋土上位は、暗褐色～黒色シルトで褐色粘土質土をブロック状に含んでいる。埋土下位は、粘性のある褐色～黄褐色の粘土質系の土で暗褐色シルトをブロック状に含むものである。埋土上位は攪乱等により動いている可能性が高く、埋土下位は人為堆積層である。出土遺物はないが、埋土の状況から墓墳の可能性が考えられる。

14号土坑

B区の南東側で検出した。遺構の南西側は15号土坑に切られている。検出面はI層下位である。平面形はやや細長い楕円形を呈し、平面規模は上部の長軸が約305cm、短軸が約160cm前後である。断面形は不整形な浅鉢状を呈し、深さは検出面から約60cm前後である。埋土は3層からなり、埋土上位は黒色～黒褐色シルトで暗褐色粘土をブロック状に含むものである。下位は、粘性のある褐色粘土質シルトで、黒褐色シルトをブロック状に含むものである。埋土上位は自然堆積層であるが、埋土下位は人為堆積層の可能性が考えられる。出土遺物はないが、埋土の状況とその形態からみて墓墳の可能性が考えられる。

15号土坑

B区の南東側で検出した。14号土坑の南西隣に位置しており、14号土坑を切る形になっている。平面形は円形を呈しており、平面規模は上部が東西約85cm、南北約85cmである。底面は東西が約50cm、南北が約55cmである。断面形は底が丸いピーカー形を呈し、深さは検出面から約55cm前後である。埋土は3層からなり、埋土上位は褐色シルトであり小角礫を少量含んでいる。埋土中位も粘性のある土であり、にぶい黄褐色粘土で、炭化物を少量含む。埋土下位は粘性のある褐色粘土質土で、黒褐色シルトをブロック状に含んでいる。出土遺物はなく、遺構の性格は不明である。

16号土坑

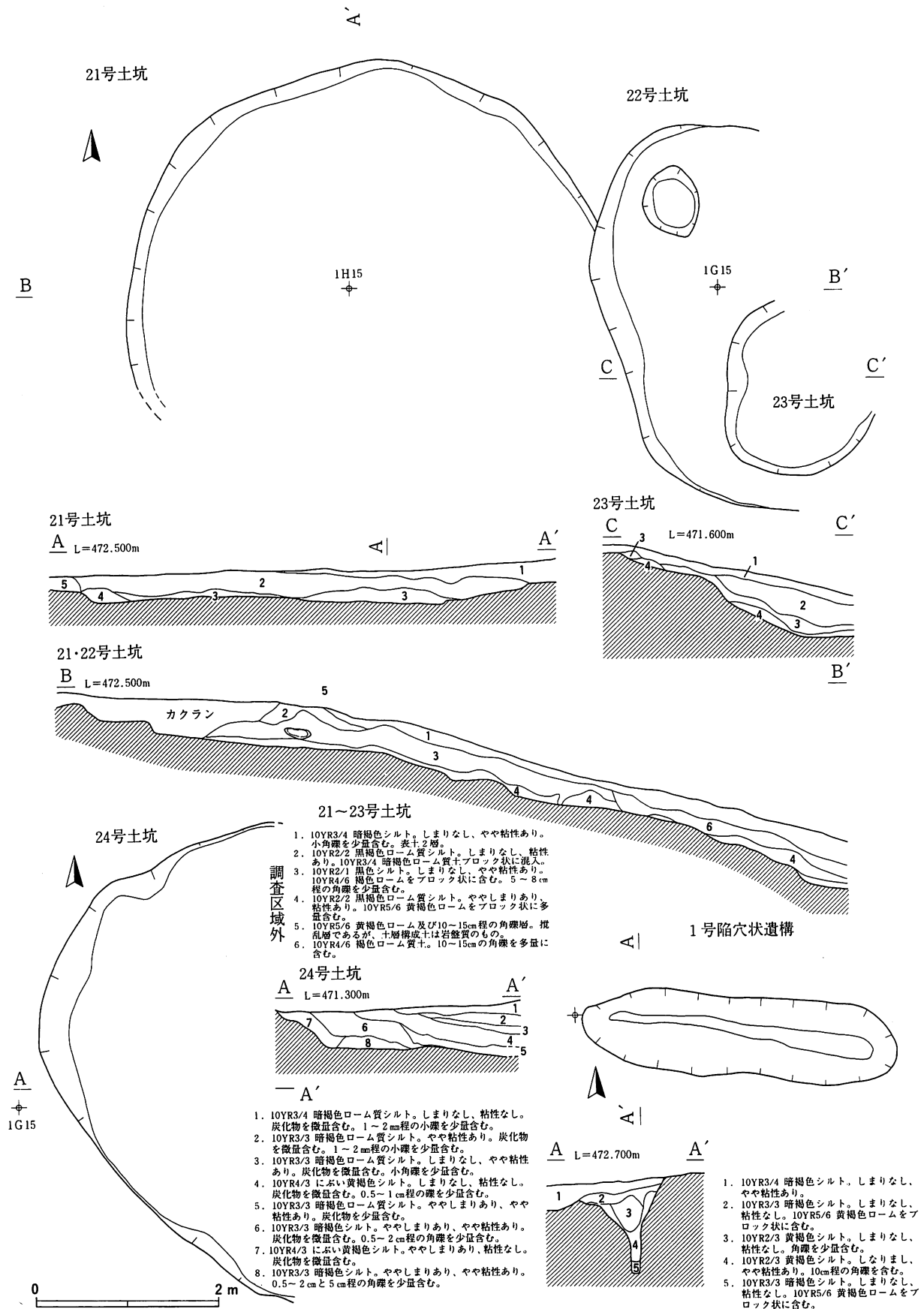
B区の東側中央寄りに位置する。検出面はI層下位である。平面形はやや歪な卵形を呈しており、平面規模は上部が長軸で約185cm、短軸で約120cm前後である。床面は地形に沿って傾斜している。断面形は不整形な逆台形状を呈し、深さは検出面から約25～30cm前後である。埋土は単層で、粘土質土を含む褐色シルトであり、中型の角礫を多量に含んでいる。埋土は自然堆積によるものと思われる。出土遺物はなく、遺構の性格は不明である。

17号土坑

B区の東側中央寄りに位置する。検出面はI層下位からIII層上位と思われる。遺構の北側は1号陥穴状遺構があったため、壁の立ち上がりが分からなかった。平面形は楕円形を呈すると思われるが、更に北に延びていく可能性も考えられる。平面規模は上部の東西が約135cm、南北の推定値が約150cmである。断面形は立ち上がりがやや内湾する形状で、底面は地形に沿って傾斜する。深さは約30～35cm前後である。埋土の状況は、表土と共に掘り上げてしまったので明確な判断はできないが、周囲の遺構の状況からみて、褐色系のシルトを主体とする埋土であり自然堆積によるものと思われる。

18号土坑

B区西側中央寄りに位置する。検出面はI層下位である。平面形は溝状を呈するもので、上部の長軸は約



第39図 21号~24号土坑、1号陥穴状遺構

230cm、短軸が約90～100cm前後である。断面形は不整形な逆三角形を呈し、深さは検出面から約40cm前後である。埋土は2層からなり、埋土の主体は、褐色粘土質土を粒状に少量含む黒色シルトである。出土遺物はなく、遺構の性格は不明である。

19号土坑

B区の東側中央部で検出した。検出面はI層下位からII層下位である。遺構の1/4程が調査区外であるが平面形はやや歪な円形を呈する。平面規模は、上部の南北が約475cm、東西の推定値約500cm前後である。遺構内の東側に段があり、立ち上がりが見えるので、当遺構より古い遺構が存在する可能性が考えられたがその延長は調査区外に出てしまっており、確実なことはいえないので同一遺構とした。断面形は不整形であり、斜面低位にいくに従い深くなる傾向にあるが、調査区外東側の立ち上がりはどうなっているかはわからない。

埋土は暗褐色シルトを主体とするもので、黒褐色シルトをブロック状に含む土である。埋土下位は、東側の一段低い部分のものであり、黒褐色シルトを主体とし、黄褐色粘土を粒状に含む。最下層は地山起源の黄褐色粘土で、暗褐色シルトをブロック状に少量含むものである。埋土全般にいえることは、中型の角礫を少量含むことである。出土遺物はなく、遺構の性格は不明である。

20号土坑

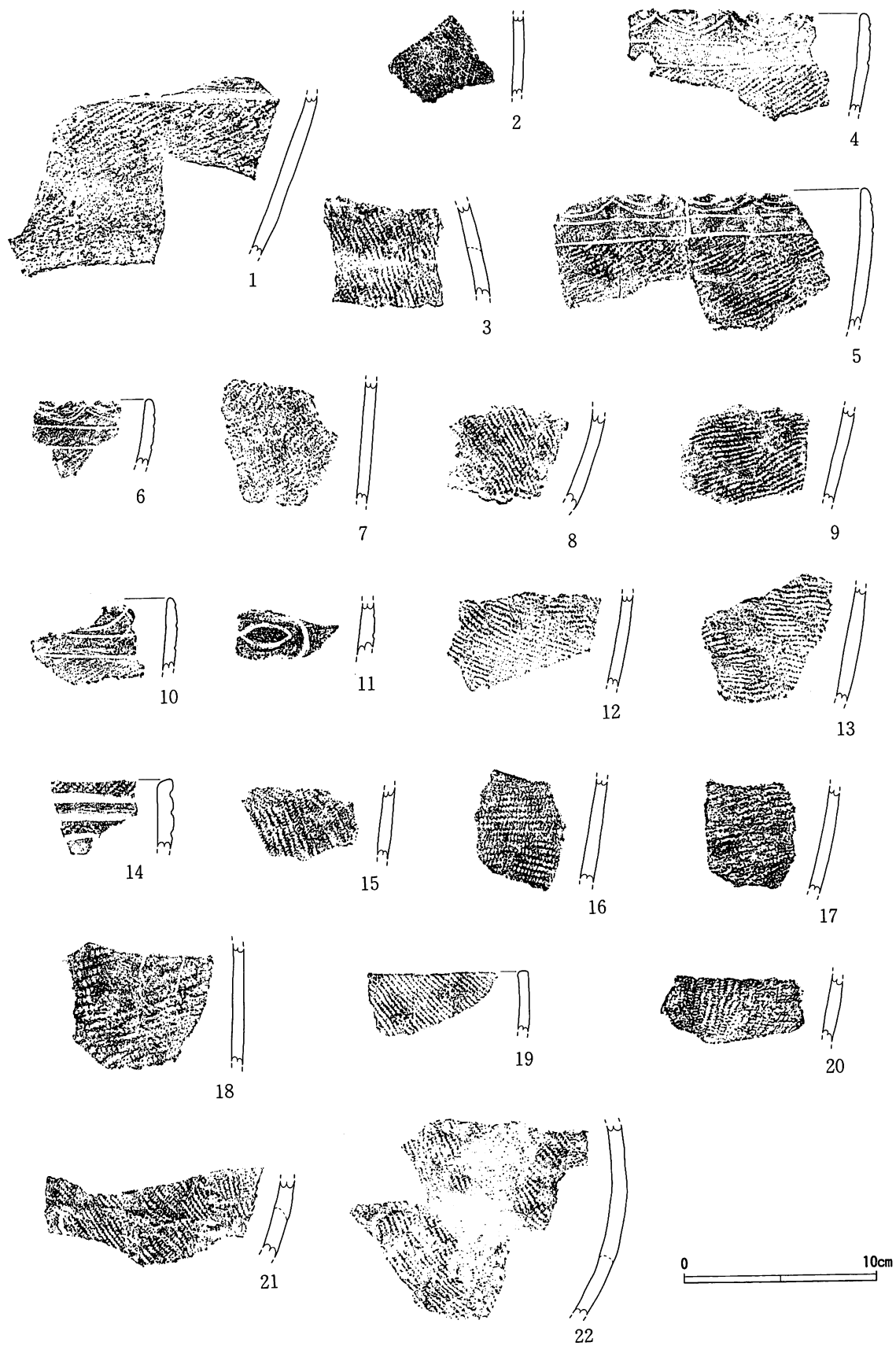
B区の南東部の斜面で検出した。検出面はI層下位ないしII層下位である。平面形は不整形で、北側が隅丸長方形で南側は楕円形状を呈する。平面規模は、上部の東西が約280cm、南北は約360cm程である。断面形も不整形であるが、東西面では逆台形状を呈し、南北面では地形面に沿って傾斜している。埋土上位は暗褐色シルトで、黄褐色粘土質土をブロック状に含んでいる。埋土下位は、北側が褐色粘土質土で暗褐色土をブロック状に含み、南側は黄褐色粘土質土でブロック状の暗褐色シルトと炭化物粒を含んでいる。出土遺物はなく、遺構の性格は不明である。

21号土坑

B区の中央部で検出した。検出面はI層下位である。平面形は本来的にはほぼ円形を呈すると思われるが、南半分は風倒木等による攪乱で壁の立ち上がりが確認できなかった。また遺構東側は22号土坑に切られている。平面規模は、上部の東西推定約520cm前後、南北推定約500cm前後である。断面形は南北方向は緩やかに立ち上がる。東西方向では、地形面に沿って傾斜しており、西側の立ち上がりは風倒木によって壊されている。深さは検出面から約30～45cm前後である。埋土の状況は、埋土上位は黒褐色の粘土質シルトでブロック状の暗褐色粘土質土を含んでいる。埋土下位は黒色シルトであり、ブロック状の褐色粘土を含んでいる。遺構埋土全般的に中型～小型の角礫を少量含んでいる。出土遺物はなく、遺構の性質も不明である。

22号土坑

B区の中央部の東側で検出した。検出面はI層下位からII層下位である。平面形は不整形な楕円形か隅丸形状である。遺構の東半分は調査区外に出ているが、周囲の壁も希薄になるので、失われているか元々存在しなかったのかもしれない。遺構内の北西側に円形を呈するピットがあり、これは遺構に伴うものと思われる。平面規模は、上部の南北が約420cm前後であり、東西推定値は約400cm前後と思われる。断面形は、不



第40图 山屋館跡B区出土遺物

整形であるが浅鉢状に緩やかに立ち上がる。深さは約20～30cm前後である。埋土は、上位が角礫を多量に含む褐色粘土であり、下位はブロック状の黄褐色粘土を含む黒褐色粘土質シルトである。出土遺物はなく、遺構の性格は不明である。

2 3号土坑

B区の中央部の東側、22号土坑内で検出した。検出面は22号土坑埋土中である。平面形は不整形な楕円形を呈するが、遺構東側は調査区外に出ている。平面規模は上部の南北が約180cm、東西の推定値は約160cm程である。断面形は内湾しながら緩やかに立ち上がる。深さは22号土坑の検出面から約60cm前後である。

埋土は、上位が褐色粘土質土でやや大きめの角礫を含んでいる。埋土下位は黒褐色～暗褐色シルトでブロック状の黄褐色粘土と小角礫と炭化物を少量含んでいる。出土遺物はなく、遺構の性格は不明である。

2 4号土坑

B区の中央部東側の斜面で検出した。検出面はⅠ層下位からⅡ層下位である。遺構の東半分は調査区外に出ている。平面形はほぼ円形を呈すると思われる。平面規模は、上部の南北が約530cm前後で、東西推定値は約550cm前後である。断面形は、地形面に沿って若干傾斜しているが、逆台形状を呈する。深さは検出面から約40～45cm前後である。埋土上～中位は、暗褐色シルト～粘土質シルトで炭化物・角礫を少量含んでいる。いずれも、自然堆積であると思われる。埋土下位は、にぶい黄褐色シルト～暗褐色シルトで炭化物・角礫を少量含んでいる。出土遺物はなく、遺構の性格は不明である。

(3) 陥穴状遺構

1号陥穴状遺構

B区中央部の尾根上で検出した。検出面はⅠ層下位からⅡ層下位である。平面形は溝状を呈し、長軸はほぼ東西方向であり、連続する尾根を切る形で構築されている。平面規模は、上部の長軸が約350cm、短軸は約80～90cm前後であり、底面は長軸が約290cm、短軸が約10cmである。埋土上位は黄褐色シルトをブロック状に含む暗褐色シルトである。埋土中位は、黄褐色シルトで角礫を含むものである。地山起源の土であり、上部の壁の崩壊土と思われる。埋土最下位は、暗褐色シルトで黄褐色粘土をブロック状に含んでいる。埋土の形成は自然堆積によるものと思われる。

(4) 出土遺物について

山屋館跡の出土遺物は、中世前期の館跡と想定されるA区からは検出されず、B区の各遺構内及びⅠ・Ⅱ層からである。従って掲載している出土遺物は、B区における出土遺物のことである。出土遺物は、縄文時代後期末の土器片と、弥生時代終末期の土器片のみであり、器形を復元できる土器はなくすべて破片である。また遺構内及びⅠ・Ⅱ層出土の遺物のほとんどはB区南側付近に集中していた。

①縄文土器

縄文後期末（大洞B1〔古〕式以前）の時期が想定される土器片は数十個程出土しているが、その大半は磨耗の進んだ小片であり、地文も明確でないものが多い。掲載したのは出土した土器の一部であるが、それらは遺構内出土のもの、口縁部や比較的破片の大きいもの、接合できたものである。出土した土器片はす

べて深鉢型土器の破片と思われる。図版番号24・25・27～36は、1号竪穴住居跡の埋土中から出土した。図版番号27～29・33は深鉢の口縁部であり、縄文時代後期末の特徴を有するものである。特に図版番号27と28は、出土位置・胎土・焼成・製作技法から同一個体の可能性がある。また図版番号28には二次焼成によると思われる色調の変化がみられる。図版番号37～43は2号竪穴住居跡の埋土中から出土した土器片である。42は深鉢の口縁部であるが、波状の口縁ではなく平縁であり、図版番号27～29と比較して胎土・焼成から粗製土器の範疇に入ると思われる。

図版番号27～29・33は、ほぼ同一のタイプの土器である。従来、大洞B式（縄文晩期前葉）期の範疇で考えられてきた型式であるが、金子1995により、大洞B1〔古〕式以前の深鉢形土器と位置づけられた。金子1995の分類によれば、口縁部突起のⅡ群B類に相当するものと思われる。後期後半に位置づけられるいわゆるA突起であり、その突起の下部には横位の平行沈線がめぐり、その上位にC字状を両側から挟み込むような三叉文が施される。口縁端部にはC字状文が連続して配され、ミガキが施される。27では平行沈線に円形の穿孔がある。胴部には縦位のL-Rの地文が施される。口縁部はくびれることがなく直立気味であり、小波状を呈している。おそらく、その他の地文のみの縄文土器片のいくつかはこのような特徴の口縁部を有する深鉢形土器の胴部から下の部分であると思われる。このタイプの土器は田柄貝塚第Ⅱ-2層出土の深鉢形土器に類似している。宮城県教育委員会1985では、それらを第Ⅷ群土器とし縄文時代晩期初葉の時期（大洞B2式期）を想定している。図版番号34は胴部上部から口縁部の土器片であるが、磨消の後に入組三叉文を施したものである。

②弥生土器

図版番号26・44・45は、小田野1987による弥生式土器編年のV期に相当する土器片と思われる。V期相当の土器とは、赤穴式と呼ばれる一群であり、弥生時代終末期に位置づけられている。小田野1987があげるV期の土器の特徴は、退化した交互刺突文と羽状捺糸文、口縁部、頸部あるいは底部付近でクロスしたり、縦走する捺糸文・付加縄文が施されること等である。山屋館跡の土器片が、以上の特徴に必ずしも相当するとはいえないが、小田野1987で取り上げている赤穴洞窟の土器の中で、同一原体を回転方向を変えて羽状に施文する技法と近似すると思われる。器種としては甕形土器の胴部の破片であると思われる。器面は研磨が施された後、縦位あるいは横位の縄文が施される。赤褐色を呈し、硬質な土器である。

なお掲載遺物の出土遺構と層位は次の通りである。図版番号24～36が1号竪穴住居跡（埋土4層24～26・28～29・33～36、埋土5層30～32）、図版番号37～43が2号竪穴住居跡（埋土2層38～41・埋土7層37・42～43）、図版番号44～45が11号土坑埋土中からである。

VI. まとめと考察

1. 山屋館経塚の経塚状遺構について

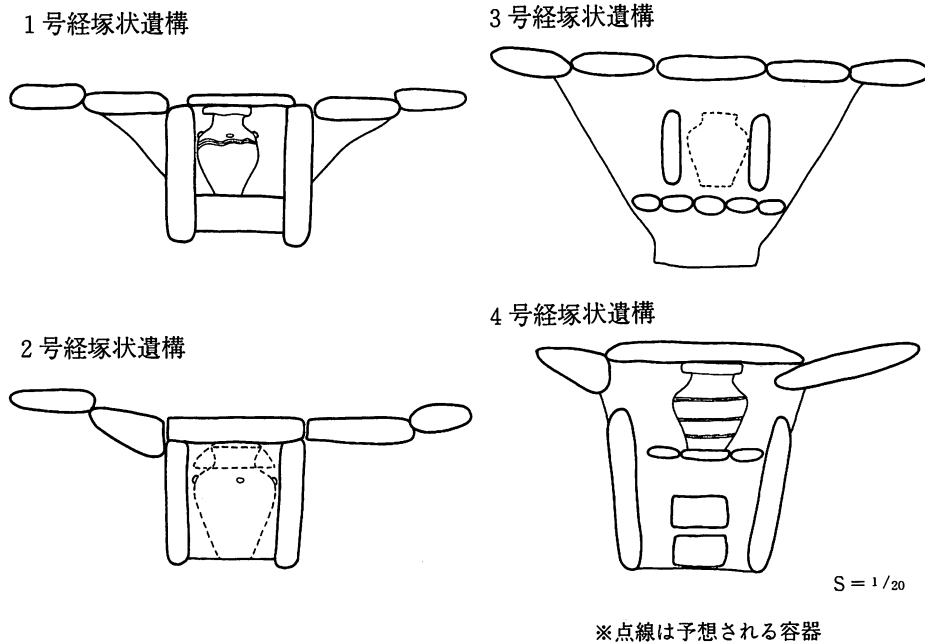
今回の調査で山屋館経塚から検出された4基の「経塚状遺構」は、それぞれ若干の形態は異なるものの、構造的にはほぼ同一といえる性質を有していると思われる。それらは近接し連なるように構築されており、積石等を4基が共有する形になっている。出土した遺物の編年観からみて、4基の遺構が構築された時期はそれほどの時間差をもたないと推測できる。それらから山屋館経塚の各遺構は、同じような時期に相次いで造られた、互いに類似する性質の遺構であると考えた。4基の遺構の共通する構造とは、単純化すれば地上部に積石によるマウンドがあり、その地下部には石槨部があることであり、石槨部は蓋石と側石・底石から成立していることである(2号経塚状遺構においては底石は省略されたと判断する)。石槨部周囲の石組は石槨部とその内部の埋納物を保護する施設と考えられる。

検出された4基の遺構の内、1号～3号経塚状遺構の3基は盗掘を受けていたが、須恵器系波状文四耳壺と銅板で縁取りした木箱の一部が出土している。未盗掘の4号経塚状遺構からは常滑産三筋文壺が出土している。出土した2つの陶製壺の年代から、4基の遺構はいずれも12世紀頃の遺構と推定し、この時代全国的に隆盛したとされる「埋経の経塚」の可能性が高いと推測した。検出された遺構は、これまで全国各地で発見された12世紀頃の経塚の石組みの構造に類似していると思われる。特に奈良博1985『経塚遺宝』では、経塚の構造概念図を提示しており、その構造は、底石・側石・蓋石からなる小石室を造り、その内部に教巻・経筒・外容器等を埋納し、その上部に積石があり更に葺石がのせられるというものである。これまでの事例から、小石室や積石等の在り方は差異はあるにしても、基本的な構造は同一であると思われる。

「埋経の経塚」とは、ある目的をもって教典を土中に埋納した場所のことである。遺構の形態以上に重要なのは教典埋納の事実の有無であるが、結局教典の存在を確認することはできなかった。3基は盗掘のため失われたと解釈できるかもしれないが、4号経塚状遺構は全くの未盗掘であったにもかかわらず、壺内部には経巻類は存在しなかった。埋納を目的とした教典は、12世紀頃は紙本経・瓦経の2つの形態をとるといわれる。これまでの事例では紙本経が多いが、この場合腐食のため八百年以上の時を経て残存することは稀である。教典存在の有無は、経巻の直接の容器であることの多い銅製経筒の存在で推測される。同時代の類似する遺構に火葬墓があり、石組みに火葬骨を入れた蔵骨器が出土する。教典の存在を推測できなければ、山屋館経塚の遺構は墳墓と推測することも可能である。まとめとして検出された遺構の性格を検討してみる。

(1) 4基の経塚状遺構の属性

検出された4基の経塚状遺構のうち3基は盗掘を受け石槨部の一部が破壊されていた。そこで遺構本来の状況を推定し、より抽象化した復元模式図を考えた(第49図参照)。1号経塚状遺構については、長方形のおそらく面取りを行った蓋石が置かれていたと思われる。但し側石がこの蓋石を支える構造とすれば、蓋石と波状文四耳壺の口縁とは間が空いてしまう。4号経塚状遺構同様、壺専用の小さなもう一枚の蓋石があったと思われる。あるいは何らかの陶製の蓋(例えば須恵器系の片口鉢等)が被せられていたかもしれない。2号経塚状遺構は、四方に大きく偏平な側石が立てられているのが特徴で、その代わり底石は省略されている。蓋石は大きな一枚の石である(すでに第19図で平面は復元している)。蓋石は4個の大きな側石で支えるもので、この蓋石も内部に存在していたであろう陶製の壺甕類の直接の蓋石と考えるのは困難である。石



第41図 経塚状遺構模式図

槨内部の容量は4基中最も大きいので、あるいは陶製の壺甕類と蓋にする片口鉢類の組み合わせで埋納されていたのかもしれない。3号経塚状遺構については、最も攪乱が大きく構造も複雑だったため、復元想定にはかなり憶測が働いているが、状況からみてこの遺構も本来的に四方を囲む側石が存在したと思われる。玉石敷状の底石は存在したが、それらは必ずしも有機的に結びついているわけではないようである。

積石に関しては、4基ともほぼ同一の性質をもつ石（周辺の山石と思われる）を使用しており、古い積石を新しく構築することになった遺構の積石に流用していることからみても、あるいは石の形状や種類、石の使用の在り方からみてもほとんど差異はない、といってよいだろう。異なるのは、組石の存在の有無と石槨部の具体的差異であろう。

4基の経塚状遺構の属性を①～⑥に分類して類型化してみる。項目は次の通りである。

- | | |
|---|---|
| <p>①組石</p> <p>a 組石のないもの</p> <p>b 組石のあるもの</p> <p>②蓋石</p> <p>a 蓋石が複数であるもの</p> <p>b 蓋石が一枚であるもの</p> <p>③側石</p> <p>a 側石が不明確であるもの</p> <p>b 側石が明確であるもの</p> | <p>④底石</p> <p>a 底石が玉石敷状のもの</p> <p>b 底石が一枚の石であるもの</p> <p>c 底石がないもの</p> <p>⑤蓋石と側石</p> <p>a 蓋石を側石が支えないもの</p> <p>b 蓋石を側石が直接支えるもの</p> <p>⑥石槨部の断面形</p> <p>a 深鉢形</p> <p>b 浅いすり鉢形</p> |
|---|---|

これらの類型を4基の経塚状遺構に当てはめると次のようになる。

- 1号経塚状遺構 ① b. ② b ? . ③ b. ④ b. ⑤ b ? . ⑥ b

2号経塚状遺構	① b.	② b.	③ b.	④ c.	⑤ b.	⑥ b
3号経塚状遺構	① a.	② a.	③ a.	④ a.	⑤ a.	⑥ a
4号経塚状遺構	① a.	② a.	③ a.	④ a.	⑤ a.	⑥ a

以上のことから4基の経塚状遺構は、その形式的属性から2つの種類にタイプングできるのではなかろうか。即ち1号・2号経塚状遺構のタイプ（Ⅰ型式）と3号・4号経塚状遺構のタイプ（Ⅱ型式）である。遺構の切り合い関係からみてⅠ型式が古いタイプで、Ⅱ型式が新しいタイプであるといえるが、それは単にⅠ型式からⅡ型式へ、時代の推移により変化するものという意味ではない。また経塚状遺構の平面的な在り方を検討するならば、必ずしも4基の遺構が一行に連なっているのではないことがわかる。前述のⅠ型式とⅡ型式の遺構がそれぞれ跨ぐように構築されているのであり、3号・4号経塚状遺構、1号・2号経塚状遺構がそれぞれ共通する軸線にあり、両者は同じ軸線にあるが並行していると考えられる。

3号・4号経塚状遺構と1号・2号経塚状遺構は、ほぼ同じ場所に在りながら形式的に差異が大きい。それらの差異の源泉は、造営時期の違いを越えて、造営者とその意思あるいは造営法の系譜の差異、宗派や修験の違い等が考えられる。その源泉については、後に若干触れることにする。

(2)山屋館経塚の造営時期について

① 4号経塚状遺構の三筋文壺の年代について

常滑窯産の陶器については、赤羽一郎・中野晴久両氏による詳細な編年（赤羽・中野1995）があるが、三筋文壺については触れられていない。それは三筋文壺の変化に富んだ口縁部などにより、一概に型式分類できないことが大きな障害になっているようである。中野1990は、三筋文が櫛目文→複線文→単線文へと12世紀中に変化するとし、比較的大型の櫛目文三筋文壺を最も古い段階の三筋文壺と位置づけている。特に中野氏は椎ノ木古窯出土の三筋文壺を常滑1 b期の典型としており（第43図4）、中野氏のご教示によれば当該壺もその時期に相当する製品であるという。なお常滑編年では当該壺相当の1 b期の年代幅を1130～1150年に位置づけている。このタイプの三筋文壺は、周辺の遺跡では、同じ紫波町の新山神社から出土しており（第43図1）、出土状況ははっきりしないが、経塚出土の壺であるとする見方がある（『紫波町誌』）。必ずしも共伴関係にあるとはいえないが鏡も出土しており、古代寺院の存在の可能性やその立地条件から新山神社の三筋文壺は、経塚出土の遺物である可能性が考えられる。

一方、このような中野氏の見解に対し、八重樫1995a は若干の疑問を投げかけている。八重樫氏は、平泉から出土した櫛目文三筋文壺は、12世紀第4四半期まで下る遺構からの遺物であり、半世紀も使用期間があることが釈然しないとし、むしろ壺の器壁の厚さに注目し、厚手の肩の張らない卵形の壺を1 b期の製品ではないかとしている。いずれにせよ1 b期の三筋文壺については議論の分かれる所があり確たることはいえないものの、当該壺が三筋文壺の中でも古い手に属するものであり、12世紀第2四半期の比較的新しい時期少なくとも12世紀中葉頃のものとして推定できるだろう。

次に岩手県内の1 b期の常滑産陶器の出土状況を見てみたい。12世紀において平泉は常滑焼きの最大の消費地といわれる。藤原秀衡の居館とみられる柳之御所遺跡から大量の常滑産陶器片が出土しているのを始めとして、最近調査の進む志羅山遺跡・泉屋遺跡からも多量の出土をみている。常滑焼きの破片は平泉のほぼ全域から出土しているといっていよい。それらのほとんどが12世紀後半代のものであるが、1 b期の陶器片も少数だが出土事例が報告されている。八重樫1995a によれば、1 b期の甕は柳之御所遺跡・志羅山遺跡・花立Ⅰ・衣関遺跡から出土しているが、特に12世紀後半の遺跡である柳之御所遺跡においては、2期の常滑

焼きが主体であり2期に比べると1b期の製品は圧倒的に少数であるという。菅野1994は文献史学の立場から藤原基成の陸奥守補任を契機として大量の東海系陶器が平泉に流入したとし、その始まりの時期を1140～1150年頃としている。平泉における常滑産陶器の出土状況は、菅野成寛氏の説を裏付けているといえるだろう。そして当該壺は、東海系陶器がこの地域に搬入されるようになった、初期段階の製品ともいえるのではなかろうか。

② 1号経塚状遺構の波状文四耳壺の年代について

波状文四耳壺は、いわゆる須恵器系の中世陶器と考えられる。櫛目文による波状文が施される四耳壺は、珠洲産あるいは珠洲系陶器の顕著な特色となっており、胎土その他の製作技法からみて当該壺を珠洲産あるいは珠洲系の窯の製品と推定することができる。吉岡1994によれば、珠洲産陶器と珠洲系陶器の識別の観点として、①口縁部の作工と形姿、叩き原体、底部糸切り技法（回転・静止）、②加飾法の有無、片口鉢卸し目の施入技法の一部と加飾法の2点を挙げており、判別の困難な個体も少なくないとしている。当該壺の口縁部は打ち欠かれているため口縁部の作工については不明ではあるが、形姿・底部静止糸切り・波状文その他の技法の様相からみて、珠洲窯産の製品というよりは珠洲系の窯の製品である可能性が高いと思われる。いわゆる珠洲系陶器とは、基本的に日本海側の地域における各窯で、珠洲窯の製作技法に強く影響を受けて成立した製品であると考えられている。

日本海側に位置する珠洲系窯で現在確認されている窯跡は、①越後・北越窯（新潟県北蒲原郡豊浦町本田北沢窯及び同郡笹神村笹岡背中灸窯）、②羽後・大畑窯（秋田県仙北郡南外村大畑）、③羽後・駒形窯（秋田県山本郡二ツ井町駒形通称エヒバチ長根）の3箇所である。これらの珠洲系窯では、12世紀中葉前後から13世紀中葉頃にかけて須恵器系陶器の生産が行われたとされ、珠洲第Ⅰ期に相当するのが③、珠洲第Ⅱ期に相当するのは①・②である。しかし未だ見ぬ窯跡の存在も予想されており、吉岡1994は経容器類の分布状況からすると今後、雄物川流域（横手盆地）、最上川上・下流域（山形盆地・庄内平野）で窯跡の追認が見込まれるとしている。いずれにせよ、珠洲系陶器を生産した窯跡の全貌が明らかではない現時点では、当該壺が①～③の窯の製品なのか、あるいはまだ見ぬ雄物川・最上川流域の窯の製品なのかはわからない。但しその型式については珠洲窯製品より先行することは考えられず、とりあえず珠洲窯の編年を援用することで、当該壺の年代を推定することができるだろう。

1号経塚状遺構出土の波状文四耳壺は、珠洲系陶器器種分類での壺R種（AⅠ類）にあたり、珠洲編年というⅠ期（寺社瓶割坂第1号窯式）に相当すると思われる。Ⅰ期とは、1150～1200年の時期を指している。吉岡1989aは、珠洲第Ⅰ期の壺類の特色として、ひとまわり大ぶりで、体部は倒卵形の広口長胴壺を標準として、口縁形態も外端でしっかり面をとる5の字状を基本としながら一様ではないとし、器高で占める底部の鉢形部分が大きいのは、ロクロ成形への依存度の高い本期の指標となる、四耳壺については、大小あり、本期特有の流動感溢れる櫛目波状文で飾っているとしている。またこれら波状文四耳壺の供給先としては、寺社権門の階級標識として珍重され、中国製品の入手にあずからない、北東日本海域の在地領主層に代用品として広く供給され、分布の西限は琵琶湖西岸の大宝寺山中世墳墓に及ぶとしている。

以上のことから当該波状文四耳壺は1150～1200年の間に生産されたことが考えられる。柳之御所遺跡を調査した三浦謙一氏のご教示によれば、柳之御所遺跡で出土している波状文四耳壺（破片）と当該壺の胎土・焼成等の技法が類似しているという。当該壺が柳之御所遺跡出土の陶器片と同一の窯の製品とするならば、当該壺の使用時期は柳之御所遺跡で生活の営まれた時期と並行する可能性が考えられるのではなかろうか。

柳之御所跡発掘調査報告書1995によれば、奥州藤原氏に関わるこの遺跡の存在した時期は12世紀後半から奥州合戦で奥州藤原氏の滅亡する1189年までの間と推定している。当該壺は12世紀後半代の珠洲系窯の製品としても、東海系陶器の使用時期より後発的と考えられており、その使用時期に関しては12世紀後半の比較的新しい時期とみることができるかもしれない。

③遺構の新旧関係と造営年代の推測

4基の経塚状遺構は、その在り方と石槨部の構造、出土遺物からみて4基が同時に構築されたと考えることは困難であり、それらはある時間差をおいて順次構築されたと考えるのが妥当である。4基の遺構は、いつ、どのような形で構築されていったかを推測してみる。まず4基の経塚状遺構の新旧関係であるが、積石や組石・石槨部の切り合いからみて1号経塚状遺構は4号経塚状遺構より新しく、2号経塚状遺構は4号・3号経塚状遺構よりも新しい時期の遺構と考えられる。1号と3号経塚状遺構の切り合い関係はわからないが、軸線の問題と石槨構造の類似性から考えて、相対的に3号・4号経塚状遺構は比較的古く、1号・2号経塚状遺構は比較的新しい遺構といえるだろう。

次に4号経塚状遺構の三筋文壺と1号経塚状遺構の波状文四耳壺から、遺構の造営時期を想定してみることとする。前述のように遺物の製作年代はある程度想定することができた。問題はその製作した時期と使用した(埋納した)時期の差異であろう。陶器の場合、通常の使用においてはある程度の使用期間があり、その後廃棄される場合が多く製作年代で遺構の年代を推測することには危険性がある。一方、中野1990や吉岡1994等の論考では、初期段階の三筋文壺あるいは須恵器系波状文四耳壺は使用の在り方が限定されており、三筋文壺や波状文四耳壺が宗教的(非日常的)な使用を前提として製作され始めたものであるとしている。日常雑器として流通する製品ではなく、造営者による直接の搬入ということを考えるならば、おそらく宗教器としての壺は、その製作時期と使用時期の差異は比較的小さいと判断できるのではなかろうか。

前述の2つの壺の遺物の年代観から、これら4基の経塚状遺構は、少なくとも12世紀中の造営事業であると考えられる。出土した遺物は両者とも運搬の時間を考慮せざるを得ないものの、製作時期と使用時期に大きな隔たりがないとすれば、当該遺構群の造営時期は、最も古く遡って12世紀第2四半期、最も新しくみて12世紀第4四半期であり、おそらく12世紀中葉から半世紀に及ぶ造営時期が考えられるのではなかろうか。また造営時期には新旧二つの時期があることが予想される。その時期を二分するならば、I型式の造営時期を12世紀中葉頃、II型式の造営時期を12世紀後半の比較的新しい時期と想定できるではなかろうか。

(3)「箱」状の容器の破片についての考察

3号経塚状遺構から出土した「箱」状の容器の破片は、銅板で縁取りを施した白木の箱の蓋の一部であると推定した。それではその「箱」はどのような用途で使用されたものであろうか。宮内1991を参考に平安時代後期の「箱」の様相を検討してみる。辞書によれば、「箱」の表記として「箱、匣、筥、篋、函、・・・」があり、それぞれの漢字は、大きさや用途、素材などの違いを表しているという。「匣」は小さなはこで貴重品などが入れられる。「匱」は大きなはこ、「筥」は物を盛る円形のはこが原義で、わが国では特に貴重品を入れる容器の意味に用いられてきた。「篋」は竹で編んだ四角の籠または箱一般の意味である。「函」はふみばこ、「篋」は主に書物などを入れる長方形のはこ、「箆」は竹で編んだ飯ひつ等々である。このように「はこ」には用途による様々な表記が存在し、その使用法は多様であった。また11世紀中頃の『類聚雑要抄』には貴族住宅の「室礼(しつらい)」の事例が数多く記録されており、箱の使用法を推察することができる。

手筈は文房具や化粧道具など身の回りのものを入れる箱である。それに類する「箱」として硯箱・唐匣(からくしげ)・鏡箱などがあつた。硯箱は硯、鏡箱は鏡、唐匣は櫛を入れた箱である。それらはいずれも印籠蓋・合口造で蒔絵・螺鈿を施したものである。『類聚雜要抄』によれば、箱の大きさは、硯箱で長さ一尺二寸二分、幅一尺六分、深さ二寸七分である。唐匣は方一尺とあり、やや小さめのようなものである。3号経塚状遺構の「箱」は、平安時代後期の貴族的生活の中で使用された「手筈」類に最も近い存在であると思われるが、それらはいずれも蒔絵・螺鈿が施された高度な工芸品である。日常的に使用されるものであり、土の中に埋納する類の箱ではない。埋納することを目的とした箱で考えられるのは、経塚に使用される経箱である。

次に3号経塚状遺構の「箱」を経箱と考えることは可能であるか検討してみる。経塚から経箱が出土した事例は次の通りである(川島茂裕氏からのご教示による・関1984に追加)。

- | | | | |
|-------|-----------|--------------|------------------------|
| ①長野県 | 秋宮経塚 | 室町時代 | 漆塗木器残片・漆塗木器金具・銅環木器金具 |
| ②滋賀県 | 横川経塚 | 平安時代 | 金銅経箱 |
| ③兵庫県 | 温泉寺経塚 | 鎌倉時代 | 銅経箱(文永8年銘) 3 |
| ④奈良県 | 金峰山経塚 | 平安時代 | 金銅経箱 |
| ⑤和歌山県 | 高野山奥の院経塚 | 天永4年銘の銅経筒を含む | 漆塗木製内容器 |
| ⑥香川県 | 根香寺経塚 | 平安時代 | 木製経筒 |
| ⑦福岡県 | 求菩提山経塚 | 平安時代 | 銅経箱(康治元年銘)・銅板経 |
| ⑧京都府 | 広隆寺弁天島経塚群 | 平安時代 | 教典・鏡・合子・柄香炉・六器・硯・木製経箱他 |

以上のように経塚からの経箱の出土は全国でも8例余りであり、埋経を目的とした経箱の出土例は決して多くはないようである。この中で銅製の経箱を用いた例は②～④・⑦である。一方、木製の経箱を用いた例は①⑤⑥⑧である。①と⑤は漆塗の経箱である。前述の通り当該「箱」は白木作りであり、漆塗の痕跡は全く確認できなかった。白木作りと考えられる経箱の出土例は、上記では⑥・⑧のみであり、経塚における経箱使用事例の中でも例外的なのかもしれない。

⑧の経塚は、京都市広隆寺の旧境内の、池の中島に造られた経塚であり、1978年に京都市埋蔵文化財研究所により調査が行われた。江谷1978によれば、検出された16基の経塚はA～Cの3つの形式に分けられる。経箱を使用したと考えられるのはC形式と呼ばれるもので、床の部分に土を重ねて水平にしてその上に経塚を作っていく形であり、この形式では経典を経箱などに入れて置いたのではないかとしている。また、特に2号経塚からは銅銭・玉類・青白磁合子などの副納品と共に鉄釘と金箔が多量に出土していることからみて、木箱に経典などを入れていたことが推定される、としている。⑥については、松浦1956によれば、この経塚から「緑釉の陶器」と「土師器質の土器」とともに、「銅製鍍金の鋏大小十七本」が出土しており、鍍金の鋏は径が1.2～1.5cm程の丸い頭に長さ3.5cm内外の先の尖った足をもったもので、足の部分に木質のものが付着してあり、箱板に打ってあつたものと思われる、としている。漆痕跡の報告はないので、白木の箱に銅製鍍金の鋏を打ち込んだ経箱であると思われる。

ちなみに経塚に使用された経箱の法量を③を例に見てみたい。森内1992によれば、文永8(1271)年銘のある銅製経箱の法量は高さ8.0cm、縦30.0cm、横18.0cmである。また経11巻の入っていた銅製経箱は外箱が高さ14.0cm、縦28.0cm、横19.0cm、内箱が高さ12.6cm、縦27.1cm、横17.4cmである。これらの寸法は中に入れられる経巻の大きさに規制されたものか、当時の「箱」類の規格なのかはわからないが、経塚に埋納することを目的に誂えられた箱である可能性が考えられるので、経巻の大きさがある程度考慮したものであろう。経塚に使用された経箱といえば、②や④のように高度な工芸品としての金銅製経箱をイメージするが、⑥や

⑧のように白木の箱に埋納した事例も存在する。白木のみであれば腐食して全く残存しないし、漆塗りだとしても漆のみが残存し、経箱と認識されていない事例もあったかもしれない。特に⑧弁天島経塚の場合は経塚の構造自体にも類似点があるように思われる。また③の文永8年銘の銅製経箱もどちらかといえば無骨な真四角で堅牢な箱であり、銅板の部分を白木に代用したとすれば形態的には類似するかもしれない。3号経塚状遺構出土の「箱」を、経巻を埋納することを目的とした経箱と推定することはひとつの選択肢になるだろう。特に当該「箱」は銅板で縁取りを行ったものであり、見栄えというよりも堅牢性を重視した作りである。埋納だけを目的とするならば当該「箱」の作りは合理的ともいえるかもしれない。

但し、3号経塚状遺構から出土状況を考え合わせるならば、当該「箱」を単純にその遺構における埋納を目的とした箱と即断することはできない。検出した「箱」の破片の多くは底石状の玉石敷の下の人為的に埋められた土の中から出土しているのである。3号経塚状遺構に新旧があり、古い段階の遺構に経箱が使用されたとも考えられるが、あるいは当該「箱」は埋納を目的としない経箱である可能性も視野に入れなければならない。想像をたくましくするならば、当該「箱」は、写経した経巻を運ぶための箱であり、経巻を経容器に埋納した後、その使用済みの箱を破壊し、底石の下に埋めた可能性も考えられる。

そこで現存するもので埋納を予定しない経箱との比較を試みる。中尊寺には国宝の紺紙金銀字交書一切経が伝世しており、それらは各十巻の単位で漆塗りを施した経箱に入れられてあった。中尊寺黄金秘宝展実行委員会1993によれば、この「漆塗経筥」の寸法は、高さ11.4cm、縦32.3cm、横22.2cmであるという。ちなみに、同じく中尊寺に伝世する宋版一切経の寸法は、縦30.0cm、横11.5cmである。当該「箱」の銅板で最も長いものでは約17cm程である。箱の横の寸法としてもやや小さいといわなければならないが、銅板を張り合わせている可能性も考えられるので何ともいえない。しかし中尊寺の経箱は、山屋館経塚の遺構造営と同じ時期、同じ地域の事例として今後更に検討する必要があると思われる。

いずれにせよ、土のなか深くに入れられた「箱」である点で、その使用目的はかなり限定されるのではなかろうか。少なくとも陶製の壺のように、経塚の外容器なのか墳墓の蔵骨器なのか判別が困難になることは少ない。経塚における経箱埋納事例の報告が少ないため確実なことは何もいえないが、3号経塚状遺構から出土した当該銅板片と木片は、経塚に埋納を予定したかどうかはともかくとして、経巻を入れた箱として使用された時期があったと推測できるのではないだろうか。

(4) 検出された遺構が経塚であるかどうかの検討

山屋館経塚の4基の遺構から、経塚としての確実な遺物が確認されなかったことには、それなりの意味があるのかもしれない。それは出土した2つの壺が外容器ではなく、経筒そのもの（経容器）であるからではないのか。更にそのような使用の在り方は、この地域（北上川流域）の「経塚」の一般的な特徴といえるのではなかろうか。2つの壺が経容器の可能性が高いとするならば、検出された4基の遺構は、経塚であると推測する条件がある程度そろうことになると思われる。そこで他地域との比較を行い、2つの壺の属性や使用の在り方等の観点から考察することで、当該遺構を経塚と判断するための条件を検討してみる。

まず山屋館経塚から検出された遺構を経塚と想定できる根拠は、今の所、次の5点であろう。

- ① 経塚として普遍的な石槨部の構造であること
- ② その石槨内部から宗教器である初期段階の三筋文壺と波状文四耳壺が出土していること
- ③ また経箱として使用した可能性のある箱の一部も出土していること
- ④ 遺跡周辺に古代寺院の存在の可能性があり、平野部を見下ろす高燥の地であること

⑤周辺に比爪館を始めとする奥州藤原氏と関係する12世紀代の遺跡が多いこと、などである。

もちろん①～⑤としてあげた根拠はいわば状況証拠にすぎない。それでは他の地域の経塚との関連と比較においてはどうか。まず東北地方の「埋経の経塚」との比較を試みる。川島茂裕氏作成の、東北地方における銘文を有する経塚（在銘経塚）の分布は次の通りである

年	出土地	年	出土地
大治 5 (1130)	福島県喜多方市慶徳町	承安 1 (1171)	福島県伊達郡桑折町
保延 5 (1139)	福島県（「新編会津風土記」）	寿永 3 (1184)	秋田県湯沢市松岡
保延 6 (1140)	山形県南陽市宮内	建久 7 (1196)	秋田県湯沢市松岡
久安 5 (1149)	秋田県平鹿郡大森町	12世紀後半	山形県鶴岡市湯田川
仁安 2 (1167)	山形県山形市山寺	元久 3 (1206)	秋田県横手市金沢
仁安 3 (1168)	秋田県仙北郡六郷町	建長 4 (1252)	山形県東田川郡羽黒町
承安 1 (1171)	福島県福島市飯坂町	弘安 6 (1283)	宮城県宮城郡利府町
承安 1 (1171)	福島県須賀川市西川	文保 3 (1319)	山形県東田川郡羽黒町

以上のように銘文を有する経塚は、岩手県内においては知られておらず、青森県と共に空白地帯となっていることがわかる。第42図で示したように岩手県内には、北上川流域を中心に、12世紀代の経塚の可能性のある場所が多く分布しているにもかかわらず、在銘経塚は一つも見つかっていないのである。経容器（経筒）に銘文を施さないことが岩手県内に分布する埋経の経塚の特質なのだろうか。

岩手県内の経塚でいわゆる経筒が出土しているのは、平泉町金鶏山経塚、東和町丹内山神社、同町熊野神社毘沙門山経塚の3箇所にすぎない。いずれも銅製経筒であるが銘文は全く施されていない（銅製経筒が出土しているため岩手県内で今の所確実に12世紀代の経塚といえるのはこの3箇所である）。銘文を残さないことと、銘文を刻みやすい金属製の経筒をあまり用いないことは密接な関係があるかもしれない。今回出土した2つの壺が経筒として使用されたとするならば、壺表面に墨書で銘文を施したとしても、残存する可能性は非常に低いと考えられる。また在地産の壺を経容器として用いているとすれば、焼成前に刻印を入れることは可能だろうが、遠く東海地方及び日本海側から搬入している壺であるために、銘文の刻印はまず不可能であろう。北上川流域を中心とする地域において、経容器は搬入された壺を用いる傾向があり、経容器に銘文を有しない要因となっているのではないか。

1号・4号経塚状遺構から出土した2つの壺が「外容器」とすれば、その壺の内部に経筒が存在したはずである。奈良博1985『経塚遺宝』は「経塚から出土する壺・甕の類は他用途のものを経容器に転用したものである。発掘状態の明らかな遺品に徴する限りでは、すべてが内部に銅製経筒を納めるかしたものであり、直接容器として使用した例はない」としている。完全に未盗掘といえる4号経塚状遺構の三筋文壺内部には経筒が存在しなかったことから、このような考え方からすれば、三筋文壺を経容器とすることはできない。（但し経筒が木製か竹製だった場合、経巻とともに腐朽してしまった可能性も考慮に入れなければならないが、非常に稀な事例であり、今回はその検討を留保する。）

一般に経容器としての陶器壺甕類であると判断するための条件は、次の4点であると思われる。①形態が明らかに銅製経筒を写したもので胴部が筒状のものであることと、印籠蓋や蓋としての片口鉢があること、②経巻の残片があること（特に軸木は残る可能性はある）、③複数の経塚があり、関係的に想定できること④副納品は出土しているのに壺甕類が小さすぎてそれが入らないのが明らかであること、である。しかし山屋館経塚の遺構・遺物の場合、残念ながら以上4点の条件には当てはまらない。

それでは次に陶製の壺甕類を経筒として使用したと考えられる事例で検討してみる。代表例として次の6経塚をあげてみよう。

- ①和歌山県・神倉山2号経塚
- ②滋賀県・比叡山横川B地点経塚
- ③三重県・猪田経塚
- ④茨城県・東城寺経塚
- ⑤栃木県・熊野神社経塚
- ⑥兵庫県・滝ノ奥経塚

①は常滑産三筋文壺と渥美小壺が出土しており、壺中に経巻が残存していた。三筋文壺は複線三筋文で報告書では12世紀第1四半期に位置づけている。②は猿投産短頸四耳壺が出土しており、12世紀初葉頃と推定している。横川の経塚の発掘・整理を担当した兼康保明氏のご教示によれば、横川の経塚の特質は銅製の経筒をあまり用いず、陶製の容器を経容器としていることだという。③は三筋文壺を経容器として使用した可能性を示唆するものとして、中野1990でも論じられている。報告書では「経筒に関しては、従来のように外筒とする考えもあろうと思われる。しかし、これらを外筒とした場合、経筒の破片が一片も存在しなかったことは奇異ではないだろうか。I号経筒・Ⅲ号経筒(筆者注・三筋文壺を指す)をはじめとして小型経筒にみるように、その大きさなどからも、いずれも外筒とするよりは経筒とするのが妥当であると思われる」としている。④は吉岡1994によれば、1・6号経塚(小石室に保安3年と天治元年銘)に銅製経筒を直接埋納し、木炭を充填していた。常滑三筋文壺(赤羽氏によると12世紀前半)と土師器壺は埋納状況は明らかではないが、おそらく経容器に転用された関東で最古の例だろうとしている。⑤は三筋文壺中に腐朽した紙本経が遺存し、三筋文壺を出土した経塚から銅製経筒の伴出がみられないという。⑥は神戸市灘区にある経塚で12枚の鏡と8個の刀子・青白磁合子・数珠玉・独鈷杵等豊富な副納品とともに、須恵器製経筒と蓋用の須恵器鉢が出土している。⑥に限らず兵庫県内には、銅製経筒を用いず須恵質・土師質の「土器製経筒」を用いる例が多く、その数17箇所に及ぶようである。これは魚住・神出窯で知られる東播系の須恵器窯の存在が背景にあると考えられる。

このように陶製壺甕類が経容器として使用された事例は、他にも全国的に数多く報告されており、必ずしも異例の出来事ではない。あるいは必ずしも「辺境」奥六郡の固有の性質ともいえないようである。三筋文壺及び波状文四耳壺には固有の属性、即ち使用時における人々の意識に、実は秘密があるのではなかろうか。

吉岡1994は三筋文壺の性格を次のように述べている。「常滑三筋文壺が濃密に分布する東海東部・関東から東北のごとく遠隔地へ、それも経塚築造の風習が伝播した12世紀前半に早くも移送されたとすれば、経容器として特別に選定されたことは十分考えられる。村落遺跡から出土例がほとんど報ぜられていない反面、蔵骨器としてもしばしば出土することから、原則として宗教器として使用されたとみなすべきであろう。」としている。三筋文壺は当時の人々にとり基本的に宗教的な容器として認識されていたのではないか。また中野1990は、三筋文壺が経筒そのものであると述べている。以下要約すると、「①経塚に使用される経筒は一般的には銅製品が用いられているが、三筋文を有する陶製経筒の形は、銅製品の形態を写したものである可能性が極めて高い。三筋文自体も、銅製経筒の上・中・下、有節円筒型経筒に類似性を認めることができる。②経塚から発見された三筋文壺を銅製経筒の外容器とするには規格が小さすぎる。和歌山県の神倉山独立経塚出土の三筋文壺には、水晶念珠玉や青白磁八角合子、さらに折り曲げた流水飛鳥文鏡が入っていたと伝えられるが、それだけの内容物があれば、経筒の入る余地は残されていない。福島市の天王寺経塚のように陶製経筒が納められた例もあり、外容器的性格も完全に否定することもできないが、三筋文壺の担った役割は、経筒と外容器の両面であったと推測しうる。③三筋文壺については従来のように外筒とする考えもあろうと思われる。しかし、これらを外筒とした場合、経筒の破片が一片も存在しなかったことは奇異ではないだろうか。

三筋文系壺は、小型経筒などにみられるようにその大きさなどからも、いずれも外筒とするよりも経筒とするのが妥当なものと思われる。」また珠洲系四耳壺についても、吉岡1994は「珠洲系櫛目文四耳壺は12世紀後半～13世紀前半代の窯跡で定量焼成されているが、青白磁四耳壺の器形と黄褐釉ⅡE類の加飾法の合成的模作品か」と推定され、同様に非日常的性格を具備した器種として製作された可能性がある。」と述べ、経塚から出土する珠洲系四耳壺が経容器として使用されたことを想定している。中野・吉岡両氏の論考から、三筋文壺や波状文四耳壺は当時非日常的あるいは宗教的な容器として強く意識されており、そのまま直に経巻を入れる「経筒」としても使用されていたと推測することができる。

しかし、問題となるのは、三筋文壺・波状文四耳壺が経容器として使用されていたとしても、同様の宗教器として、蔵骨器としても使用されていた可能性が考えられることである。三筋文壺・波状文四耳壺が経容器として使用された事例をいくら述べても、あるいは経容器として製作されたことを論証したとしても、使用者の段階で蔵骨器としてみなされていたとすれば、使用法として経容器と蔵骨器の両者に可能性は存在することになる。そこで次に蔵骨器として使用された可能性を検討してみる。

蔵骨器とは、その内部に火葬骨を入れて埋葬するための容器である。それ故、蔵骨器と判断する第一の条件とは、その内部に火葬骨が入れられてある（残存している）ことであろう。火葬骨は紙本経と比べれば、比較的風化・腐食に強いと思われるが、発掘事例としては蔵骨器内に火葬骨が存在しない場合もみられる。蔵骨器の器形としては、壺形のタイプが多く、金属製・陶製・須恵器製・土師器製・白磁製・石製がある。また石室から火葬骨のみしか出土しない場合もあり、木製・曲物製・布製等の蔵骨器の存在が推測されている。古代においては蓋付の球胴形・無花果形があるが、中世においては古代のタイプを保持するもの（土上に鉢や山茶碗等を転用して蓋とする場合が多い。中世陶器を蔵骨器として使用するようになる契機は、集石墓を典型例とする中世墓の出現であり、12世紀後半がその出現期と考えられている。それは中世期に入り蔵骨器を伴う火葬墓の主体が、貴族・僧侶から武士階級に拡大していったことと関連するものと思われる。これまでの発掘事例では、蔵骨器の底部に穿孔するものがある。呪術的な思想と関係するものかもしれないが、底部穿孔は経塚出土の壺・甕類には類例がない。教典の保護のための容器であり密封を優先するからであるが、人為的な底部穿孔の痕跡は、火葬骨が残存しなくとも蔵骨器の分別の標識とはなるだろう。

まず岩手県内における12世紀頃の蔵骨器の出土状況を簡単にみていくことにする。県内の墳墓を集成した石川1983によれば、岩手県において蔵骨器を伴う墳墓は、古代から鎌倉時代に限られているとし、花泉町宮沢王壇・石鳥谷町大瀬川B遺跡・金ヶ崎町西根遺跡の3箇所をあげている。宮沢王壇からは「骨壺と五銖銭」が出土しているとされるが詳細はわからない。大瀬川B遺跡からは3つのマウンド遺構が検出され、うち1号マウンドの石組みから「須恵器壺」が出土し、2号マウンドの下部と周溝から常滑産三筋文壺の破片が出土している。この「須恵器壺」の産地・形式とも不明であるが、壺直下に「至道通宝」が置かれていたことから考えて、12世紀前後の遺構である可能性が考えられる。三筋文壺は出土状況からみてマウンドに直接伴うものとはいえない。西根遺跡からは、3条の「周湟」の周湟と2基の土壙墓が検出され、周溝埋土から完形の「ロクロ未使用土師器壺」とロクロ土師器坏が出土しており、壺内部には火葬骨が遺存していたという。「壺」の詳細は不明だが、共伴する土師器坏の年代は11世紀中葉頃と考えられる（松本1992）。他に水沢市玉貫遺跡からも土壙墓と思われる3基のピットと火葬跡と思われる焼土遺構が検出されている。常滑産大型壺の他に手づくねかわらけ・鉄製紡錘車・鉄製馬具・北宋銭が出土しており、報告書では常滑壺を蔵骨器と想定している。かわらけは御之御所遺跡のものと類似し12世紀後半頃と考えられる（松本1992）。石組みから蔵骨器とみられる壺が出土しているのは大瀬川B遺跡のみであるが、火葬骨が出土している訳ではなく、

逆に経塚の遺構である可能性も考えられるので比較資料にはなりえない。12世紀頃の蔵骨器の資料としては玉貫遺跡を唯一の事例とするが、遺構の状況が明確にはわからない。検出されたピットに伴うとすれば、石室をもたない火葬墓となり、山屋館経塚の遺構と単純には比較することはできないが、岩手県内でも常滑産の壺を蔵骨器として使用した、12世紀頃の中世墓が存在する可能性はいえるだろう。

次に東北での事例をみってみる。恵美・吉田1984は、東北地方において、特に山形県庄内地方で石室の中に蔵骨器を有する墳墓が分布しているとしている。また山口1995によれば、庄内地方の12～13世紀頃の蔵骨器としては、城輪柵跡出土の珠洲系四耳壺や、七日台墳墓群の珠洲系の壺・石製の蔵骨器があるとし、七日台墳墓群については、奥州藤原氏の郎従であり奥州合戦で滅亡した田川氏一族の墓地と想定している。七日台墳墓群のような10基の集石墓が一直線に連続する事例は全国的にも類例はないようだ。庄内地方では珠洲系の蔵骨器を用いる傾向がある。宮城県内でも松島五大堂と東和町華足寺から渥美産の蔵骨器が出土している程度である。調査事例が少ないこともあるだろうが、12世紀頃の蔵骨器を伴う墳墓は東北地方では多くは存在していないようである。

藤沢1989は、平安時代末～鎌倉時代初頭における中世墓地の成立とは、一定の墓所をもたなかった人々の墓所成立を指すのであり、11～12世紀農村における屋敷墓が13世紀になり農村の集村化に伴い集合墓地が造られていったとし、中世墓地のモデルになったのは平安貴族の墓地であり、いわば貴族文化の庶民化であるとしている。おそらく12世紀頃の蔵骨器を伴う火葬墓に葬られる階層は、上級貴族と僧侶に限定されていたのではなかろうか。そして、それは経塚造営の主体とも重なるのではなかろうか。

蔵骨器を有する墓が上級貴族・僧侶層の墓とするならば、近畿とその周辺の墳墓と比較する必要がある。五十川1980によれば、平安京内から発見される墳墓は少数で、検出されたものは土壙墓が主体である。京城からの穢れの排除という為政者の意思が働いており、中世・京都になると数が増える傾向があるようだ。12世紀頃の墳墓としては法住寺殿の武士の墓（土壙墓）があるだけで、鎌倉時代初期頃の火葬墓としては京都大学構内から塚墓が検出されている。平安京周辺の12世紀頃の墳墓としては、滋賀県日野市大谷中世墳墓群が知られている。12世紀中葉から15世紀にかけての墳墓で、12世紀頃の蔵骨器が出土している4号墓からは、蔵骨器11・納骨孔5・五輪塔1が出土している。長い期間の埋葬行為のため、遺構の状況ははっきりしないようだが、比較的大型の河原石を集積し蔵骨器を囲む形態である。蔵骨器は常滑・古瀬戸・中国産白磁等バラエティーに富む。

いわゆる中世陶器を蔵骨器に用いる、集石あるいは石室を伴うような12世紀後半から13世紀前半頃の墳墓は、他にも京都府大内城跡墳墓・三重県横尾墳墓・三重県椎木中世墓・新潟県河沢塚・富山県柳田古墓・福井県家久遺跡等から検出されており、経塚と比べれば事例としては少ないものの、近畿から日本海側にかけて分布するようである。どちらかといえば中世陶器の産地に多く分布する傾向にあるとは思われるが、相当数の東海系・珠洲系・中国産の陶磁器を搬入した奥州藤原氏にとっては、それらの陶磁器を蔵骨器として使用する行為は異例なことではなかったかもしれない。三筋文壺・波状文四耳壺の存在は、経容器・蔵骨器の2通りの使用形態が今の所想定されるが、それらが蔵骨器であるとしても、近畿から北陸の上級貴族・僧侶層に限定された特殊な使用法を直接移入した結果と考えることができるのではなかろうか。

出土遺物そのものからそれらを経容器と判断することは困難である。それではその他に経塚か墳墓かを分別する方法はないのだろうか。最後に、経塚の遺構と蔵骨器を納めた墳墓の遺構とでは、明確な違いはあるかどうかをみってみることにする。但し個々の遺構をみる余裕はないので全体的な傾向を概観するに留める。

関1985は、経塚の築造方法を3種に分類している。「Ⅰ. 土壙に埋納したもの、Ⅱ. 土壙に石室を構築し

て埋納したもの、Ⅲ. 自然の地形を利用したもの」である。山屋館経塚の遺構が経塚とすればⅡ類に入らるう。森内1992は、Ⅱを更に細分化して、「a. 板石や河原石などで石室を組み立てて周囲に割石や河原石を詰めるもの、b. 偏平な河原石や板石のみで石室を組み立てるもの。周囲の詰石のないもの、c. 底に偏平な石を敷き、その上に瓦を立てて周壁するもの、d. 掘り穴の横壁を掘り込んで中に石室を設けるもの」の4種に分類している。山屋館経塚の遺構と比較するならば、1号・3号・4号経塚状遺構がa. 類に、2号経塚状遺構がb. 類に構造的に類似しており、それらの分類に相当すると思われる。

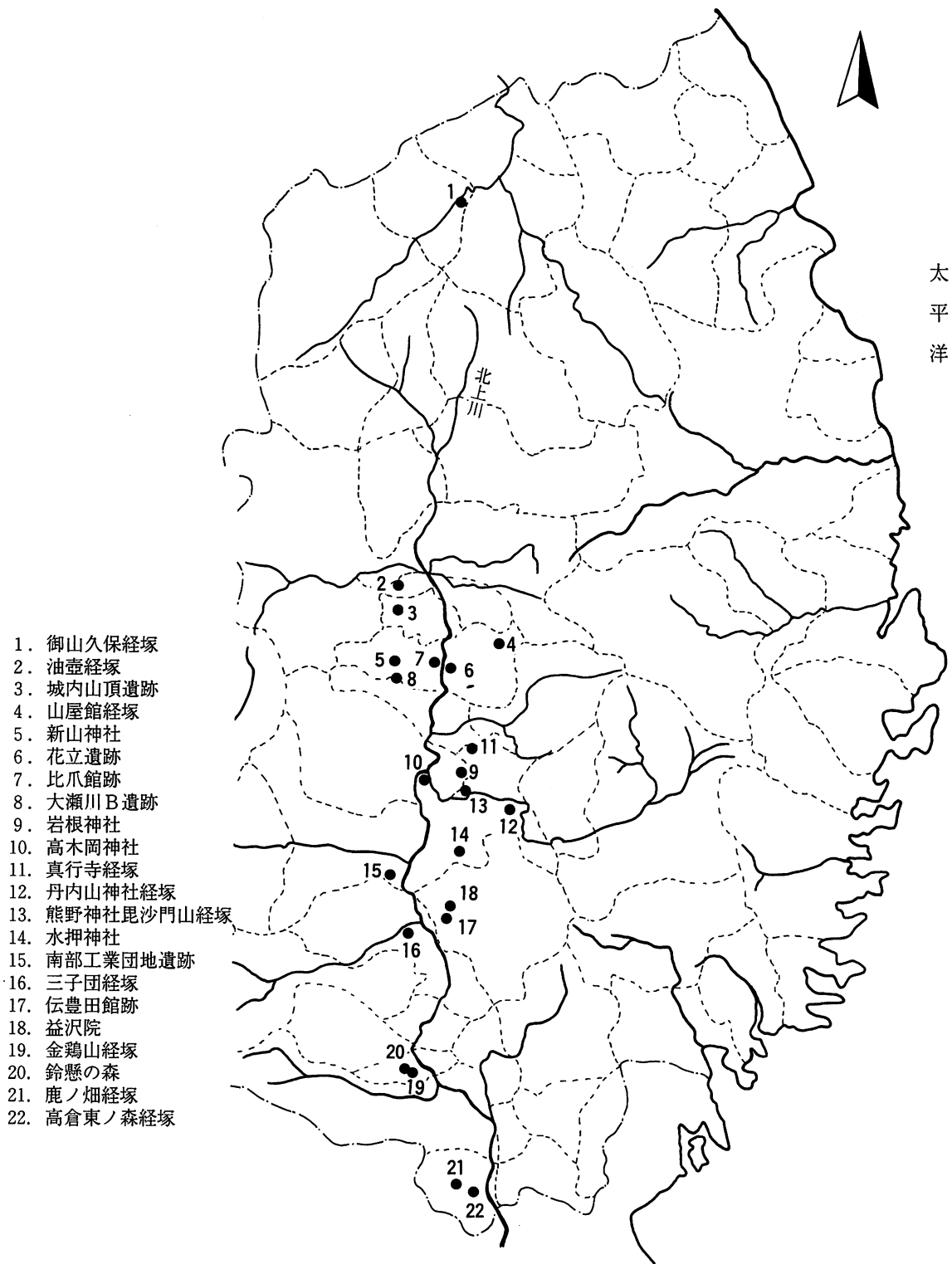
個々の事例を示す余裕はないが、私見によれば、特にa. c. d. 類の形態的な差異は、教典埋納儀礼に関わるものではないかと思われる。儀礼に関わる副納品を置く場所がそれぞれの形態によって異なり、a. は石槨の周辺、c. は石槨の内部、d. は前庭部状の掘り穴が中心になる。経容器の在り方では、a. は、陶製経筒のみの場合が多くみられ銅製経筒・陶製甕による外容器の場合は少なく、c. の場合は経筒に外容器が伴う形式が多いようである。但し経容器の在り方等については全国的な事例を更にみていく必要がある。いずれにせよ経塚の構造においては、教典埋納行為の在り方が反映されるのでないかと思われる。石槨を築き、石槨内に教典を納める、蓋石をして石槨を閉じるという、一連の行為が遺構にあらわれているのではなかろうか。集石墓の遺構の場合は類似する構造ながら、火葬骨を土中に埋葬し、詰石で封じるという行為を想定させるのではなかろうか。仮説を弄してしまったが、経塚と墳墓の構造の差異の検討は今後の課題であると思われる。

経塚の構造と墳墓の構造が似ていることについては、両者が密接な関係にあることを意味していると思われる。経塚と墳墓の関係については、ここ10年の発掘調査事例の増加により、特に中世墓研究者の中で注目されるようになってきた。杉原1987は、京都府北部の経塚のうち権現山経塚・大道寺経塚等において、経塚と墳墓が同じ場所に造営される事例をひいて「経塚の外容器と小墓の骨蔵器とは、時期的に接近するが、やや経塚が先行するようである。とすれば、この経塚は、霊地的な意味でまずこの場所に築かれ、時間的にさほど遅れることなく、寺院及び墓地として意識的にこの地が選ばれたと考えることができる」「一地域の京都府北部では単独例は皆無と予想され、また墓地的性格を有するものがあることからすれば、時代的にも遺構的にも経塚をいわゆる複合遺跡としてみる視点が必要」であるとしている。経塚がまず先行し、その場所に墳墓が営まれる事例は、京都府北部の地域性とは限らないようで、例えば三重県横尾中世墳墓群でも同様の報告がある。伊藤1993は、墓地と経塚が結びつく思想的背景として、経塚造営における弥勒信仰から阿弥陀浄土への信仰の転換があり、12世紀後半に出現する集石墓は経塚の構造から派生したものとしている。山屋館経塚の4基の遺構の場合も、4基は共通する性質のものとは推測しているが、経塚と火葬骨を埋葬した墳墓が複合して存在しているという可能性を視野に入れておく必要がある。

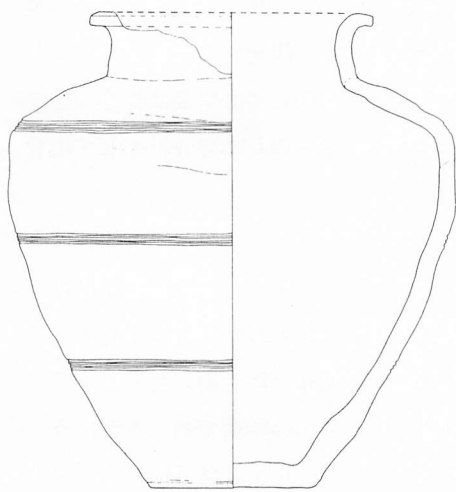
以上のことから、山屋館経塚から検出された各遺構の性質について、現段階では結論を出すことはできず今後の事例報告や調査・研究に待つほかはない。検出された遺構は、経塚と墳墓の両方の可能性が存在するものの、遺構の構造からみて、経塚の遺構の構造に比較的類似していると述べるに留めることにする。

(5)造営者の検討と北上川流域の「経塚」

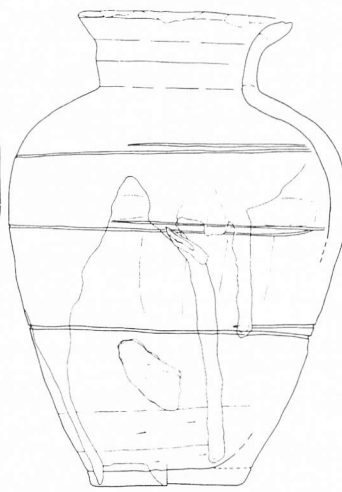
山屋館経塚の遺構の造営が、12世紀中葉から12世紀第4半期頃とするならば、それは平泉の奥州藤原氏の中でも二代基衡晩年から四代泰衡の時期に相当する。平安時代末期において、「奥六郡の主」として北上川流域を直接の支配下においたのは、他ならぬ奥州藤原氏であった。奥州藤原氏かその一族あるいはその関係者が「願主」として、この「山屋館経塚」を造営した可能性はあるだろうか。赤羽1995は「北上川流域の



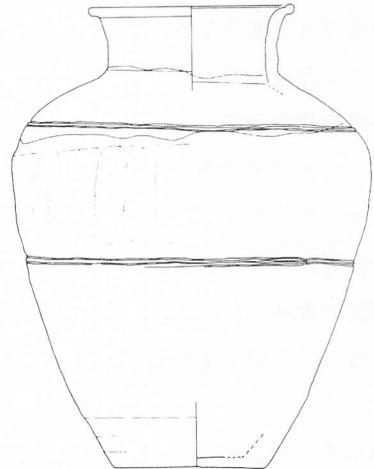
第42図 岩手県内の「埋経の経塚」の可能性のある場所



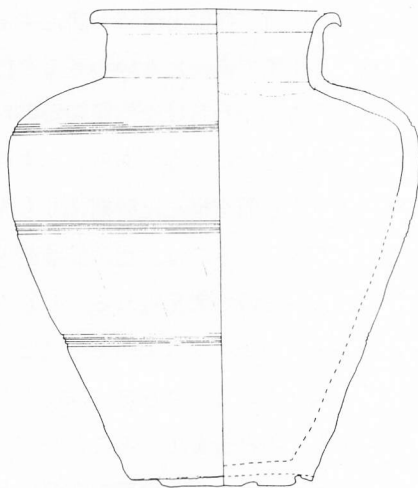
1. 新山神社・複線三筋文壺



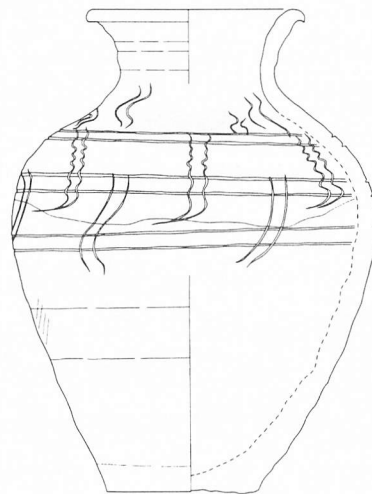
2. 真行寺・単線三筋肉文壺



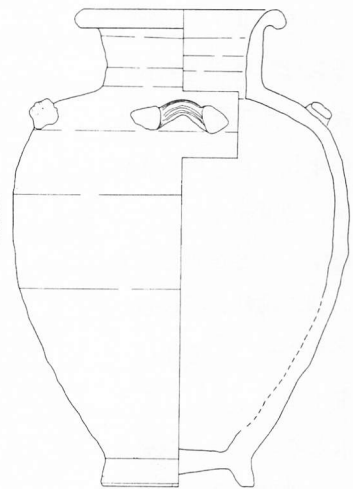
3. 油壺経塚・二筋文壺



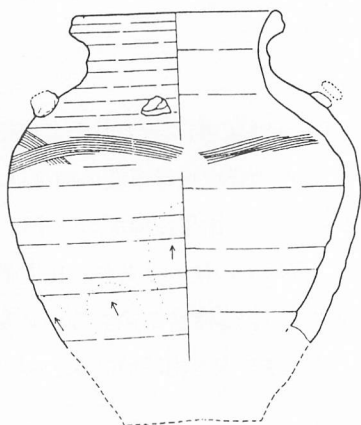
4. 常滑椎ノ木古窯出土
複線文三筋文壺



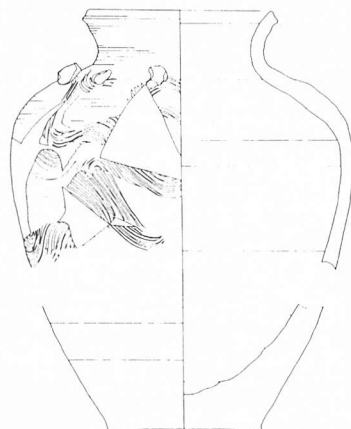
5. 城内山頂・三筋文系壺



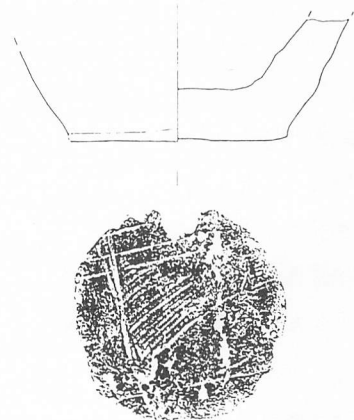
6. 丹内山神社経塚・白磁四耳壺



7. 志羅山17次・10号土坑
須恵器系波状文四耳壺



8. 柳之御所24SD 2
須恵器系波状文四耳壺



9. 志羅山4次・1号土坑
須恵器系壺 (波状文四耳壺か)

1~8、S=1/4
9、S=1/2

第43図 岩手県内出土の三筋文壺、波状文四耳壺

経塚について述べれば、それらの造営に関わった願主の実像を追求するだけの資料に恵まれていないが、奥州藤原氏の関係者やその傘下の人物であったであろう。彼らの居住域を平泉だけに限定することはできずおそらく北上川に沿った台地上に跋扈していたと想像されるが、彼らの経塚造営に関しても平泉は物心両面での指導性を発揮していたと考える。平泉遺跡群から発見される三筋壺等も経塚造営のための資材として用意されたものではないだろうか。」としている。

奥州藤原氏かその一族あるいはその関係者のうち誰かが、「山屋館経塚」の造営にかかわった可能性は十分に考えられる。それではその人物をある程度絞り込むことはできないだろうか。第一に考えられるのは、遺跡の南西約10kmに位置する比爪館の主、樋爪氏の行為である。『吾妻鏡』文治5年の奥州合戦で登場するのは、当主樋爪俊衡である。藤原秀衡の血族たる俊衡は仏教への帰依深く、頼朝軍が陣ヶ岡に集結した時点では僧形であった。また菅野文夫氏の指摘によれば俊衡の孫に聖円があり、比叡山の学僧であったという。樋爪氏が比叡山との独自の関係を有していたとするならば、「山屋館経塚」造営に対する樋爪氏の介在を考慮することができるのかもしれない。

一方、北上川流域に分布する経塚が、「奥六郡」における奥州藤原氏による仏国土の創出事業と関連するならば、奥州藤原氏の重要な一族である樋爪氏といえども、その力量を越える事業であったといわざるを得ない。比爪館跡の発掘調査により得られた資料を検討するならば、その出土遺物（かわらけや国産陶器等）の年代は柳之御所遺跡の時期と並行するものであり、12世紀後半代の遺物に限定されるようである。とすれば、12世紀第2四半期～中葉と考えられる4号経塚状遺構は、比爪館跡に樋爪氏が館を構えた時期よりも先行することが考えられる。更に4号経塚状遺構の造営時期と並行することが考えられるのは、比爪館跡西方の新山神社の「経塚」である。それらは奥州藤原氏系の経塚の中でも比較的古いものと考えられる。むしろこのような「経塚」が造営されるほど重要な場所に、平泉の第2の拠点比爪館が置かれたのではなかったか。北上川を見下ろす山地や丘の上に立地すること、陶磁器製の壺に直接経巻を入れること、経容器には銘文を有しないこと、運搬費だけでも高額になると思われる東海系・珠洲系・中国産他の容器を用いることなど、この地域の斉一性はそれらの造営者が同一であることを示しているのではなかろうか。また中尊寺を始めとする天台系寺院及びその総本山たる比叡山の影響も考慮に入れなければならないだろう。山屋館経塚の遺構は、少なくともこの地域の宗教・経済・政治の中心たる平泉との密接な関係を見いだすことができると思われる。

山屋館経塚の4つの遺構の造営は、12世紀中葉から後半にかけておそらく約半世紀の間に行われた、奥州藤原氏による北上川流域地域の経塚造営事業の一環である可能性が考えられる。その経塚造営事業の検証は、現在20箇所以上考えられる北上川流域地域の「経塚」の綿密な検討が必要になるだろう。山屋館経塚の遺構は、その検証作業の有効な資料と成りえたと考える。今後北上川流域に点在する「経塚」の検討と共に、山屋館経塚の4基の遺構の軸線の問題や石槨部構築の技術的系譜の問題の検討、周辺の古代寺院跡の調査等が必要であると思われる。特に、想定される古代寺院跡を中心とする「聖域」の結構の在り方と山屋館経塚の関係の調査と検討は今後の重要な課題となるだろう。

2. 山屋館跡について

(1)A区について

「山屋館」の名称は、文献資料や地元の伝承等にあるものではなく、所在する場所で遺跡名として命名されたものであることは前述した。以下、山屋館の性質と時期・館主について若干の考察を試みる。

市村1987は、鎌倉期の「城郭」は、合戦・紛争などの非日常的事態に際し、立て籠もるために創出された特異な空間＝「場」として、それらの「城郭」は「寺院・神社の境内などを意識的に占拠する形で構えられる場合が多く、占拠する空間・場を一種の『聖域』としようという意図を読み取ることができる。」としている。また中澤1993は、中世前期の城郭は多くの場合最後の抵抗の場・決戦の場として、非日常的な戦闘状態に際して立て籠もるため創出された特異な空間であり、日常生活を送る場とは性格を異にするものであったとし、城郭と聖地・宗教施設とは密接な関係をみせることが多いとしている。中澤1993が指摘する城郭と聖地・宗教施設の密接な関係の具体例は、①相模国衣笠城（三浦氏・治承4年）と衣笠坂ノ台経塚・金峰山蔵王権現社、②越後国赤谷城（城氏・寿永元年）と大壇原、③常陸国金砂城（佐竹氏・治承4年）と西金砂神社、④越後国鳥坂城（城氏・建任元年）と鳥坂山一帯（羽黒修験）、⑤出羽国金沢柵（清原氏・永保3年）と「寺の沢」祇園寺・閑居長根経塚群などである。主として『吾妻鏡』や『平家物語』等の記載からの指摘であるが、⑤については、大平1994等で11世紀後半の清原氏の居館跡であることは否定的に考えられており、現在の金沢柵跡は中世前期の典型的な山城と捉えるのが妥当である。聖域としての経塚と城郭の関係が指摘されていることは注目されるだろう。

城郭と「聖域」の密接な関係については、今後の城郭調査や発掘調査で検証していく必要があると思われるが、このような市村・中澤両氏の仮説を援用するならば、山屋館経塚と山屋館の関係についても、山屋館が構築された場所は、12世紀代に経塚が築かれた「聖域」にあり、意識的に「聖域」を占拠したものであるということができるだろう。但しここで問題になるのは、経塚造営者と館（城郭）造営者の差異である。城郭が経塚よりも後発的であることは確実性が高いと思われるが、それが同一の一族でなされる行為なのか全く別個の人物によりなされる行為なのかはわからない。

一方、川合1991・1996は、「治承・寿永の『戦争』」には騎馬戦の比重が低下し、「交通遮断施設」である「城郭」の構築が一般的であったとし、これは「徒歩立ちの軍勢の集団的な戦闘力が最大限有効に発揮できるように計算されたもの」としている。川合氏の中世前期の城郭を「交通遮断施設」とみる説は、この時代の多様な城郭の在り方からみてやや狭い範囲での見方であると思うが、山屋館跡の立地は、この川合説に当てはまる事例になるのではなかろうか。はるか西方を眺め、天王川を南に見下ろす山の頂に立地する山屋館跡は、川筋の交通路を抑えるには絶好の場所にあるといえる。聖域との密接な関係の他に、古館方面と峠の東方面の交通を遮断する装置として山屋館が構築された可能性はあるのではなかろうか。

山屋館は以上のように「聖域」を強く意識して構築された、臨時の立て籠もるための軍事施設であることが推測されたが、山屋館の存在した時期の推測については、遺物が全く検出されなかったことから困難な面がある。但し、山屋館跡を形式的に中世前期の城館とするならば、山屋館経塚造営の後であり、その時期は12世紀末から南北朝期の間であることは推測できる。館主の推測を含めて、時期を絞ってみたいと思う。

山屋館の周辺には多くの中世城館遺跡が点在している（第6・8図参照）。それらは斯波御所ともいわれる高水寺城（高水寺という「聖域」を意識して命名されたのか？）を中核として、北上川を見下ろす奥羽山脈と北上山地の麓付近に立地している。それらは異様な程の密度で点在しているといえる。それは先に触れたように南北朝期の南朝側（河村氏）と北朝側（斯波氏）の対立と抗争が背景にあることは間違いないだ

ろう。『紫波郡誌』によれば、河村氏一族は北上川東岸の北上山地に館を構えたとしており、山屋館跡周辺には河村氏一族の城館跡とされる遺跡が多い。河村氏一族の当主河村秀清は、所伝によれば大巻城に本拠を置いたといわれる。紫波町大巻に大巻城跡とされる場所があり、ここに河村氏の中樞があったのだろうか。北上川西岸から奥羽山脈周辺地区に比べ、北上川東岸地区の城館遺跡の事例は乏しく、今後の調査の結果を待つしかないが、いずれにせよ、以上のことからこの「山屋館」は、南北朝の争乱期前後に河村氏あるいはその一族が構築した城館である可能性が考えられるかもしれない。

(2)B区について

最後にB区で検出された土坑群についてまとめてみる。検出された土坑群はその形状・埋土の状況等からみて多様であり、遺構同士の切り合いもあるので、同時期にそれらの土坑が存在したのではないことが考えられる。出土遺物が得られない遺構が多く、時期の推測が困難であり、使用目的も明確なものは少ない。ここでは埋土の状況と土坑の形状、土坑のある場所等から土坑の存在した時期を可能な限り想定してみる。

まず2棟の竪穴住居跡の存在から、縄文時代後期末頃の人間の生活に伴うと考えられる土坑が存在するだろう。この時期の土坑と考えられるのは2・3・8・9・16・20号土坑である。これらは円筒形を呈して埋土が自然堆積の土坑である。なお陥穴状遺構を1基検出しているが、これは縄文時代の遺構と考えるのが妥当であるが、集落と狩場が同時存在したとは考えにくいので、縄文時代後期末の集落と前後する時期と推測する。次に弥生時代末と想定される土坑であるが、土器片が出土するにもかかわらず住居跡が検出されなかったことから、ここは弥生時代末の時期には集落ではないが人が集まる場所であったことが推測される。墓墳の可能性が考えられる土坑がいくつか検出しており、実際土器片がその周辺にあったことから、1・4・10～15号土坑がこの時期の土坑である可能性が考えられる。これらは平面形が楕円形を呈し底面が比較的平坦に作られており、地山ブロックを混入する土で人為的に埋められていると考えられる土坑である。以上の縄文～弥生時代の土坑はB区の南側に集中する傾向にある。B区中央部の土坑群からは一切遺物は検出されていない。埋土の状況も異なり角礫等を比較的多く含む傾向にある。これらについては、少なくとも弥生時代末以降の土坑である可能性が高いと思われるが、あるいは館跡と関係する遺構も含まれるかもしれない。使用目的不明・時期不明とせざるをえないが、おそらく中世以降の比較的新しい土坑と考えられる。これらの土坑は5～7・17～19・21～24号土坑である。

【引用・参考文献】

- 赤羽一郎 1995 「中世陶器の流通—常滑窯製品を追って」『中世の風景を読む3』境界と鄙に生きる人々
赤羽一郎・中野晴久 1995 「中世常滑焼の生産地編年」『常滑焼と中世社会』永原慶二編 小学館
飯村 均 1995 「東北の中世窯と常滑窯」『月刊考古学ジャーナル』No.396特集常滑焼—編年と流通経路
石川長喜 1982 「発掘調査された墳墓について」岩手県立埋蔵文化財センター『紀要Ⅲ』
五十川伸夫 1980 「平安京・中世京都の葬地と墓制」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和55年度京都大学埋蔵文化財研究センター
伊藤久嗣 1993 「中世墓の理解をめぐる一視点」『中世社会と墳墓』帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集 名著出版
岩手県教育委員会 1981 『東北縦貫自動車道関係遺跡発掘調査報告書第七分冊（大瀬川B遺跡）』
江谷 寛 1978 「広隆寺弁天島経塚群」『考古学ジャーナル』153
恵美昌之・吉田幸一 1984 「日本各地の墳墓 東北」『新版仏教考古学講座第7巻 墳墓』雄山閣
大平 聡 1994 「堀の系譜」『中世の城館を掘る・読む』山川出版
奥村秀雄 1979 「経塚」『考古学講座』8、特論（上）祭祀・信仰
小田野哲憲 1987 「岩手の弥生式土器編年試論」『岩手県立博物館研究報告』第5号
小田野哲憲 1990 「岩手県における天王山式期の現状と課題」『天王山式期をめぐる検討会記録集』
金子昭彦 1993 「大洞B2 式の磨消縄文について（下）—東北地方北部を中心に—」（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『紀要ⅩⅢ』

- 金子昭彦 1995 「岩手県上鷹生遺跡における土器口縁部の突起—大洞式前半の突起の事例研究—」(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『紀要X V』
- 鎌田 勉・八重樫忠郎 1996 「岩手県内の経塚の検証(1)—山屋館跡経塚状遺構と『経塚』出土といわれる陶磁器について—」(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『紀要X VI』
- 菅野成寛 1994 「平泉出土の国産輸入陶磁器と宋版一切経の船載」『柳之御所跡発掘調査報告書』平泉町教育委員会
- 川合 康 1996 第三章1 「治承・寿永内乱期の『城郭』」『源平合戦の虚像を剥ぐ—治承・寿永内乱史研究—』講談社選書メチエ72
- 木口勝弘 1995(1965) 『新版 奥州経塚の研究』大盛堂印刷出版部
- 草間俊一 1978 『岩手県古代仏教資料調査』岩手県文化財調査報告第28集 岩手県教育委員会
- 斉藤邦雄 1993 「岩手県にみられる後北式土器と在地弥生土器について」『岩手考古学』第5号
(財)岩手県埋蔵文化財センター 1980 『金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書(Ⅰ) 水沢市玉貫遺跡・金ヶ崎町西根遺跡』岩手県埋蔵文化財センター文化財報告書第18集
- (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター編 1983 『古代・中世の墳墓について』第13回埋蔵文化財研究会資料集
- 桜井芳彦 1991 「紫波町内出土の中世陶器」『岩手考古学』第3号
- 杉原和雄 1987 「経塚遺構と古墳—京都府北部を中心として—」(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府埋蔵文化財論集』第1集
- 杉山 洋 1994 『浄土への祈り—経塚が語る永遠の世界』雄山閣
- 関 秀夫 1984 『経塚地名総覧』考古学ライブラリー ニューサイエンス社
- 関 秀夫 1985 『経塚』考古学ライブラリー33 ニューサイエンス社
- 関 秀夫 1990a 『経塚の諸相とその展開』雄山閣
- 関 秀夫 1990b 『経塚とその遺物』日本の美術No.292
- 中尊寺黄金秘宝展実行委員会 1993 『中尊寺黄金秘宝展図録』
- 天台寺研究会 1984 『天台寺研究』岩手日報社
- 東北歴史資料館 1982 『東北の中世陶器』
- 中澤克昭 1993 「中世城郭試論—その心性を探る—」『史学雑誌』第102編11号
- 中澤克昭 1994 「空間としての『城郭』とその展開」『城と館を掘る・読む』山川出版社
- 中野晴久 1990 「三筋壺—その造形と意味をめぐって—」『常滑市民俗資料館研究紀要Ⅳ』
- 奈良国立博物館 1985 『経塚遺宝』
- 檜崎彰一 1978 「初期中世陶における三筋文の系譜」『名古屋大学文学部研究論集75』
- 檜崎彰一 1990 『常滑・渥美・猿投』日本の陶磁 古代・中世篇4
- 奈良修介 1967 『秋田県の考古学』第5章第二節八. 経塚郷土考古学叢書3
- 西嶋覚・山本雅靖 1975 『猪田経塚』上野市文化財調査概報3 上野市教育委員会
- 野末浩之 1990 「珠洲系窯の小型四耳壺について」『愛知県陶磁資料館研究紀要9』
- 藤沢典彦 1989 「中世墓地ノート」『佛教藝術』182号特集・中世の墳墓
- 松浦正一 1956 「根香寺の経塚」『下笠居村史』
- 松澤 修 1986 「滋賀県・大谷中世墳墓群」『歴史手帖』14-11 シンポジウム中世墳墓を考える—中世都市と場をめぐって—
- 松本建速 1992 「柳之御所跡におけるかわらけ存在の意味—御之御所跡のかわらけの系譜と平泉におけるかわらけ出現からみた文化変化の様相—」(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『紀要X II』
- 丸山竜平・兼康保明 1979 『滋賀県文化財調査報告第7冊』滋賀県教育委員会
- 宮内 哲 1991 『箱』ものと人間の文化史67. 法政大学出版局
- 宮城県教育委員会 1985 『田柄貝塚Ⅰ』遺構・土器編 宮城県文化財調査報告書第111集
- 宮田勝功・田阪仁 1989 「〔三重〕横尾墳墓群」『佛教藝術』182号 特集・中世の墳墓
- 森内秀造 1992 『兵庫の経塚』博物館普及資料第10集 兵庫県立歴史博物館
- 樋口定志 1991 「方形館はいかに成立するか」『争点・日本の歴史4 中世編』新人物往来社
- 八重樫忠郎 1995a 「平泉町出土の刻画文陶器集成」『平泉と鎌倉—永福寺遺物展—』平泉町
- 八重樫忠郎 1995b 「平泉遺跡群の常滑焼—1 b期の要を中心に—」『月刊考古学ジャーナル』No.396特集常滑焼—編年と流通経路
- 山口博之 1995 「山形県庄内地方の中世墓をめぐって」『帝京大学山梨文化財研究所報』第25号 特集・考古学と中世史研究—中世日本列島の地域性—
- 山本賢三 1960 『東和町丹内山神社経塚発掘調査報告』東和町教育委員会・丹内山神社
- 吉岡康暢 1987 「中世陶器の生産経営形態—能登・珠洲窯を中心に—」『国立歴史民俗博物館研究報告第12集』国立歴史民俗博物館
- 吉岡康暢 1989 a 『日本海域の土器・陶磁〔中世編〕』人類学叢書10 六興出版
- 吉岡康暢 1989 b 『珠洲の名陶』珠洲市立珠洲焼資料館
- 吉岡康暢 1989 c 「北東日本海域における中世陶磁の流通」『国立歴史民俗博物館研究報告第19集』国立歴史民俗博物館
- 吉岡康暢 1994 「総論中世須恵器の地域的展開—経外容器からみた初期中世陶器の地域相—」『中世須恵器の研究』吉川弘文館『紫波町史』・『紫波郡誌』・『東和町史』

紫波町山屋館跡 3号経塚状遺構出土材の樹種

高橋 利彦 (木工舎「ゆい」)

1. 試料

試料は⑨・⑩の2点である。試料は石槨側石の裏と底石の下から検出された銅板片に付着していた材片で、経箱の一部と考えられている。検出状況からみて石槨は作り替えられた可能性が高い。試料は旧経塚に納められていたとみられ、12世紀のものとされている。また、3号経塚状遺構は検出された4基の遺構の中では尾根の最下部に位置し、また最古の構築と考えられている。なお、表題にある山屋館跡は中世の城館遺跡であり、4基の遺構とは直接の関係はない。

2. 方法

剃刀の刃を用いて試料の木口・柁目・板目の3面の徒手切片を作製、ガム・クロール (Gum Chloral) で封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に顕微鏡写真図版 (図版 1) も作製した。なお作製したプレパレートはすべて木工舎「ゆい」に保管されている。

3. 結果

試料はともにヒノキ属の一種に同定された。試料の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質は次のようなものである。

・ヒノキ属の一種 (*Chamaecyparis* sp.) ヒノキ科

早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞は晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型 (Cupressoid) で1～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

ヒノキ属にはヒノキ (*Chamaecyparis obtusa*) とサワラ (*C. pisifera*) の2種がある。ヒノキは本州 (福島県以南) ・四国・九州に分布し、また各地で植栽される常緑高木で、国内では現在植林面積第1位の重要樹種である。材はやや軽軟で加工は安易、割裂性は大きい強度。保存性は高い。建築・器具材など各種の用途が知られている。サワラは本州 (岩手県以南) ・九州に自生し、また植栽される高木で多くの園芸品種がある。材は軽軟で割裂性は大きく、加工も容易、強度的にはヒノキに劣るが、耐水性が高いため樽や桶にするほか各種の用途がある。

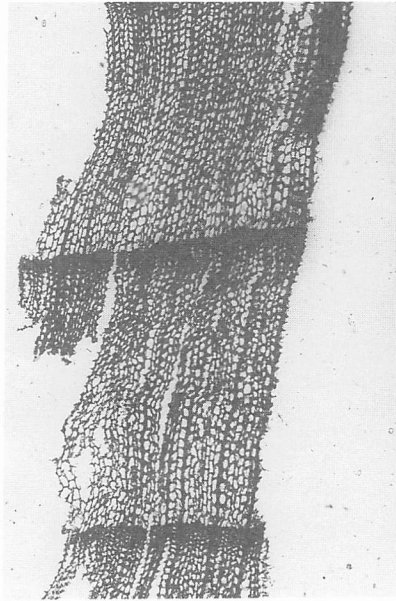
ヒノキの現生種の分布北限は福島県いわき市、サワラのそれは早池峰山とされている。試料は12世紀のものとしてされているが、当時の北限が現在のものと大きく異なっていたとは考えにくく、ヒノキはもちろんサワラでも現地に自然分布していた可能性は低いと考えている。したがって現地生の樹木を材料としたとすれば、それは植栽木であった可能性が高く、製品として遠方 (関東地方など) から搬入されたことも考えられよう。

なお、筆者の手元の資料には同時期の類例はなく、地域や時代を限定しなくとも箱の用材が検討された例は少ないようである (伊東ほか 1987, 伊東 1990)。

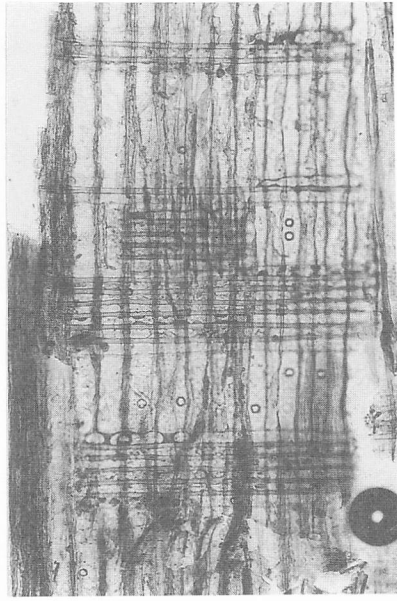
引用文献

伊東隆夫・山口和穂・林昭三・布谷知夫・島地謙 1987 日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途,
「木材研究・資料」, 第23号, 41-210.

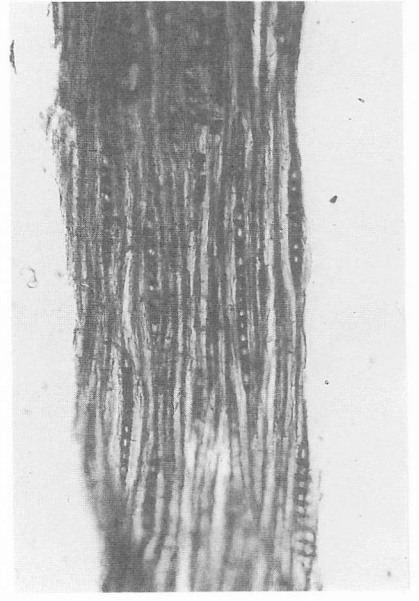
-----1990 日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ, 「木材研究・資料」 第26号, 91-189.



木口 ×40



杵目 ×100



板目 ×100

ヒノキ属の一種 ⑨

樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上, 杵目では左から右.

写真図版

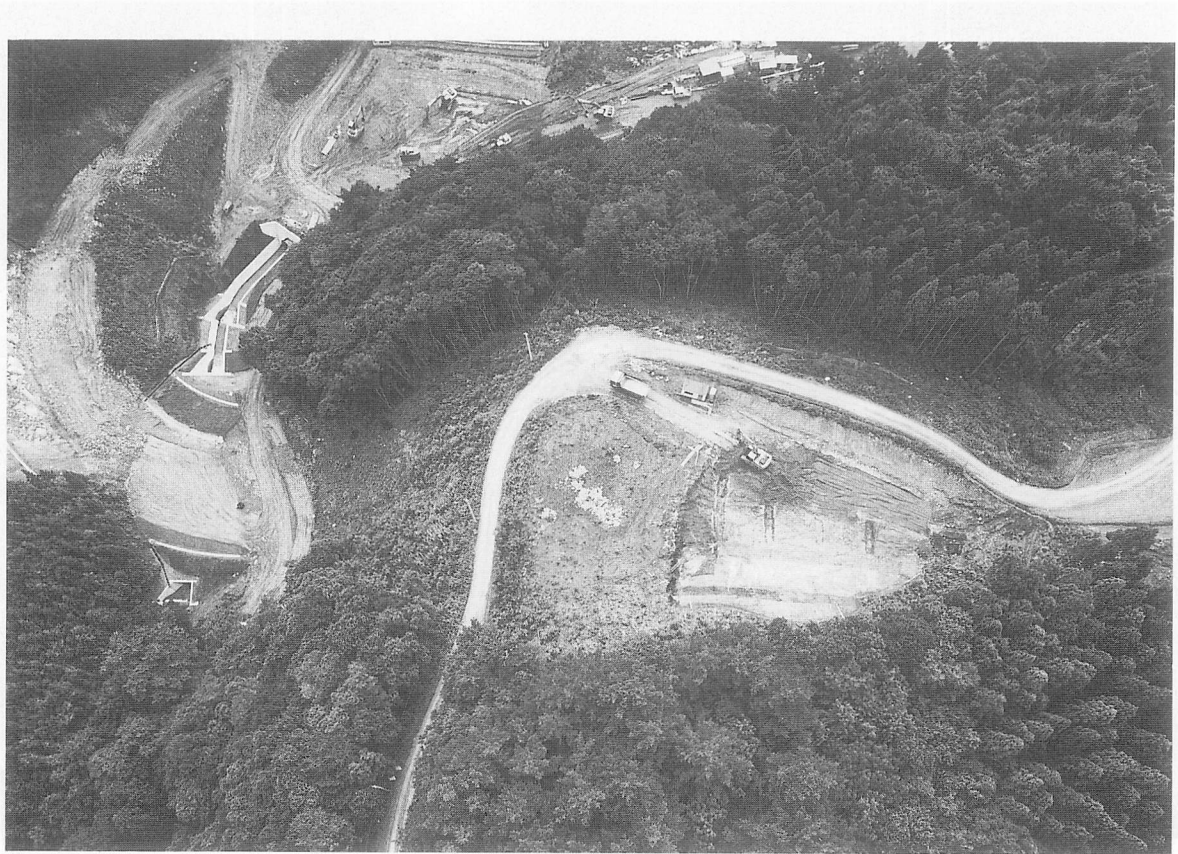


遺跡遠景(上が南)

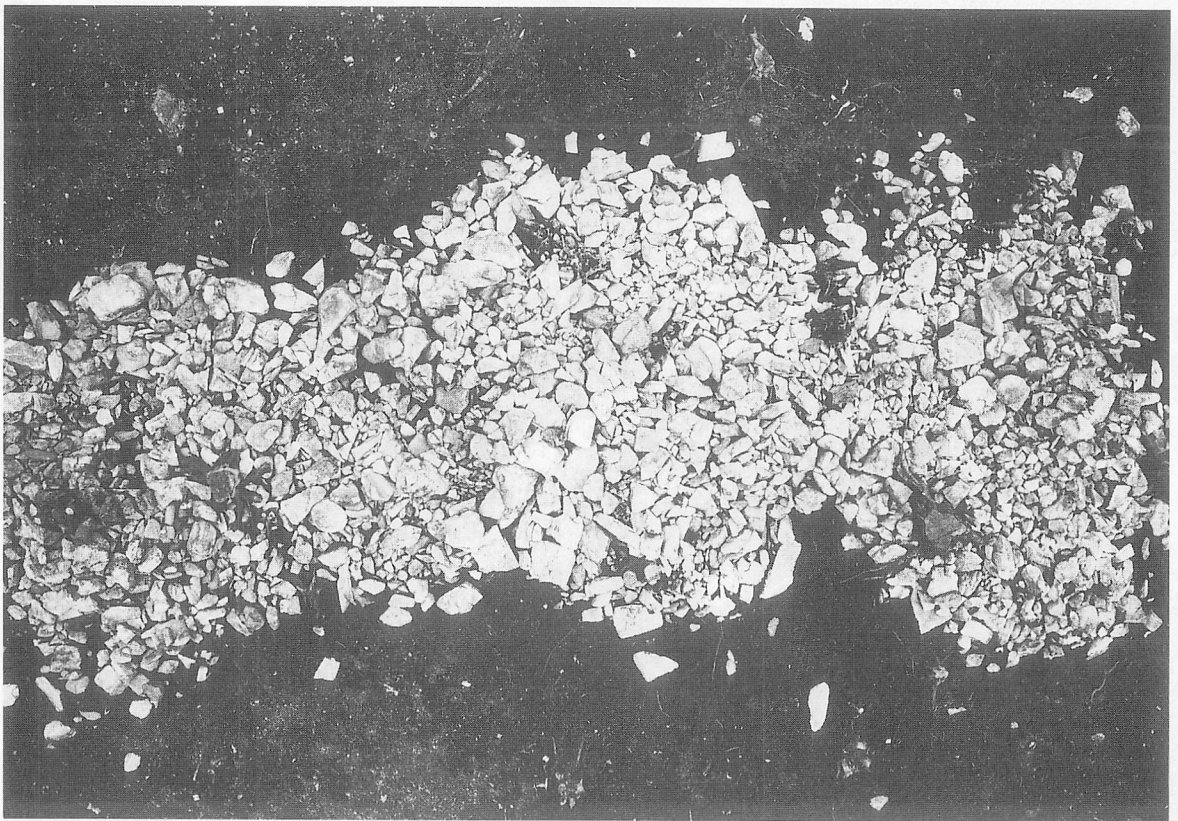


山屋館跡全景(北東から)

写真図版1 空中写真



山屋館経塚と周辺の地形



経塚状遺構 積石全景(左から1号・4号・2号・3号経塚状遺構)

写真図版 2 山屋館経塚全景(1)



経塚状遺構、組石と石槨部検出状況(左下より1号・4号・2号・3号経塚状遺構)

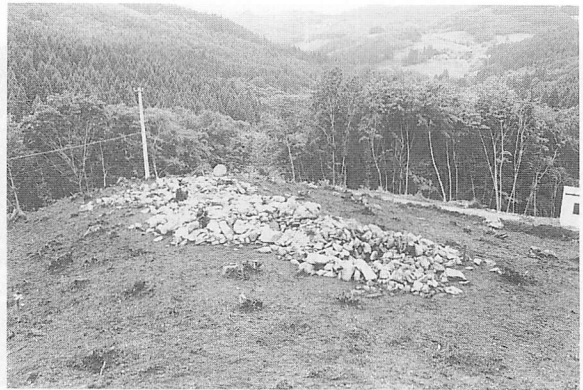


経塚状遺構 石槨部検出(右端の3号経塚状遺構は完掘)

写真図版3 山屋館経塚全景(2)



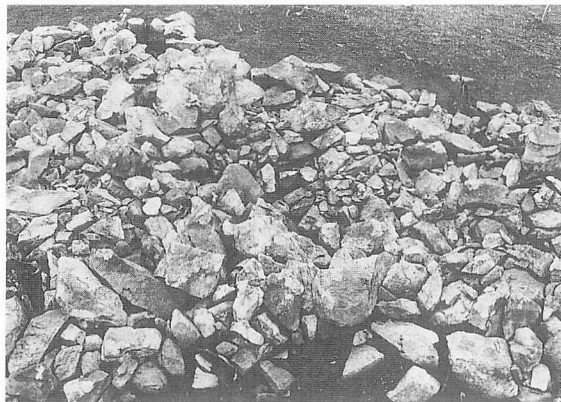
積石全景(北東から)



積石全景(東から)



1号経塚状遺構積石



2号・4号経塚状遺構積石



3号経塚状遺構積石



1号経塚状遺構積石断面



2号経塚状遺構積石断面

写真図版 4 経塚状遺構積石の状況(1)



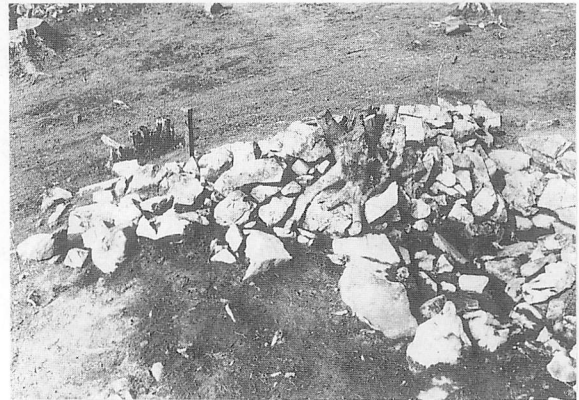
2号・4号経塚状遺構積石断面



2号・4号経塚状遺構積石断面



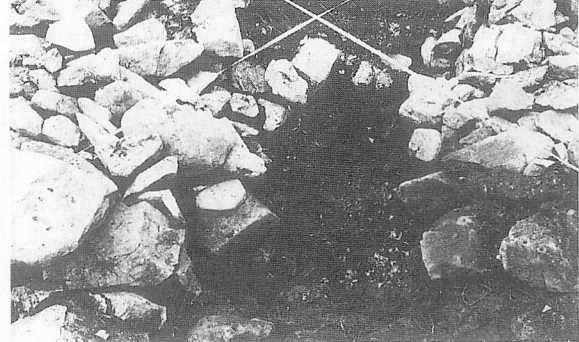
3号経塚状遺構積石断面



3号経塚状遺構積石断面



積石除去作業風景



1号経塚状遺構積石と石槨部検出



積石全景(北から)

写真図版5 経塚状遺構積石の状況(2)



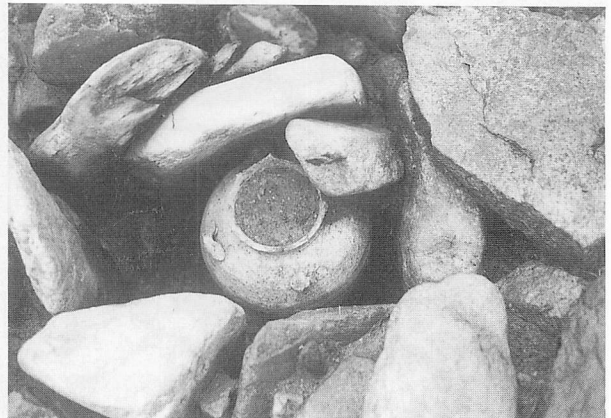
石槨部全景(南から)



石槨部全景(北東から)

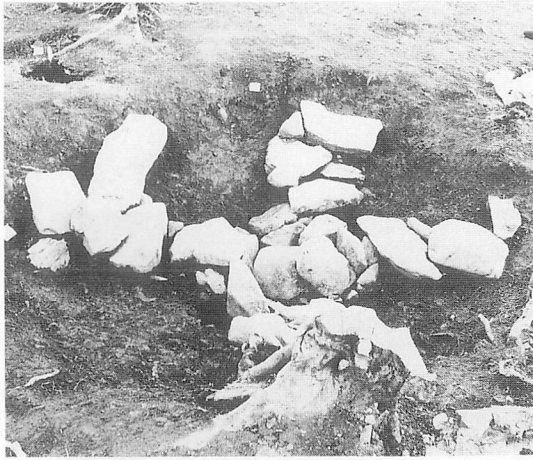


波状文四耳壺出土状況(西から)

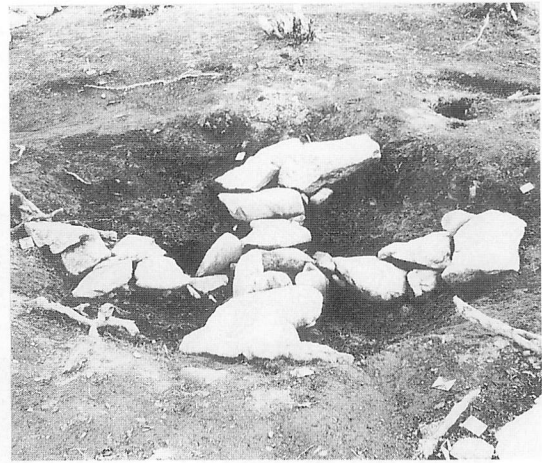


波状文四耳壺出土状況(南から)

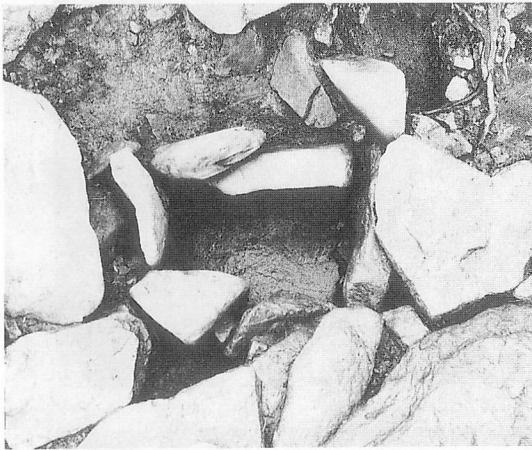
写真図版 6 1号経塚状遺構(1)



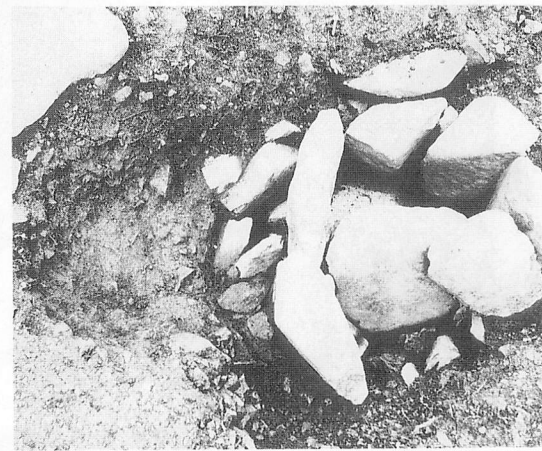
石槨部断面(北から)



石槨部断面(西から)



側石・底石検出状況



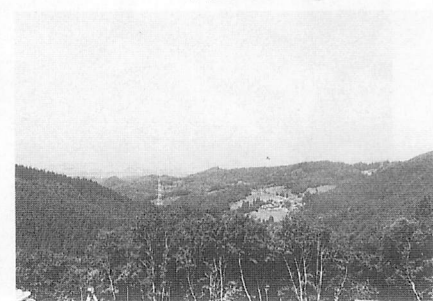
東側の側石近くの掘り込み



側石・底石の状況(写真上の側石が外れる)

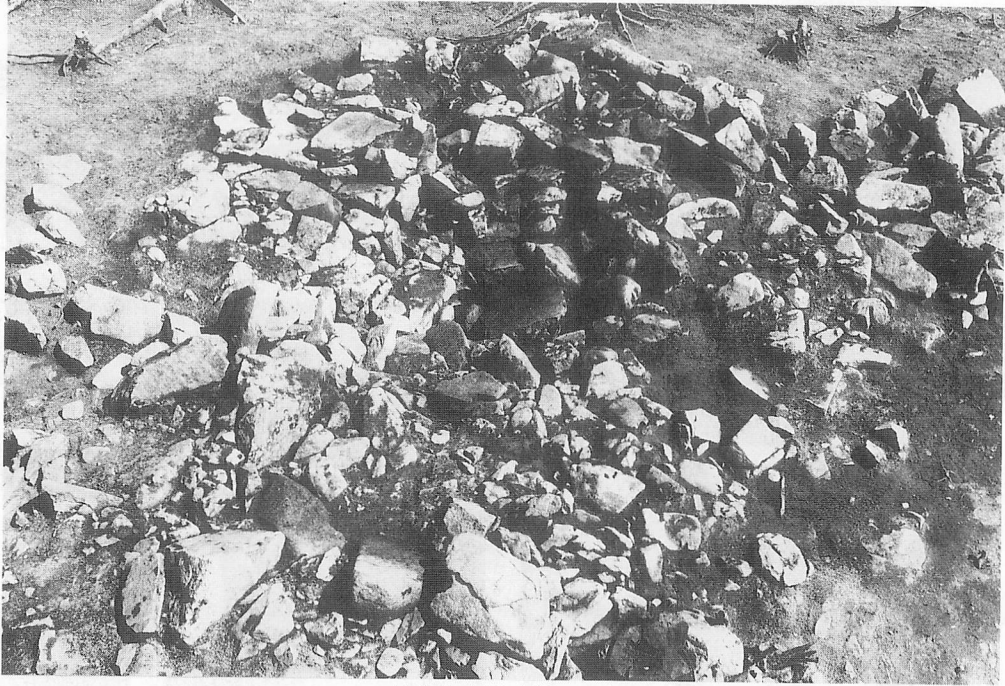


調査風景



山屋経塚からの眺望

写真図版7 1号経塚状遺構(2)

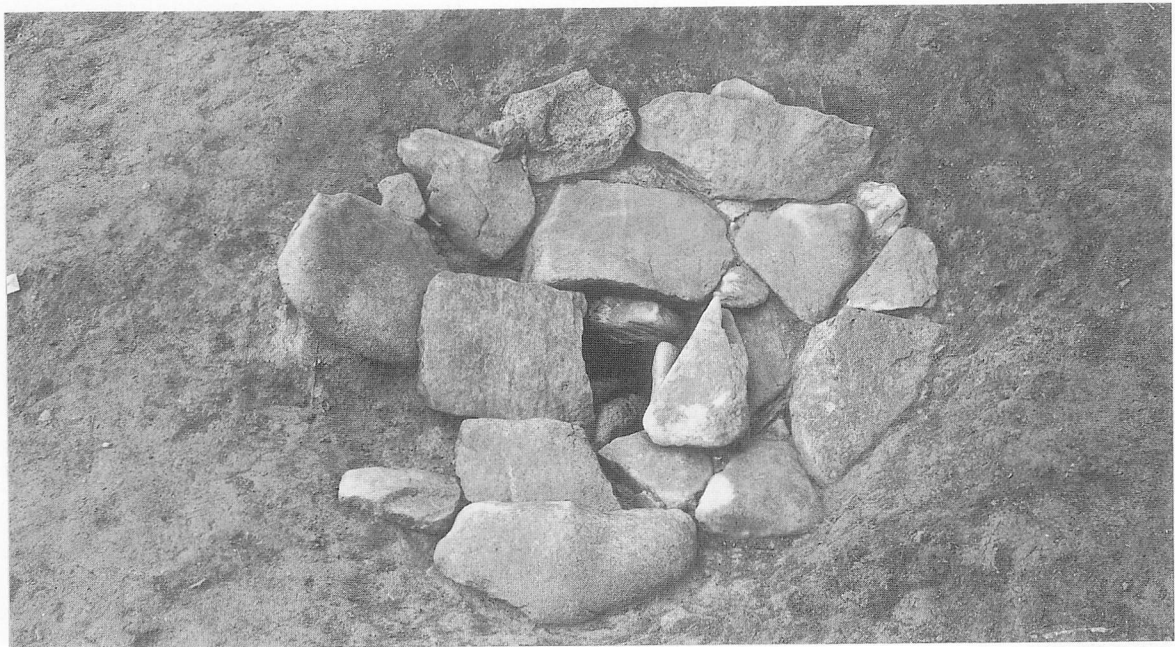


検出途中平面(北から)

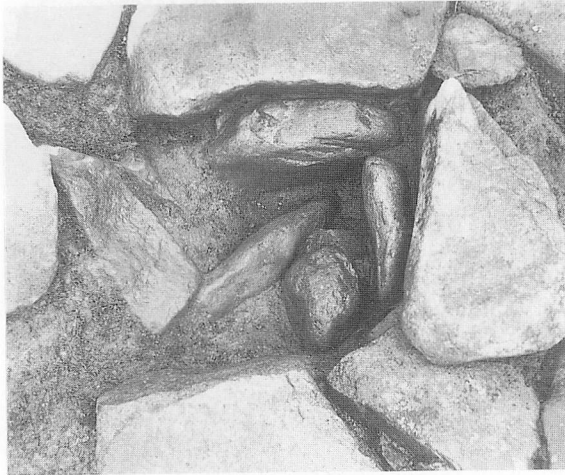


検出途中平面(南から)

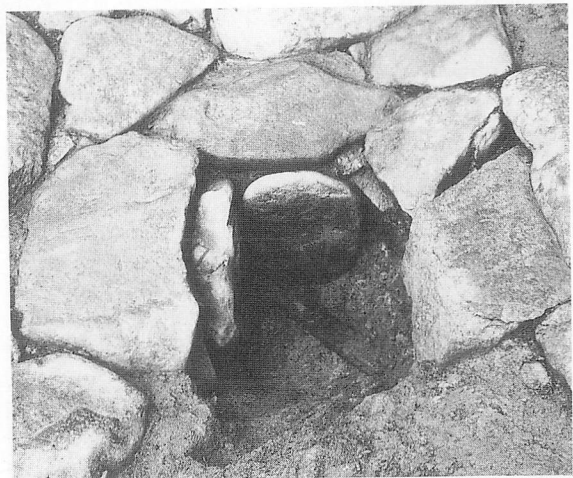
写真図版 8 2号経塚状遺構(1)



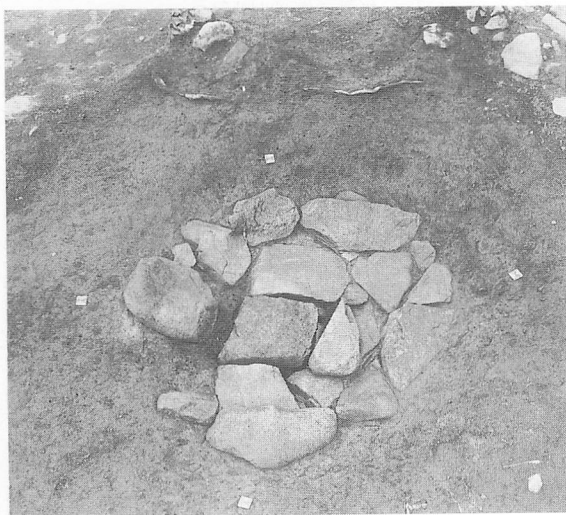
石槨部検出状況(南から)



石槨内部検出状況(南から)



石槨内部最終検出(西から)



蓋石復元想定状況(南から)



石槨部最終検出状況(南から)

写真図版 9 2号経塚状遺構(2)



検出途中平面(東から)



検出途中平面(東から)



石槨部断面(南から)

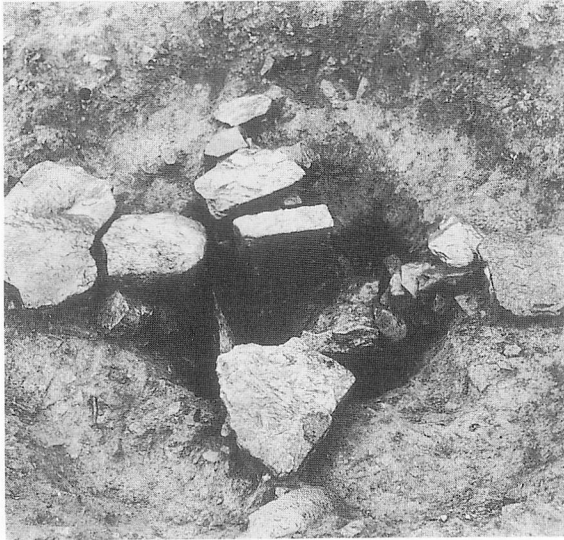


蓋石検出状況(南東から)

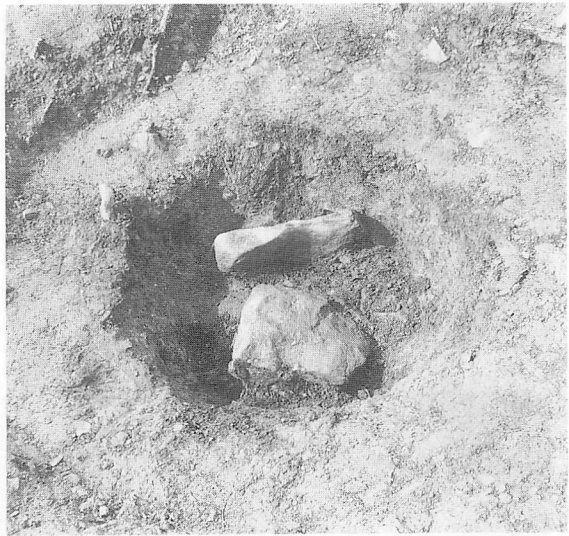


石槨部断面(西から)

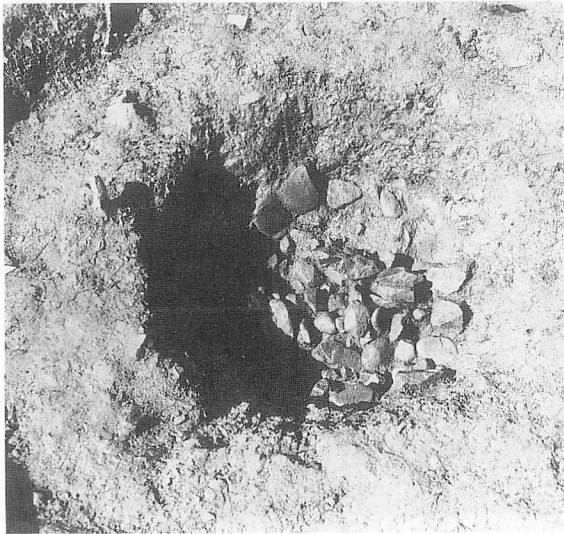
写真図版10 3号経塚状遺構(1)



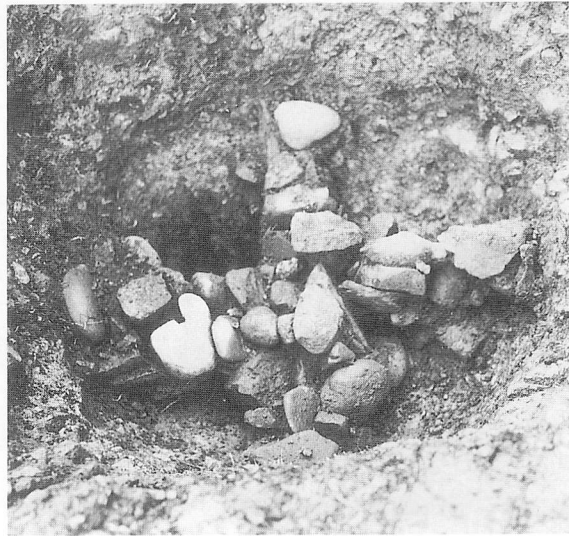
石槨部断面(西から)



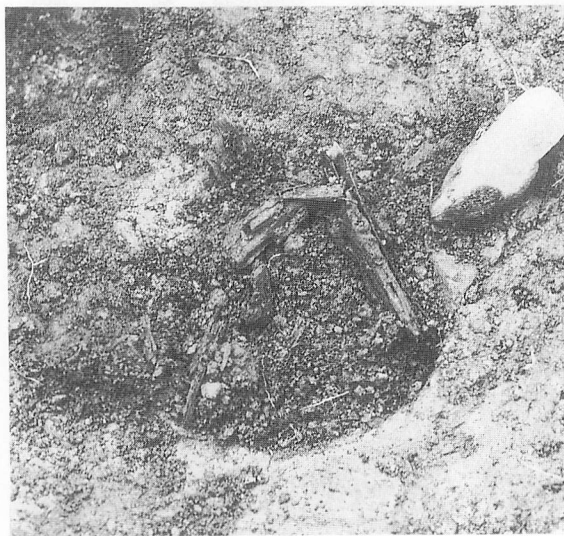
側石検出状況(南から)



底石検出状況(南から)



底石断面



「箱」破片出土状況



完掘(南から)

写真図版11 3号経塚状遺構(2)



検出途中断面(北から)



蓋石 2 検出状況(西から)



蓋石 1 検出状況(西から)



蓋石除去後、遺物検出状況(西から)

写真図版12 4号経塚状遺構(1)



三筋文壺出土状況(西から)

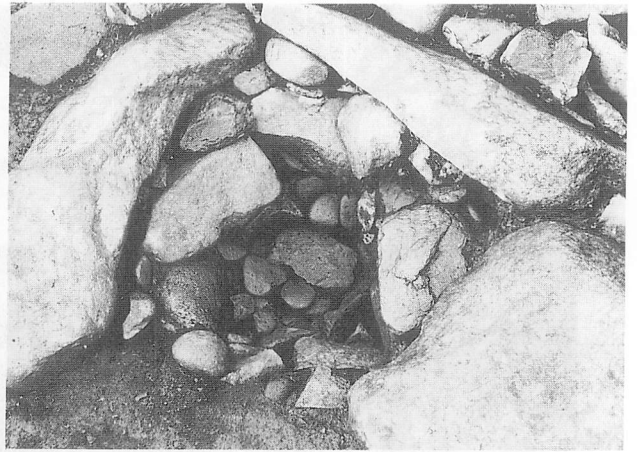


石槲部検出状況(南から)

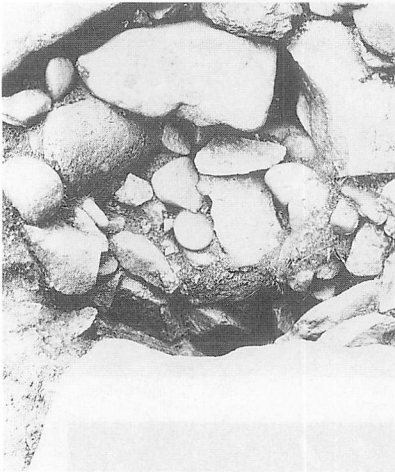
写真図版13 4号経塚状遺構(2)



三筋文壺出土状況(西から)



底石検出状況(南から)



底石断面(東から)



底石下の石検出(南から)



底石下の玉石群断面



側石検出状況(南から)



完掘(東から)

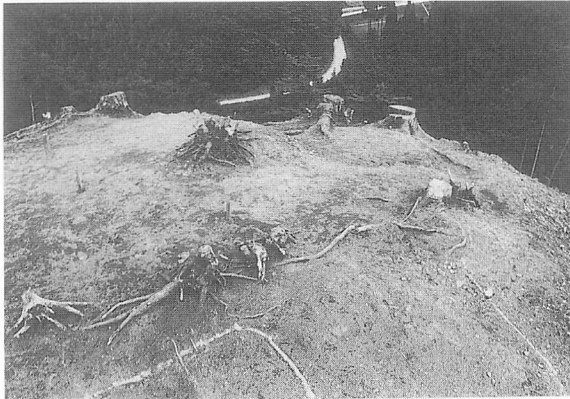
写真図版14 4号経塚状遺構(3)



調査風景



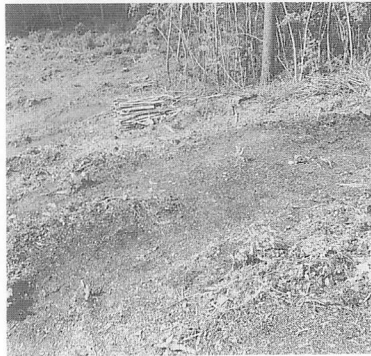
館跡(南側)



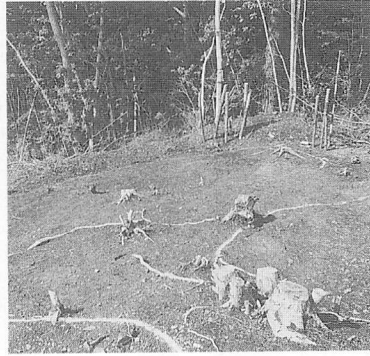
主榎部・曲輪



北側の曲輪



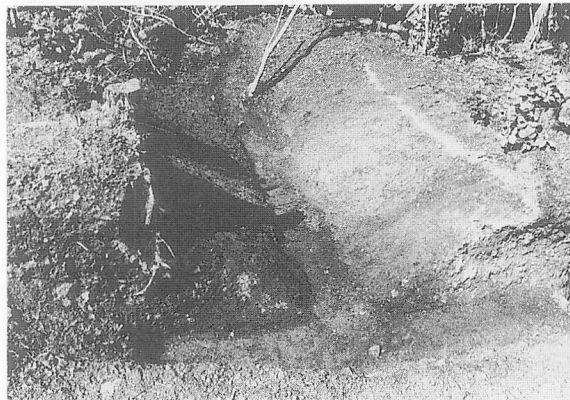
南側の曲輪



西側の曲輪



主榎・西側の曲輪

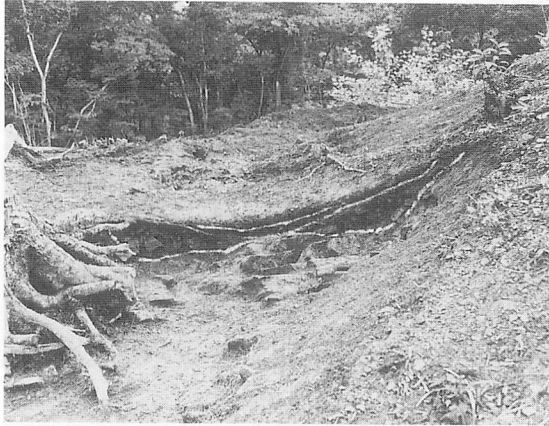


1号堀(西側)

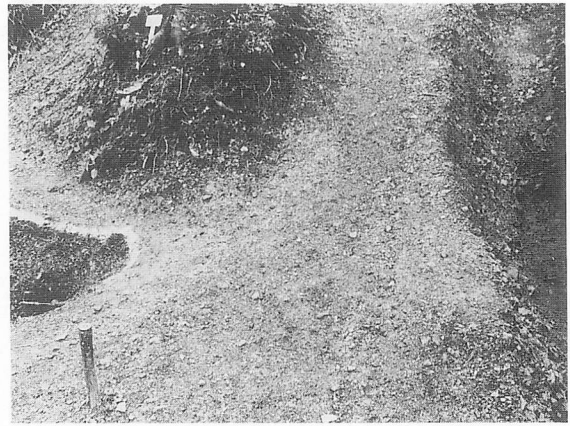


1号堀(東側)

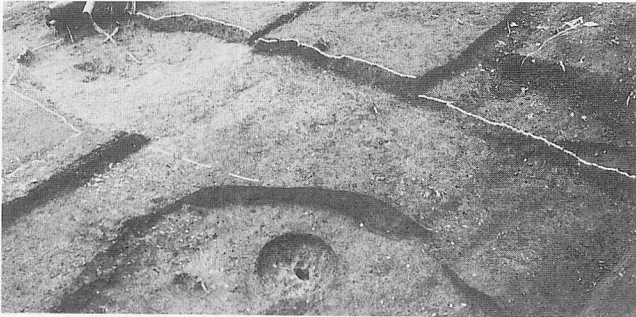
写真図版15 館跡(1)



1号堀ベルト断面



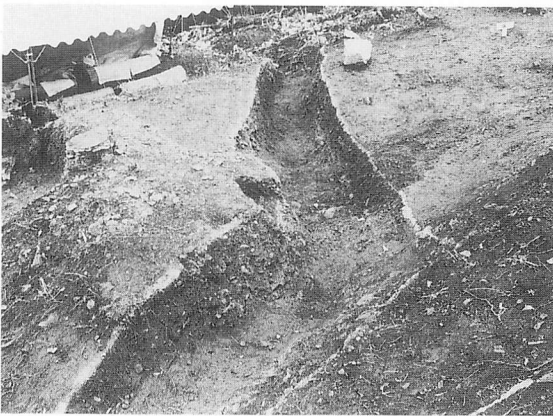
1号堀土橋



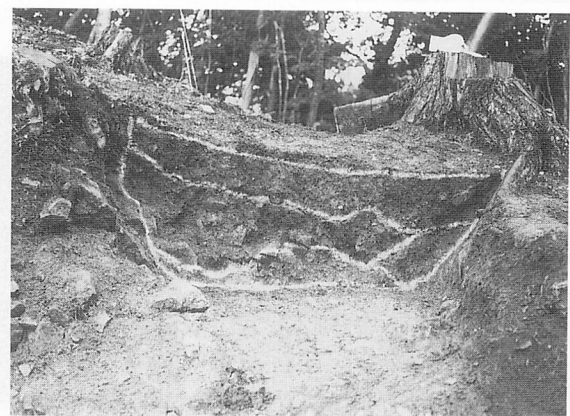
2号堀平面(北西から)



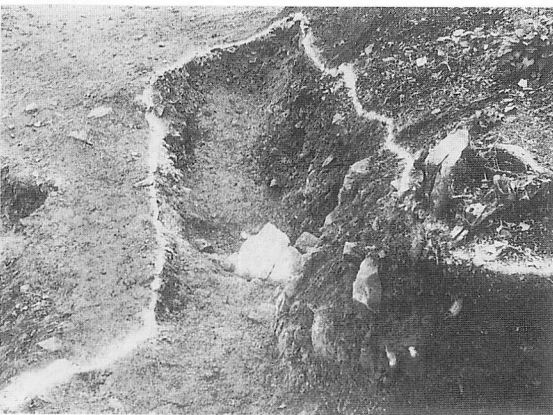
2号堀ベルト断面



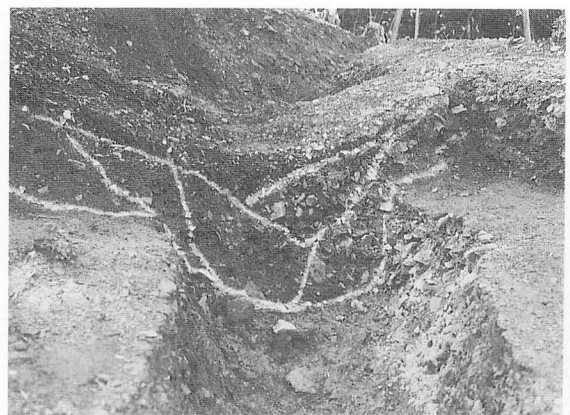
3号堀ベルト断面



3号堀平面(西から)



4号堀平面(西から)

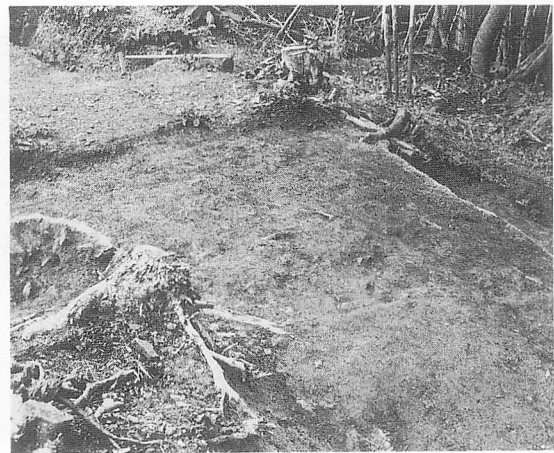


4号堀ベルト断面

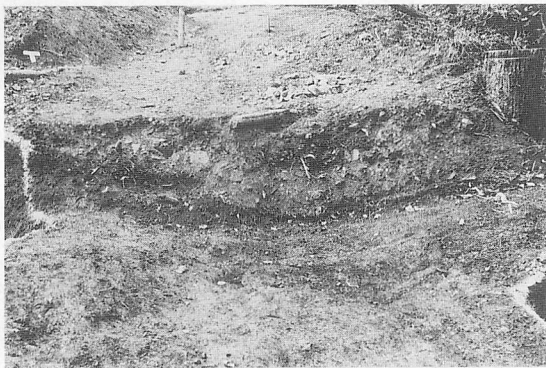
写真図版16 館跡(2)



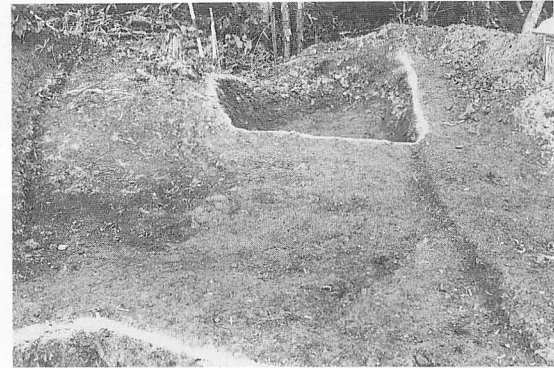
5号堀平面(西から)



3号堀土橋



4号堀土橋



4号堀土橋



1号マウンド状遺構平面(南から) ○



2号マウンド状遺構平面(西から)



1号マウンド状遺構断面



2号マウンド状遺構断面



2号マウンド状遺構断面

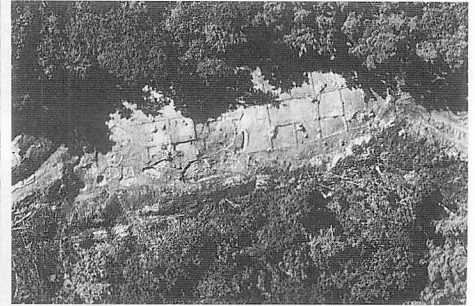
写真図版17 館跡(3)



山屋館跡B地点全景(南から)



調査前



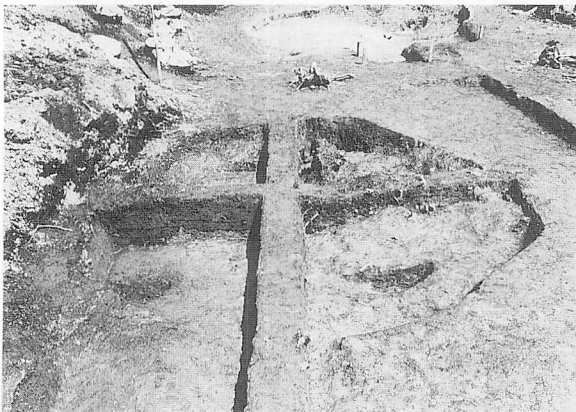
空中写真



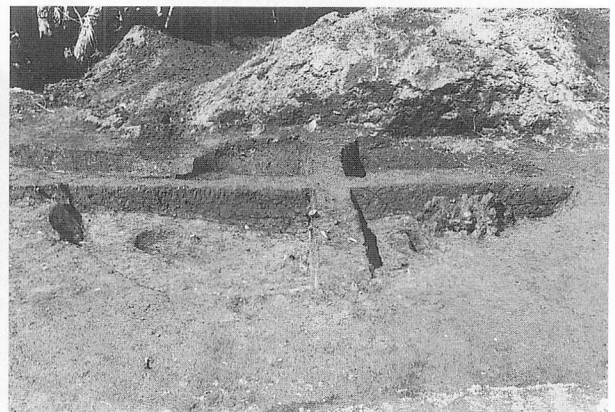
1号竪穴住居跡完掘平面(西から)



1層縄文土器出土状況(東から)



東西ベルト断面

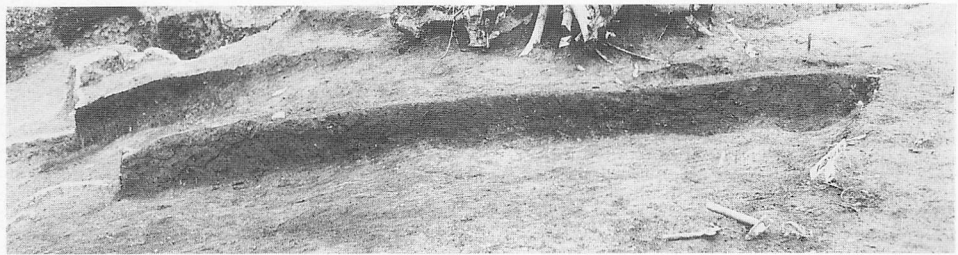


南北ベルト断面

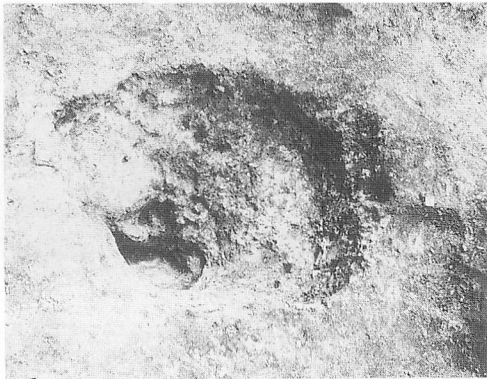
写真図版18 1号竪穴住居跡



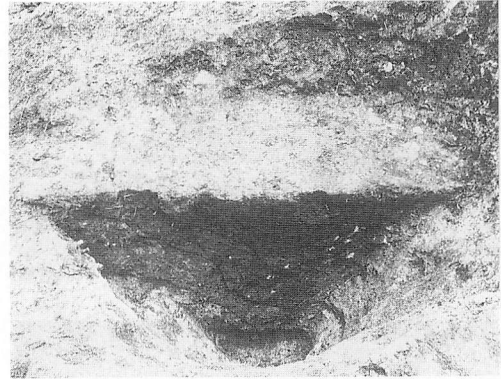
2号竖穴住居跡完掘平面(南から)



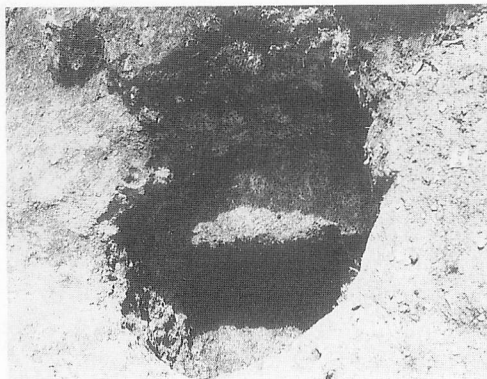
2号竖穴住居跡東西ベルト断面



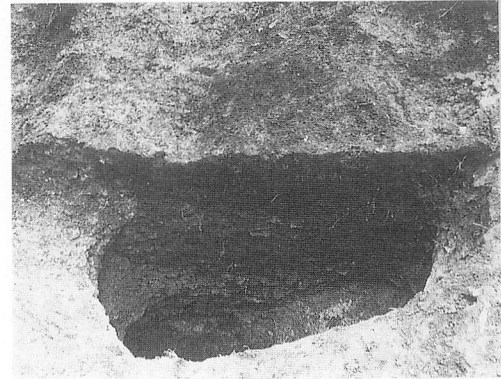
1号土坑平面



1号土坑断面

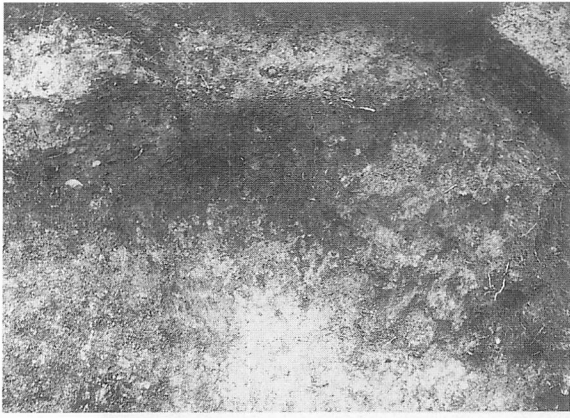


2号土坑平面

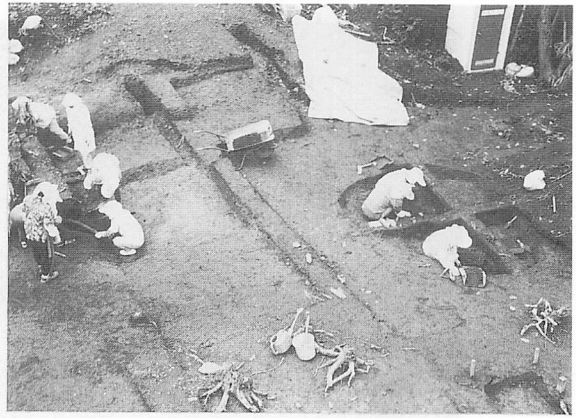


2号土坑断面

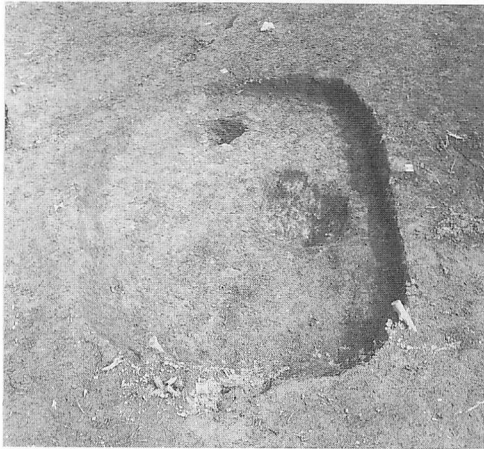
写真図版19 2号竖穴住居跡、1号・2号土坑



3号土坑平面



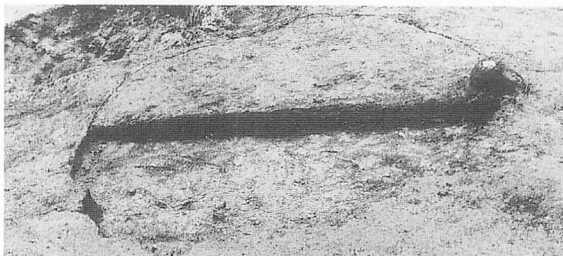
調査風景



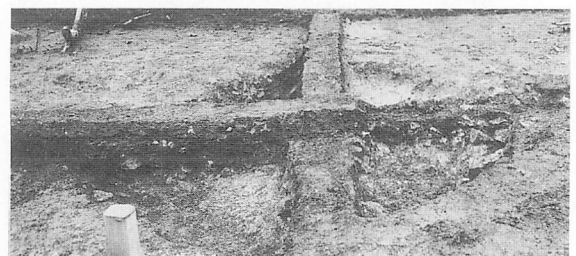
4号土坑平面



土坑群(北から)



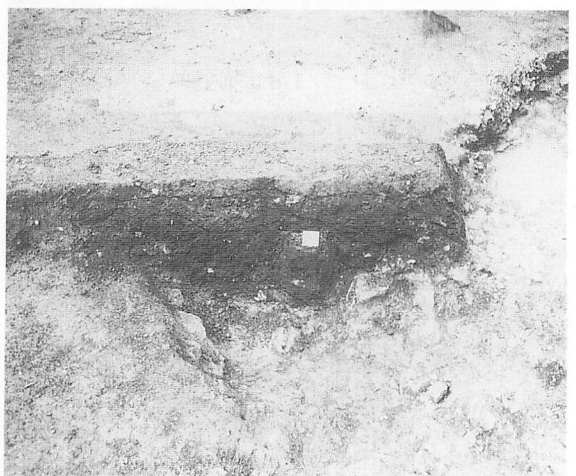
4号土坑断面



5号土坑南北ベルト断面

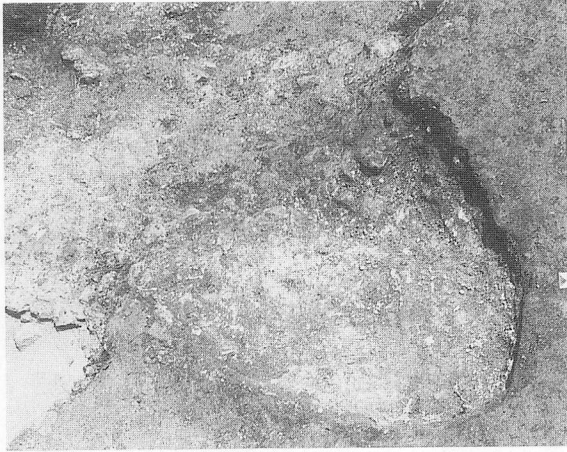


5号土坑平面



6号土坑東西ベルト断面

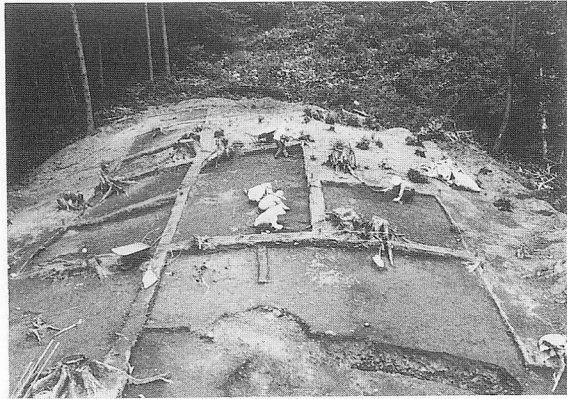
写真図版20 3号～6号土坑



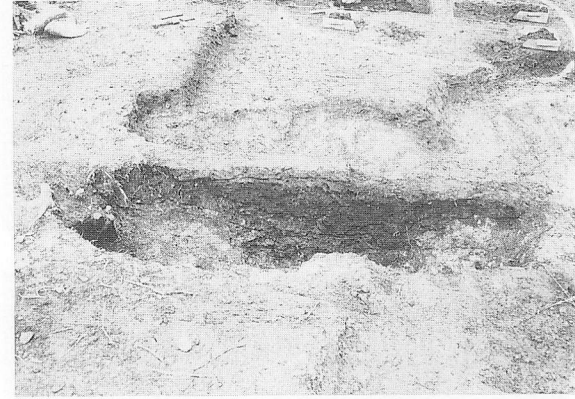
7号土坑平面



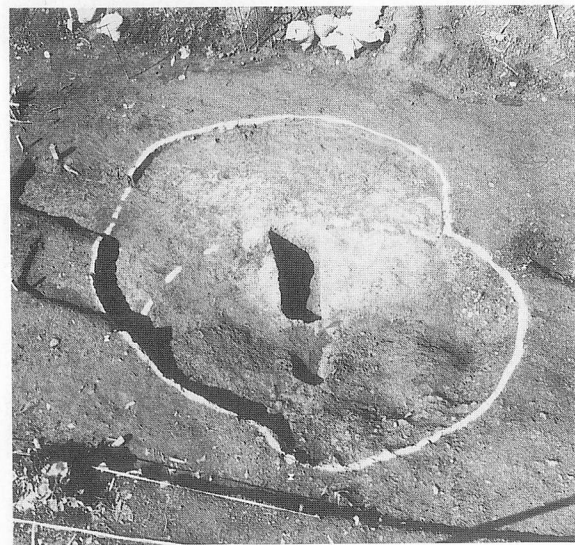
7号土坑東西ベルト断面



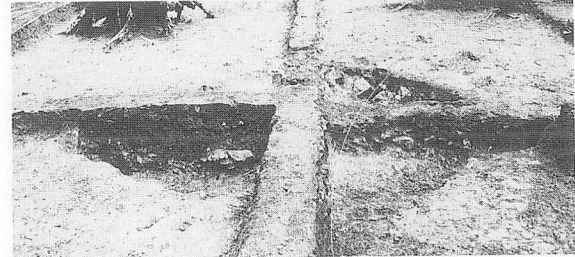
調査風景



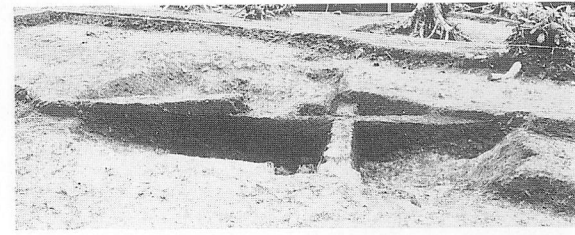
8号・9号土坑東西ベルト断面



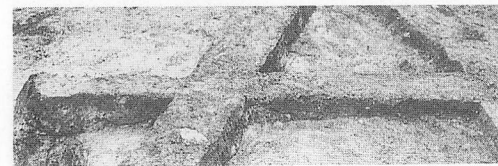
10号・11号土坑平面



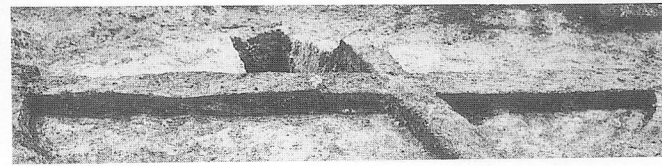
10号土坑東西ベルト断面



10号土坑南北ベルト断面



11号土坑東西ベルト断面



11号土坑南北ベルト断面

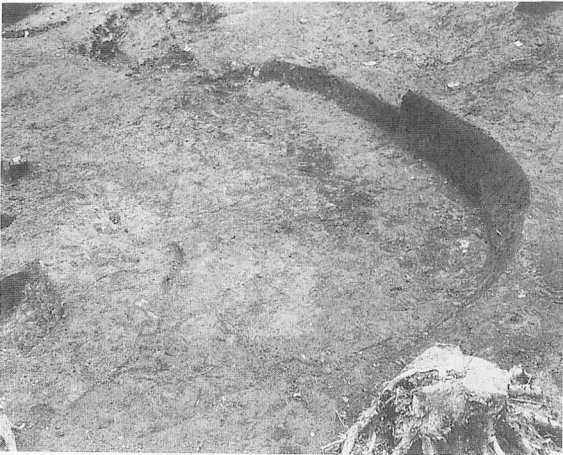
写真図版21 7号～11号土坑



12号土坑平面



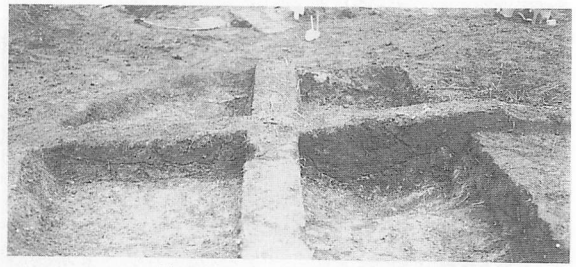
12号・13号土坑平面



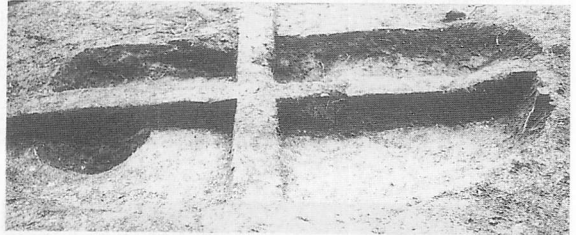
13号土坑平面



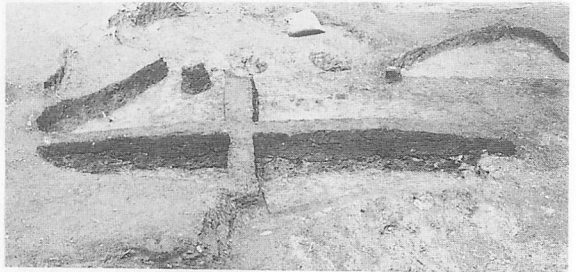
14号・15号土坑平面



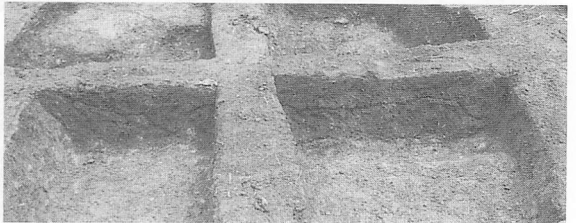
12号土坑北西・南東ベルト断面



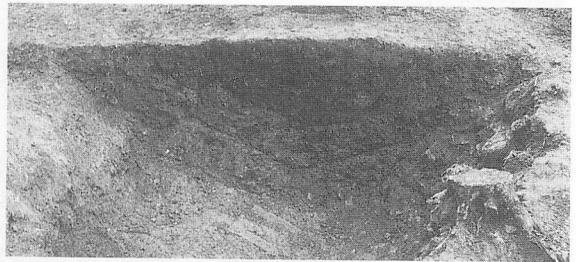
12号土坑北東・南西ベルト断面



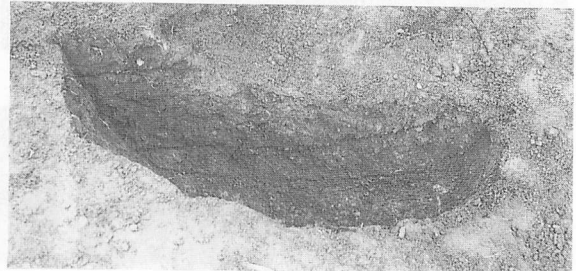
13号土坑東西ベルト断面



13号土坑南北ベルト断面



15号土坑断面



14号土坑断面

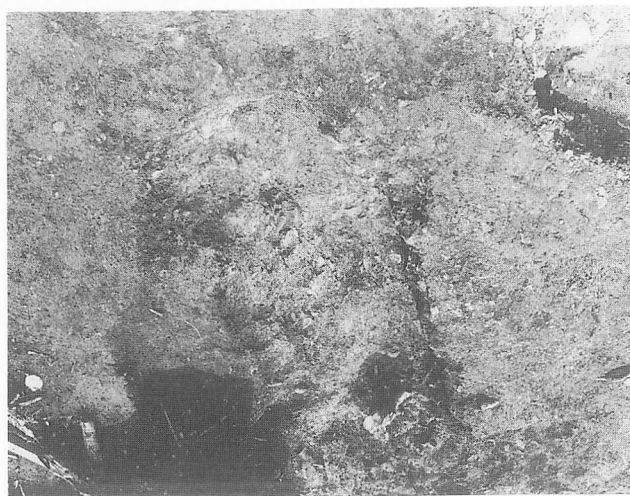
写真図版22 12号～15号土坑



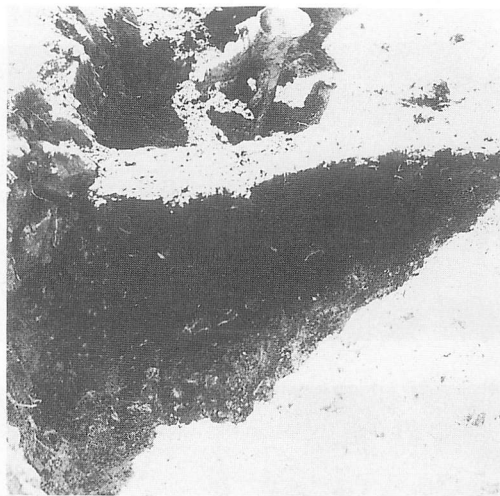
17号土坑平面



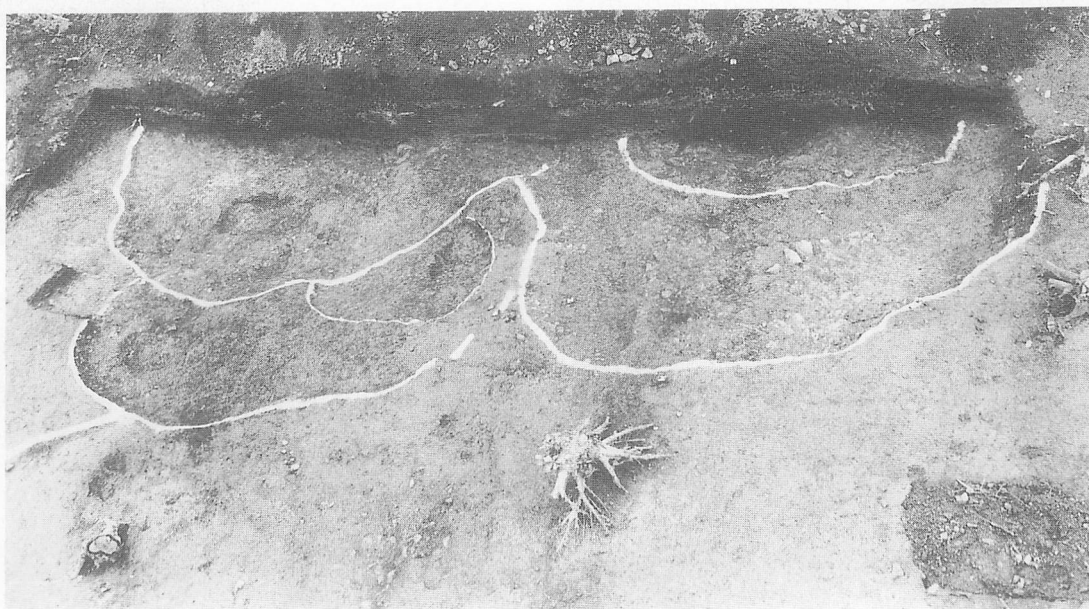
16号土坑平面



18号土坑平面



18号土坑断面

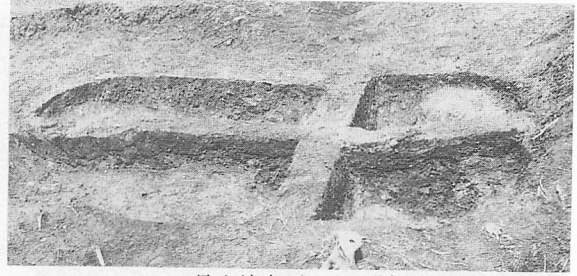


19号·22号·23号·24号土坑平面

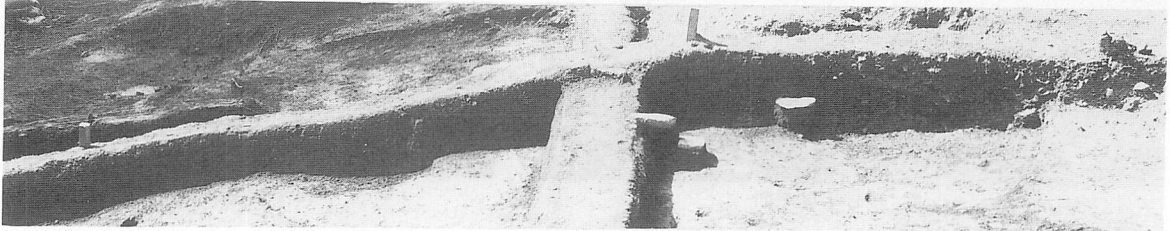
写真图版23 16号~19号·22号~24号土坑



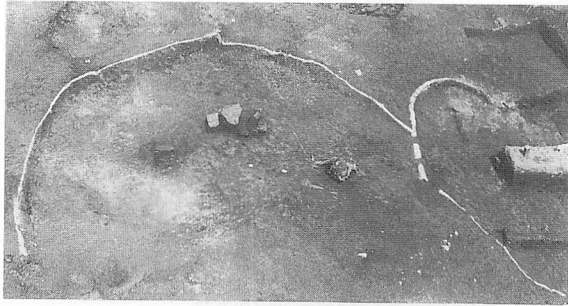
22号土坑東西ベルト断面



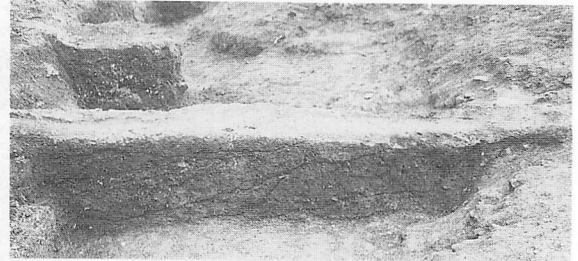
20号土坑東西ベルト断面



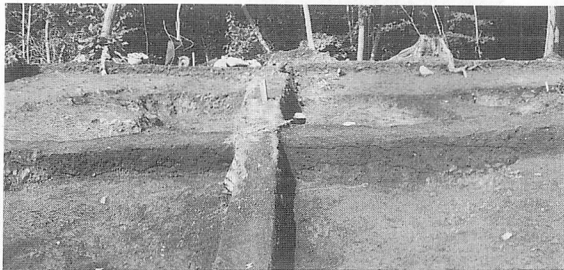
21号土坑東西ベルト断面



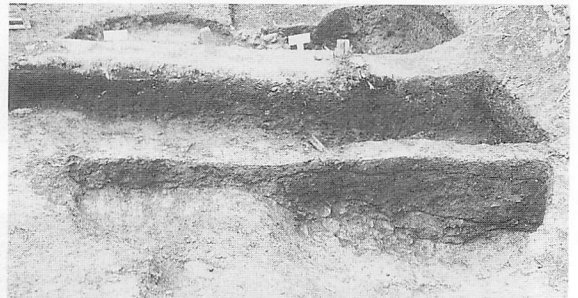
21号土坑平面



22号土坑南北ベルト断面



21号土坑南北ベルト断面



24号土坑東西ベルト断面

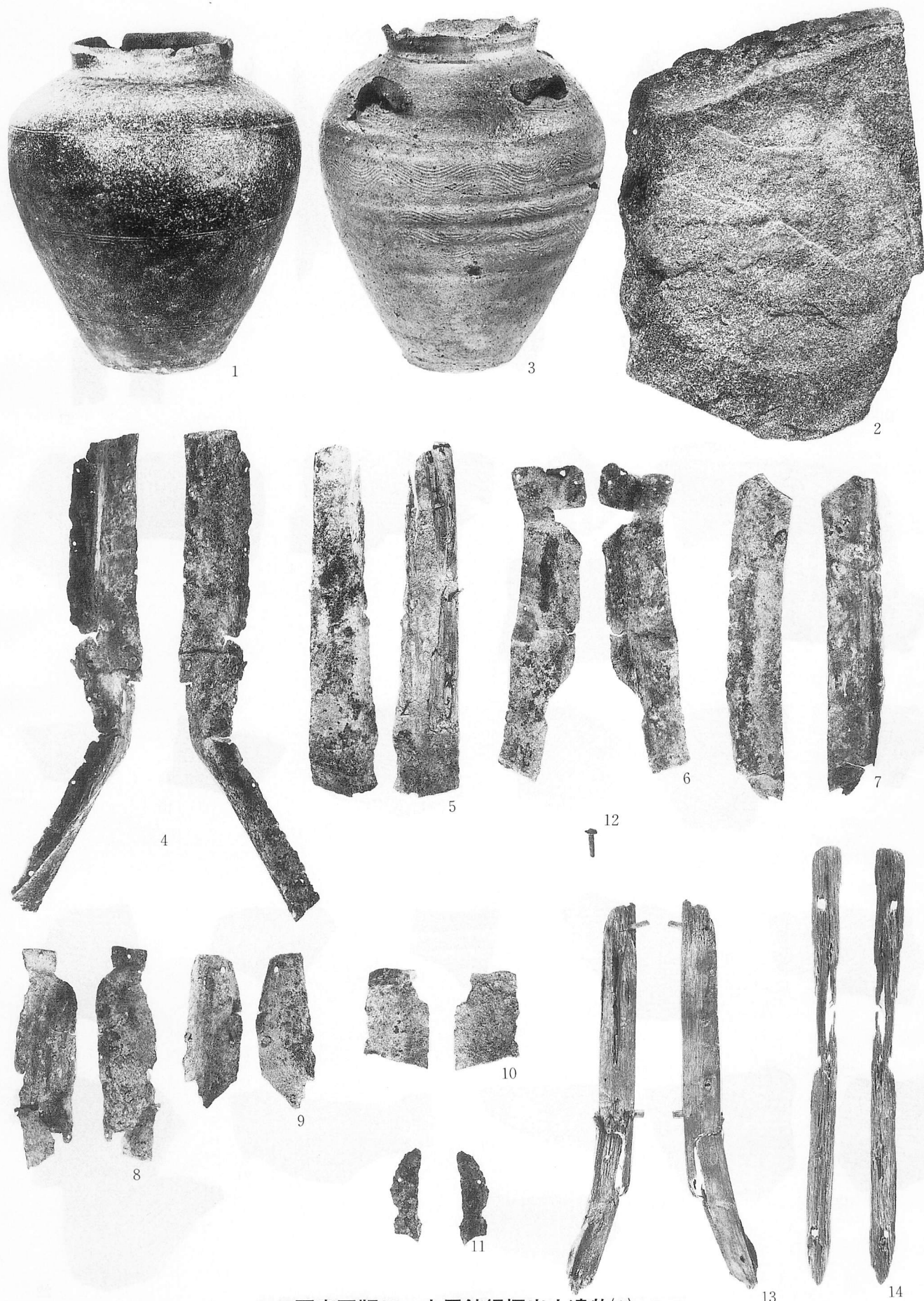


1号陥穴状遺構平面

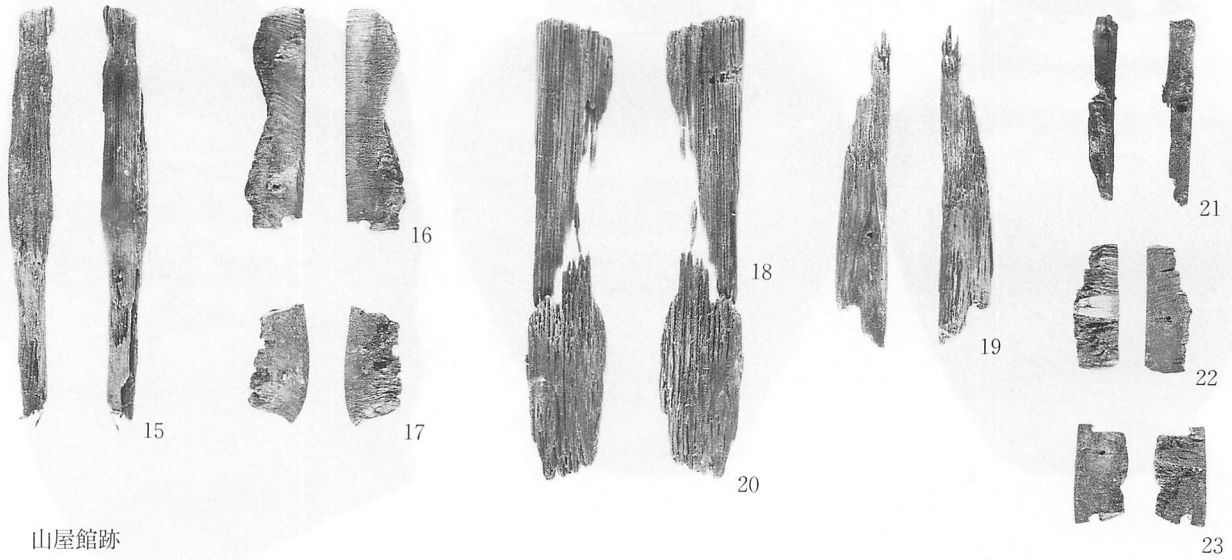


1号陥穴状遺構断面

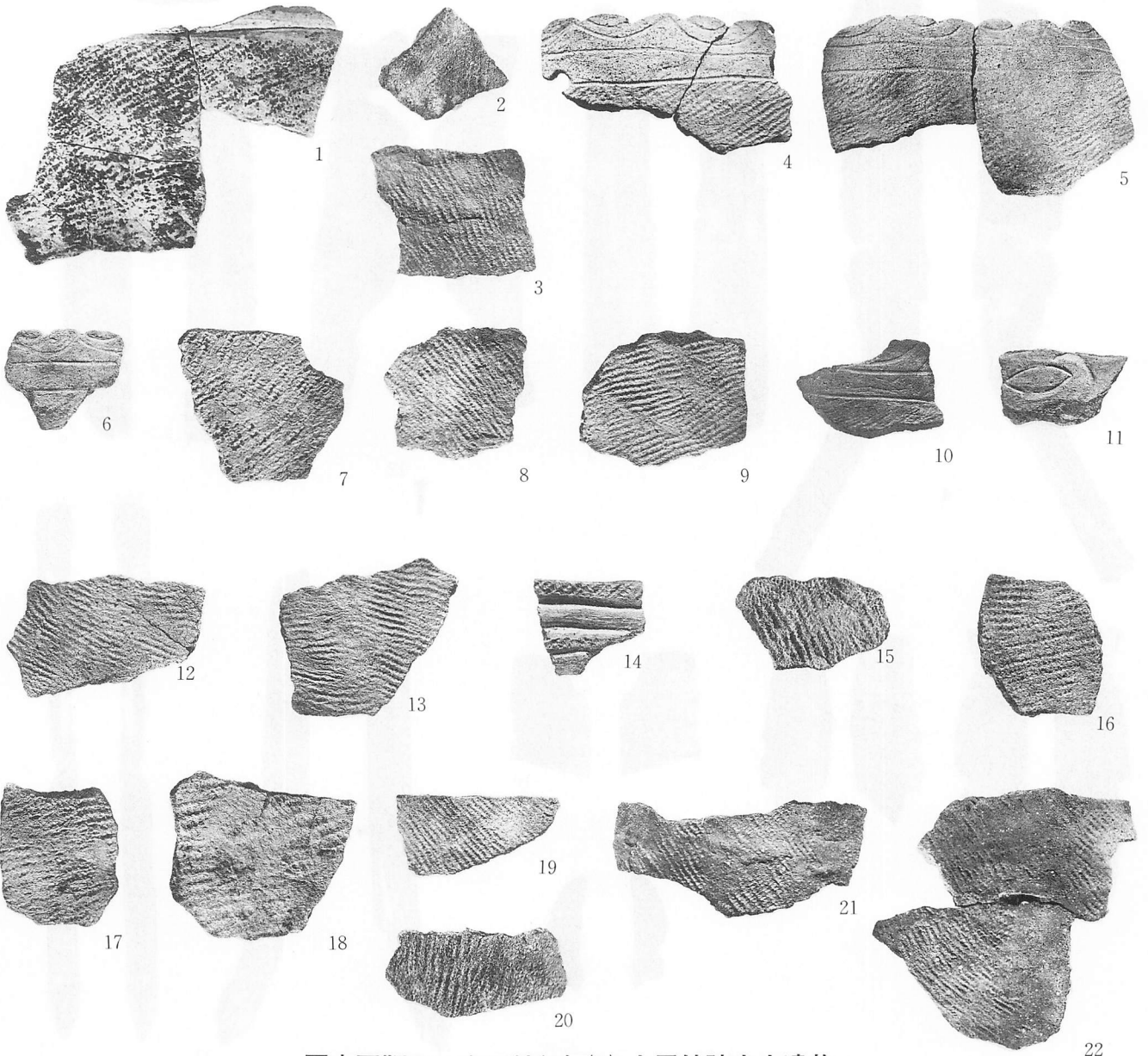
写真図版24 20号～22号・24号土坑、1号陥穴状遺構



写真図版25 山屋館経塚出土遺物(1)



山屋館跡



写真図版26 山屋館経塚(2)・山屋館跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	やまやたてきょうづか・やまやたてあとほくつちょうさほうこくしょ							
書名	山屋館経塚・山屋館跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第255集							
編著者名	鎌田 勉・高橋與右衛門							
編集機関	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020 岩手県盛岡市下飯岡11-185 Tel 019-638-9001							
発行年月日	1997年 3月 31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
山屋館経塚 山屋館跡	岩手県紫波郡 紫波町山屋字 山口	03321	LE59-2101	39度 34分 50秒	141度 17分 20秒	19950616 ～ 19950918	2,900㎡	町道長岡徳田線道路改良工事に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
山屋館経塚	経塚	平安時代 末期	経塚状遺構 4基	常滑産三筋文壺 須恵器系波状文四耳壺 「箱」状の容器の破片		12世紀代の経塚状遺構 4基の石槨構造を検出。 経容器の可能性のある 三筋文壺と波状文四耳 壺を検出。		
山屋館跡	城館跡 集落跡	縄文 弥生 中世	館跡 主郭 1 曲輪 11 帯曲輪 1 帯曲輪状 1 マウンド状2基 堀跡 5条 竪穴住居跡 2棟 土坑24基 陥穴状1基	縄文時代後期末と弥生 時代終末期の土器片		中世前期と推測される 山城形式の城館跡を検 出。		

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長 山 影 源 吉
副 所 長 鷹 羽 康 造

〔管理課〕

管 理 課 長 澤 田 寛
主 事 横 山 文 彦
〃 千 葉 勝 彦

〔調査課〕

調 査 課 長 小 田 野 哲 憲
課 長 補 佐 高 橋 與 右 衛 門
〃 工 藤 利 幸
主 任 文 化 財 中 川 重 紀
專 門 調 査 員 〃 佐 々 木 清 文
〃 高 橋 義 介
〃 酒 井 宗 孝
〃 菊 池 人 見
文 化 財 小 山 内 透
專 門 調 査 員 〃 金 子 佐 知 子
〃 松 本 建 速
〃 菊 池 榮 壽
〃 宮 本 節 子
〃 下 田 隆 衛
〃 濱 田 宏
〃 金 子 昭 彦
〃 晴 山 雅 光
〃 木 戸 口 俊 子
〃 阿 部 勝 則

文 化 財
專 門 調 査 員

羽 柴 直 人
〃 星 雅 之
〃 高 木 晃
〃 杉 沢 昭 太 郎
〃 大 道 篤 史
〃 溜 浩 二 郎
〃 村 上 拓
〃 中 村 直 美
期 限 付 員 川 向 聖 子
〃 佐 藤 良 和
〃 篠 根 敬 志
〃 柴 田 慈 幸
〃 鈴 木 浩 二
〃 鈴 木 聡
〃 高 橋 実 央
〃 千 葉 和 弘
〃 平 澤 里 香
〃 山 口 俊 規
〃 山 下 浩 幸

〔資料課〕

資 料 課 長 菊 池 強 一
主 任 文 化 財 伊 藤 拓
專 門 調 査 員

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第255集

山屋館経塚・山屋館跡発掘調査報告書

町道長岡・徳田線道路改良工事関連遺跡発掘調査

平成9年3月25日 印刷

平成9年3月31日 発行

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

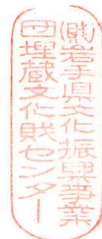
〒020 岩手県盛岡市下飯岡11-185

電話 (019) 638-9001

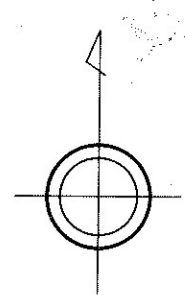
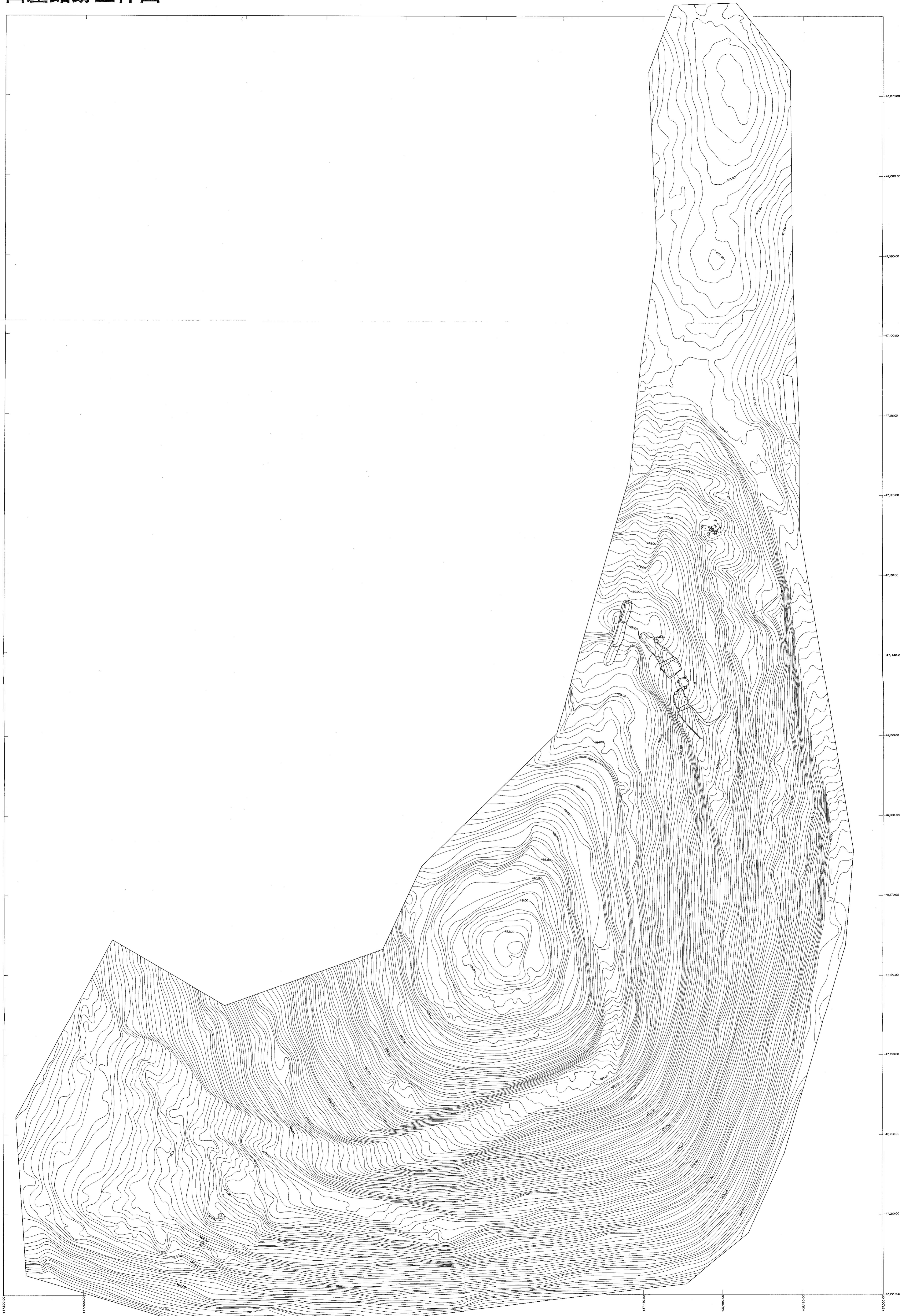
印刷 株式会社 吉田印刷

〒020 盛岡市名須川町23-27

電話 (019) 625-2323



山屋館跡全体面



1:200

